

明治三十三年十二月廿五日
（第三種郵便物認可）
（明治四十四年三月二十三日印刷納本
（毎月一回二十三日印刷納本）
女學世界
四月一日發行
第十一卷第五號


花より麗はしい
美人の姿
櫻の中からぬけ出しか
霞の奥から生れしか
イヤ……
レート一滴の
化粧から！
レート
乳白
化粧水

紳士の胸には時計飾られ
淑女の指には指輪光れり

紳士といふ紳士に懐中時計を用ゐ給はぬはなく、淑女といふ淑女に寶石入指輪を嵌め給はぬ方ぞなし。時計と指輪と何處より御求め遊ばさるべきや。

三越は最も信用を重んじ、嶄新なる時計と流行せる指輪、ブローチ、ピン、金盃銀盃其他の貴金屬類を最も廉價に販賣す。

信用ある三越より信用ある品々御求め下されたし。

時計及指輪御注文案内は御一報次第進呈

東京駿河町

三越呉服店

（振替貯金口座東京三〇〇番）

女學世界 第拾壹巻第五號 四月號目次

女(いの二)

女（いの三）

スミレ香水

馥郁たる芳香はよく旬日を保ち
ハンカチーフ用として實に天下一品也

定價
小三十錢
中七十五錢
大一圓四十錢

金スミレ香水は體裁優美なる香水噴を添へ意匠斬新、品質又佳良なれば專ら上流社界の紳士淑女に驩迎せらる
（定價一組七十錢）



東京市日本橋區横山町三丁目
パール練香油
スミレ黑香油　本舗
菊の露白粉

平尾銑也商店

電話浪花百十番
振替東京百十番

女（いの四）

ち　か　ら　は



◉婦人の幸福は如斯して得らるべし

結婚前に至つて健康なりし婦人の一旦他に嫁し未だ幾もなくて血の道癪に苦しむ者の非常に多きは事實婦人の生殖器が天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の繁殖するは當然にして結婚の機會に病毒侵入し其田畑を荒す故實際惡き土地の田畑に滿足な農産なき道理にて政治實業上外交繁き人の夫人及日常多くの客に接する婦人等は殊更其生殖器を害する機會多きを以て子宮血の道に苦しむ事の夥しきは此理由なれば一生の損害とならぬやう可要球を用ゆべし、方今婦人科學の泰斗として臨床上實地の錬達一世を歷する獨逸伯林のフロインド博士の研究と其實驗に成る處方に依る藥液をして直接に婦人の局處に作用せしむべく可要球(座藥にして内用藥にあらず)を調劑し幾多婦人科醫の實驗に供したる處殊に子宮内膜炎帶下白帶下赤帶下下腹筋張胸先差込子宮糜爛子宮出血及惡臭搔痒月經時疼痛痲毒性子宮病等の諸症に外用すれば驚くべく効力神速顯著なりとの稱賛を受けたり故に速に可要球を外用して病毒を根治せらるべし

可要球定價　三球入廿錢八球入五拾錢拾八球入壹圓、四拾球入貳圓特製百拾個入五圓

發行所　東京本郷湯島天神前(振替東京千五百番)　藥劑師　中西莊吉

眞に美容を希ひ美髮を望む者は

……先づ……

衛生 化粧 **最新美髮法**を讀め

本書の内容は

◎しらが、赤毛染の話◎毛のなき所に毛の生える話
◎ちゞれ毛くせ直しの話◎毛髮の洗ひやうの話
◎拔毛どめふけとりの話　其他毛髮化粧に關する秘法
にて郵劵貳錢封入御申込なれば直ちに無代贈呈

次ぎに……

理想的 最新製劑 ちゞれ毛くせ直し ベント を用ひよ

本劑は一度之れを使用すれば如何なるちゞれ毛くせ毛も立處に直伸し永く使用すれば殆んど根本的に全治す

定價十二個入九十錢　六個入四十七錢　送料東京市内四錢　地方八錢

また……

内務省免許 生毛強壯 エフトニック

本劑は最も進歩したる毛髮劑にして根本的に毛髮を美化するにあり、されば本劑を服用せば、身體を強健にし、血行を良行ならしむ、皮脂線の分泌を盛んにし、毛根の營養を能くし、毛髮の發育を補くるを以て、薄毛、細毛、赤毛、白髮等に連用せば奇効あり。

十日分 金壹圓　小包料 金八錢
卅日分 金貳圓五拾錢　小包料 金拾六錢

發賣元　東京本所區外手町八七　深澤國華堂(振替東京二〇八二五)

女(ろの一)

花はさくら本雑誌は「婦女界」

(四月號)

婦女界

一冊金十五錢
▲郵税金一錢五厘
六冊金九十錢
十二冊金一圓七十五錢
(註文は總て前金のこと)

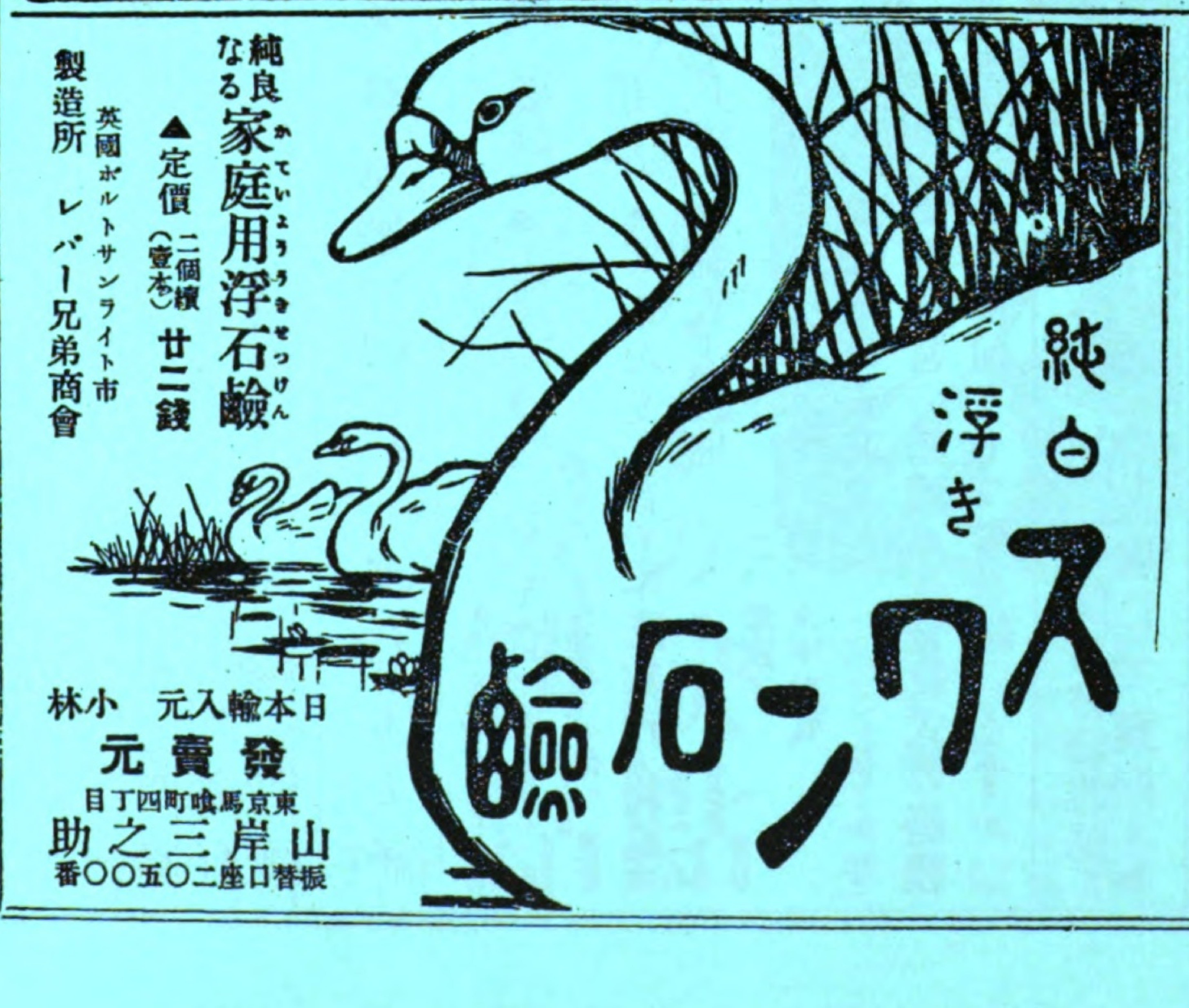
女(ろの二)

男女の必讀大文字

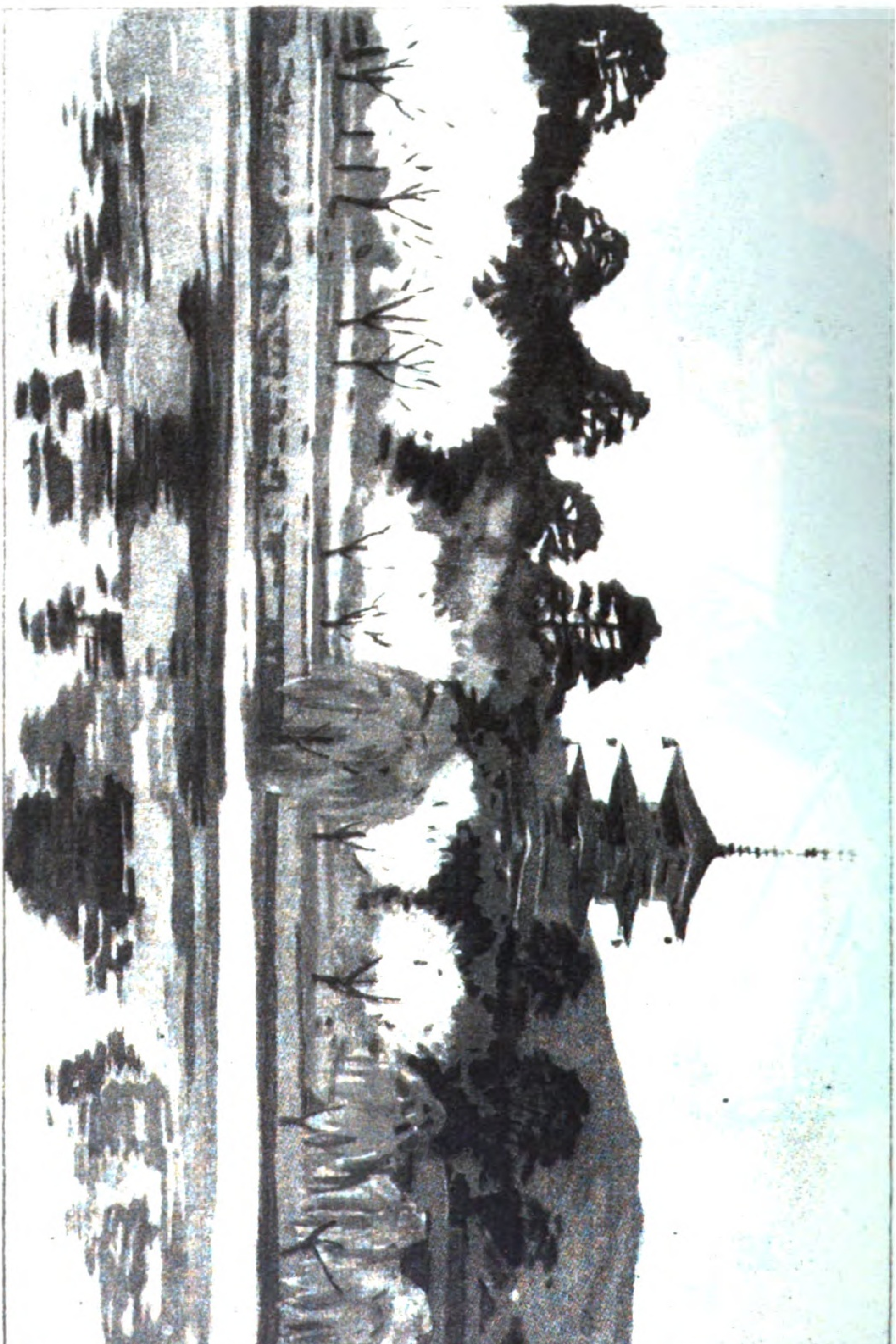
婦人の見たる男子の缺點
男子の見たる婦人の缺點

▲現代の男子は斯の如き婦人を求む……成女學校長 宮田脩
▲細君に信頼せよ……小崎弘道氏夫人 小崎千代子
▲ヤンチャンな坊ちゃん……三宅博士夫人 三宅花圃
▲こんな男子もある……某省參事官夫人
▲婦人は愛憎の念が強い……法學博士 浮田和民
▲五つの缺點……山脇女學校長 山脇房子
▲男子は騙されやすし……某實業家夫人


千代田
香油
發賣元
東京市馬喰町
山岸三之助
電浪花三七九三
振替二〇五〇〇
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
特製 金七十錢
大瓶 金三十五錢
中瓶 金二十五錢
小瓶 金十七錢


純良なる家庭用浮石鹼
▲定價 二個積(壹本) 廿二錢
製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會
純白 浮き
スワン石鹼
日本輸入元 小林
發賣元
東京馬喰町四丁目
山岸三之助
振替口座二〇五〇〇

女(ろの四)



春の都踊


最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾七年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
醸造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番　振替口座五〇二一一番

女(はの一)

●●四月一日初號發行●●

見る雜誌

新婦人

讀む畫報

編輯主幹前田曙山

每月一回一日發行
定價金廿八錢

飛行機に搭乘して天際を飛翔する日本婦人 實寫眞

見るもの

紫式部 二十五度摺石版極彩色油繪……川村清雄筆

花美かなる妾が顔美かなる……鰭崎英朋筆

●伏見若宮妃殿下●閑院宮女王殿下●武子女王殿下●戯れに藤原式服裝をなせる令孃（宮中女官）●武裝せる閨秀畫家 雨女史岡田八千代女史●新に公衆の前に立てる女優 森律子 初瀬浪子●天平風俗の女流文學者 長谷川時雨●奈良朝風俗の筑前琵琶を彈ずる福田旭世女史●其他名流夫人令孃二百餘

讀むもの

見たる女性の予（予の見たる女性）……大隈伯爵

モデルの告白……荃澤幽香子

西土母は鬼のやうな蠻族なり……東海林文學士

新夫婦と生活難……下田歌子

四十餘度結婚を媒妁したる予の實驗……清水書記官

如何なるを良妻といふか……嘉悦孝子

歷史の上の婦人……幸田文學博士

文學者となりし身の上話……長谷川時雨

何故に畫家を良人として選しか……岡田八千代

十五歲で嫁した時の追懷……寺田勇吉氏夫人

懸賞案件 深夜強盜に襲はれし時は如何にすべきか

發行所 東京本郷區龍岡町三四 振替口座東京三〇五八 聚精堂 賣捌所全國各地到る所の書林雜誌店

（電話下谷四〇七九●●電話下谷六七二）

女（はの四）

少女戯蝶



上村松園女史筆


水晶おしろい
無色透明
東京
大和屋製

最見安き琴の譜本

師に就きて直接習ふに異ならず

生田流 井上胡蝶著

箏曲新譜

巻之貳

定價送料 共金壹圓拾錢 代金引替小包拾四錢增 海外小包引替代金壹圓參拾五錢

彈琴家の福音書！

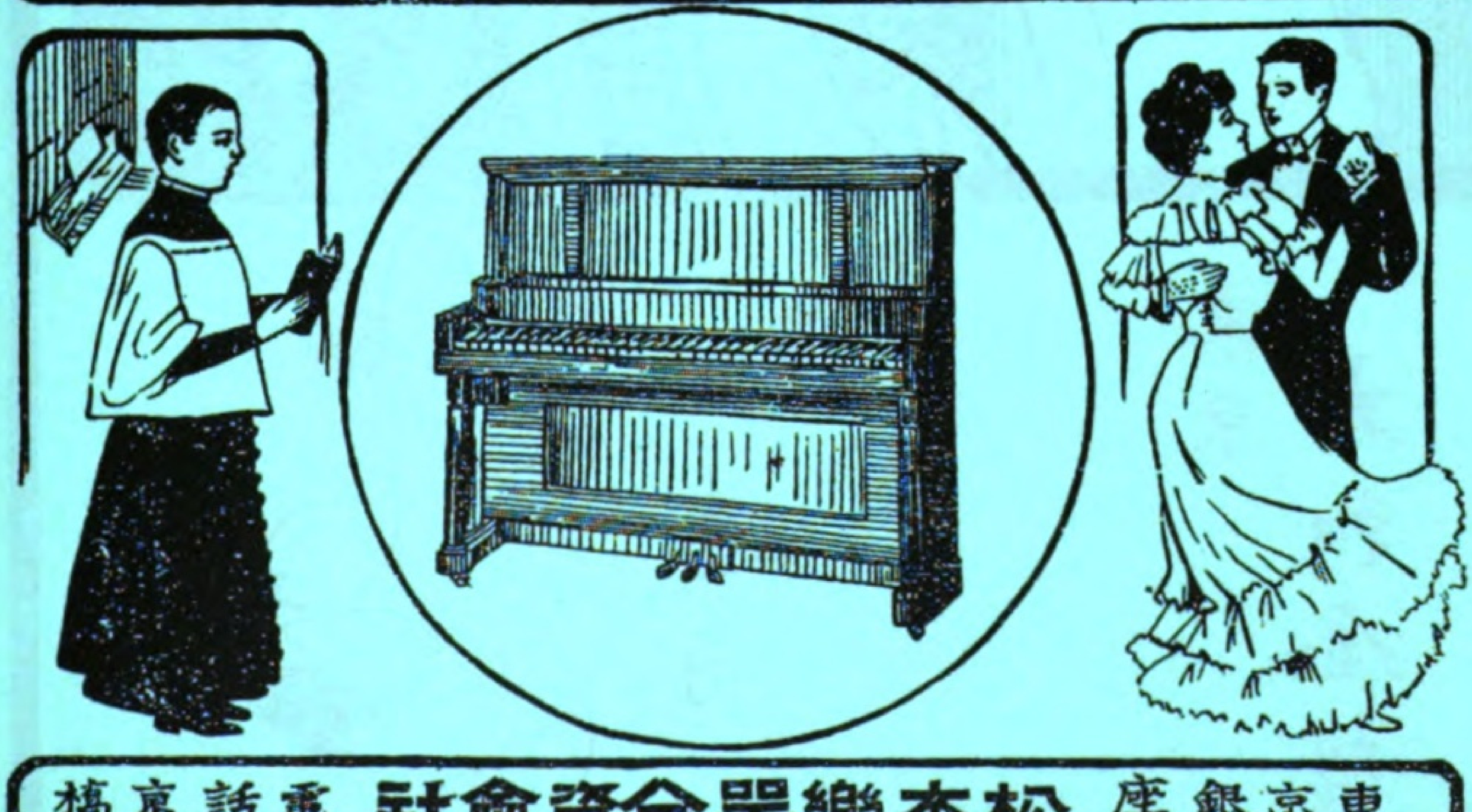
目次 調子合せ方音符休止符右手法左手法其他彈琴に必要の事項は悉く記載あり、歌曲は春日影、朝外出、六段前歌、難波獅子、末の契、松竹梅、殘月、秋風の曲、八重衣、飛燕の曲、以上十曲

本書は最も見安き新譜を以て記載し在來の言葉記號を附記しあれば誰にても容易に彈し得べく且自然の間に完全なる樂則を知るに至るべし曲中不詳あらば返信料添へ照會あれば無料通信教授をなす覺え難く忘れ易きは琴習ふ人の常なるも覺え易く忘るゝ事なきは本書の賜なり苟も琴を習はんと欲する人及び習ひて忘れたる人は見給ふべし。

福岡縣福岡市外馬出一一〇三

發行所 箏曲通信教授所

ピアノ・オルガン



東京銀座四丁目 松本樂器合資會社 電話京橋二二九八

目錄進呈

女(にの二)

造花材料

天然の花は風雨に亂れ
人工の花は家庭を賑す

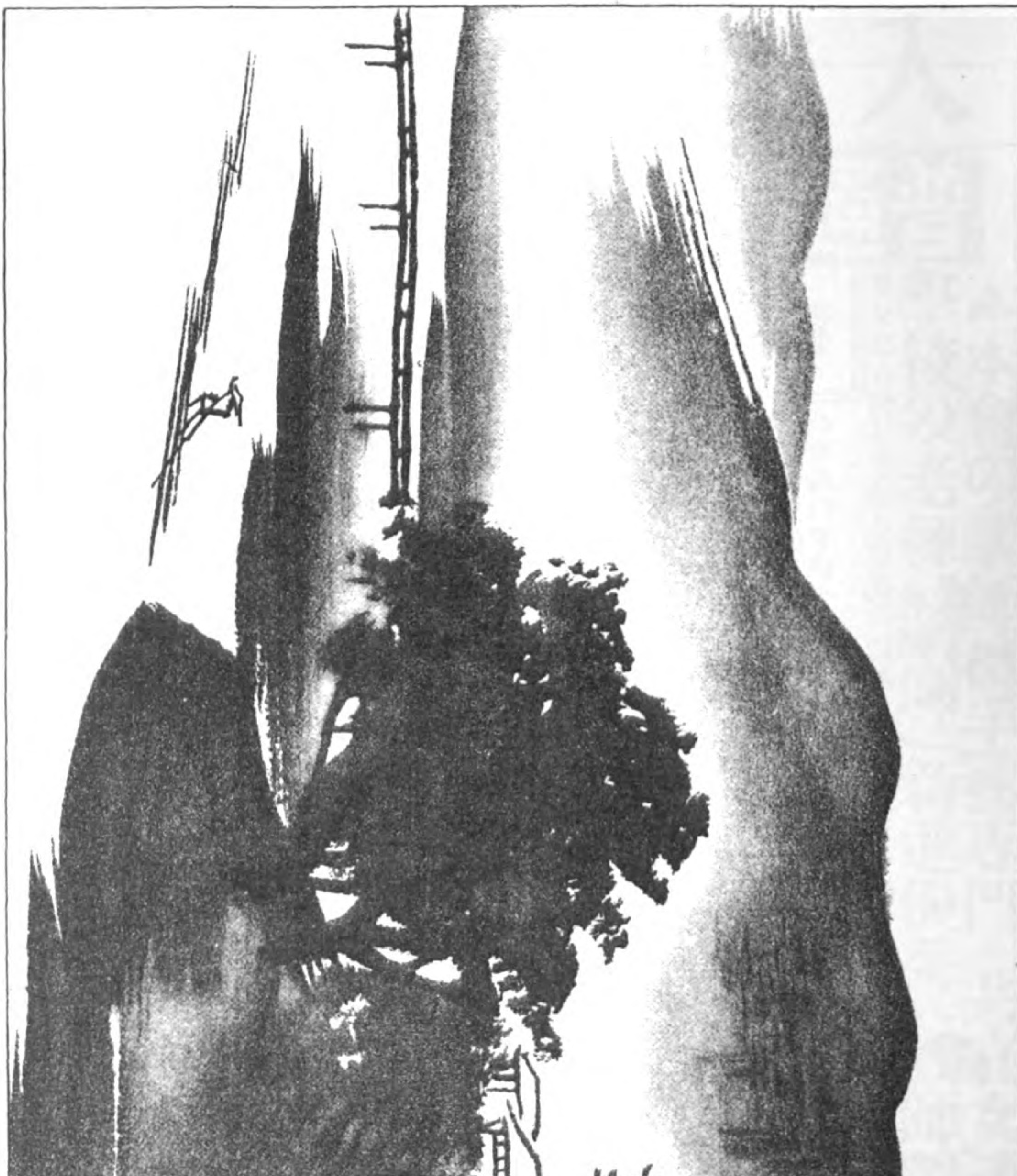
面白く
家庭に
趣味を
造り花

その
樂しみの
數も
いろ〳〵

金三拾六錢封入して左へ御問合せあれ

東京日本橋區横山町
合資會社
天野卯兵衛商店
電浪花一六四三番



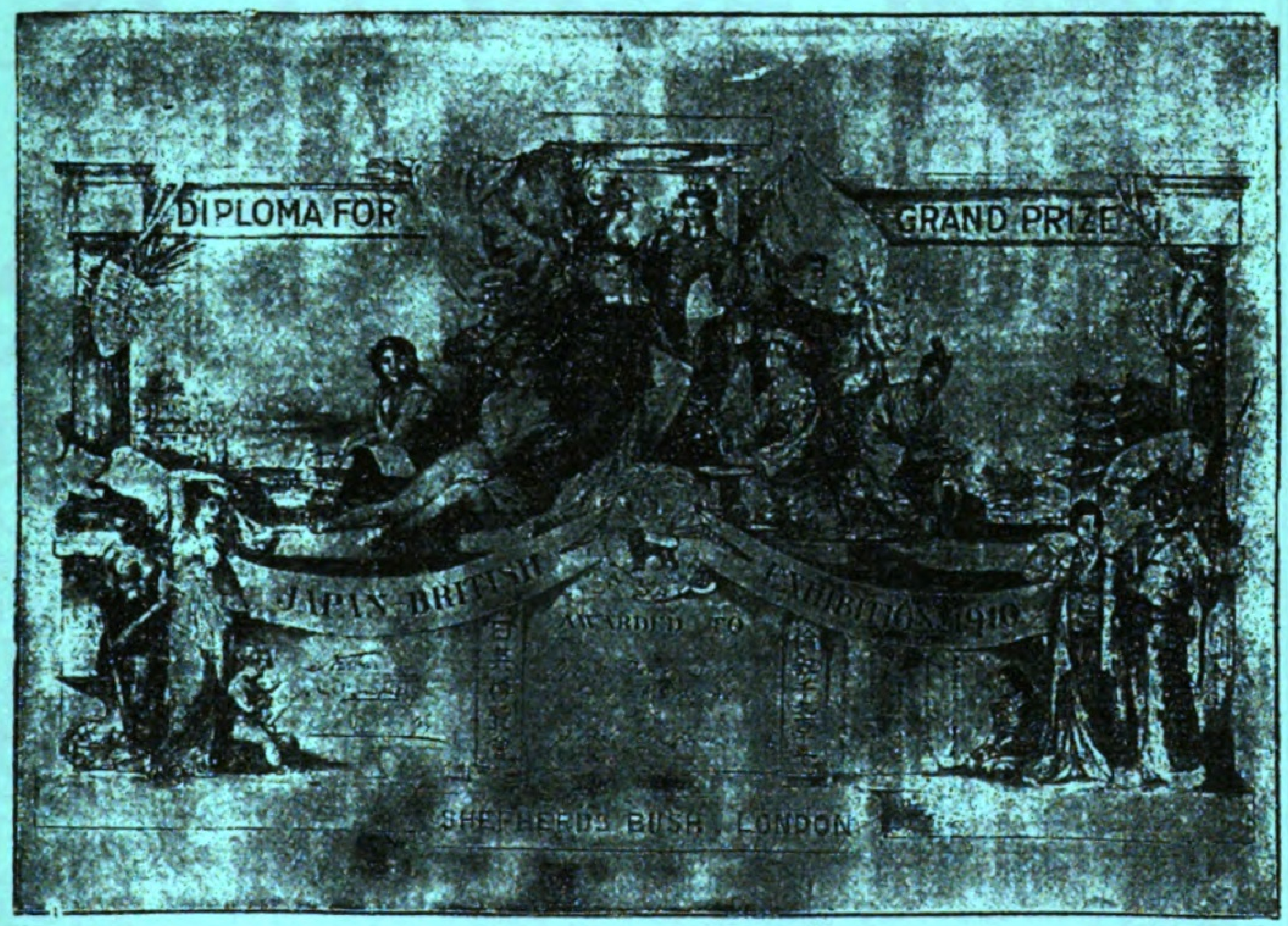


山嵐

春畫



◎日英大博覽會受領名譽大賞寫◎



名譽アル山葉ピアノ
山葉オルガン



東京音樂學校教授 テッツオールド夫人
山葉ピアノ彈奏の圖

女(ほの二)

婦人画報

四月一日發行　四月の卷　一冊 廿五錢　郵稅二錢　六冊稅共壹圓五拾錢　十二冊稅共貳圓八拾八錢

讀物

陽春と節操……文學博士 井上哲次郎

當世婦人の弱點……農法學博士 新渡戸稲造

女らしき事業……法學博士 小河滋次郎

婦人職業問題……法學博士 上杉愼吉

▼嫉妬のはなし……文學士 源 頁英

▼浮世繪に表はれた美人 文學士 藤懸靜也

▼女學生 生活の一段落 緒方博士夫人 天野博士夫人 平井博士夫人

▼櫻の三大名所……理學博士 三好學

▼汐干と摘草 長谷川時雨 岡田八千代

畫報

花見る人……岡田三郎助氏筆 三色版二頁大

御庭園に於ける山階宮三殿下

日本櫻の三大名所たる小金井の櫻……

松浦伯爵家の婚儀

上村大將の初孫とひなまつり……

天覽の造花の刺繡……

貴婦人の御稽古（愛國婦人會にて）

女學校の晝休み一時間

◉熊本籠城祭に於ける二婦人……

◉婦人の馬上の打球と女學生の弓術

◉吉井子爵と吉井男爵の令孃……

◉諸名家の令孃……

◉新婚の島津公夫妻と松浦氏夫妻……

◉浮世繪の美人三體◉この頃の小鳥

◉將校婦人會に於ける村雲尼公と久邇宮妃殿下

◉名家の室内◉作法のしをり……

◉伊勢大廟の女學生◉玉章翁祝賀會

◉春の都櫻と遊覽……其他

讀物

社會の花婦人美……下田歌子

乳人政岡……中島德藏

其日其日……三宅花圃

皇后陛下の御歌……

▼上野と向島のお花見……尾島菊子

▼東京盲學校參觀記……白芙蓉

▼東西の瘤取り物語りに就て 久留島武彦

▼家具の手入（宮川すみ）▼臺所科學

▼草香幡梭姫（いね子）▼四國の女……

▼東京遊覽月々の樂み▼假名の書方

▼和歌初學 佐々木博士 室内の裝飾 家庭十二ケ月

東京麴町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九番　振替口座一一八一八番

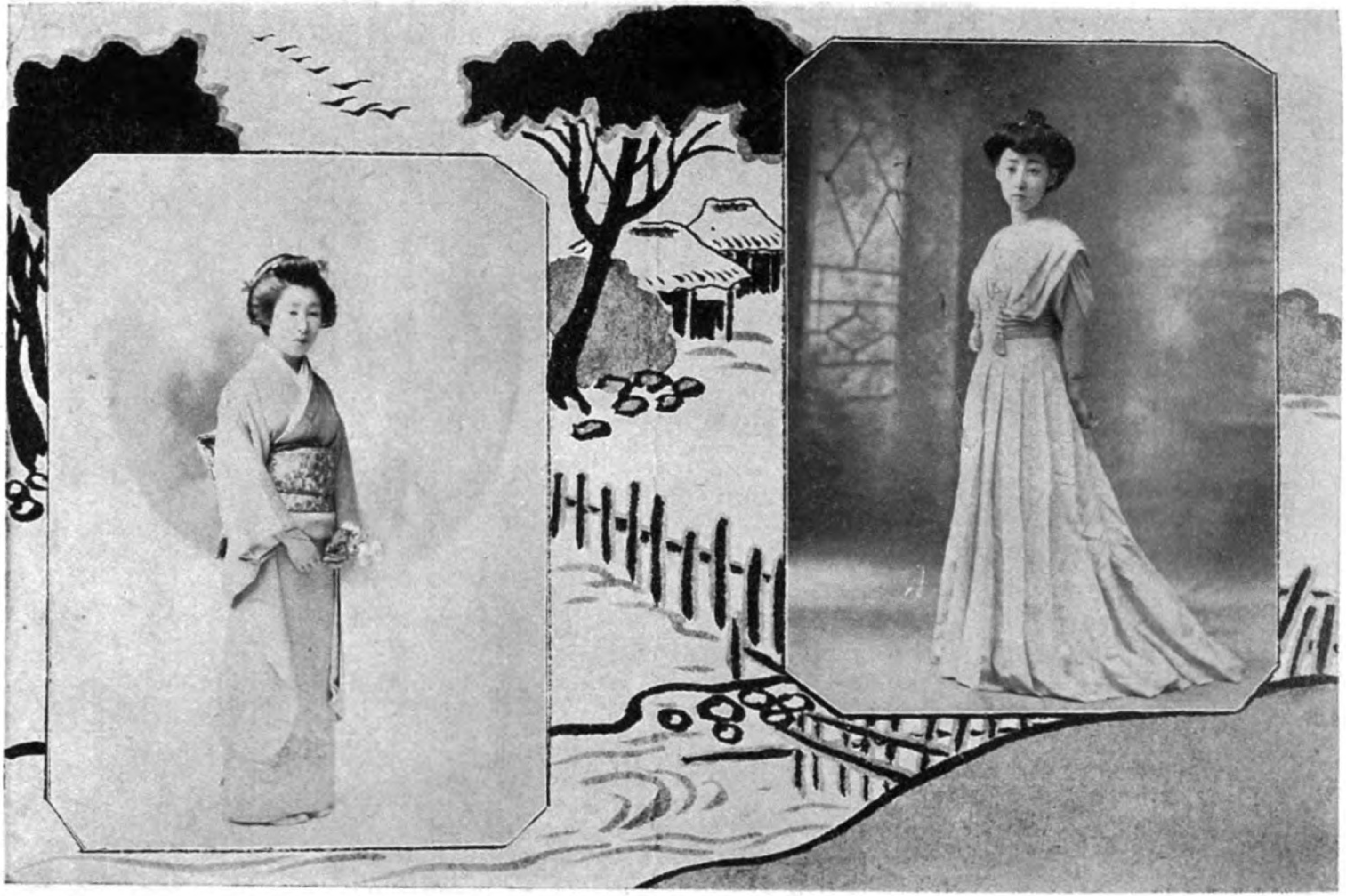
女（ほの三）


鉛氣のない白の高尚な花の如き
大學白粉
荒れたる肌を美しくなる
大學化粧水

東伏見宮妃周子殿下



名流婦人



子爵井上正義氏夫人孝子

子爵土屋正直氏夫人穀子（德川達孝伯令孃）

優艶の花の如き四月號を見よ

婦人乃鑑

四月一日發行 四月號 一冊拾五錢 郵税二錢

●前金郵税共 六冊九十七錢 十二冊分一圓九十九錢

▲婦人の方各階級を通して必讀すべき唯一の雜誌

○婦人時事問題(數篇) 社説
▲婦人に對する種々の感想 小笠原長生
▲女權擴張が實現されたならば 田村松魚
▲我子の行方 鳩山春子
▲私の理想とする家庭 澁澤かね子
▲『主婦の鑑』水呑百姓の夫を巨萬の身代にした妻 橋田とし子
▲妻が余の友人に對する心懸け 松村介石
▲取締上より見たる女優 小濱松次郎
▲女學校訪問記 一記者
▲小兒皮膚病と母親の注意 醫學士 濱野太吉
▲鮮明にして美麗なる極彩色寫眞版二十葉

女子の獨立自營 與謝野晶子

▲婦人會にはこんな弊風がある 宮川鐵次郎
▲政治家の妻たるものゝ心得 山協房子
▲凡べての家庭の慰藉としたい音樂 湯原元一
▲幸福なる花嫁 日比谷茂登子
▲何の理由なしに五十年間の獨身生活 松本文學博士
▲此頃の奧様は御飯の炊き方を知らない 宇山祿子
▲造花の話 於田さゑ子
▲支那婦人の深い印象 清藤へ秋子
▲花咲く彌生頃のお惣菜 古木不二子
▲三月の外科室(長詩) 午後の館(短歌) 花田玉藥
○舊い婦人と新らしい婦人 伯爵 大木遠吉

▲洗練の記事と絢爛の寫眞を滿載せる大廉價の雜誌

女(への二)

東京新橋 婦人社 電話新橋(三五二三)(三一一八)
振替東京一三〇三三番

大阪北區老松町 大阪支店 (電話東五〇八八)
振替大阪一二四五〇番

◉見よ!!!若き男女の秘書出でたり!!!

第三版

最新美人法

第一 白色法 色白くなるつけ藥飲み藥等實驗有効の方法十餘種を分り易すく詳説す外に藥品等を用ゐぬ簡短の良法數種あり

第二 美髮法 髮の毛を美しく柔かにツヤをよく長くする十餘種の方法と縮れ毛癖毛薄毛赤毛白毛等を治す良法其他種々詳述す

第三 美顔法 顔を洗ふ最良の方法眼口唇等の注意油顔赤顔青顔等を治する方法シワのよらぬ法齒を白くする方法等を詳記せり

第四 治療法 やせる法こえる法鼻高くする法聲をよくする法イボあざワキガひぜん田蟲ナマズ其他秘密病の必治法を記述せり

第五 養生法 根本的美人となる平生の養生法食物と美人との關係婦人病と顔色との關係其他睡眠運動の注意等を面白く記せり

第六 化粧法 化粧品の撰び方最新の化粧法鼻高く見せる法目を大きく又は小さく見せる法唇を薄く又は厚く見せる法其他色々

第七 服裝法 衣服の色合や縞柄の見合け法衣服裁縫の注意より着物の着方帶のしめ方に至るまで皆一册の中に分りよく記述す

●學理實驗上必ず有効なるを證す

●大割引送料共 金廿五錢振替廿六錢切手廿八錢

最新刊

女秘密箱

第一 女ばかりの衞生 月經の血は汚くない事より月經不順の療法月經の秘密日記子宮病の説明や療法婦人科醫の秘密出産後同衾すべからざる日數子をはらむ法はらまぬ法淫慾缺亡病梅毒痳病の秘密療法妊娠出産の事を面白く分りよく記述す

第二 秘密實際の秘傳 子を持つ月子をはらみしを知る法子を生みし女を看破する方法男子の秘密を見破る法胎内の子の男女を知る法飯炊きの秘法秘密に文通する暗合文の書き方洗濯屋の大秘密なる洗濯藥の調合法夫婦の將來を前知する方法等

第三 女の秘密實驗談 ある媒の自由結婚談より或花嫁の見合結納結婚式の感じより新世帶を持ちし實驗談ある夫人の子を生みし苦しい話や失敗談產婆をたのむ心得ある女の家庭平和策等實に面白く皆若き男女の參考書として一讀をすゝむ

●通俗衞生女の心得小本全一册

●大割引送料共 金拾八錢振替拾九錢切手廿一錢

●密封送本 親にも兄弟にも友達にも本だか何だかも分らぬ樣に密封送本す非常に氣のきいた送本の方法也

發行專賣所 東京神田錦町三ノ二 振替東京一六一八番 學友社 本社前金 即時送本

拔け毛を留め縮れ毛を直す

ヘヤ、ナース

（百八十五 三月分）

特製 壹圓卅五錢 同上 貳圓半 送費內地十三錢

世の劇藥性賣藥又は傳授的處方の中には毛根を害し頭腐を傷け取り返へしの付かざる後難を招きたりとの嘆聲を洩さるゝを聞く事あり是れ豈毛髮衞生界の一大恨事にあらずや

我ヘヤ、ナースは現代に於ける日本唯一の新處方的髮油にして毛髮を永久に根本より培養美化する各種植物性油料の配合に成り○第一拔け毛（毛髮の脫落）を防止し禿部を再生せしめ薄毛赤毛を濃化黑化する特効あると同時に縮毛癖毛等を根本より矯正美化せしむる卓越偉大の神効を有す○世の賣藥類に依賴し大に其の非を悟りたる人は速にヘヤ、ナースの卓効に浴せられよ

郵券送付次第、毛髮衞生説明書を進呈す

發賣元 ヘヤ、ナース 名古屋市中區中ノ町三丁目 鬼頭杏西堂

★（ヘ〇五）

◎產婦人科 ◎小兒科

宅診 午前 往診 午後

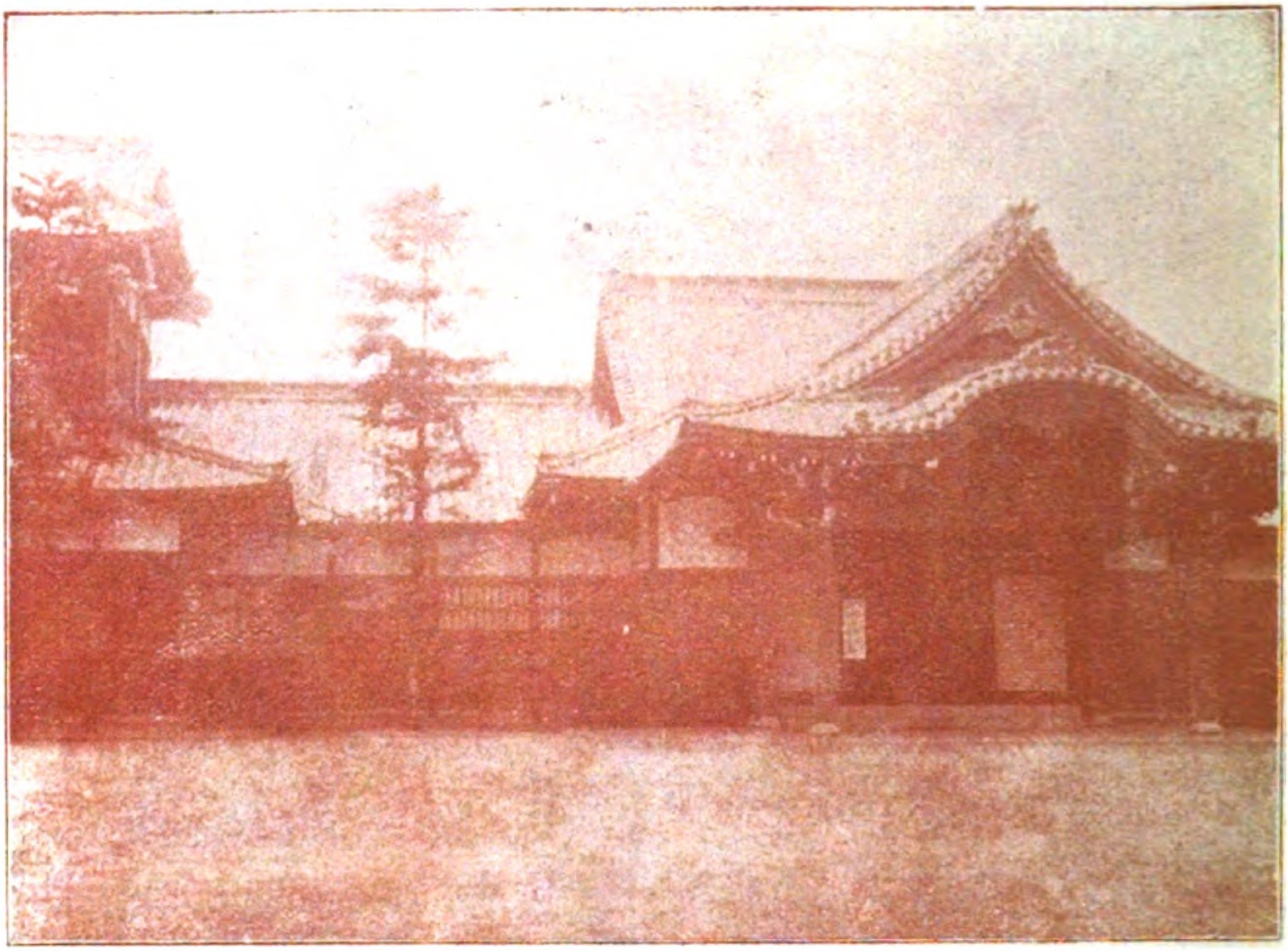
病室並ニ產室ノ設備アリ隨時入院ノ需メニ應ズ

院長 女醫 鷲山改姓 吉岡彌生

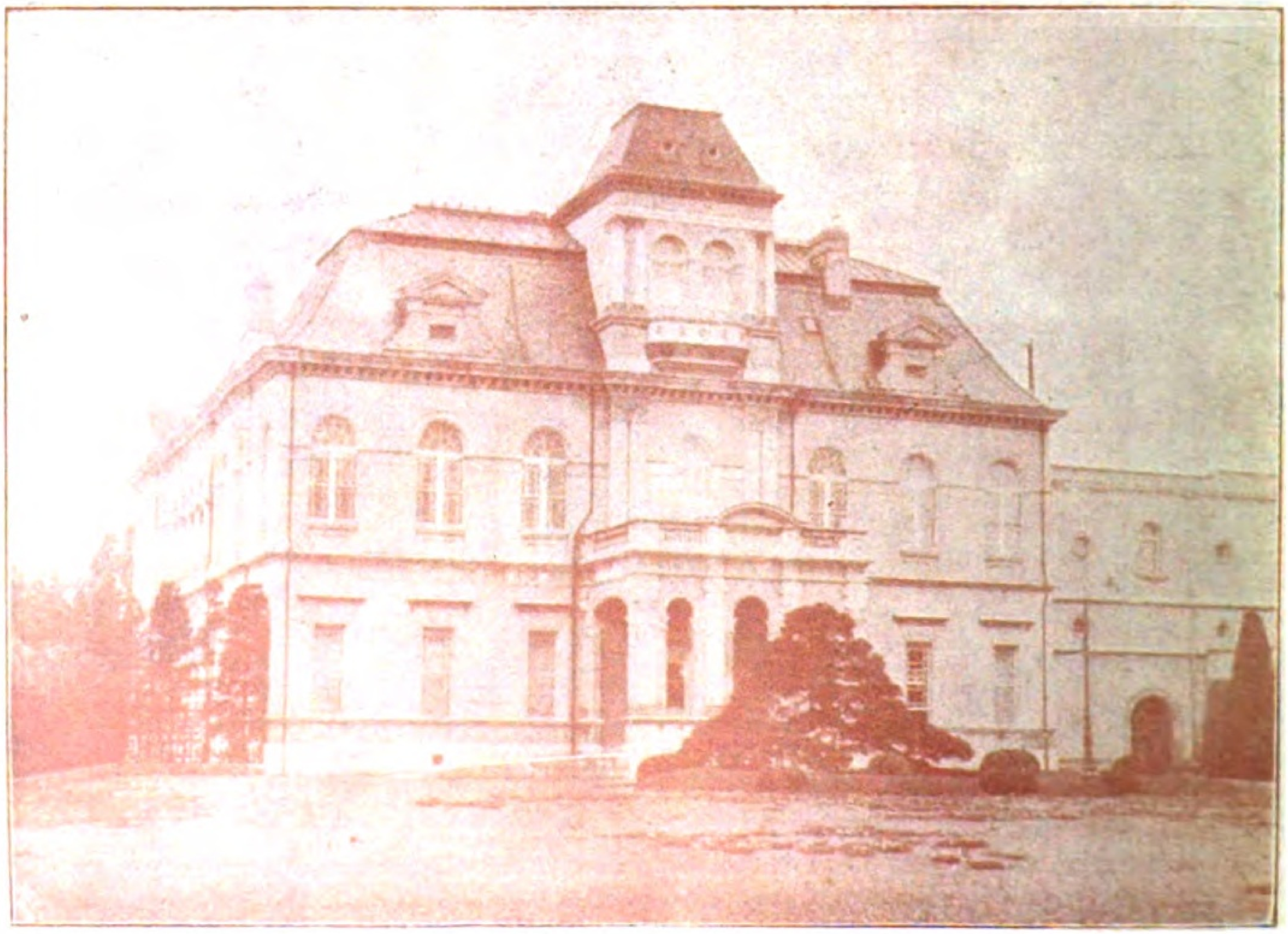
東京市麴町區飯田町四丁目卅一番地

東京至誠病院 電話番町（二三五七）

名流の邸宅(一)

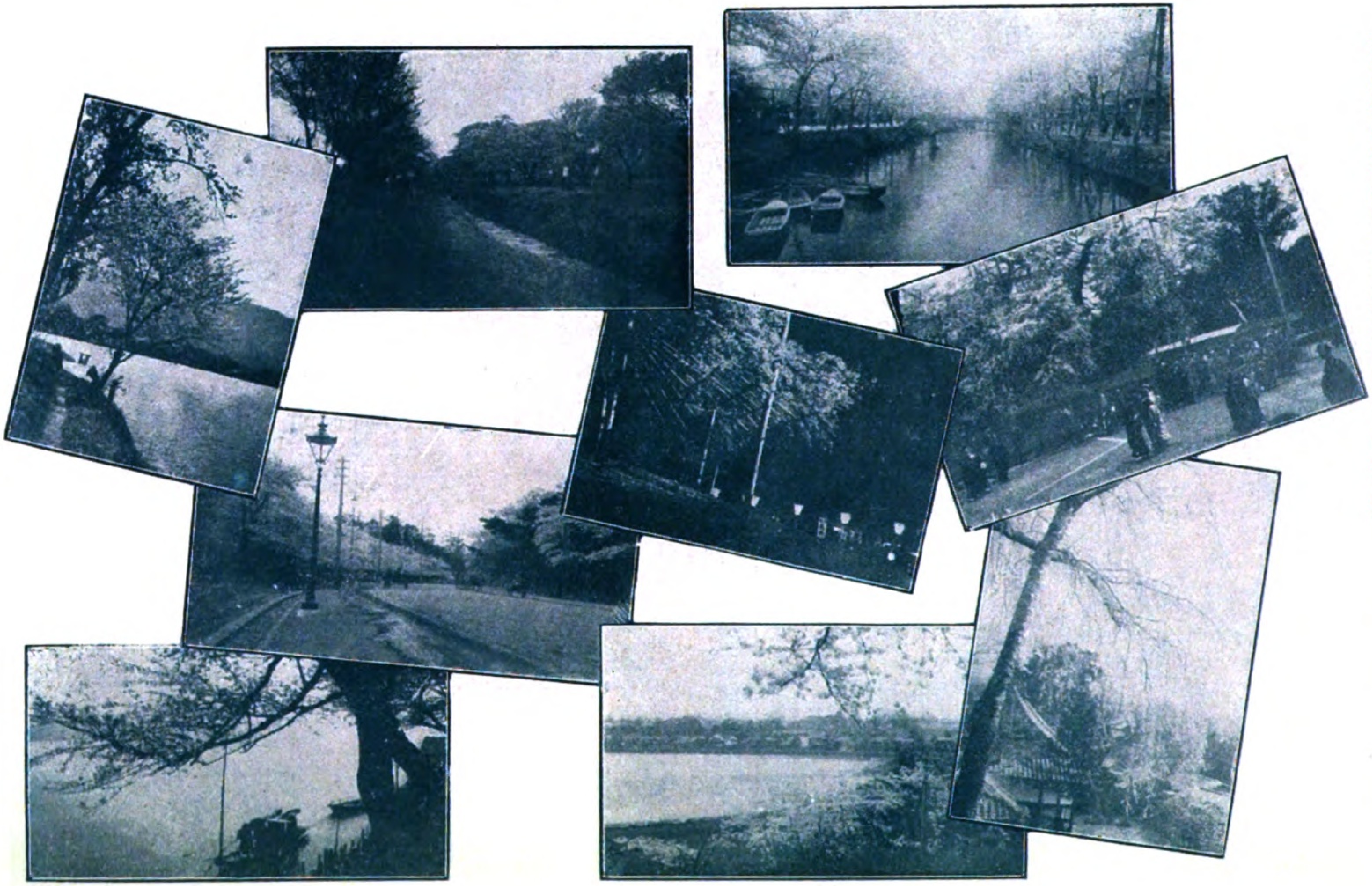


黒田侯爵邸表玄關（赤坂福吉町）



鍋島侯爵邸西洋館（麹町區永田町）

櫻の名所



右より左へ、上段(一)江戸川堤の櫻(二)小金井の吉野櫻(三)京都嵯峨の櫻、中段(一)京都丸山公園の櫻(二)同丸山公園の櫻(三)上野公園の櫻、下段(一)東海道金谷利生寺の枝垂櫻(二)不忍池畔の櫻(三)墨堤の櫻

舶來 ライロホーン

兩面盤音譜多數ルーソー號にて到着仕候

三月吹込新製

（定價金壹圓五拾錢）

王冠印クラウン片面音譜発賣

浪速節
- 東家樂雄演奏—五郎正宗、鹽原多助
- 東家小雀同—神崎與五郎、中山安兵衛
- 浪速亭重子同—梁川庄八
- 浪速亭重治同—不如歸

等

說教節—家元若松若太夫—石童丸、小栗判官

日向島、新曲尺八、樂隊、謠曲、小唄、新内富本其他數十種

◎尚引續新吹込の新音譜多數發賣仕候

專賣特許 連働蓄音器　新案特許 重函蓄音器各種

◎實用新案理想的 安全音譜入 新製發賣仕候





定價表音譜目錄御一報次第直ちに送金仕候

東京市銀座一丁目三番地（長電話京橋 九七八 九七九 振替口座東京六四二五）

東京市淺草並木町廿五番地（長電話下谷九八八 振替口座東京一九八八四）

支店……（大阪）……（九州福岡）……（北海道小樽）

三光堂

女（その一）

毎に新しき問題に注意するは本誌の本領なり

四月號出づ

女子文壇

●家族と娘との間△保存すべき美點と保存するに及ばぬ行ひ附り女には仕事が多すぎる(幸田文學博士)△自覺なき服從は時勢が許さぬ(麻生女子大學學監)△子孫は家の奴隷でない(秋元子爵)△家族制度も個人主義も眼中に無い(加納子爵)◎衣服の着こなし方(江木榮子、關屋愛子)◉新しい世界(三宅やす子)◎人手を省いて機械を使へ(女子商業嘉悦孝子)◎蘇生(横瀨夜雨)◉東京の芝居と大阪の芝居(中村春雨)◉繪の東京(荒井寛方)◉さくら月(記者)地方新聞記者の勤めぶり(六花)外數篇◎化粧問答(藤波芙蓉)◎創作小說、散文、詩、和歌、初作、俳句◎雜錄

毎號百五十餘頁 石版寫眞版口繪拾頁
價一冊拾五錢
送料壹錢五厘
半年分壹圓卅四錢

紙數百五十頁
四月一日號
口繪挿畫澤山

少女 櫻花號

特價拾五錢
送料壹錢

△石版極彩色三頁大口繪……洗鱗畫伯筆

少女小說

●暗い晚……河井醉茗
●猫の子……田中空雷
●二人やんちやん……佐々木邦
●父待つ夜……宮脇史郎
●山の湯……濱本野花
●草の香……藤田千枝子
●形見の寫眞……吉田千代美
●お十小夜……夢園艷子

對話 僞善(溝口白羊)

繪ばなし
●もういゝわよ
●おもひで
●人形の病氣
●鈴子さん

◉日本婦人の世界的發展と語學……(長井理學博士)●袴は御自分でお仕立なさい……(三浦百合子)●勇ましい犬の最期……(少年動物愛護會山縣文夫)●大阪の子供博覽會(三島菊雄)●櫻草の話……

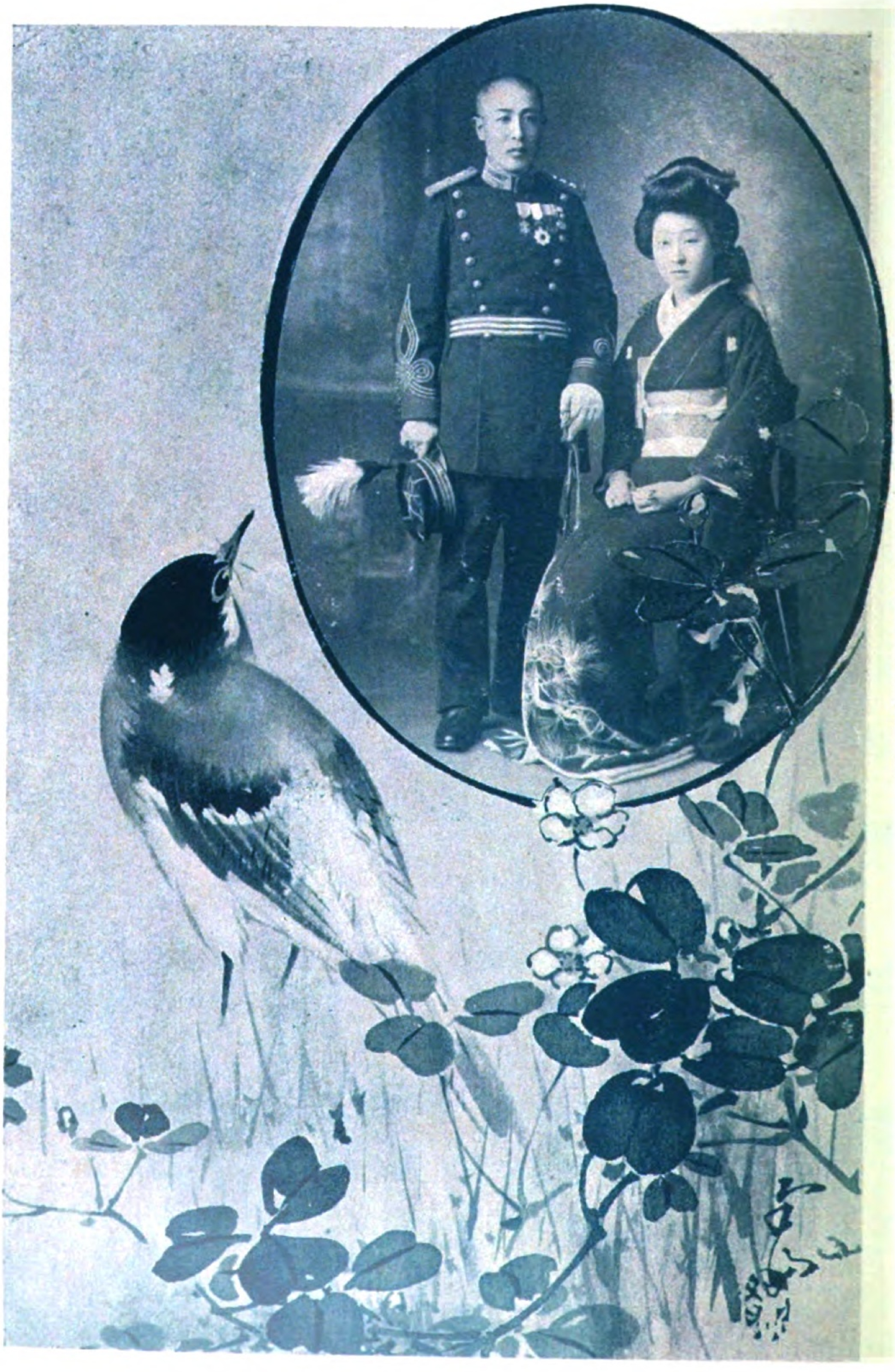
初めて寄宿舍に泊つた晚 他人の中△冷たい床△裸木△六疊の部屋 地方の傳說 其他面白い讀物や懸賞ものあり

東京京橋區大鋸町 女子文壇社出版 (振替口座東京第壹七貳九番) 全國賣捌書店

女學(との三)

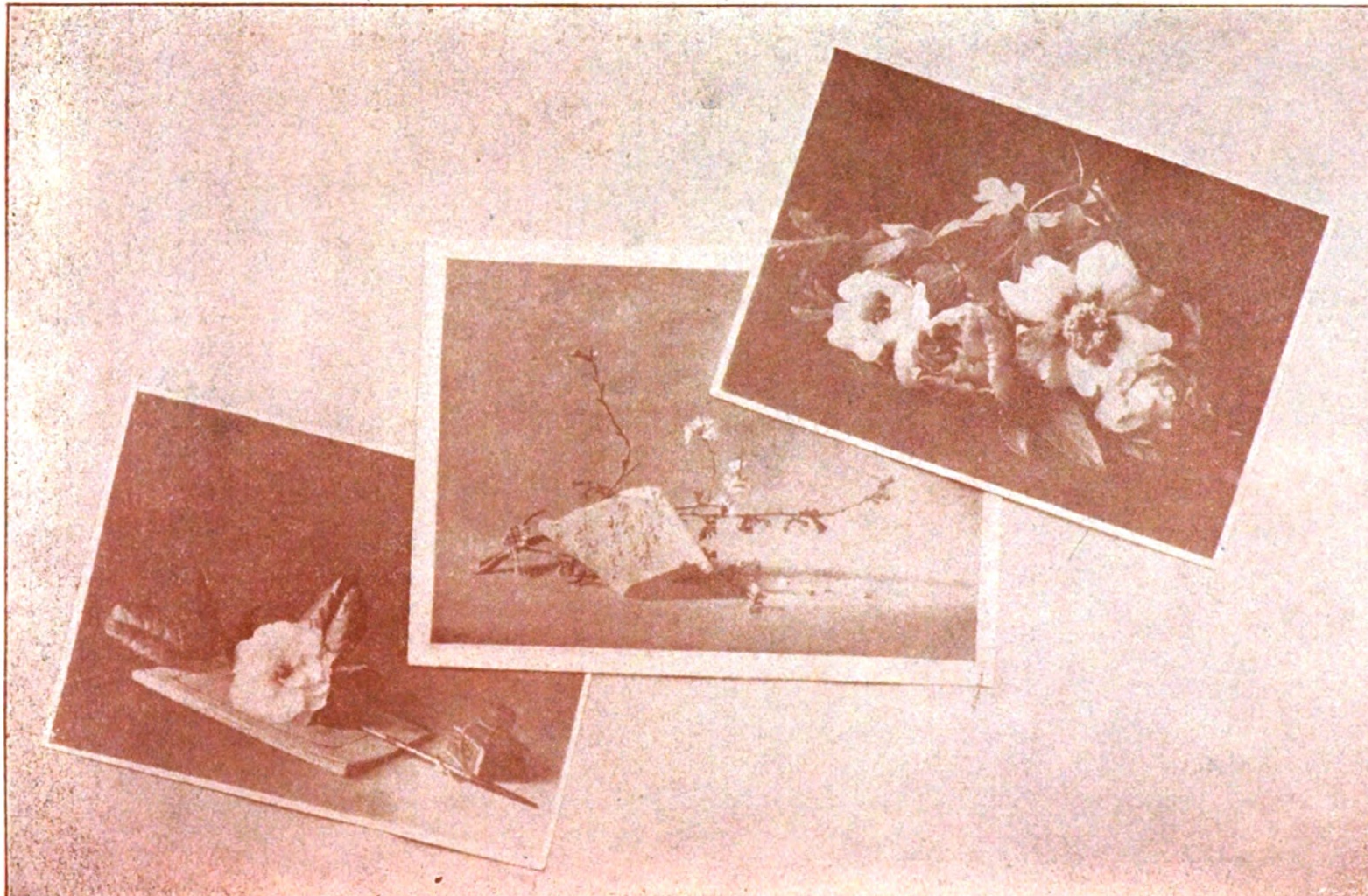
（との四）

新婚の春



男爵野村素介氏令嗣素一氏　同新夫人錫子（海軍造船大監山田銈太郎氏令孃）

花信




都の花石鹸
大阪野村製
▲全國到る處の化粧品雜貨店に販賣せり
芳香の高雅にして
品質の純良なるは
紳士淑女の愛用と
名譽の金牌とに依
り知らる
（その一）

女(ちの四)

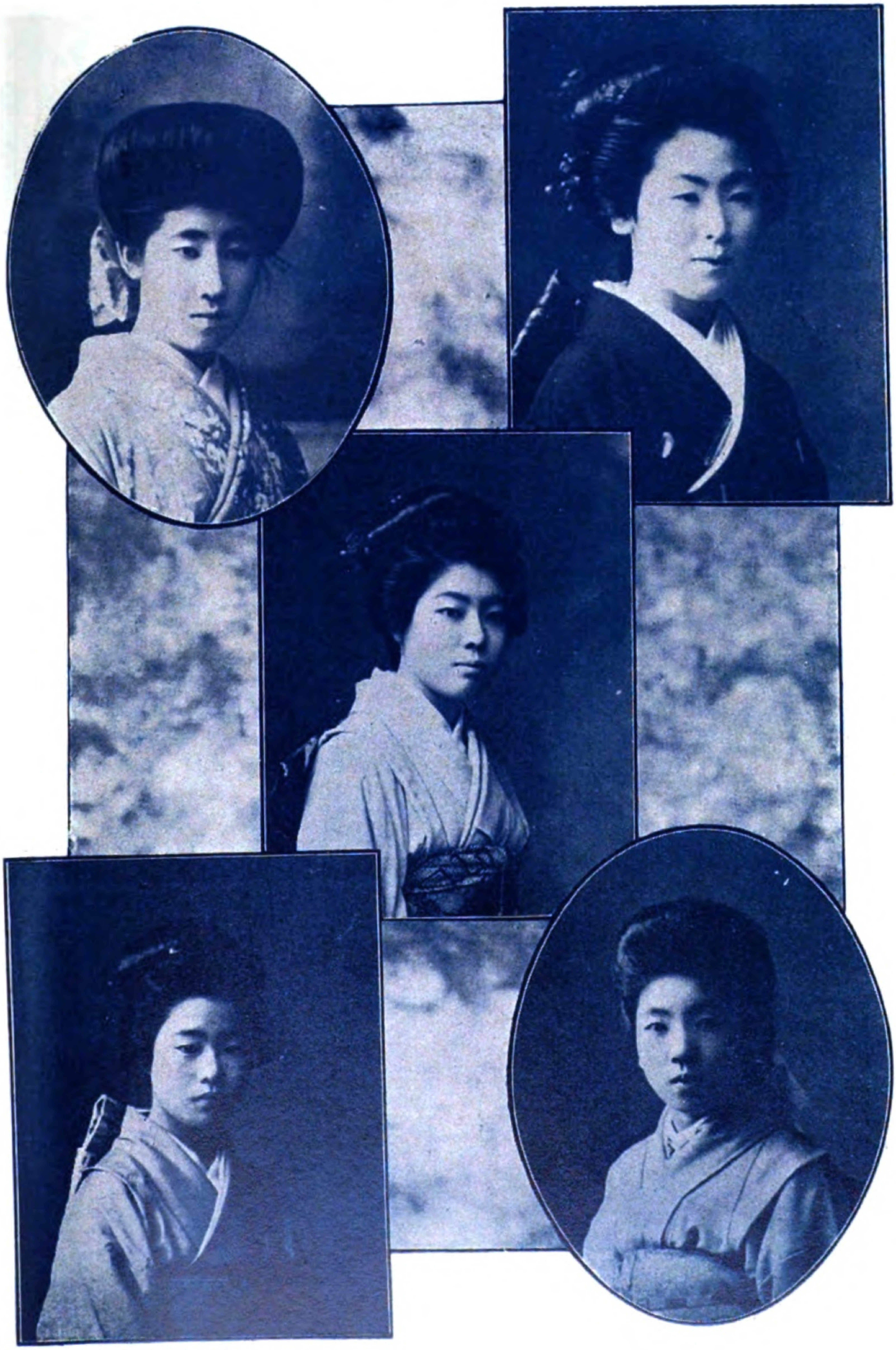
令嬢かゞみ



上圖、男爵川田龍吉氏令妹道子（牛込新小川町）

下圖、故男爵長與稱吉氏令嬢美代子（麻布富士見町）

令嬢かゝみ



右方上、川上ゆき子（麻布）下、安藤米子（赤坂）

左方上、山田梅子（高輪）下、加茂壽子（小石川）中央、梅田[illegible]子 京橋）

飲む丈血になる

ボビナイン

病者は藥を飲む前に先づボビナインを飲め

▲總ての病者は藥物的療法を行ふと同時に滋養療法を行はざるべからず、然らざれば如何なる名藥も其効甚だ尠なかるべし

▲**ボビナイン**は以上の目的に最も適合せる滋養品にして歐米にては廿餘年前より貴重なる滋養品として賞用せらる

▲血と肉とを構成する**ボビナイン**は生牛肉中に含蓄せる總ての滋養分を最も斬新なる方法に依り其性質を變んずることなく抽出したる理想的滋養品なり

▲**ボビナイン**が幾多滋養品中傑出せる所以は消化吸收力の速かなることにして如何に胃腸の惡しき人又弱き人にも直に消化せらるべきを以て幼兒の滋養品として牛乳に滴下し用ふる時は其効最も著るしかるべし



大瓶二圓十五錢
小瓶九十五錢
送料一本八錢

▲一適症　貧血、神經衰弱、產前產後、小兒の發育不良、食慾消失、肺結核

一服用法はサイダー、牛乳等に混和して用ふる時は尤も妙なり

一各地到る處の藥舖、洋酒店にあり　●說明書御報次第進呈

ボビナインは飲むだけ血になる滋養品なり

（りのこ）

日本總代理店

横濱市境町二丁目

藥種貿易商　合資會社　友田商店　振替口座東京一九三八番

は欧米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密薬を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老錬なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸説を參考し有力薬を配合したる世界無比の學理的最良薬なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する莞腎丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣薬にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病ヤケド、デキモノ跡の禿に生毛せしむる事請合薬價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

らい病

●●●●●取次所ハ前月ノ廣告ニアリ●●●●

醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど薬劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ザノサール　一ヶ月分　貳圓
複方ザノサール　一ヶ月分　參圓

此らい病薬は有名なる癩病治療薬を化學的の方法にて分析し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力薬なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる薬品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする瞞着主義の賣薬に非ず

三河國碧海郡刈谷町

振替口座東京貳參壹壹

電話　刈谷參拾貳番

本舗　醫科大學卒業薬劑士　從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

婦人へ相談

月やく滯又は不順等を人知れず秘密に治療せんとするのが女の性癖である、夫故往々有觸れた無効の薬などに迷ふて後日の大病を引起す人が多い、此等の婦女に斯道大醫の方劑を仰ぐと同樣最も安心に快通流下する靈薬をお知らせするから、郵券三錢を添へて申込みあれ密封にて詳報す

東京市京橋區金六町三番地　笹山むめの

ちゞれ毛くせ毛並に婦人の新福音

（赤毛を黒くし白毛を防ぎフケを去る奇劑）



▲ちゞれ毛・くせ毛は全治せぬか？
▲赤毛は必ず黒くならぬものか？
▲白毛は果して豫防できぬものか？
▲フケは如何にして取れぬものか？

前記の問題は久しく醫學薬學界にて研究されたれども全治は却々困難のものと稱へられしも斯道に熱心なる薬學大家は遂に一新劑を發見されたり其實驗に依ば百試百驗確に卓効を保證す該劑を望む方は速に郵券二錢送れ説明書呈す

○東京神田仲猿樂町十　北澤定子

女(りの二)

女（りの三）

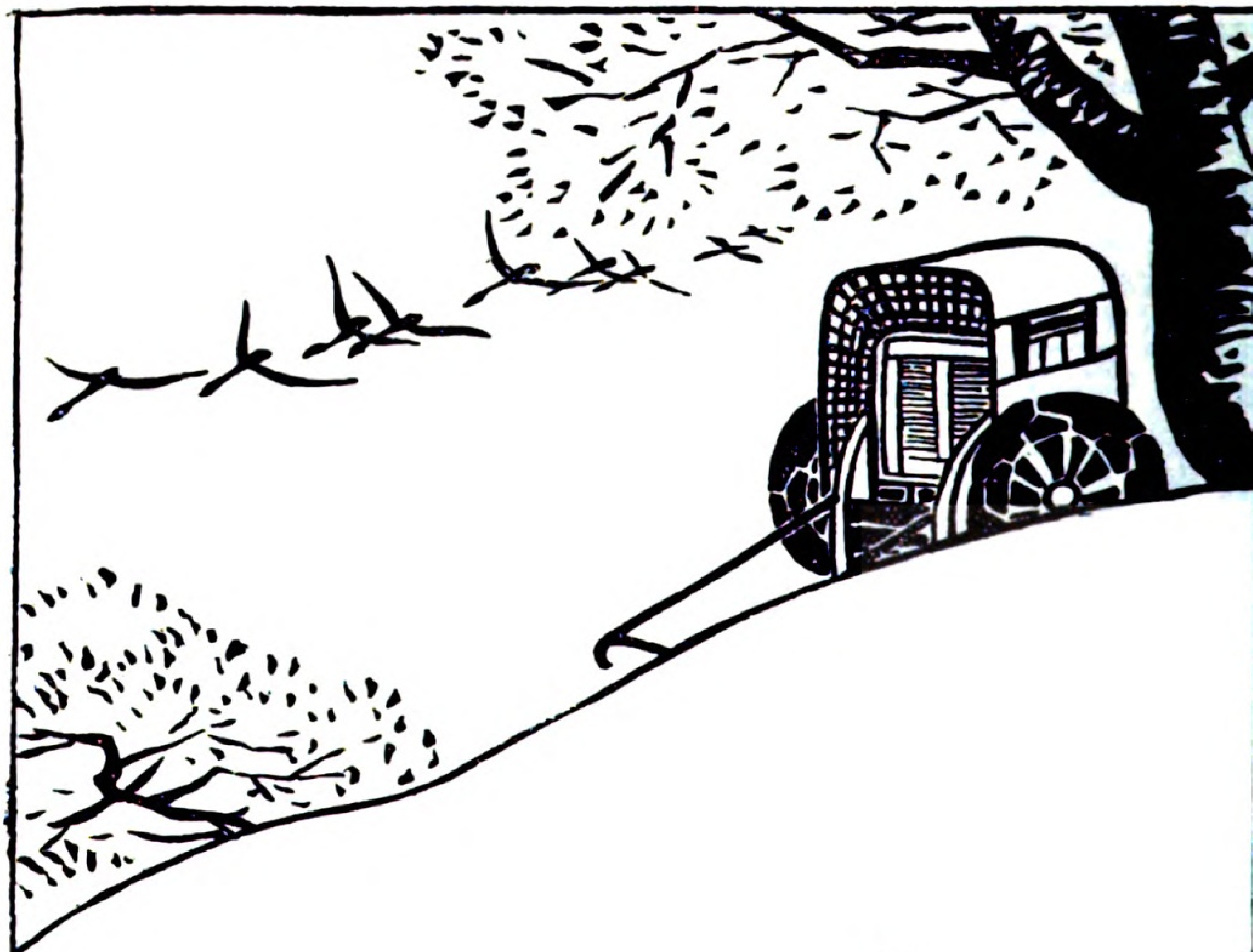
新製品陳列會

四月一日より新製品陳列會開催仕候本年は別して珍柄の品々數百種特選の上陳列仕り寄切見切反物は改築中の二階に賣場相設け例年ゟも澤山に御覽に入れ可申上尚御子供様方御用品及雑貨一切春季向清新の品々取揃申候間日々早朝より御來店遊ばされ度候洋服地も御散歩服地變りチョッキ地等新規輸入の物最近に到着仕り候間是亦御覽被下度候又日本橋開橋式を祝し意匠相凝らし申候帛紗風呂敷ハンカチーフ手拭等紀念品種々賣出し申候間御自用又は御進物用として御用命奉願上候一時休業中の食堂も四月一日より三階に假開設仕り殊に今季よりは新橋花月樓に於て食品一切調進仕り美味低廉を旨とし萬事注意仕り御便利相圖申候尚々増築中店内手狭と相成萬事不行屆勝と存候得共何卒御容赦被遊日本橋御通行の御序には是非々々御立寄の程偏に奉願上候　謹言

尚四月十日より五月幟武者人形陳列は正札を以て販賣可仕候

白木屋呉服店

女(りの四)



女學世界

第拾壹巻

第五號

四月號

現代婦人評論（其三）

社交界の花形

鐵拳禪

一

◉曰く情意投合曰く南北朝問題、曰く三税廢止案、曰く何、曰く何々……と、天下の耳目は皆日比谷に集り、主客の話題も亦帝國議會を中心とす。議會に於ける議員の一擧一動は、國民多數の凝視する所となり、其の演說の如きも亦多大の興味を以て傾聽せらる。

◉兩國橋畔の殷賑既に去りて、國技館の興味漸く議會に移り、議會の論議色めく時、傍聽席は人を以て埋めらる。斯の如く觀客——傍聽人を呼ぶ者は新聞紙也。

◉新聞紙の所報先づ主客の話題に上り、スケッチの髯と禿と眼鏡とは話題の興味を助け、傍聽——見物の念を挑發す。實際傍聽人の列に入るに至りて、其の興味の幾分は減殺せらるゝも、質問日の議場は又別種の興趣を添へずんば非ず。

◉松本君平質問するの時、夫人壽子傍聽席にあり。藏原惟郭演壇に前面の高所を仰ぐ時、質素なる夫人の姿は幾多の若き廂髮の中に在り。鳩山和夫議席より顧眄するの時、夫人春子の顏或は婦人席にあり。

◉婦人傍聽席は、議場の二百三高地也。遠く政府委員席を望み、近く三百七十有餘の頭顱を一目の下に集む。婦人此處に據りて演壇に對すれば、質問者の油の乘り來る事請合なるも、美姫嫣焉として流眄せば、又箍の弛ぶなきを保すべからず。

◉近時、婦人界漸く覺醒し來りて、單に家庭(城郭)の慰藉者たるに止まらず、進んで戰場の後援者たるに至れり。一個の城郭に立籠りて子女を鞠育し、戰鬪(職務)に疲れて歸れる良人を慰藉すべきは勿論なるも、社會の戰士たる良人を激勵し、良人の品格地位の向上を圖る事を忘るべからざる也。

◉天下は良人の天下に非ざると共に、奥様の天下に非ず、夫妻相待ち、相扶けて始めて天下泰平也。良人の趣味を理解し、良人の業務に同情し。良人を活動せしめ得るの妻は幸福也。汗馬に鞭して奔る底の妻は、餘り見てくれの好きものに非ず。

◉春子女史は良人自慢、息子自慢、嫁自慢の人也。年歯よりはお若く、擧止快活也、或は博士鳩山の選擧運動を助け、或は新聞雑誌記者を引いて談話し、或は社交界に活動す。一時は下田歌子、山脇房子と相駢びて、交際場裡の花形たりき。息一郎夫人は衆議院書記官寺田榮氏の女まだ萠え初めし春の若草、春子の後繼者たるべきや否やは、之を後日に待たざるべからず。

◉房子は精力主義の人、絶えず婦人界に活動し、飛躍し、表面に立ちて働かざれば止まず。良人玄は(法學博士)行政裁判所長官、彼女は山脇高等女學校長、各々行かんと欲する途を行く所、家庭の人たる春子とは全然其の趣を異にす。

◉世の毀譽褒貶の甚しきは歌子也 之に次ぐは房子也。一は朝の人にして、一は野の人也。一は清少納言を髣髴し、一は政子を聯想す。歌子は宮中の御用掛を罷め、學習院女學部を退くの後、羽翼傷つきたるの觀あるに反し、房子は各種の婦人會を操縦して、隠然たる勢力を扶植す。

◉歌子は何となく落着き拂ひて、おほまかなる所あり。勉めて光を裹み、香を匿して應對し 輕佻浮薄の態あらず。辯舌爽亮にして、一種の魔力を有す 吾人曾て、實踐女學校の卒業式に臨む。彼女一たび紅脣を開いて告辭を述べ、濃情の一韻胸中の琴線に觸るれば、卒業の女子皆首を俛れて流涕す。斯の如き「歡喜の悲劇」は、此の校に於て始めて見る所のもの也。

◉歌子は情の人也。房子は智の人也。一は歌人にして一は政治家(實際は教育家なるも)也。歌子は上流社會の交際に馴れ、房子は婦人界の一角に風雲を觀望す。丁抹の婦人選擧權運動領袖は、遙々書を房子春子等に寄せ、本年六月ストックホルムに開くべき歐米廿一ケ國聯合婦人參政權運動會に、來會を促し來りたるを以

て見れば、彼女の名聲も既に國内の者に非ず。併し根本人物の大小に至りては房子は勿論歌子の敵にあらず

◉婦人參政權獲得に熱狂するは、英國の婦人也。夙に參政權を得たるは、フヰンランド婦人也其の議會に巾幗代議士十九名の議席を有す。本邦に於ては漸く議會傍聽の權を有するに過ぎず、參政權の如きは唯一場の癡夢のみ。

◉壽子は男岡内重俊の三女也。君平に配してより、政治に趣味を有し、陰に陽に良人を鼓舞す。君平は竹越與三郎、望月小太郎等と議會の三ハイカラを以て目せられ、重きをなさずして輕きをなしたるも、近時與三郎と共に貫祿を增したるを見る。是れ年の功なりと雖も亦、夫人内助の功ならずんば非ず。

◉竹越竹代は岡山縣人中村與膺の姉、望月嘉代は東京新見七之丞の長女、共にハイカラを良人に持つ佳人也。與三郎は現代議士、全院委員長として羽振よく、小太郎は前代議士、今は英文通信社を經營す。夫人嘉代子は東洋英和女學校の出、自らタイプライターを打ちて事業を幇助し、時に相携へて交際場裡に出入す。雙蛺蝶の片々として、花に舞ふに似たり。



下田歌子女史

◉竹代子は信仰の女性也。彼女の宗教論は一家の見を持す。好んで來客の前に出洒張らざるも。人の訪ふあれば一刻の淸談を辭せず。風神白百合の如く、他をして薰染せしめずんば止まず。年齒正に四十二嘉代子の三十四、壽子の三十に比して。年長者の光榮を有す。

二

◉日向欣子は、代議士日向輝武の夫人也。輝武は移民界の雄、扮裝も素振も構はざる蠻カラ也。而して夫人

欣子はハイカラにして美人也、上毛の俠に配するに、東京の趣味を以てす。三ハイカラの夫人と、好個の對照ならずんば非ず。

◎欣子は烏森の奇俠眞島權瓶の養女也。輝武將に移民事業に扇ち、萬金を懷ろにして北米より歸り。歌吹海裡を横行して頻りに麗姫を物色す、彼女時に妙齡十七、大液の芙蓉。未央の柳、まさに其姿を成さんとす、敎坊他日の神采凤に幾多嫖客の眼中に映ず、財界の風流才子某々等食指萃りに動く、輝武機先を制して未だ其の汚れざるに拔く。こゝを以て彼女は巷の塵に染まざるに早く一家の妻となつて、深閨の裡、歌詠に親しみ、文墨に耽り、日夕寛平の才人を憧憬して宛然たる王朝美人の生活に入りさわらび女史の雅號を以て枕の草紙に追隨す斯くして


鳩山春子女史

彼女は歌を鈴木重嶺に、書を多田親愛に家政を小具貞子(愛住女學校長)に學び、且英佛の二語を研修せり。今日の彼女を知り、英語を操るの妙を讃するもの、誰れか昔日の濱の家の養女なるを思はんや。

◎才色雙絶を以て、欣子と名を齊しうするもの、江木ゑゐ子あり。東京岡田るゐの養女にして、法學博士江木衷の夫人也。多くの紙上榮子に作れども、今戶籍面に據りてゑゐと書す。欣々女史は其の號也。

◎欣々は趣味の人也。多藝多能適くとして可ならざるなき才女也。謠曲を觀世清廉に、鼓を三須錦吾に、漢詩を岩溪裳川に、書道を齋藤芳洲に、繪畫を橋本雅邦に、馬術を法學士阪井泰次郎に修め、篆刻は其の最も長ずる所也。曾て大日本篆刻會に出品して、二等賞を得たるは、其の技の優秀なるを證す。

◎現代ハイカラの兩大關を、趣味の東西を以て論ずれば、ゑゐ子は東洋趣味也。欣子は西洋趣味也。其の雅號より云ふも一は漢詩人欣々也。一は小説家さわらび也。欣々は『馬上吟』に其の豪懷を吐き、さわらびはキーッの詩集に泣く。粹七分ハイカラ三分なるは彼れにして、ハイカラ七分粹三分なるは此れ也。

◎欣々は和裝を好み、さわらびは洋裝を愛す。然れども、天長節夜會の際は平常愛する所の洋裝を捨て、和裝を纏ふを例とす。而して其の和裝も白襟黒紋附の古風にはあらで、色は今様の薄桃色乃至藤紫。――滿堂の花瓦斯煌煌として輝く所、和裝の色彩と化粧と兩々相待ちて、外國婦人中に其の美を發揮す。

◎逝ける高橋千代子は、流行界の女王なりき。良人義雄の三越の重役たりし關係より、衣服には特に意匠を凝し、模樣及び形等を考案して、以て流行界を指導せり。加ふるに天の成せる麗質は、彼女をして美名を擅にせしめ、當時「日本第一」の稱あり。

◎『時事新報』に當選せる日本第一は、末弘ひろ子也。彼女は學習院女學部に學び、令孃美の代表者なりき。千代子に至りては夫人美の代表者にして、流行界の源泉となり、現代的虚榮婦人の典型なりき。顯はれたる日本美人界の双璧也。



山脇房子女史

◎ひろ子は侯野津鎭之助の室なり。彼れ名門を負ふて又罕儔の美貌あり將來の社交界を双肩に荷うて立つならんも、千代子は既に歸らぬ人となれり。千代子は元岐阜縣書記官長谷川方省の四女、小川小學校(神田淡路町)卒業後、英語を英人某に、箏曲を山登萬和に、謠曲を梅若六郎に、和歌を小出粲に、書道を小野鵞堂に、水彩畫を二葉會に學び、就中、箏曲は其の得意とする所也。

◉『たらちねの母のいませる心地して昔戀しき雛祭かな』とは千代子の詠也。彼女の溫情は、遺憾なく三十一字の裡に流露す。此の趣味を移して寫眞に遊び、元祿姿、ハイカラ姿等の千姿百態を撮影し、又自ら進んで三越の繪看板（洋畫家岡田三郎助筆）となる。其の事情は異なるも、吾人は徐ろに畫家カノーワの爲めにヴヱニユスのモデルとなれる、那破崙大帝の妹を偲ぶを禁ずる能はず。

三

◉金轡の白馬夕陽に嘶き、輕車飛ぶが如く神田小川町一番地角を右に折れ、廣濶なる坦路を眞直に南甲賀町の邸に入る。邸前には供待の馬車數臺、腕車數輛、殆んど市を成すの觀あり。

◉社交界の明星戸田極子は即ち此の邸の女主人公也。



古川虎之助夫人

彼女は維新の大元勳岩倉具視を父とし、舊の大垣藩主にして式部長兼主獵局長たる伯氏共を良人とし、一種の門閥的勢力を以て、華やかなる空氣の中に呼吸しつゝあり。

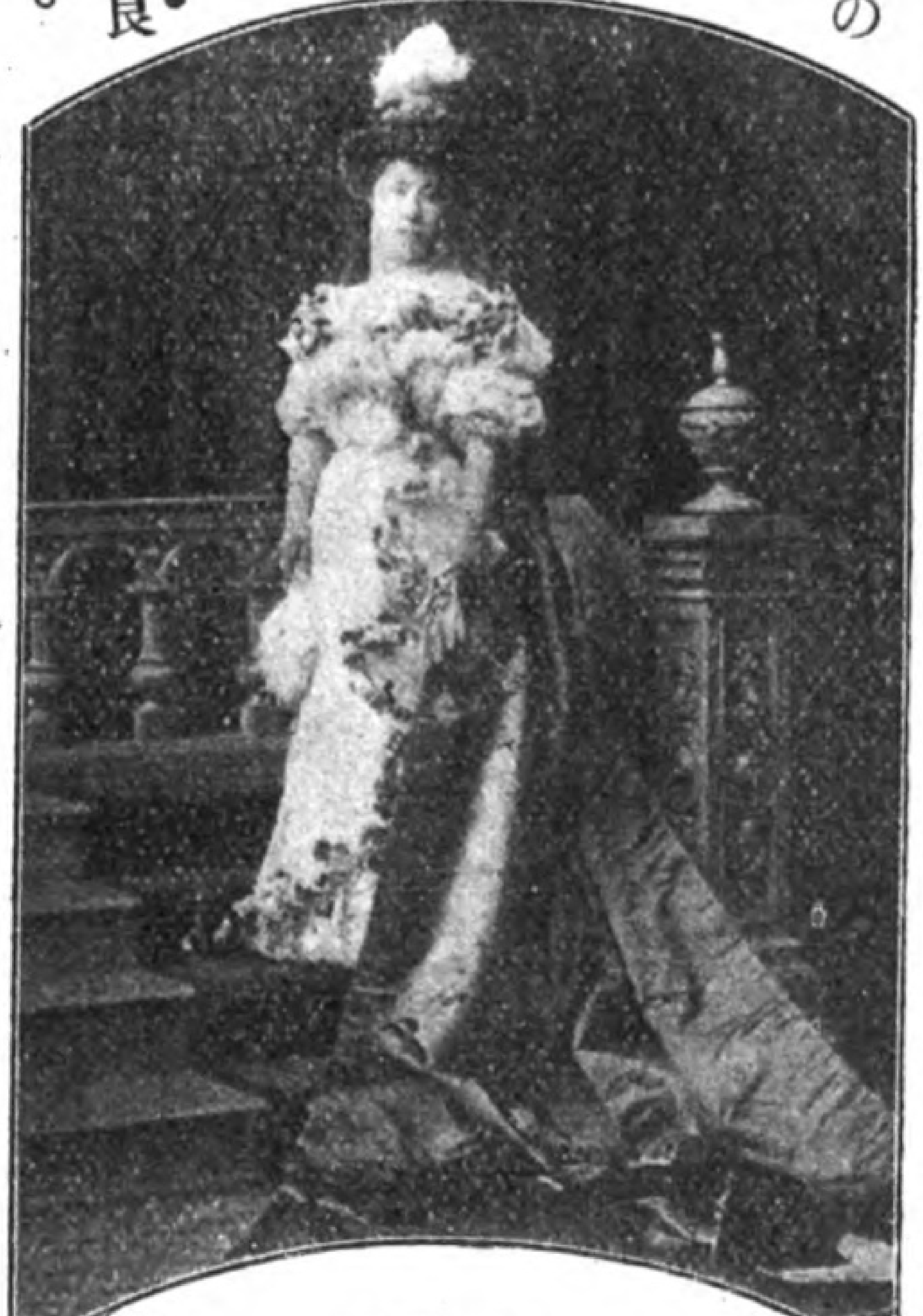
◉極子、少時嬌名あり。舞踏の名手として、内外紳士間に持て囃され、鹿鳴館裡燈明かに花薫る所、滿場の視線を一身に集めたり。是れ彼女の交際場裡に立てる初陣にして、聲名開運の序幕ならずんば非ず。

◉其の交際振は花やかならざるも、婦人界に勢力あるは二條治子（公基弘夫人）也。彼女は翩々たるハイカラに非ずして、優に頭首の器あり。濃厚に非ずして瀟洒たり。單に交際場裡の人たるのみならず、亦能く事業方面にも活動し得るの材能を有す、只惜む天性蒲柳にして十年の痼疾未だ癒えず、多くは湘南の別墅に閑日月を銷するを。

◉治子は故前田利嗣の叔母にして、亦近衛貞子（公篤麿未亡人の）叔母なり。貞子は公の薨後甚だ振はざるも、時に公會席上の人たる事なしとせず。前田漾子（侯利爲夫人）は所謂百萬石の息女、芳紀二十五歳の麗姫也。未だ交際場裡の人たらざるも背後に黄金あり、亦門地あり、加ふるに天成の麗質を以てす多望なる未來は彼女の前に展開せらる。

◉門地を以て羽振の利くもの、一條悦子（公實輝室、侯細川護成妹）あり。九條千代子（男良政室、伯大谷光瑩の女）あり。九條武子（男良致室、伯大谷光瑞妹）あり。悦子は愛國婦人會理事にして、武子は眞宗婦人會に關係す。

◉武子、曾て英京に在り。當時歐洲漫遊中の籌子伯大谷光瑞夫人）に會し、共に家事及び社交に就きて研究する所あり。若くして文明の交際に慣れ、趣味高尙の賤しからざる所、天晴上流ハイカラのタイプならずんば非ず。



戸田伯爵令嬢

◉故裏方籌子は公九條道實の妹、皇太子妃節子殿下を始め、山階宮妃範子殿下、澁谷逢子（男隆明夫人）、大谷袛子（西本願寺法嗣光明室、と姉妹の關係を有す。而して、武子は其の實弟の室となれるを以て、九條家と大谷家とは最も固く結び付けり。

◉武子の眼は表情の音樂也、光榮ある人生の春を讚美す。裏方籌子の活動は黄金の雄辯也、人生の敗北者を慰藉す。彼女が婦人慈善會の總裁となり傷病兵を慰問せる、法主光瑞に隨ひて北海道より樺太を巡錫せる、さては淸國に遊び、印度及び歐米に航せる等、深窓の貴婦人を覺醒するの雷音なりし也。

◉松平信子(子容大弟恒雄室)は學習院女學部出身、西園寺新子(侯公望嗣子八郎室)は日本女子大學出身、共に社交界の新進也。斯界倘し官學私學の對抗を見るの曉あらば、兩者必ずや各々一方の將とならん。

◉信子は侯鍋島直大の四女、梨本宮妃伊都子殿下の令妹也。三十九年十月東京を出發して倫敦に赴き、十二月同地に於て結婚式を擧げぬ。當時良人の英國大使館書記官たりしに由るとは云へ、社交界の檜舞臺に於て花嫁となれるの一事、日本處女の矜ならずんば非ず。

◉彼女は昨年三月歸朝し、先月東宮御用掛(奏任待遇)を仰付られ、外國婦人接伴の任に當る事となれり。流石は社交界に敏腕の聞え高き榮子夫人の女たるに恥ぢず。

◉阿部篤子(伯正桓室)は、侯鍋島の養女也。壯健にして滅多に醫藥を口にせず、身體肥滿して體量十八貫餘、風姿榮子に肖たるものあり。良人伯は謠曲に凝りて多く外出せざるに反し、彼女は能く社交界に活動す。現に愛國婦人會副會長也。


戸田伯爵夫人

◉小笠原貞子(伯長幹室)は、謠曲の父、和歌の母の間に成長して、カメラに趣味を有す。母篤子の肥滿に似ず、玉肌滑かにして美容あり。華族女學校時代夙に才名を馳す。

◉伯長幹は繪畫の嗜好深く、殊に寫眞の技を得、華香會員中の翹楚也。夫人の趣味は、乃ち良人の趣味也。夫人自らレンズを定めて映寫し、現像、燒付け、貼附等に至るまで、一として纎手を煩はさざる莫し。

◉長幹夫人は絕世の美人、容顏玉の如く、肌膚眞に羽二重をのべたるが如し、故に幾多の侍女炊婢等、朝夕の化粧部屋を垣間見て恍惚として其身を忘るゝほどなりといふ。偶々長幹伯の來りて怪しみ、「コラお前達、

何をして居る」叱咤の聲を聞くこと屢次。

◉趣味の人には非ざるも、寺島京子(伯誠一郎室)は社交界の人。富豪三井源右衛門の女也。伯は外務大臣秘書官を退くの後、其の關係よりして北海道炭鑛の取締役となりぬ。

◉彼れの姉多惠子は、宮中顧問官長崎省吾の夫人也。英語に堪能にして、外人接伴には無くはならぬ婦人也。聞說、彼女は畏き邊の通譯をも仕うまつり、皇后宮の有り難き思召を蒙る事數次なりと。

四

◉實業家の夫人にして、社交界に著聞する者多からず。是れ一つは亭主の算盤勘定の都合に依るべきも、新時代の敎育を受けざる事、多大の原因ならずんば非ず。

◉次は人爵階級の關係也。婦人は殊は虛榮の强きもの其古へ町人の女房として貴婦人と交際するが如きは身が引けてならぬものつひ出不精となる也。然るに、近時金權の膨脹と共に、實業家の夫人令孃漸く世間に幅を利かさんとす。



一條公爵夫人

◉男澁澤榮一室かね子は、實業界の名婦人也。安政二年一月十五日、麻布區新網町平民伊藤八兵衛の娘と生れ、溫順貞淑の聞えあり。バロン澁澤の地位を得ると共に、彼女も亦名を成すに至れる也。

◉先年實業團の一行に加はりて、米大陸を漫遊す。當時其の行を共にせる婦人に、神田熊千代(男乃武室)あり。堀越しな子(堀越商會主善重郎夫人)あり。而して、東道の役を相勤めたるは、才色雙美の水野夫人(紐育總領事幸吉夫人)也

◉彼女は長胴短脚の日本婦人には似もやらず、脊格好すらりと高く、紅脣巧みに英語をあやつりて、表情

に富める眼を耀かす。彼地の公會席上に於ける交際振の鮮かなる一行婦人をして其の擧措を誤らしめざりしは彼女の賜也。

◉しな子は前田献吉（貴族院議員）の二女、英語を解す。『時事新報』の求婚廣告を介して、婚を善重郎に結べり。求婚者は即ち深沈寡默、ブリキラボーの蠻カラ、應募者は敎育ある美婦人、又交際界の一佳話ならずんば非ず。

◉松方好子（子九鬼隆輝姉）は、侯松方の次男幸次郎夫人也　此の行には良人のみ加しと雖も、又携帶の資格を有す。彼女は六年間米國にあり、マウント・ヴアモント學校に學び、現代新婦人の好タイプ也。

◉古河虎之助の夫人は侯西郷從道の女、容貌花の如き岩倉櫻子（公具張夫人）の妹也。村井久子は往年ヒーロー、サンライスの賣捌元今財界に雄飛せる村井商會主吉兵衞の一女、舞踏界の寵兒也。



鍋島侯爵夫人

◉官界の外交方面には、石井たま子（外務次官菊次郎夫人あり。佐分利文子（外務省參事官貞男夫人、小村外相の女）あり。其他、大使公使夫人にして、活動する者なきに非ざるも、今悉くは擧げず。

◉稻垣榮子（公使滿次郎寡婦故子爵山口尚芳の女）は、公使夫人中の異彩也。曾て暹羅に在るや、同國皇室の優遇淺からず、クインスクールの敎授としては皇族の子弟を薫陶し、公使夫人としては交際場裡の花と稱せられ。榮華を一身に鍾めたりき。

◉滿次郎は稀代の醜男也。經歷を以てすれば大使たるべき人物が、僅かに暹羅、西班牙等の駐劄公使に止まりしは醜男の所爲也と評する者あり。若し美容の榮子

夫人なかりせば、是れ程に昇進せざりしやも知るべからず「駿馬痴漢を乗せて走るの比喩」京童をして戯れ言はしめたるは酷辭なり。

◉死別の哀愁未だ去るざるに、榮子は早く高橋義雄に再嫁すべしと傳へられぬ。されど、本物とならずして歇めり。才情餘りあり抱負又殊に大なる彼女は、大使程の人物ならばと、云はんも、實家にては相當なる人物あらばと云ふの形勢あり。白雲の徂徠、唯高山の巓のみには非ず。

◉尾崎テオドラ(英子)は東京市長行雄の新夫人也、彼女た男尾崎三良の女。純然たる西洋婦人の風姿あり。深く文學趣味を解し。閑餘ペンを英文に染め、昨年一書をボストンより出版せるは世人の知る所也。

◉行雄は今帝都の市長に隱るゝも、曩日政界の飛將軍たり、其辯爽涼にして沈痛、言論の規模頗る雄大にして憲政國首相の器たるを想望せしむ而かも中道失意振はず、僅かに市長の椅子を贏ち得たるに過ぎず、末すぼりの運命憐れむべしと雖も、晩近美人の配を得て、恩情尤も厚く失路の志を慰むるを得て忽ちにして閨門得意の人となれり。去年夫妻相携へて歐米の盛都に遊び、頗る文明のハイカラ生活に襯染すと聞くテオドラ夫人の近況これを證す。



寺島伯爵夫人

◉テオドラ孃は金髪にして黑瞳所謂日英同盟の子なり三十にして嫁せず、日夕文筆に親しみて悶々の情を遣る、當時愕堂居士も又亡閨の恨みあり、亡妻は糟糠の人にして、居士と艱難を共にする二十有餘年、好個内助の模範たり、故を以て居士の志を悲しむもの皆以て適當の後繼者を得せしめんと議す、偶々倫敦より雁信あり、

拔いてこれを見るに、全く不知不識の書なり、蓋し、テオドラ尾崎に致すべきを郵便脚夫誤つてこれを市長尾崎に呈せるなり、こゝに於て愕堂居士その輕卒を謝し、改めてこれを尾崎男爵家に致す、始めて知る金髪黒瞳の孃子、その名をテオドラと稱し、未婚の美人なりし事を　落花情あり、流水豈こゝろなからんや、月下氷人來つて結ぶ、眞に奇縁といふべし。

◉外國婦人にして本邦人の妻となり、社交界に知らるるもの、三宮八重野（英京―男義胤後室）あり。新渡戸萬里子（北米―博士稻造夫人あり。青木エリザベット（普魯西―子周藏室）あり。伊東マリーフラバーズ（巴里―海軍中將義五郎室）あり。高橋ルイゼ（獨逸―博士順太郎夫人）あり。長井テレーセー獨逸博士長義夫人）あり、獨逸系多數を占む。


水野幸吉氏夫人

◉就中、内外人に交際多きは八重野也。貴婦人のノートには、必ず彼女の招待會を逸せず。エリザベットは良人の隱退後、閑散の地にあり。萬里子は華やかなる舞臺よりは、寧ろ精神界に活動するに似たり。

◉伊澤乙女子（貴族院議員修二の女）は、清國人、（大使館參贊官吳振麟）に嫁し、今春一女を擧ぐ。而して之が媒介の任に當れるは、服部繁子（博士宇之吉夫人）也。此の二人者は、日清兩國の社交界に翺翔す。

◉服部夫人漢儒島田重禮の女才豊かにして口舌あり、これを以て北京宮廷の大官貴嬪の間に出入し遂に西太后の信頼を博するに至り一時公使夫人以上の腕ありとまで噂せられぬ。

五

◎陸海軍人の夫人とし云へば、良人の階級を笠に著て公會の席上にまで上下を論ずるが常也。之が爲めに、月若き奥樣の如きは、其の出席を厭ひ、遂に社交に熟せざるを致す。此の弊を矯めんとせば、先づ將校の婦人會より改めざるべからず。

◎伊集院繁子（海軍大將五郎夫人）は軍人奥樣の弊に染まず、能く公共事業に盡瘁す流石は幕府麾下の士大野義方の女なりと、賞讃する者あり。現に愛國婦人會及び東洋婦人會評議員、篤志看護婦會理事也。

◎伊集院五郎は敏才辣手、洵に海軍部内の麒麟兒なり、而して夫妻の奇緣頗る小說的說話を有す、繁子は華族女學校の出身にして才貌雙絕の譽あり、夙に好配を得て官界の一才子に嫁ぐ、春夢暖かく鸞鳳の契淺かにざりしに運命の神はこの才子佳人に禍して花に嵐の嫉みを受けぬ、彼女は空閨の怨を齎らして雨の夜、風の晨にその心友を訪へり、心友は即ち伊集院の先夫人なり、伊集院夫妻その不幸を憐れみ、頻りに再醮をすゝめてその勞を執る、而かも繁子の決心固くして終生寡獨の志奪ふべからざりし。斯くて春風秋雨五閲年、伊集院夫人は不治の病に罹りて命旦夕に迫まる、姉とも賴む繁子の心痛幾ばくぞ、而かも夫人は再び起つ能はざるを知り、良人に遺言して必らず繁子を迎ふるを以てす、繁子即ち快諾して後妻となる、而して彼女が先夫人の遺子に對する眞情は、生の親にも優りて恩愛深しと聞く、草葉の陰よ、若し靈あらば滿足の笑を禁じ得ざるべし。


稻垣榮子女史

◎大臣大將の夫人に、桂かな子あり。侯井上馨の養女として侯太郎に輿入したるも、實は名子屋香雪軒の娘

也。粹な丸髷に結ひて、優にやさしき奥樣風、水際立ちて、美しくおはします。

◉かな子夫人、敎坊鄙賤の出なりといへども、天稟聰明にして且嬌舌あり、亦よく良人の地位聲望に追隨するの品位を備ふ、往年太郎侯爵始めて内閣引受の際、力足らずして屢々足を大磯に向け、伊藤公の聲息を窺ふの御苦勞もありしがその時必らず夫人を伴ふ。政治上に些の必要なき婦人の同伴、これ然しながら春風氷を解くの用意にてもありなん

◉彼女に一の珍話あり。日露戰役の際、新橋停車場内に休養所を設け、篤志看護婦人會員は交代に出勤せしが、かな子夫人の出席せるは唯の一回、而も素足に下駄穿きと云ふ粹を見せたる外、一言も發せざりきと。

◉後藤和子（男安場保和二女）は、現内閣の花形遞相新平夫人也。髪は角刈、金縁の鼻眼鏡にハイカラ髭の男爵樣に比すれば、夫人は至つて地味也。新平性急にして火の如く、和子は溶々として春水に似たり。水火相和せざるは通り相場なるも、後藤の家庭は琴瑟相和して頗る平安。夫人に一技能あり曰く立板に水！



尾崎テオドラ夫人

◉交際場裡に立ちて、派手なるは末松生子（子謙澄夫人、公伊藤博文長女）也。活氣横溢せるは目賀田いつ子（男種太郎夫人、伯勝安房の女）也。生子は竹柏園の歌風を學び、文藝の嗜好淺からず。いつ子は朝鮮の事情に精通し、意見の聞くべきものあり。二女共に、多少生父の面影を傳へずんば非ず。

◉目賀田夫人は男勝りなり、六尺の有髯子時々その罵倒叱咤に遭ふて閉息す、平生草むしり、畑うち、米搗は申すに及ばず時に人糞を汲み、肥桶を擔ふて百姓の姿と業を爲す偶々長袖、紫裙の婦人を見れば態と

腕をまくり臀を端折りて其の意氣を示し、「どうです、貴女方に出來ますか」

◉家庭敎師として蒙古に入り、鬚武者をアッと云はせたる河原操子は、今一宮鉎太郎（正金紐育支店長）夫人として米國に在り。小崎千代子は、敬虔なる牧師弘道夫人。良人を助けて靈界の事業に活動し、年歯稍傾くも意氣益々盛んなる者あり。

◉宮岡けい子（東伏見宮妃殿下御用扱恒次郎夫人）は、千代子より六歳若く、本年四十二歳、旣に孫あり。而も若々しくして血色好く、近く良人と共に、殿下に隨ひて渡英せんとす。

◉けい子は英和女學校の出身、十九歳にして恒次郎に嫁ぎ、明治二十七年始めて米國に渡り、六月程滯在して獨逸に赴き、約七年間在留せり。而して三十九年再び渡米し、四十二年歸朝せるを以て、英佛獨の語を善くす、長崎多惠子、松平信子等と相駢んで、外人接伴の花形也



前田侯爵夫人

◉早老者の多き婦人中に、小崎千代子あり、宮岡けい子等ありて、なほ處女の如く活動するは、少くとも現代婦人界の誇也。年未だ三十ならざるに、青春時代を葬り去りたるが如く悲歎するは、斷じて現代婦人の繼續すべき思想に非ず。

◉若かれ！　若かれ！　若かれよ、若くして咲く花の如く、老ゆるも猶美果の如く、美しき光と潤ひとを有せざる可からず。而して『活動』は、這裡より發生す。

櫻がり我袖ながら散花を
はらはでけふの山つとにせん　春海



細川三齋夫人秀林院の事に就て俗說を辯す

池邊義象

細川三齋(忠興)公夫人秀林院の最期に付て、近來說を爲すものがあるが、史實を究めず俗說に據て論評をするもの多く、空中に樓閣をゑがく感があるから、此に聊か辯じて見やうと思ふ。

まつ系圖からいはふ。或說に秀林院を明智光秀の妹とせるは大なる誤である。これは正しく光秀の女で、明智系圖によれば、長女岸、次女花後里、三女春後玉。即ちこの玉と云ふが後の秀林院夫人で、永祿七年正月の誕生である。これで光秀の女たることは明かであるが、猶細川家譜にも、本朝列女傳にも光秀の女とあり、關ケ原軍記大成には、忠興が內室は明智日向守光秀が女なれども君を敬ひ夫を恐るゝ心ばへ父光秀に似ざりしとて皆人あはれがりしとなん云々と見え、日本西教史にも丹後侯ジヨクンドノ(細川越中守忠興)の夫人(明智光秀の女)は云々とあつて、何の疑ふ所も無い猶細川幽齋公(藤孝)が丹後に在て信長の變を聞かれて忠興に向ひ、我は信長公の御恩深く蒙りたれば剃髮して多年の恩を謝すべし、其方事は光秀とは聟舅の間なれば彼に與すべきや心に任せらるべし云々とあるなどにて愈明瞭である。

又忠興公との婚義の事を考ふるに、細川家譜に、天正二年正月十七日信長の命に依て結納がすんでをるが、この時夫人は十一歲、忠興公は十二歲である。さて同六年即ち夫人十五歲忠興公十六歲で結婚せられたとある。光秀は天正十年即ち信長を弑した年に山崎合

戰で敗北して歿したが、五十七歳と傳へてある。さうすれば永祿七年(秀林院出生)は光秀の三十九歳の時である。この齡の上からかんがへても妹といふはあまり年間が遠ざかり過ぎるではないか。況や光秀の父光綱は蚤く死して光秀は孤になつて居つたといふではないか。

この秀林院夫人には、長子忠隆(幼名熊千代通稱與一郎後薙髮して長岡休無といふ)次子與秋(與五郎と稱す)三子忠利(幼名光、内記と稱し越中守に任じ肥後の國主と爲る)長女長(前野出雲守長重の室)次女多良(稻葉民部少輔一通の室)がある。その他忠興公の男女の子はあれどもいづれも側室の出である。

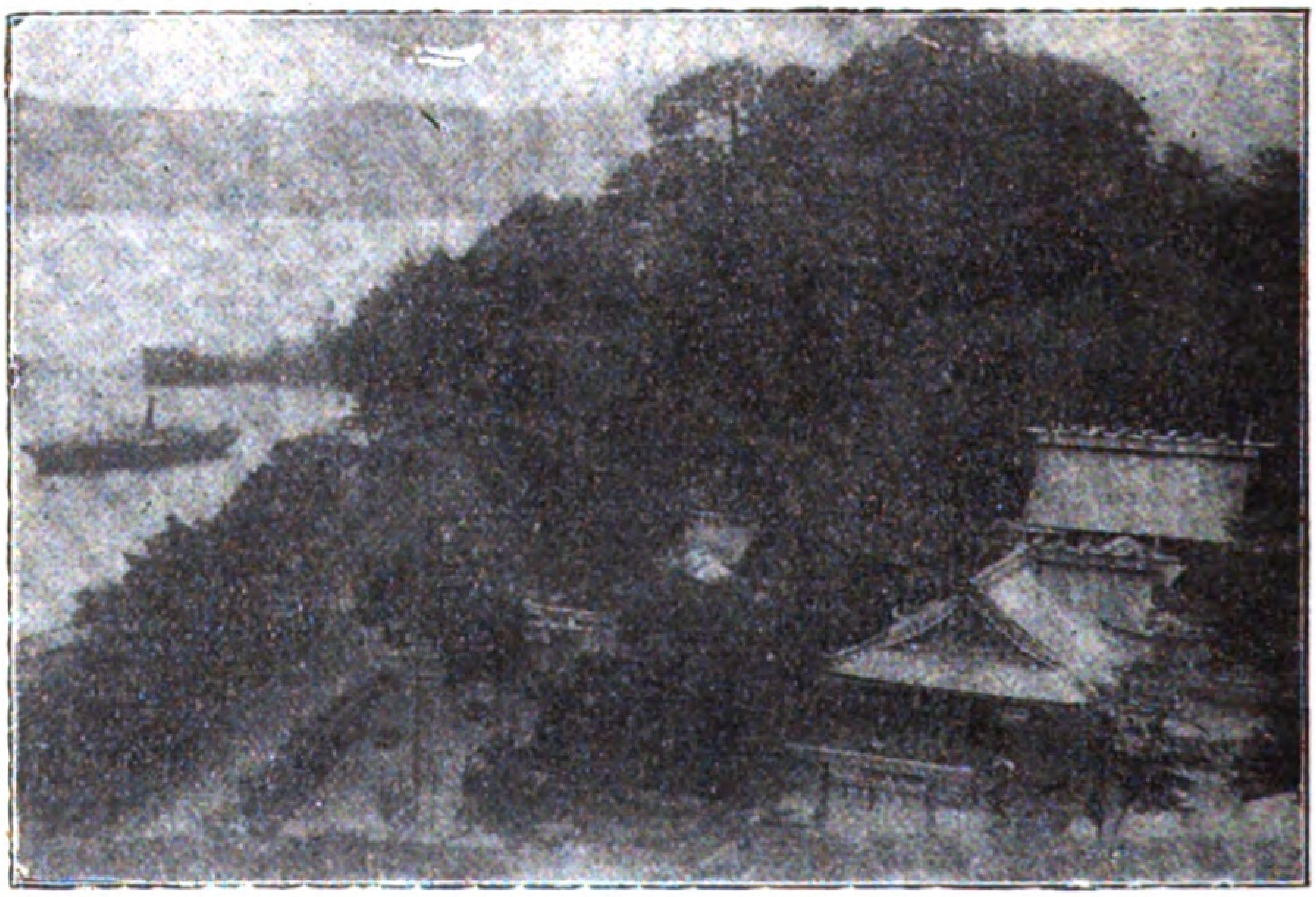
慶長五年七月關が原役の起る前、この夫人は大阪玉造の細川氏の邸(この邸の事を城のやうにかいてあるものもあるが間違ひである)に留守をして居られた。時に石田三成が大阪城中から人を遣はして、質に取らうと強ひたことが本となつて、この夫人はこの邸内で死を遂げられたのである。

この時の事が即ちこの夫人の大節の大にあらはれた時で、列女傳にものり、人もやかましくいふことである。然るに列女傳や武者物語などいふものは俗說の多いものでこの最期の狀を傳へて、夫人は十歳の女子と八歳の男子とを手づから害せられて後、みづからも害せられたやうにある處から、今人が之を見て、あまりその處置が殘酷である、女子の鑑と見るべからずとか否々この場合にはこの方法に出づるより外にない、實に同情すべきである。かくてこそ女子の鑑と仰ぐべきであるとか人々の評論まち〳〵であるが、これは空中に樓閣をゑがき、夢中に夢を說くやうな譯で、實際十歳八歳の男女の兒も何にもない。細川家系圖には生れて程なく夭せられた人さへこまかに載せてあるが、この時八歳とか十歳とかなられた方などは一切載せてない。明智の系圖にも無論ない。これは全く想像を加へて何人かゞ作り成したもので、劇などに悲しくあはれに演せられるから、人口に膾炙したものであらう。そのかたもない事をとらへて彼是批評するのは穿鑿の足らぬも甚しいといふものである。(併しがやうな事はつひその說に引込まるゝもので、自分も青年時代には芝居を見て深くこれに感じ、その通りとおもひ說を成して居つたが、段々調べて事實ならぬことを知つた)

この時の事情は秀林院夫人の侍女霜といふが正保五年二月十九日（慶長五年から四十九年）に細川光尚公の命によつて書き上げた「覺書」と日本西教史とは、最も能く盡して居る。まづ「霜の覺書」を左に掲げやう。

しうりんゐん様御はて被成候次第の事

一、石田治部少輔、亂の年七月十二日に小笠原少さい・河北いわみ兩人御臺所までまいられ候、私をよび出し被申候は治部少輔かたより、いつれも東へ御立被成候大名衆の人じちを取申候よし風聞仕候がいかゞ仕候はんやと申され候故、則秀林院樣へその通申上候へば秀林院樣



越前敦賀金ヶ崎神社

御意被成候は治部少輔と三齋樣とは兼々御あいだあしく候まゝ定めて人じち取初には、此方に申参るべく候、はじめにてなく候はゞよそのなみも有べきが一番に申來り候はゞ御返答いかゞ被遊能く候はんや、せうさい、いわみ、ふんべついたし候やうにと御意被成候故、其通私承り兩人へ私申渡候

一、せうさい、いわみ被申候はかの方より右のやうす申來り候はゞ人しちに出候はん人無御座候、與一郎樣與五郎樣はひがしへ御立被成候内記樣は江戸人質に御座候唯今爰元にて人質に出候はん人壹人も無御座候間出申事成ましきと可申候せひ共に人質取候はんと申候はゞ

丹後へ申遣し幽齋樣御上り被成御出候ものか其外何とそ御さしづ可有候まゝ、それまで待候へと返事いたすべきと申上られ候へは一段可然よし御意御座候事。

一、ちやうこんと申す比丘尼御上樣へ御出入仕候を彼方より此人を賴み內せうにて右の樣子申こし人しちに御出候樣にと度々ちやうこん申候へとも三齋樣御爲にあしと候まゝ人質に御出候事はいかやうの事候とも中々御同心なきよし仰られ候また其後參り申されは左樣に候はゞうきだの八郎殿は與一郎樣おくさまにつき候間御一門中にて御座候間八郎殿まで御出候へば其分にては人質に御出候とは世間には申ましく候まゝ、さやうに被遊候へと申いり候事

一、御上樣御意被成候はうき田の八郎殿は尤御一門中にて候へども是も治部少輔と一味のやうに被聞召候間それまでも御出候ても同前に候まゝ是も中々御同心なく候ゆへ、內せうにての分にては埒明不申候事

一、同十六日（今按に時慶卿記には十七日とあれど此方正しきか）かの方よりおもてむきの使參候て是非是非御上樣を人質に御出し候へ、さなく候はゞ押かけ候て取候はんよし申越候に付少齋石見申され候は餘り申度まゝの使にて候此上は我々共是にて切腹いたし候共出し申ましき由申遣し候それより御屋敷の者共覺悟仕申候事

一、御上樣御意には誠押入候時は御自害可被遊候まゝ其時少齋奧へ參り御かいしやくいたし候樣にと被仰候與一郎樣御上樣へも人しちに御出し有ましく候まゝ是もろ共に御じがいなさるべきよし內々御やくそく御座候事

一、少齋石見稻富此三人だんがう有之稻富はおもてにて敵を防き候へ其ひまに御上樣御さいご候樣に可仕由談合御座候故則稻富は表門へ居申候されて其日の初夜の比敵御門までよせ申候稻富は其時心がはりを仕り敵と一所に成申候其樣子を少齋聞きもはや成ましくと思ひ、長刀を持ち御上樣御座候所へ參り

只今が御さいごにて候由申され候内々被仰含候事にて御座候故與一郎様奥様をよび一所にて御はて候はんとて御へやへ人を被遣候へば、もはやいつかたへやらん御のき被成候に付力なく御果被成候少斎長刀にて御かいしやくいたし申され候事

一、三斎様與一郎様え御書置被成候、私へ御渡し被成被仰候はおくといふ女房と私と兩人にはおちのき候て御書置を相屆御さいごのやうす三斎様へ申上候やうにと御意被成候故御さいごを見すて候ては落申ましく候まゝ御供いたし候はん由申上候へとも二人はせひおち候へさなく候へば此のやうす御存知なされまし

越前敦賀常宮神社



くれまゝひらにと被仰候故せひなく御さいごを見屆しまい候ておち申候内記様御知人には内記様への御かたみを被遣候事

一、私とも御門へ出候時分はもはや御やかたに火かゝり申候御門の外には人大せい見へ申候後に承候へは敵にては御座なく候由火事故あつまりたる人にて御座候と申候敵參り候も一ぢやうにて見なし候へともいなとみを引連れ御さいご以前に引申たるよし是も後に承り申候、則御屋敷にて腹を切り申候人は少齋石見石見甥六右衛門　同　子壹人此分をは覺　申　候其外も二三人もはてられ候由に申候へとも是はしかと覺不申候こまぐしき事は書付られず候

間あらく〜は大かた如此にて候以上

文中にある與一郎樣とは忠隆、與五郎樣とは興秋、内記樣とは忠利なること前に述べた通である。決してこの外に男女の御子はなかつた、もし俗說にいふ通の事があつたら、必ずこの霜が書かねはならぬ。秀林院ははじめ忠隆の夫人と共に自害なされやうといふ考へであつたがこの人は早く遁れられた、これは隣家の宇喜田秀家の邸へゆかれたので、秀家夫人は即ちこの忠隆夫人の姉で（前田利長の妹）あるから密に桐と云ふ下女を以て相談を遂げられ立退かれたのである



郊外散步

さて細川家譜によれは、この秀林院の最期の時、おく、霜など落ちゆくことになつたれは、夫人「さては心にかゝる事なし少齋介錯仕候へと被仰候、畏候とて長刀をさげ老女を先に立て參りけれは御髮を御手つから上へきりくと巻上けさせたまへは少齋左樣にては無御座候と申上けれは、心得たりと御胸の所を兩方へくわつと押ひらきたまふ、少齋敷居をへたてゝ居候ひしが、御座の間へ入候事憚多く候へば、今すこしこなたへ御出被遊候へと申上けれは、則敷居へちかきたゝみに居直らせたまへば、長刀にて御胸元をつき通し奉り候」と見えてをる。これか事實である。

秀林院はこの時三十八歳、諡號は秀林院殿華屋宗玉大姉で、玉の字は俗名を玉と云つたからであらう。さて殉死したものは、即ち前に見えてをる小笠原少齋（五十四歳）河北無齋石見（七十九歳）金津助二郎（四十二歳）及び河北の一族二人であるが、その死にざまの猛烈であつたことも細川家記にくはしく見えてをる。

日本西教史に、この時の事を考へ合すると、大に發明すべきことがある。同史によれば、秀林院夫人は熱心なる基督教信者であつてグラスといふ宗名を持て居られた。（日本の書には之を譯して、伽羅奢とかいてある）さてこの事件の生した時、夫人護衛の臣等、夫人の居室に到り歎息涕泣した、夫人怪んでその故を問はれければ、臣等は嗚咽上言するに、城中よりの人質の事を以てし、且忠興公出陣の時我が不在中夫人を掠奪せらるゝごとき事あらば直に夫人を刎首して自ら屠腹せよとある命を以てした。夫人はこの不慮の事を聞けとも、更に憂ふる色なく、天主を拜し、從容として悲歎號泣する家臣等に答へて曰「汝等我身に關する事に於て決して悲歎すべからず、死は元來恐るる所に非す、汝等の我身を生存せしめんより、寧ろ死に就かしむるを以て幸福とす、我が身は基督信者なり、基督信者の死するや何人なりとも奪ふ能はざる不朽の生活を天道に於て得る道あり、汝等速に我が侯の命を逐くべし、我が身は速に天堂に到らんとす、且眞に尊敬すべき天主は、汝等の殉死を禁す、我に於ても亦之を禁ず、故に汝等我が言に從ひ、基督



花とパラソル

信者となるを誓はゞ、我は心を安んじて、死につくべし」と護衛の臣等は之に答へて「臣等は君夫人を殺して生存するに耐ふべからず、若し刀劍を用ゐざれば食は絶て餓死せんか、はた焚死せんか已に君夫人の死後は、臣等その坐を去るに忍びず、且日本國法に於ても、君夫人と共に死するは理に當れり、況や侯より此命を受けたるをや、今尊命に從はば侯の命に戻るを以て到底罪人たるを免れず又君夫人の命を奉ぜんため、己等の身命を存するより寧ろ君夫人を生存せしめて、君侯の命を奉ずるを冀ふ、夫人死する勿れ」と夫人曰く、否我は身命よりも



貴婦人の洋裝

最も欽慕する天命至ると思量す、汝等我と共に死を決せば、死前に基督信者となるべし。臣等曰、能はざるなり、臣等今に於てこの敎を受る暇なし且基督敎は、臣等の殉死及び日本國法に於て名譽となすべきことを禁止するを以てなり、臣等は君夫人の爲に死すべし、臣等死して、君夫人を困苦せしめし罪を謝せんとすと、夫人は到底その意を遂る能はざるを察し、自ら死裝を整へ、天主に祈願し、侍女を去らしめ、顏色淸艶心衷湛然・徐に護衛兵の傍に近づきてその坐に就き・基督及びマリーの名號を唱へ、衣襟を開き、首を

伸べて創手に任せければ、護衛長臣は之を禮し、刀を拔て首を刎し、直に絹褥を以てその死骸を覆ひ、上に火薬を散亂して他室に退き、戸を閉ち、各人刀を取り腹十文字に割破し、護衛兵の中一人存在して火を放ち邸の一部を焚燒しければ高堂大廈一時間にして盡く灰燼となれり。これ實に千六百年にして、鎮火の後オルガンタン師は厚禮を以て夫人の葬式を行へり云々(以上摘要)かやうに細かに書いてあるけれども、彼の男女の子の事は見えぬ。

又同史によれば、夫人は當時最も絶れたる美人にして、深く三齋の愛を受けられたれども、夫の旨に違ひて基督教には厚く歸依せられ、常に基督の書をよみ、フレール、ワンサン師の贈れる文典を研究して、讀書作文に從事し、殆と歐洲人のごとくに、羅甸或は葡萄牙の國語を書かれたとある。夫人の歌に堪能に書をもよくし、かく外國語にも通じをられたるは、實にめづらしい、況やその貞節非凡にして、夫忠興公の志を堅固ならしめ、かくこの夫人の一擧によつて、三成が他の人質策を止めたのは、どのくらゐ關が原の東軍の氣を引立たであらう、強ひていへば夫人の一死によつて、關が原東軍の勝を得たとも論じ得られるであらう、夫人については、猶いひたいこともあるが、今は俗説を辯ずるを主として、いさゝか說を敷衍したれば、こゝで筆を擱く。

(四十四年一月廿八日稿)



貴婦人の洋裝

女學校の寄宿舍生活

紫蘭

田舍の人に知らせる書簡

大内青巒居士は申されました、解脱安心を誤解しては放縱怠惰となるとか、まして覊絆なき身のほど心の手綱を引締めねばならぬ事と存じます。

私は今目白臺の友人の家から神田邊の學校に通うて居ります、去年の秋上京して都の學校生活を半年ほどつゞけてゐました上京の當座は學校の寄宿舍に入りましたけれども懐ろ勘定の都合で中途より自炊生活に移りましたそれも兎もすれば自墮落に流れ易い身を省みてこの頃は確かな友達の家に居て通學して居ります、委しい消息は申しませぬ劇甚な都會生活に何となう、せわしい心地がして、筆も十分採れませぬ。

小人閑居して不善をなすとは陳腐の言といふ人もありますが、現在の私には此上もない誡であります。

何ごとも世は白眞弓絃はけて
ゆるへぬをこそ心とはせめ

と師のはなむけを心の駒に鞭撻て居ますけれども、兎角にゆるみがちにて我ながら淺ましくなります。

東京の二月は殊に寒さ烈しいよしに聞きましたがさまでは御座いません一つ橋（職業學校）九段（和洋裁縫女學校）渡邊と申せば文部の檢定資格を得る學校で、技術其ものを學ぶに於ては決して惡い學校ではないのですが、私立といふが田舍ものには何となく肩身のせまい樣に思はれます。

校舍利用の方法は流石によく行はれて、寄宿舍も晝は敎室と化して授業を致し、午前九時の始業の鐘の鳴りますまでに自習用の机を片づけなどして、隨分大變ですのよ、折ふし忘れては窓ぎはに足袋や、手拭をぶらさげて澄して置く日もございます。然し之も考へ樣では簡易生活の修練ともなり、不平も言はれぬ事ですけれども、唯一つ困りますのは病氣の折です。勿論、

寄宿用として晝間必要もない多くの室をあけて置く理由はないですが病室だけは欲しいものだと一同申して居ります。

日頃巖疊な私などは、一寸の感冒位は積極的の療法をとりて氣でなほす方がよろしうございます、大方の人は左樣は參らず實に氣の毒です、こゝに至つて平素健康の難有さをつく〴〵感謝いたします。東京で一寸病氣にかゝれば脈一つ握つて貰ふても二三圓に取られます、病氣其ものよりもこれが第一恐ろしいです。



櫻散る空や越後の島曇り　（許六）

さて手藝學校と申せば、種々雜多の人の寄合とて、實際驚くの外はありませぬ、且又、敎師其人の腰の低さ田舍で考へては一寸比較するものがございません、惡き意味に取れば其弱點に乘じて生徒に熱心の念さへあれば、どれだけでも腕はつくものかと、私立學校の個人敎授の妙所はまづこゝ等かと感心致しました。

しかし、人間は手先のみ働かせては頭の方が全くお留守になります、よろづ忙しい都會生活の渦中にてはすべての人が人格を隱す暇は殆んどなく、善きも惡しきも明瞭に其本性をあらはし居ます。詮じつむれば美しい品性はなく、暖かき感情はなく、又綽々とした餘裕のあるものはなく、惡く申さば我利々々亡者の寄合です尤も目的其ものが品性の陶冶ではなく、單に手藝の研究、檢定の競爭準備ですから咎める必要もなく又これに向つて兎やかく申すも無駄な事、却つて生存競爭に失敗した者の泣言らし

くひゞきます、この如く人心の荒廢は學校内ですら隨分わかります。しかし、北は青森のはてから南は鹿兒島の隅からしての遊學に月々貳拾圓餘の學資を受けての勉强故、夢おろそかにはすます、强い〳〵人とならねばならずその感念が働きますからその冷性なところ、個人主義的なところ我利々々なところがむしろ至當な行爲否はむべき行爲かも知れませぬそれは人々の見るまゝに任すのが至當と存じます。

けれど、私の狹い眼では何や彼や思ひ合せて實科女學校の問題もそゝろ寒心すべきものゝやうに見えます。



登られば山とおもはず春の山　（小蝶）

通學生の中にても相當の年齢の人は、その修むべき技能が技能故、隨分自活の人もあるらし。

寄宿生では左樣のわけには參らず、一厘一毛すべてが父兄の汗のかたまりですから。

同室の人と申しても餘程年齢の差もありましてをかしい位です、中には相當の地位あつた人の未亡人、或は破鏡をいだきし人で愛兒の行末の爲とて、三十越してから發奮又は夫の航海中を女一人にて一家を構へんよりは寄宿舍の安全な生活にこの三年間を有

効に過し且つ手藝の道を研究するとの心掛の人、或は高等小學校の補習科を出たばかりの初々しき人など、交つて面白きこともあります。

順逆さま〴〵の境遇は持つて生れた運命とあきらめ、各々疚ましからぬ心で勵み居りますが中には土曜より日曜にかけての外泊を普通としてあやしき者の外妾と噂されつゝある人もあります。家にあれば奥様よ孃様よと云はるゝ人が寄宿舎では隨分食物の上に無邪氣な藝當を演じます。

私共が女學校の寄宿舎にあつた時は食費としては五圓以下にてすみ、月謝小遣を合せて八圓位でしたが、東京では食費だけに八圓はかゝります、今の東京の物價の標準ではそれ位が普通と存じます、けれど寄宿生の多くは地方資產家の子女とて可なりの粗食には、隨分苦しいやうに見えます。


春の野や長きつかきらの裾につく（來山）

朝はからき味噌汁一椀、これは是非つきます、一週二回づつあまり新らしからぬ鰈か鯖などの肴をくれ、其他は葱とあさりむきみの汁、菜のひたしもの、人參、こんにやく、芋、蓮根などの煮〆、いり卵の花、黒まめ、海苔二枚づゝが一週間にめぐりまはつて來ます。臺所の女中の權幕のつよさはお話になりませぬ、敎師も自分等も、同じく校主より雇はれ、ユ

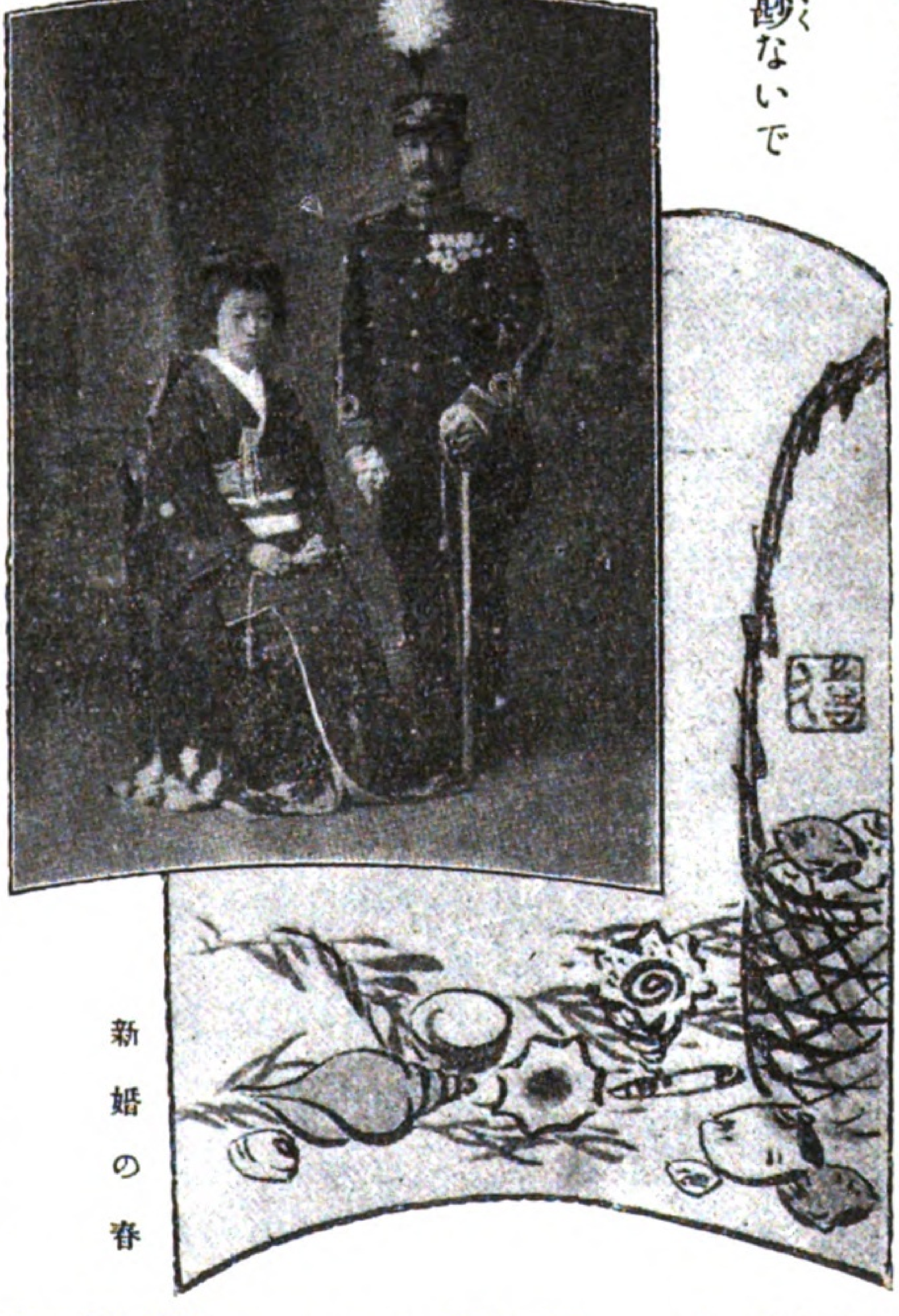
同等の權利あるものゝ如く思ひなして、機嫌のわるい折などは寄宿生を過すること丸で居候あつかひです、時折り寄宿生との間に大衝突も起りますよ。

粗食の上に其分量も尠いですから勢ひ間食は止を得ぬ事で一週一度の土曜會は何よりの樂みといたし、當番になれば、否、應なしに大福餅屋の門に立ち、蕎麥屋の暖簾をくゞつて、注文に參らねばならず、左樣に外出も自由になり、すべての點に於て規則のゆるやかなるのも一異彩です。

これに較べて自炊生活は大に廉くつきます。同居の人は地方の專科に敎員で、文部の檢定の準備をする人です、四疊半を二人で二圓八十錢で借り、机二つにランプ、シチリン、鍋、釜、茶碗、火鉢、鐵瓶位で十分用は足ります。

一ケ月分の食費は米と炭で二人分が四圓で濟みます、煮燒はあまり致しませぬ、流石都の地とて一歩踏み出せば甘露煮、つくだに何でも意のまゝです、一日五錢程求めれば二人して夕食より明日の辨當の分まであります、石油五錢は三日に使ひきれません。

寄宿舍でも炭は自分の支出です、すべてを比較いた



新婚の春

蛤や大きく見ゆる撰のこり　（濱路）

せば月に三圓近く廉くあがります．炊事や掃除に少し時間を要すのみで都合上夜深しも出來て便利です。然し、廿歳に滿たぬうら若き少女の自炊生活はあまり贊成致し兼ます。

隣室に廿歳前後の美しき女學生風の人が居ます終日外出することもなく、なすこともなき日を過しますから、不思議に堪へず、同室の人に尋ねましたら、浮世の表裏はかくもあるものかな．年の暮までを某女學校に通ひしが近頃はそれも廢めて爲す事もなく夜々ここに通ひ來るは私立大學生にてしかも淸國の留學生なりとは！如何思召すぞ。かゝることは東都の裏面に行はるゝ末事にて珍らしくもあらぬ事とは何とも早全く厭になります。

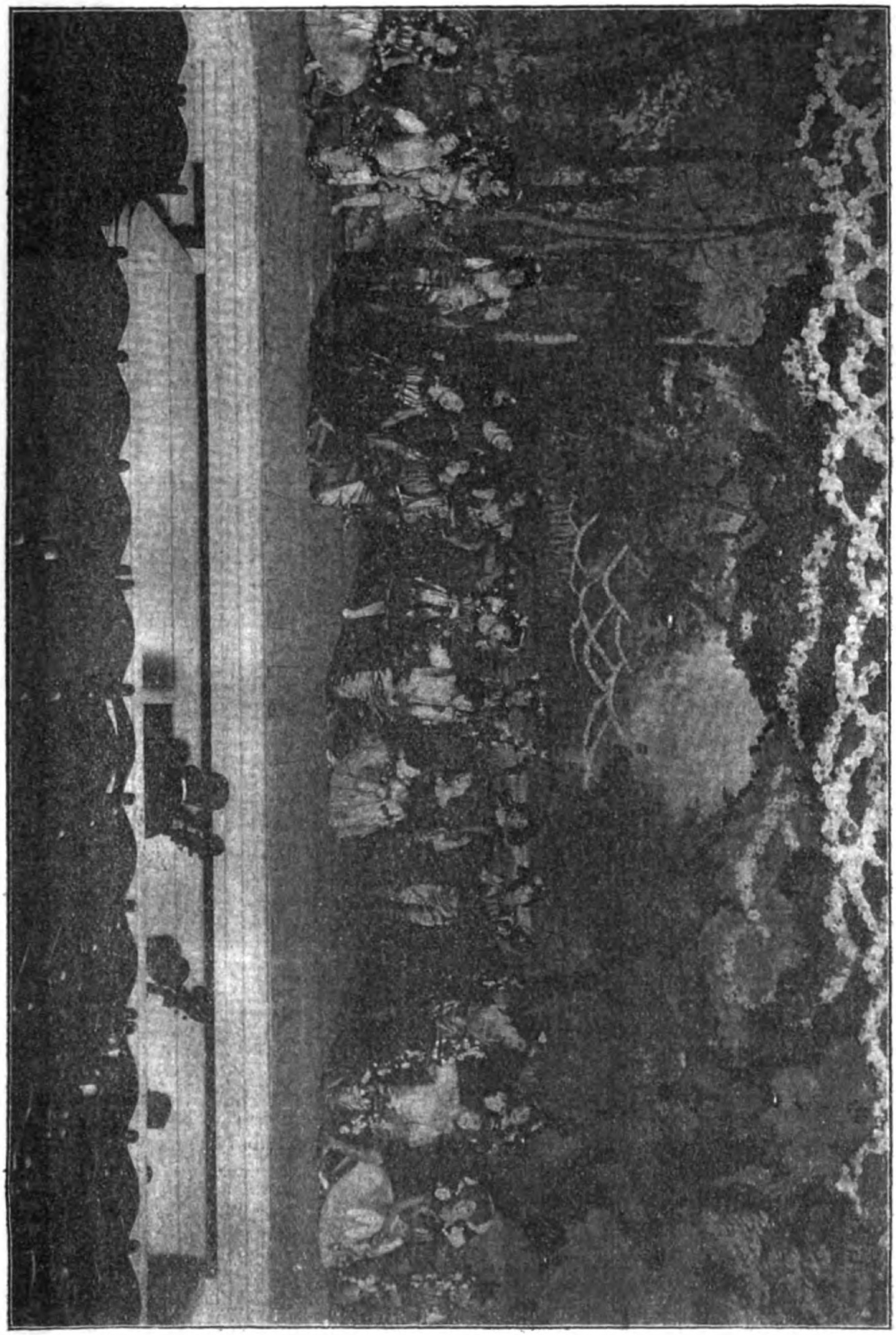
金澤兼六公園旭櫻



みめかたち可なりに、厚化粧して肩あげして胸高袴の通學は廿二のとしが丁度十六七に見えるよし、こゝに又驚くべきは其校の男教師が度度あやしき擧動に及びしとは、全く化物の寄合、百鬼夜行の狀態ではありませぬか。

其人自身は如何なる理窟つけるかは知らねどすでに墮落の淵にしづみしと見て間違はなかるべく、あゝ思ひ出してもいやになります田舍の無垢の少女が虛榮にあくがれ、親にねだりて都に出づれば中には斯る運命を招く人もあるべければ可戒々々

思へば私半年に滿たぬ內に三度も居をかへましたこと是れ全くかかる汚濁の空氣に染みるを恐れてです。



帝國劇場の花の舞

村井弦齋著

◎家庭改良の最良指針!!!

増補註釈 食道樂

春夏秋冬 合本 定價貳圓 郵税十八錢

◎本書には米料理百種、パン料理五十種、病人料理百五十種、日用食品分析表、食器食品價格表、料理心得の歌百種等の附錄あり。

増補註釈 食道樂 續篇

春夏秋冬分本價各一冊八十錢 郵税各冊十二錢

◎春の巻には野菜料理百種 夏の巻には果物料理百種、秋の巻には魚料理百種、冬の巻には肉料理百種の附錄あり。

増補訂正 台所重宝記

全一冊 和裝 定價金壹圓 郵税十二錢

著者の自序に曰く此書の記事は盡く我が家庭の實驗する所にして余は飽く迄も世人に親切ならん事を期すと

▲發行所 東京市麹町區有樂町（振替東京七三八番） 報知社出版部

▲發賣所 東京銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番） 新橋堂書店

SECTIONAL-BOOKCASE.

It fits any place

組合せ本箱

●最新式最新形の本箱にして目下歐米諸國に流行を極め居れり

●多數の優れたる特徴を有す、其重なるもの左の如し

▲藏書の増減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし

▲室内の構造に應じて適宜に配置し得べし

▲書物を入れたるまゝ手軽に運搬し得べし

▲硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有す

▲書物を分類するに最も適當なる構造を有す



▲形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

●之れを要するに最善最良の本箱!!

構造を示せる目錄は往復ハガキにて御申越次第進呈

定價

金二十六圓 檜製

金二十八圓 欅製

金三十圓 櫻製

運賃荷造費御自辨

It grows with your library

東京市銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番） 新橋堂書店

女（めの一）

女學（ぬの三）

新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體**純白色に變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服新劑 サーサパリラ

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑拾貳圓貳拾錢也

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん**皮膚**を**潤澤軟密**にし**色**を**白く**し、**粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御註文を望む)

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速安全に**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず完全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其效効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續々怪しき**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證新發見藥

從來醫療賓藥百方手を盡し全治せざる腋臭患者は速に最近發見の本劑を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に去れ如何程劇烈の難重症も特別製を用ひよ忽ち**病菌を全滅**し惡臭毒素を驅逐し他病に變ずる憂なし是れ他にありふれたる類藥と異なる所の本劑一種獨特の**靈効**なり速に試み**病苦**を脱せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分藥價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割増しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

全治確證

無痛全治する挿入藥

ぢを治す

Haemorrhoidal KUGEL

に作用し 穴痔 蓮痔 いぼ痔 裂痔 脫肛 又痔瘻の初期等痔病一切に神効を奏して遺憾なし半劑八拾錢壹劑壹圓五拾錢特別製貳圓八拾錢送料拾貳錢

本邦人に最も多き痔疾に對して從來迂遠なる內服藥にのみ治療を委ね適切なる治方を講ずる者少し　本館發賣の治痔藥は近世醫學界の貴重なる新發見藥を以て座藥に調製したるものにしてこれを肛門內に挿入するも少しも疼痛を覺へず體溫の爲め徐々適切に溶解して直接(潰)患部

最近の大發見

肺病血清藥

從來の療法として醫學界に用ゐ來れる唯一の「ケレヲソード」の如きは殺菌の力はあるも其力を藉りて肺病を治する事は事實上不可能の事柄なり弊館發賣の肺病血清藥は根本的に病因を全治せしむる適中新劑なり末期の患者即ち既に肺臟の缺損せる者に向ては病勢の進行を止め患部を固癒せしめ初期の人は七八日目より効顯れ一ケ月以上二ケ月にて全く快癒せしむ　半劑壹圓五拾錢壹劑貳圓八拾錢貳劑五圓特別製七圓送料拾貳錢

專賣 東京神田區小川町東明館前 **オリエンタル藥館**

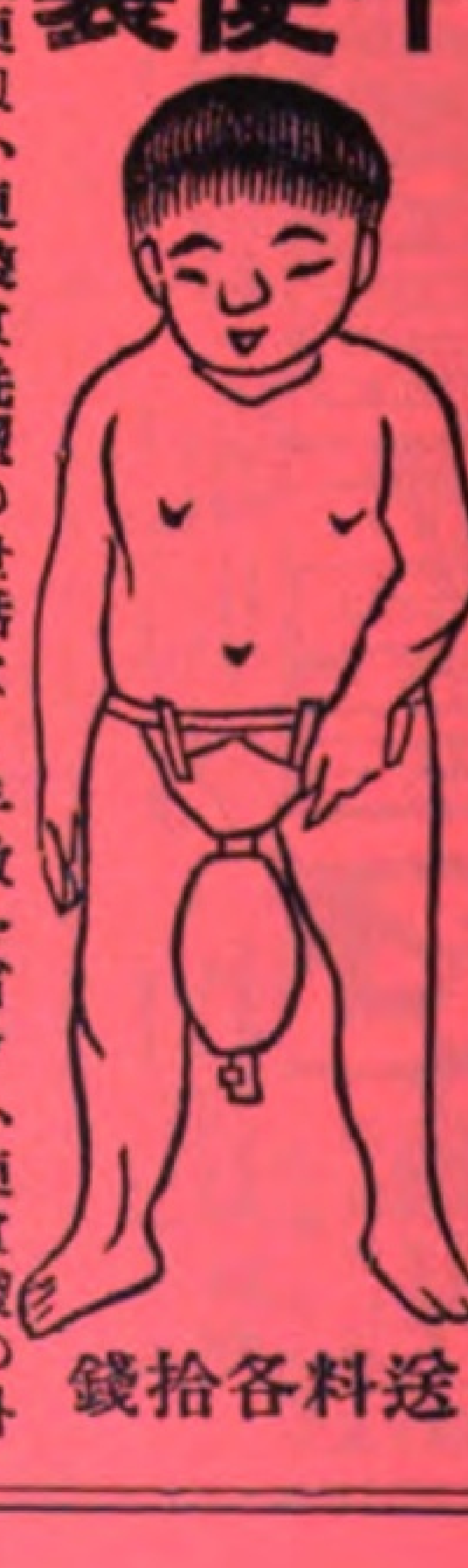
懷姙避姙自由自在

全壹册 拾五錢 送料貳錢

子なき人は本書を讀みて懷姙の法を知るべく又子が出來て困る人は避姙の法を知るべく實に本書は懷姙避姙を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵券代用必一割增

大阪市東區鎗屋町壹 和泉屋

ね小便袋



送料各拾錢

衞生最長德用輕便れ小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に清潔なれば **小兒病人** 老人の最も必要にして、れ、おきたち、すわり等に毫も差支なきは本品の特長なり(男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ)

◉子を持つ親ある家人は是非必要特許品 病人

定價●乳兒用 九拾五錢●中人用 壹圓貳拾錢●大人用 壹圓九拾五錢 一特別製品各拾五錢ヒリ

ルーデーサック 十二個 五十錢 廿五個 一圓 六十個 貳圓 送料八錢

子宮サック 特製 七十錢 二個 一圓廿錢 三個 一圓六十錢 送料八錢

注文切手代用一割增 振替口座大阪八三一〇番

發賣元 大阪市東區鎗屋町一丁 **和泉屋商會**

第十二回

新學期開講

會長陸軍二等軍醫正 正六位勳四等ドクトル 渡邊鼎

通信教授 産婆看護 講習生募集

産婆科六ケ月卒業 看護科四ケ月卒業

規則要郵券三錢

東京四谷區內藤町一ノ七

東京産婆看護婦講習會

女(ぬの五)

世界無比……最新發明藥

あざ

入墨は廿日　ほくろ　そばかす、なまず　いぼは拾日

日に必ず美麗に除去す　痕跡を殘さず

ること

保險附　新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なまず、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと認む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

らい病根治新劑

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絕し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢

毛の必ず生る確證藥

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、局部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮着と速生すること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

藥價特別製分五圓卅錢▲中瓶貳圓卅錢▲小瓶壹圓廿錢

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顏赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

美き聲の出る新藥

▲藥名……ウエーヌス

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり　▲聲麗しくして…男子は威嚴あり　▲聲は人格を高尚ならしむる要素なり…謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來甚はだ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發すること確證す。

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記憶力を增進する靈劑

腦病必治

記憶增進丸

(藥價)七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢(送料)各拾錢宛

本劑は獨逸大醫スクリーポツト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記憶力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記憶力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記憶力大に增進すること嘗て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絕顯著なる奇効を知れ

以上六藥專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　日新館藥房

女(ぬの六)

女學め（の七）

赤堀 吉峰 吉松 菊子 三先生合著

五版

家庭應用 惣菜五百種

本書は割烹大家として有名なる赤堀三先生が從來の料理書の多くは机上の料理書で全く實用に適せざるを歎かれ多年の研究と實驗とに基き一般家庭に應用せらるゝ樣和洋の料理各五百餘種を叮寧懇切に説明せられたものです

郵稅八 價七十五錢

四版

家庭應用 洋食五百種

郵稅八 價七十五錢

故久保田米僊先生著

初版

年中惣菜料理

郵稅八 定價八十錢

四版

毎日の惣菜 案內

郵稅二 定價金十錢

此二つの本がありますれば毎日三度三度のお菜慥らへに御苦勞なさる事はありません眞に臺所には一册なくてはならない本です

▲松林伯知一世一代の講演

徳川榮華物語

◎六ケ年間報知新聞連載……好評嘖々

全十册 各册定價五十錢 郵稅六錢

各巻の主なる讀物

松の巻には 大久保彥左衞門、春日局

竹の巻には 天草一揆、由比正雪

梅の巻には 元祿時代、水戶黃門

櫻の巻には 赤穗義士、大岡越前

藤の巻には 白河樂翁、高山彥九郎

菊の巻には 中山公東下り、林子平

椿の巻には 河內山宗俊、鼠小僧

萩の巻には 大鹽平八郎、高野長英

楓の巻には 八代目團十郎、お富與三郎

桐の巻には 水戶家騷動、錢屋五兵衞

▲東京小兒科院長 醫學博士 瀨川昌耆先生著

▲やまと新聞記者 天野誠齋先生著

（五版）

增補訂正 實驗上の育兒

上巻定價六十錢郵稅八錢 下巻定價七十五錢郵稅八錢

七人の愛兒を自身御夫婦にて恙なく育て上げられた育兒實驗家の瀨川醫學博士が丁寧親切に說明せられました育兒談は即ち此本です、吾兒の健全なる發育を望まるゝ父なり母なる人に是非御一讀あらん事をお勸め申します。

發行所 東京市京橋區銀座（東京）／振替貯金東京二〇〇番 新橋堂書店



雜記帳

——産褥での雑感——

與謝野晶子

×

わたしは未だ病院の分娩室に横になつて居る。室内では夕方になると瓦斯煖爐が焚かれるが、好い陽氣が毎日つゞくので日のある間は暖い。其れに此室は南を受けて縁に硝子戸が這入ッてゐるから、障子を少し位明けて置いても風の吹込む心配は無い。唯光線がまぶしいので二枚折の小屛風を障子に寄せて斜に看護婦が立てゝ置く。未だ新しい匂の殘ッてゐる疊の上に、妙華園の温室を出て來た切花を硝子の花瓶に挿した小い卓と、三月の新しい雜誌が十冊程と並べられてゐる外に何物も散ばッて居ない、整然として清淨な、而して靜かな室である。

看護婦さんは次の副室に控へて居る。其處には火鉢や茶器や手拭掛や、調度を入れる押入や、食器を入れる箱やなどが備へてあるらしい。見舞に來る人は皆其處で帽や外套や被布やを脫ぐ。其人達がわたしの前に現れる時は凡て掩ひを取去ッた人達である。羽織袴の立派なのを改まッて著けてゐる人は少い。大抵は常着の人である。裸體で這入ッて來るのと格別相違の無い人達である。見舞の言葉もくど／＼と述べる人は無い何れも「奥さん、どうですか」位のことを云ッて、後は帝國劇場の噂とか新刊小說の評判とかを少時して歸ッて行く。わたしは其人達の他人行儀の無い、打解けた

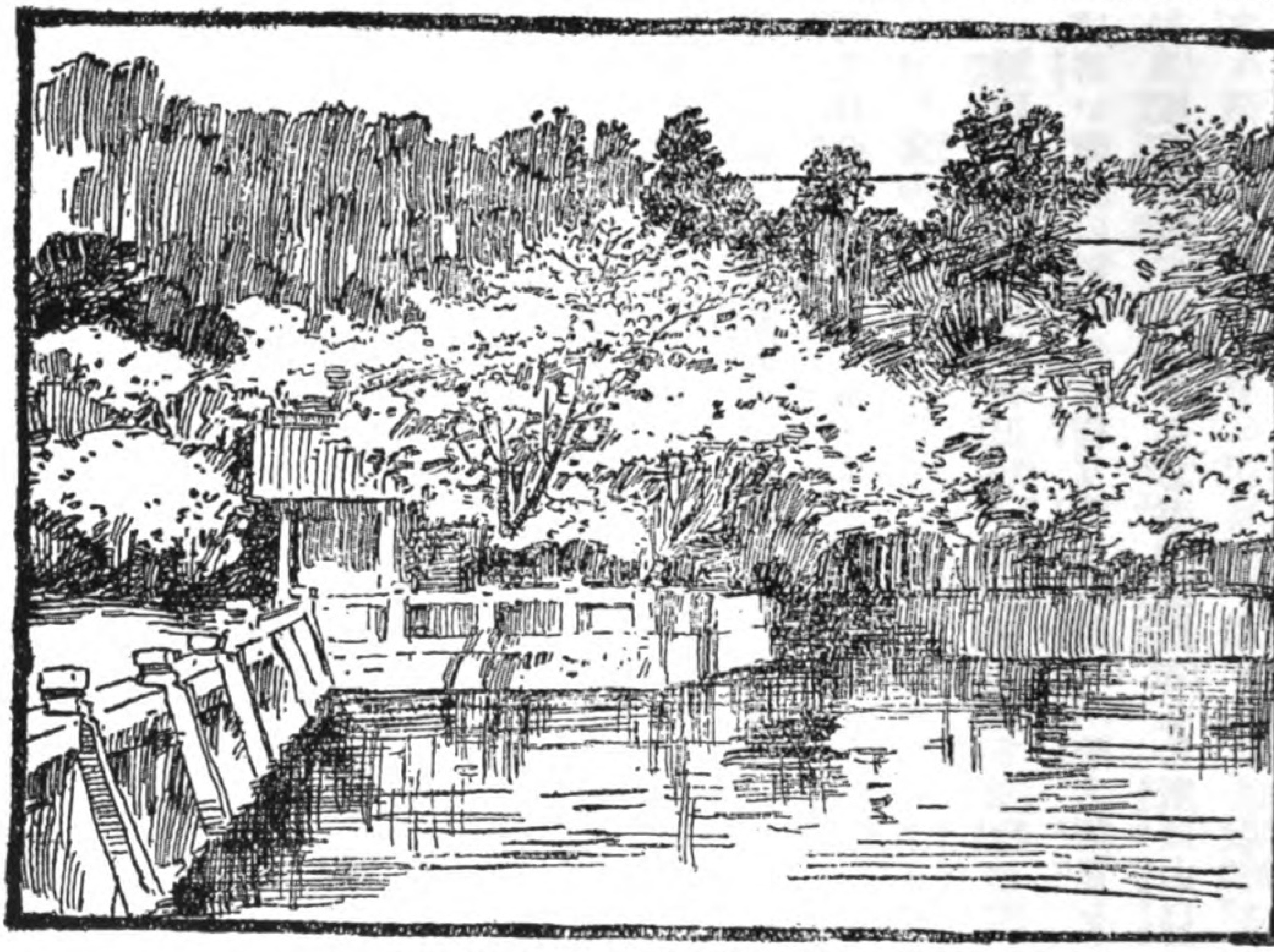
友情の温く濃かなのが嬉しい。

と云ッて其人達はお互の交際範圍でばかり生きてゐる人で無い。藝術ばかりで生きて居られる時代に住んでゐる人でも無い。次の副室に退くや否や、或人は大學帽を被り、或人は獺の毛皮を襟に附けた外套を被り、或人は辯護士試驗に應じる準備の筆記を入れた包を小脇に挾んで歸る。一歩この病院の門を出ればもう普通の人に混じて路を行くのである。わたしは見送に出られる身で無いけれど、わたしの友達が其れぞれ何う云ふ掩ひ物に身を鎧うて此病院の門から世間へ現れ「假面」の生活を續けて行くかと云ふ事は大抵想像が附くどうせ軍人にならない人達だから祖國で重寶がられる譯には行くまい。わたしは斯んな事を考へて思はず獨で微笑んだ。

×

副室の前は廊下になッてゐて、玄關から此處まで來るには二三回も屈折して廿四五間もある長い廊下を、おまけに岡の樣な地形を利用して建てられに病室の廊下であるから、急な傾斜を二三度も上下して通らねばならぬ。通る人は皆上草履を浮かす樣にして通る。此處は音を忌む國なのである。「足音をお靜に」と云ふ貼紙が幾所にもしてある。或病室の前には「重症患者有之候に付特に足音を靜に御注意被下度候」とさへ書いてあると云ふ。

併し斯うして病室に横になッてゐる身には、其最も忌むと云はれる「音」が何よりも戀しい。宇宙と云ひ人生と云ふも客觀的に云へば畢竟線と色と音との複雜な集りから成立ッて居る。學問藝術に携はる人は、其複雜な線と色と音とが有ッて居る微妙にして偉大な調和を讀んで、一般群集の前に闡明する者だと云ッて可い固よりわたしは然う云ふ立派な藝術家でも無く、殊に今のわたしは産後の疲勞の恢復するのを待ッて天井を



芝公園辨天池の櫻

眺めてゐる「只の女」である。其れにしても此病室で見る線と色とは餘りに貧弱である。音と云ッたら副室で沸る鐵瓶の音と廊下の前の横長い手洗場で折々醫員や看護婦さんが水道栓を捩ちて手を淨める音と、何處かで看護婦達の私語する聲と、看護婦の溜で鳴る時計の音と、其れ位のものである。宅に居て何時も靜かな家に住みたいと願ッて居たわたしも此單調には堪へられない。二三日前までは時計の鳴るのを待ち兼ねたが、今ではもう、十二時頃だらうと思ふのに未だ宵の九時を打ッたりするのでがッかりして、あの意地の惡い音は聞えない方がよいと思ふ。耳を澄まして何か新しい物音を探し當てやうとするが、變ッた音の聞えないのは苦痛である。

偶ま廊下の遠くから幽かな上草履の音がして、其れが自分の副室の前で留ッた時は胸を跳らさずに居られない。其れが行き過ぎて外の病室の見舞客である時は

慘めである。人は孤立を嫌ふ。同情して貰ひたいのが素性であるらしい。

　毎日學校の歸りに立寄る長男は、いくら敎へて置いても廊下で音を立てる。わたしは氣藥をしながら其子供らしい足音を聞くと氣が引立つ。夜に入ッて見舞に來て吳れる良人は、靜かに廊下に立止ッて指先で二度ほど輕く副室の入口の障子を彈く。中の人に注意を與へて置いて這入ッて來るのであるが、しんとした靜かな中で響く指音は、忍ぶ戀路の男がする合圖の樣に聞える。其瞬間、十年前に經驗しなかッた若い心持をわたしは今更味ふ樣な氣がする。

×

　看護婦さんは行儀の正しい、無口な女で、物を言へば薄い銀線の觸れ合ふ樣な淸んだ聲で明確と語尾を言ふ。感情を顏に出さずに意志の堅固さうな所は山口縣生れの女などによく見る型である。わたしは院長さんの博士よりも此看護婦さんに餘計氣が置ける。

　いつも產をして五日目位から筆を執るのがわたしの習慣になつて居たが、今度は病院へ這入らねばならぬ程の容體であッたから後の疲勞も甚しい。其れに心臟も惡い、熱も少しは出て居る。其れで筆を執らうなどゝは考へないけれど、じッと斯うして寢て居ると種々の感想が浮ぶ。坐禪でもして居る氣で其れを鎭めやうとしても却て苦痛であるから、唯妄念の湧くに任せて置くその中で小說が二種ばかり出來た。一つは二十回ばかり出來てまだ未完である。其等は諳誦して忘れない樣にして居るが、歌の形をして浮んだ物丈は、看護婦さんの居ない間を見計ッて良人に鉛筆で書き取ッて貰ひ、約束のある新聞雜誌へ送ッて居る。せめて側にある雜誌でも讀みたいのであるが、院長さんの誡めを嚴格に執り行ふ看護婦さんに遠慮して、婦人雜誌や三越タイムスの寫眞版の所ばかりを觀るのを樂みにして居

る、斯う云ふ意志の強い看護婦さんの側に居られる事が眞に患者の爲めになるのであると思ふ。

×

産前から産後へかけて七八日間は全く一睡もしなかッた。産前の二夜は横になると飛行機の樣な形をした物がお腹から胸へ上る氣がして、窒息する程呼吸が切ないので、眞直に坐ッた儘呻き〳〵戸の隙間の白むを待つて居た。此前の雙兒の時とは姙娠して三月目から大分に苦しさが違ふ。上の方になッて居る兒は位置が惡いと森棟醫學士が言はれる。其兒がわたしには飛行機の樣な形に感ぜられるのである。わたしは腎臓炎を起して水腫が全身に行き亘ッた。呼吸が日増に切迫して立つ事も寢る事も出來ない身になッた。わたしは此飛行機の爲に今度は取殺されるのだと覺悟して榊博士の病院へ送られた。

生きて復かへらじと乘るわが車刑

小金井の櫻



場に似る病院の門。

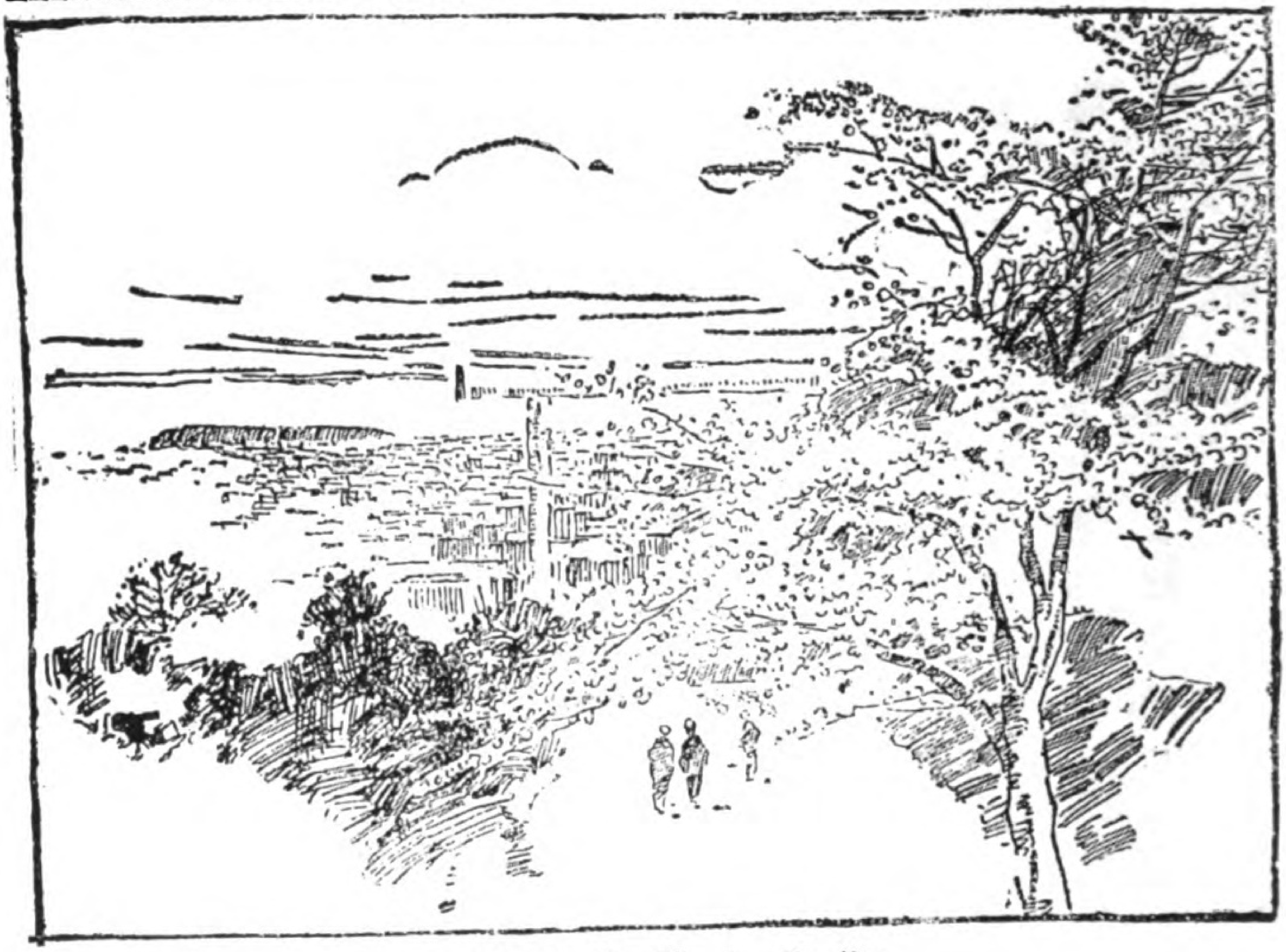
と云のがわたしの實感であッた。

×

二月の初に一度產の氣が附いて、產婆や看護婦が駆け付け森棟先生に泊ッて頂く樣な騷ぎを夜通しながら其儘鎭まッて仕舞ッた。此前の產も同じ樣な事があッて一月程經ッてから生れた。癖になると云ふから今度も三月に入ッて生むのかと想ふと、其樣に延びてはわたしの體が持ち相に無い。森棟さんも榊博士も人工的に分娩を計らねばなるまいと言はれる。良人も親戚の者も子供は何うなッても可いから母親の體を助けて欲しいと言ふ。わたし自身にも然う考へて居た。死を怖れるのでは勿論無い。死ぬる際の肉の苦痛を怖れるのかと云ふと、多少は其れもあるが、度々の產で荒瀬に揉まれて居る自分には、男子が初陣の戰で感じる武者ぶるひ程の恐怖は無い。又もッと生き永らへて御國の爲に微力を盡したいの、社會上の名譽が何うのと云ふ樣な氣樂な欲望からでは更々無い。つゞまる所良人と既に生れて居る子供との爲に今姑く生きて居たいと言ふ理由に歸着する。此の切端詰ッた場合の「自分」と言ふ物の內容は良人と子供とで總てゞある。平生の心で考へたなら、何も自分が居なくなッたからと云ッて良人や子供が生きて行かれぬ譯も無いであらう。其れが此場合では、自分が亡くなると同時に良人と子供とが全く一無に歸して仕舞ふ氣がしてならぬ。人は何處までも利己的である。禪家の大德の臨終が立派であると云ふのは、何よりも繫累の無いと云ふ事が根柢になッては居ないでせうか。

わたしは斯んな事で產前十日程から不安に襲はれ、體の苦痛に苛まれて、神經が例に無くひどく昂ッて居た。

×



・横濱大神宮の櫻

お産は二三度目が比較的樂で、度が重る程初産の時の樣な苦痛をすると云ふ。産む人の體質にも由る事でせうが、わたしの經驗した所ではよく其れが當て適る此前の産も重かッたが。今度のは更に重かッた。産む時ばかりで無く。産前産後に亘ッて苦痛が多かッた。幸ひ人工的の施術も受けず、二月廿二日の午前三時再び自然の産氣が附いて、榊博士の御立會下さッた中で生みました。わたしは病院の御厄介になると云ふ事を從來經驗しませなんだが、お産を病院ですると云ふ事は經濟さへ許せば萬事に都合がよい。院長さんに親しく脈を取ッて頂き、産婆さんや看護婦さんの手が揃ッて居るので、産婦には何よりも心強い。けれども産む時の苦痛は減じない、却て從來よりも劇しかッた。

惡龍となりて苦しみ、猪となりて啼かずば人の生み難きかな。

蛇の子に股を裂かるる蛇の母そそ
冷くも「時」の見詰むる。

と思ッて悲鳴を續けて居るより外は無かッた。先に生れた兒は思ッたよりも容易でしたが、例の飛行機が縦横にわたしを苦める。博士が「手術をしやう」と沈着いた小聲で言はれた時、わたしは真白い死の崖に棒立になッた感がした。

逆兒の飛行機が死んで生れた。後で聞くと院長さんが直ぐに人工呼吸を施して下さッた相であるけれど甲斐が無かッた。

その母の骨ことごとく砕かるゝ呵
責の中に健き兒の啼く。

胎の子は母を嚙むなり靜かにも默
せる子の手をば握るたび。

よわき兒は力およばず胎に死ぬ母
と戰ひ姉と戰ひ。

あはれなる半死の母と呼吸せざる
兒と横たはる薄暗き床。

×

産後の痛みが又例に無い劇しさで一晝夜つゞいた。此痛みの劇しいのは後腹の收縮の爲に好い兆候だと云ふのですけれど、鬼の子の爪が幾つもお腹に引掛ッて居る氣がして、出た後までわたしを苦めることかと生れた兒が一途に憎くてなりませなんだ。親子の愛情と云ふものも斯う云ふ場合には未だ芽を萌かない。考へて見ると變なものである。

隣の室で良人の弟と昴發行所の和貝さんとが、死んだ兒の柩に成るべく音を立てまいとして釘を打つて居る良人が「一目見て置いて遣らないか。これまでに無い美くしい兒だ」と云はれたけれど、わたしは見る氣がしなかッた。産後の痛みの劇しいのと疲勞とで、死んだ子供の上などを考へて居る餘裕は無かッた。

その母の命に代はる兒なれども器
の如く木の箱に入る。
虚無を生む死を生む斯かる大事を
も夢と現の境にて聞く。

實際其場合のわたしは、わが兒の死んで生れたと云ふ事を鉢や茶碗が落ちて缺けた程の事にしか思ッて居なかッた。桐ケ谷の火葬場まで送ッて來て呉れた弟が、その子煩惱な心から、「可愛い兒でしたのに惜しい事をしました」と云ッて目を潤ませた時、初めてわたしも目が潤んだ。其れは死んだ兒の爲に泣いたのでは無い、弟の其子煩惱な美くしい涙に思はず貰泣をしたのでした。

×

漸く産後の痛みが治ッたので、うと〱と眠らうとして見たが、目を瞑ると種々の厭な幻覺に襲はれて、此正月に大逆罪で死刑になッた、自分の逢ッた事もない大石誠之助さんの柩などが枕許に並ぶ。目を開けると直ぐ消えて仕舞ふ。疲れ切ッて居る體は眠くて堪らないけれど、強ひて目を瞑ると、死んだ赤ん坊らしいものが纖い指で頻に目蓋を剝かうとする。止むを得ず我慢をして目を開けて居ることが又一晝夜ほど續いた。斯んな厭な幻覺を見たのは初めてである。わたしの今度の疲勞は一通で無かッた。

×

日が經つに從ッて産後の危險期も過ぎ、餘病も癒り、體も心持も次第に平日に復して行くらしい。昨日から少しづゝ室内を歩く事を許され、文字なども短いものならば書いてよい事になッた。

わたしの目に觸れないで消えて仕舞ッた死んだ赤ん坊の印象は、産の苦痛の無くなッた今日何もわたしに殘らない。まるで人事の樣である。空である。虚無である。唯其兒の爲にと思ッて拵へた赤い枕や衣類が、

副室の押入に餘計な物になッて居るのを見ると、物足らない、淡い哀しみが湧いて來る。やはり他人に別れたのでは無い、棄てられた母と云ッた樣な淋しい氣持である。

看護婦さんは硝子の花瓶から萎れたヘリオトロオプを一本拔いて捨てに行ッた。

わたしは早く騷しい中六番町の宅へ歸りたい。

×

婦人問題を論ずる男の方の中に、女の體質を初から弱いものだと見て居る人のあるのは可笑しい。さう云ふ人に問ひたいのは、男の體質はお產ほどの苦痛に堪へられるか。わたしは今度で六度產をして八人の兒を擧げ、七人の新しい人間を世界に殖した。男に是丈の苦痛が屢せられるか。少くともわたしが一週間以上一睡もしなかッた程度の辛抱が一般の男に出來るでせうか。

婦人の體質がふくよかに美くしく柔かであると云ふ事は出來る。其れを見て弱く脆いと概論するのは輕率で無いでせうか。更に其概論を土臺にして男子に從屬すべき者だと斷ずるのは、論ずる人の不名譽でせう。

男をば罵る。彼等子を生ます命を賭けず暇あるかな。

×

わたしは野蠻の遺風である武士道は嫌ですけれど、命がけで新しい人間の增殖に盡す婦道は永久に光輝があッて、かの七八百年の間武門の暴力の根柢となッて皇室と國民とを苦めた野蠻道などゝは反對に、眞に人類の幸福は此婦道から生ずると思ふのです。是は石婦の空言では無い、わたしの胎を裂いて八人の兒を淨めた血で書いて置く。

日本の女に歐米の例を引いて結婚を避ける風を戒める人のあるのは大早計である。日本の女は皆幸福なる結婚を望んで居る。剛健なる子女を生まんと準備して居る。



睡眠の話

ドクトル　富士川　游

△生理上より觀たる睡眠

人間の働きには色々あるが、其の中睡眠といふ働きが最も時間が長くて、一日二十四時間中、ざつと八時間は眠ります。即ち我々の生活の三分の一は眠むつて暮すのです。がこれは大人の事で、小さい時分はもつと眠ります。生れたての子供などは、二十四時間殆ど全く眠むつて居ります。二三歳になつても、十五六時間は眠ります。そして其れを脈膊や呼吸のやうに、時間を定めて斷えず繰返して居ります。何ういふ譯でこんな働きが起るかは一寸難かしい問題で、學者もよくは知りません。或は腦の中に乳酸が出來るから眠むるのだと言ふ說もあるが、確かとは言へない。又腦に貧血を起してだとも言はれてゐるが、これも確かでない或は腦に血液が多くなつて眠むるのだといふ說もあるが、これも當てにはならぬ。たゞ分つてゐるのは、我我が朝から働いて筋肉を使ふと、何かゞ腦に入つて行つて其の働きを休めるのだといふ事だけで、それ以上はまだ分りませぬ。

△心理學上の重大事實

以上は生理の方から觀た話ですが、更に心理の方から言つて見ると、睡眠には疲勞することが要る。併し餘り疲勞が過ぎては又眠むられなくなる。又餘り悲しむ事なども睡眠を妨げますが、心理學上もつと重大な事實は、注意力を無くすると大抵眠るといふことですこれは事實で、病人などを見るとよく分ります。一方

の眼が見えないで一方の耳が聞えないといふやうな者は、その他方の健康な眼と耳を閉ぐと直ぐ睡つて了ひます。動物などもさうで、光線や音響を避けて靜かにすると直ぐ睡ります。人が夜睡むるといふのも、つまり外界の刺戟を避けるに都合のよい時を選ぶのです。

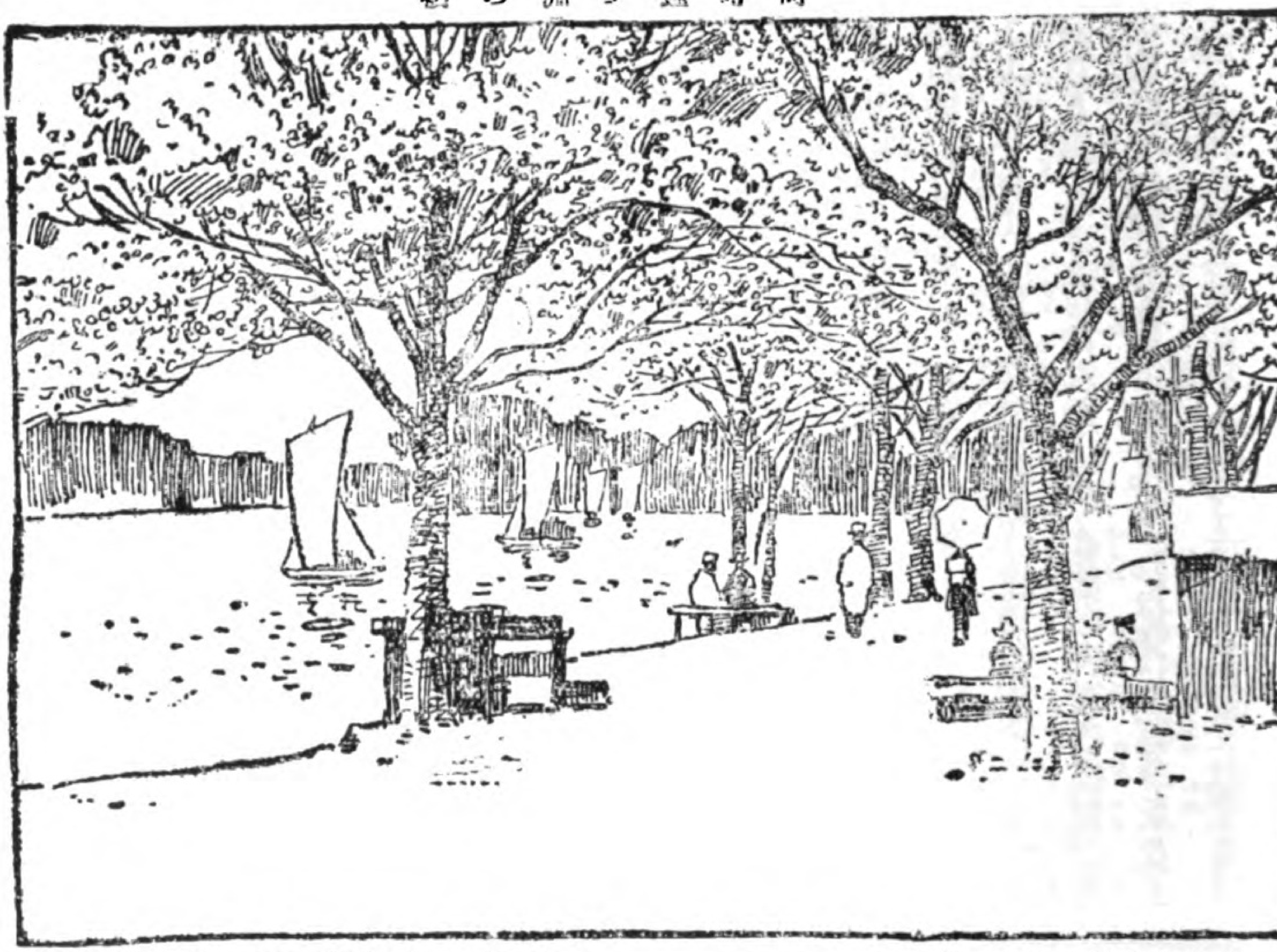
△睡眠中と醒覺中の相違

以上の樣な事が集つて我々が睡眠といふ働きを起すのであるが、其の眠つてゐる間の身體の樣子を見ると起きて居る時とは著しい違ひがあります。第一、全身の筋肉が力を失ふ。特に眼は直ぐ閉がり、首は前へ傾いて舟をこぐ。起きてゐる時は、うつかりして居ても筋肉は働いて、首は立つてゐるが、眠ると其れが出來なくなります。次に呼吸の數は普通一分間に十八乃至二十位のものだが、眠むると十四乃至十六位に減じ脈膊も七十位のものが六十位に減じます。又我々は酸素を吸つて炭酸瓦斯を吐いてゐるが、其の炭酸瓦斯の吐き方も少なくなります。これは新陳代謝の働きが弱くなるからです。尙ほ一つ、眠むると體温が〇、五位減じます。我々が眠むる時に夜具を着なければ風を引くとか、夏でも夜具が要るといふのは其の爲めです。更に精神上に就て見ると、眠むると何の働きも一體に弱くなります。そして反對に内外よりする刺戟に感ずる事が強くなります。睡眠中に色々の印象が意識に現はれて來る夢は其の一例であります。

△晩型の眠りと朝型の眠り

次に睡眠其のものゝ狀態を考へて見ると、我々の眠り樣には二つの型があります。一は晩型の睡眠と言つて、就眠後暫くすると、直ぐ熟睡の境に入つて、二時間目位から段々と眠りの淺くなるもので、健康體の者に見る普通の型であります。一は朝型の睡眠と言つて就眠後一時間位では、眠むるには眠むつても晩型のやうに熟睡せず、二三時間目位のところ及び四五時間目位の所へ行つて漸く熟睡の境に入るもので、所謂寢坊の方で、神經衰弱、神經過敏、或は仕事をして甚だし

向島鐘ヶ淵の櫻



く疲れたもの等多くは病的の者に見る型であります。此の二つの種類を晝寢の工合に就て比べて見ると、晩型の者は、晝寢をすると氣分が惡るいが、寢るとぐつすり寢込んでしまひ、之れに反して朝型の者は、晝寢をすると非常に氣持がよいが、さう澤山は眠りません。

△睡眠は三四時間でよいといふ說

尙ほ調べて見ると、睡眠の狀態には深く眠むつて居る時と淺く眠つてゐる時の二期あつて、晩型でも朝型でも、一定の時間を過ぎると皆な眠り方が淺くなります。こゝに於て、睡眠は疲勞を癒すが目的で、其の疲勞は最初の熟睡の期に於て癒されるから、後の淺い方の眠りは無用だといふ人があります。ワイランド博士などが其れで、二三時間睡眠の後起して數學の問題等を與へて實驗の上で說を立てゝ居るのですが、併し當く物を考へねばならぬ樣な場合には、も少し餘計眠つ

た方がよいといふ事を博士自身も言つて居ります。之を事實に就て見るに、獨逸のフレデリック大王、佛蘭西のナポレオン、英吉利のウエリントンなどは、皆な四時間しか寢なかつたやうであり、又現今の知名の人でもさういふ人があるやうだから、人に依つては或はそれでよいかも知れぬが、併し概して言へば、先づ八時間は眠らなければなりません。特に神經質の者はもう少し餘計に眠る方がよいやうです。又婦人は子供に睡眠を妨げられるから、男子よりは一二時間位は餘計に眠る必要があります。

△夢の原因

次に睡眠中の精神の有樣を調べて見るに、其の精神生活は時間を超絕し、空間を超絕して居ります。夢は即ち其の一例で、幾十年前の事でも實行出來ると共に如何なる處へでも行かれぬといふ事なく、全く時間空間の關係を無視して居ります。これは先に一言したやうに、意識の働らきが弱くなると共に、刺戟に感ずる事が強くなつて、此の現象を起すのです。我々は意識の働らきが弱くなつて、極く熟睡の境にある時と雖も全く意識が無くなるといふ事は殆どありません。今一枚の板を取つて、其の上に人を眠らせ、之をうまく中心を取つて一本の棒で丁字形に支へ、さて其の眠れる人の頭の邊へ行つて何か話をすると、人は眠つて居るが、頭に重みが加はつて其處が少しく下ります。これは身體は眠つて居ても意識が起きて働らいて居る證據であります。或は如何に眠つて居ても、母は子供の泣聲を聞けば直ぐ目を醒まし、武士は轡の音で目を醒ますなどいふ事を見ても、睡眠中でも或る意識が働いてゐることが分ります。即ち眠りの模樣程度に依つて意識は色々に働らくので、それに其の眠りを醒ます迄に至らない外部からの刺戟或は身體內の刺戟が加はると夢となるのであります。

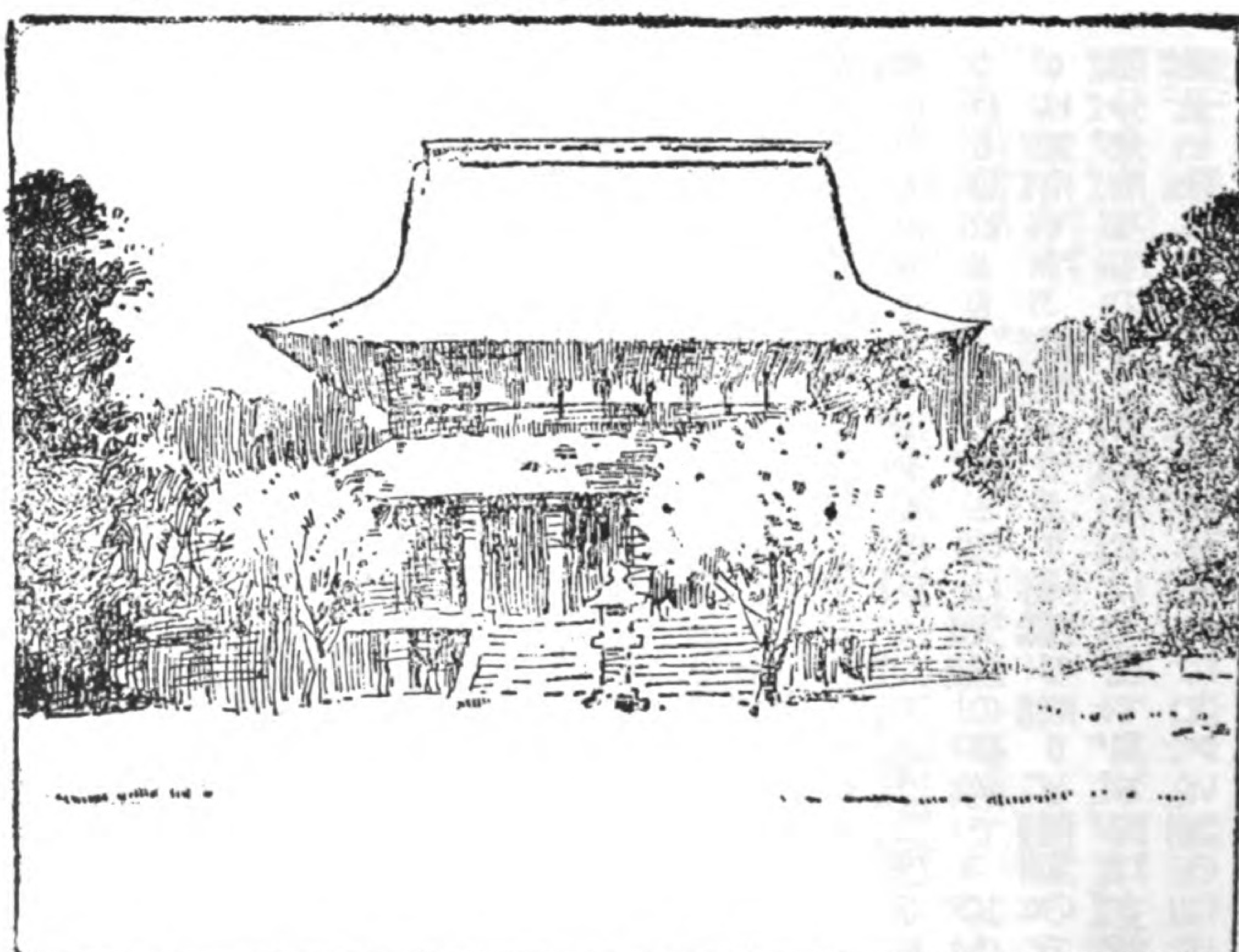
△夢に依つて病氣を知る

ところで醫學の方からいふと、身體の外部の刺戟か

ら起る夢、例へば前夜音樂會に行つて翌晩それを夢に見るとか、或は現に物音を聞きつゝ其れを夢に見るといふやうなのは價値はないが、身體の內部の刺戟に依つて起るもの、即ち身體の感覺に異狀があるとか、或は腸胃に異狀があるとかして起るものは、夢に依つて病氣を推定する事が出來ます。例へば舌に故障がある時には、舌が動かなくて非常に苦しむ夢を見ることがあり、又一寸外から見ては分らなくても、其の夢の工合に依つて癲癇を豫知することが出來るやうな事があります。又病氣の時の夢は、睡眠が淺いから多くは接近した日の事を見るが、普通の夢は比較的古い事を見るので、或る場合には此れも診斷の助けになります。

△不眠と絕食の害の比較

睡眠を妨げると飯を食はないよりも害があつて、一日一夜眠らなければ、三日間飯を食はない程の影響があります。そして飯を食はないで死んだ者よりは眠らないで死んだ者の方が非常に身體を損じて居ります。



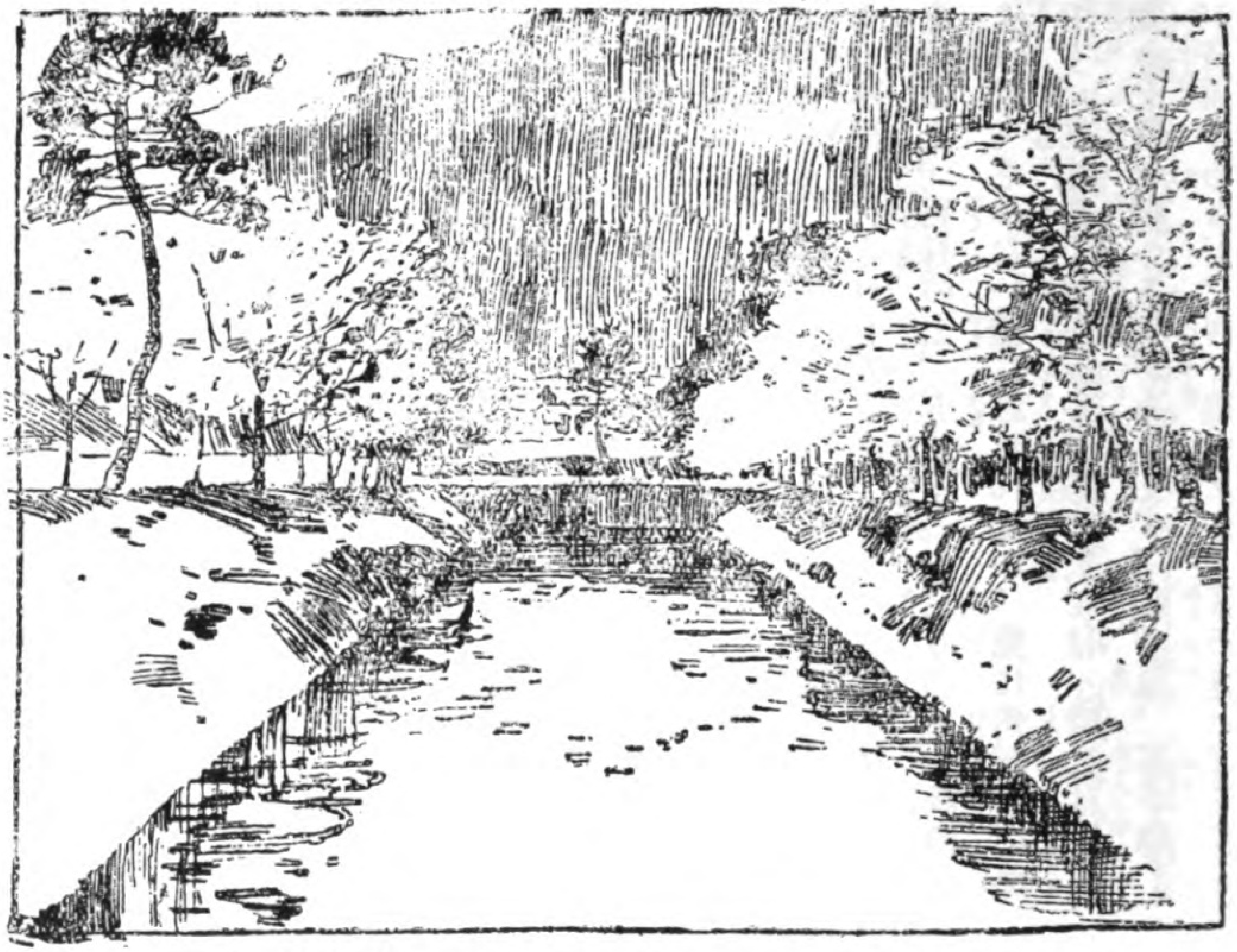
吉野藏王堂の櫻

故に人は眠られる丈け十分眠るのが必要であります。特に眠りが足りないと人は十分の働らきも出來ず、又早く老人になります。近來、試驗勉强、職業の心配等の爲に神經衰弱を起して睡眠の出來ない人が大分多くなつて來たやうであるが、之れを醫者に見せる前に、先づ自ら療法を行ふのが簡便です。それは他の刺戟を避けて暗い所で靜かに眠るのです。それで眠られなかつたら、身體を疲勞さする爲に運動を爲し、寢る四五時間前に飯を普通より少しく餘計に取り、入浴或は腰湯等で身體を溫め、室の溫度を少しく高め、敷布團を厚くし、掛けものを輕くし、そして按摩を施して寢ると、大抵は眠られます。尤も人によつては連續した刺戟がなければ眠られない人があります。工業に從事する者は、傍に機械の音がなければ眠られず、都會の眞中に生れた者は、山中では容易に眠られないといふやうな事もあるから、人に依つて注意が要ります。獨逸の田舍に、不眠症の者を療治する所があるが、其處には大きな瀑布があつて非常に騷々しいけれ共、患者は其の音を聞きながらよく眠むるといふ事です。

△夢遊症の危險

以上は普通の睡眠に就て述べたのであるが、尙ほ此の外に變態の睡眠があります。其の一つは夢遊（ソムナムブリスムス）と言つて、或る時期迄眠むるけれども、やがて轉々反側して、其の中遽かに立ち上り、寢床を出て戶外へ飛び出したり、庭をクル／＼歩き廻つたりして寢るのがあります。それが尙ほ進むと、立つて話をしたり、書物を讀んだりします。一層甚いのは室を出て町へ飛び出して、人を殺したり旅行したりして歸つて寢るが、それで自分は一向知らずに居ることがある。これは睡眠の變態ではあるが、而かもなか／＼多いのであります。斯かる現象は人工(催眠術)でも起されるけれども、多くあるのは天然の夢遊で、其の多くは癲癇です。癲癇はつまり一種の眠りを催すので、隨分危險なもので、新聞などに、寢て居る間に玄能で親子を殺したとか、家に火を放けたとかいふのには澤

周防岩國公園の櫻



山之れがあります。ひつくり返つて口から泡を出すものゝみが癲癇のやうに思はれてゐるが、其の實さうでないのが非常に多いのです。横濱には、二時間かゝつて三州濱松まで行つて漸く目を醒ましたといふのがあつた。社會にとつても個人に取つても隨分危險なものであります。

△睡眠中の透視と讀心術

夢遊症の者は、其他色々奇態な藝をやります。透視といつて固體を透して物を視るとか、透視といつて二三十里先の物でも視るとか、讀心術(テレパチー)といつて人が何を考へて居るかを知るとか、或は時間的の要素を超絶して何千年後の事でも知るといふやうな色色不思議な事をやつて見せます、獨逸で或時女が眼を隱して居て文字を讀むといふので評判になつた事があります。これは人が書物を開くと何處でもすら〳〵讀んで見せるのです。眼で見ない事は確かなので、大に人の信用を受けたが、たゞ讀む書物が其の女の持つて

居るのに限られてゐること〻、又異に透視ならば、書物を開いて手に渡して讀む迄の間に時間を要しないわけであるが、十分内外の時間を要する事が不思議だといふので、レーベーゲルド博士などが調べて見ると、それは母親が傍に附いて居て、人が書物を開くと暗號で頁數を娘に知らせ、娘は其處を記憶で讀むのだといふ事が知れました。夢遊症のは斯る手品とは違つて、多くは實際見るのです。何でもすつかり中るといふのではないが、漠然と而かもなか〳〵能く中ります。これに透視などをやらせるには、大きな字を書いて襖の向ふに置いて、あそこに字が書いてあるがあれは何といふ字だといふ風に、暗示を與へなければならぬけれども、不思議にそれを讀み中てます。獨逸で調べた結果を見ると、百分の三、五位中つて居るので、我國などよりはちと少ない樣に思はれるが、兎に角面白い現象です。其他此の夢遊症の狀態に於ては、時には五官の働きを置き變へる事があります。眼で見、耳で聽くのが普通であるが、胸で聽いたり、耳で嗅いだりする事がよくあります。

△誰れにも出來る讀想術

夢遊症中の讀心術の外に、夢遊症でない讀心術、一名讀想術(ユダンケンレーゲン)といふのがあつて、之れは誰れにでも出來ます。凡そ人の精神狀態は腦から微細な振動となつて一々筋肉に現はれて來るもので、器械を用ゆればそれが能く分かります。之を細かに見分けることが出來れば、人の考へて居る事は大抵中てることが出來るわけであるが、たゞ我々が注意をしないから出來ないのです。人間でなくても、淺草公園などへ行くと山雀が藝をやつて居ります。あれなども其の一例と見てよろしいのです。又伯林では、ハンスと云ふ馬が居て藝をした。それは人が傍に居て、八とか五とか、或は一と五とか云ふやうに或る數を呼ぶと、馬はそれを聞いて其の數だけ板をトン〳〵たゝいて見せたといふのです。で非常に賢い馬だから調べて見ると、馬が數を呼ぶ人の樣子を見て居て、今あの樣子な

らば五と言つたんだらうと云ふ風に、人の全體の樣子を判斷して行るのだと分つた。これも其の一例であります。此の讀心術は夢遊症ではなくて、以心傳心の働らきです。

△催眠術の現象

今一つ睡眠の變態で、先に述べた變態と普通の睡眠との中間に働らくものがある。これは催眠術であります。これは普通の眠りと違つて、眠つてゐる間精神が外界と關係し、且つ奇妙に其の人固有の意識を失ひ殆ど器械のやうになつて側に居る人の自由勝手になります。然し此の狀態は普通の睡眠と等しく全く生理的であります。そして其の狀態を大體四段に分けられます第一期は普通の睡眠と同じ樣な有樣にある。第二期は身體が固くなる。第三期は夢遊の時期で、此の時には先に述べた讀心術等の如き通常人の出來ない色々不思議な現象を現はします。其の次に五官の更に強くなる時期がある。此の催眠術は誰れにでも出來る事で、試



神戸楠公社前道

驗をした者も多くあつて、立派に成績を示して居ります。

△謂ゆる神靈現象の說明

併し、前に述べた夢遊の狀態の者の爲す事、或は催眠術に依つて爲す色々の事も、從來の經驗に依れば、人工、言ひ換へれば我々の五官の普通の働きに依つて出來さうなのであります。今凹面鏡を相對せしめて、其の一方の鏡の前に音響を置くと、それが他方の鏡と相反射して或る一點に燒點が出來る。そこへ耳を置くと最も明細に音響を聞き取られるといふのが物理學の法則であります。故に鋭敏な耳を其處へ置けば、人が口を閉ぢたり開けたりするのは勿論、たとへ舌を動かさないでも人が何か思へば其の爲に筋肉が動らいて音がする其の音の意味までも聞き取られるのは明かであります。從つて五官が極く鋭敏の場合には讀心術や其他の不思議な事を色々出來得る筈であります。たゞ此等の現象は、通常は變態睡眠かそれに類似の狀態の下でなければ現はれない。そしてそれが如何にも奇異であるから、何時も迷信の種となり、甚だしい時は學者の問題となる事があります。千八百五十年頃かに亞米利加で丸い卓子が動くといふ不思議な現象が發見されて、今日になつても神靈現象とか稱して大に跋扈してある。其他にも色々此の種のものがあるが、これは筋肉の働らきで我々にも出來ることで、これらも何も不思議ではない。神靈で說く迄もなく、理學、生理學の方面から十分說き得るのであります。

（以上は近頃南葵文庫の講演會に於て講ぜられたお話の大要であります）



櫛に就ての種々の傳說

考古博士

一 櫛は神代より

易々とした束れ餘る黒髮と、煩惱のメナルス多き浮世を捨てゝ、佛の前に行ひすます尼さんや、囊海坊主のクリ〳〵でない限り、何も女として、日常の生活に櫛を離すものはあるまい。けれども女として、此の櫛に就いての智識がある者は、殆んど皆無といつてもよいでせう。

我が神代に櫛のことがあるのは、古事記の卷の黄泉の段に、イザナギの命とイザナミの命とが御合まして、その結果、御子三十五人を産ませられた。そしてイザナミの命は遂に神避ましたから、イツモの國とハヽキの國の境比婆の山といふに葬し奉つた。すると、イザナギの命は、その御妻の命を慕ひ給ふてヨミの國(伯耆夜見ケ濱)に御顔を見に行かれた。けれども西還が眞暗で判らないものだから、左の御髻に差してゐられた湯津間櫛の男柱を一箇取闕いで、それに火を燭してその御顔を細かに御覽なされた。さて御歸り遊ばさうとすると、突然黄泉醜女といふものが現はれて、命を追ひ掛けたので、今は命も絶體絶命、黒御鬘(玉を緒にてつなぎたるもの、神代の裝飾)を投げ附けられたのである。すると醜女は此れを見て生葡子(葡萄の類ならん)だと思つて、それを拾つて食べてゐる内に、命はドン〳〵遁げて行かれた。けれども又又醜女が追ひ掛けて來るので、今度は右の御髻に差してゐられた湯津間櫛を引缺いで投げ附けられた。すると醜女は又それを筍だと思つて、それを拔き食む間に、漸くお遁げ遊ばした。

以上の話は、即ち、櫛といふものが我が神典に見えた抑々ですが、これで見てもこれよりも以前に、櫛が有つたことが知れます。

二 湯津間櫛の事

又同じ書の八俣の大蛇の段では、湯津爪櫛とも書いてあるが、本居宣長の古事記傳卷の九には、「爪櫛の爪は櫛の齒のしげく間の繁くせまつて居るのを云つたもので、古の櫛は爪の形をしてゐたとも深櫛の意だともいふのは誤解である。即ち爪は串と同じ類であつて、黄泉の段に火を燭されたのから思つて見れば、上代の櫛の齒は稍長かつたらうと思ふ。又湯津は清淨の義又は木の名だといふことも當つてゐない」とあるし、同じ卷の天稚彦が雉を射る所の湯津桂の條には、「湯津は五百箇で枝の繁れることをいふ」とある。けれども此の湯津といふのは、木の名であつて、柞といふのが其の本らしいことがある。和名抄といふ書の木の部に「柞和名を由志、櫛作梳也」とあるし、延喜式内藏寮といふ書には「年中所造御梳三百六十枚皆用由志木」などとあるから、此の湯津の津と由志の志とが後年に至つて人の口にして來たと見てもよいのである。のみならず、今現にある境黄楊といふのは、その柞の木である。

三　黄楊櫛

以上我が上古時代の櫛は柞の木を用ゐてゐたといふことが判るが、今一般に用ゐられてゐる黄楊は、何時の頃から始つたかと云へば、殆んど千有餘年前に賤の女のさし櫛であつたらしい。伊勢物語の八十七段に

蘆の屋のなだの鹽やきいとまなみ
つげのをぐしもさゝず來にけり。

といふ歌があるし、萬葉集卷の九にも

君なくばなぞ身かざらん
くしげなる
つげのをぐしもと
らんと思はず

などゝあるのみならず、此の後、基俊集や、爲家の夫木抄にも、つげのをぐしと詠んだのがある。ずつと下つて建長八年の百首歌合にも

あふ事のつげのさし櫛さしもやは
あだなる夢にこゝろひくべき。

の歌もある。

又大内の宮女だちも、木製の櫛をさしてゐたらしく、清少納言の枕の草紙の中にも



神代の櫛（即ち湯津間櫛）長さ九寸餘横一寸五分餘木にて作りたるもの

「宮女が三四人乘つてゐる物見車が、御門の閾に乘りかゝつて、それががたりと引下ろされた機會に、其の中にゐた女中達が額を打ち合せ、さしてゐた櫛の墜ちたのも心附かず、膝の下などに敷いて折れたりした」と書いてある。

それから猶高貴の御方々には沈香の櫛もあつたやうで、榮華物語のはつ花の卷に「しろがれの箱のふたには鏡をいれ、ぢんのくし、白かれのかうがいを入れて」とあるが萬葉集卷の四に

乙女子が玉くしげなる
玉櫛の
いぶかし今も
妹におはざれば

及び夫木抄にも

心をばなにゝおきてか
白露の
玉の小櫛をさして見すらん。

と詠じてある所から見れば、無論又玉櫛といふやうなものもあつたらしい。尤も玉といふのは古語で、何でもそのものを褒める辭に代用されてゐた。

四　象牙の櫛

現今では餘り澤山見ないやうですが、徳川時代のある頃には、象牙の

櫛が盛んに行はれてゐたさうである。即ち此れも千年以前の延喜式に「凡内命婦三位已上聽用象牙櫛云々」とあるから、當時今のやうな瑇瑁の櫛があれば此のやうに象牙を重くしなかつたらうと思ふ。さすれば前段の如き、木櫛を用ゐてゐたのは、その三位以下の女官のみであつたといふことが推し量られる。既に角象牙の櫛は、慥かにその頃からあつたのである。枕の草紙の、あさましき物といふ條にも「さしぐし磨くほどに物にさへて折れたる」とあるのは、其證據の裏書と見てよい。

又近くは、延寶五年の出版俳諧かくれ笠に「いざ取りて鹿の音聞かん塗り足駄、象牙の小櫛鬢筋の露」とあるし、西鶴の一代女の暗物女といふ者は

「額に白粉眉にはおき墨尺長の平髷を髱にかけて梅花香の雫をふくませて象牙のさし櫛大きくよろづ氣をつけて拵へ」とある。

要するに、今から三百餘年前まではべつかふの櫛がなかつた爲めに、櫛を男に賣る女ですら象牙の櫛をさしたので、「よろづ氣を附けて」と云つたのであらう。



五　蒔繪の櫛

蒔繪は支那で古くから插金と云つて、隨分廣く行はれたるらしく、日本でも隨分古くからあつたから、前に述べた玉櫛は、即ちそれであらうと思ふ。枕の草紙のうれしき物の條に

「さし櫛むすばせておかしげなるも又うれし思ふ人は我身よりまさりてうれし」と、あるのみならず、右京大夫家集といふ書にも

「やしまの大臣とかやこのころは聞ゆめる、其人の中納言と聞えし頃、五節に櫛を乞ひきこえたりしを賜ふとて紅のうすやうに、蘆分小船をむすびたる櫛さしたるが、なのめならぬにかきてをしつけられたる

　あしわけのさはる小船に
　　くれなゐの
　ふかき心を
　　よするとを知れ

返し
　あしわけて心よせける
　小船とも
　　くれなゐふかきいろにてぞ知る。

と書してある。案ずるに「蘆分け小船むすびたる櫛」といふのは、云ふまでもなくその模樣が蒔繪してあることで、それよりもずつと近くでは、西鶴の諸艶大鑑卷之四に、「大阪の湯女どもが、馴染みの客の紋所を、蒔繪にした櫛を幾枚も拵へて置いて、客の來たのを見ると、その紋所の櫛をさして出た」こと、一代女にも「大阪新町の遊女等の間に、蒔繪の紋櫛をさす事が流行した」こと、又俗つれ〴〵にも、「庵形の木櫛に

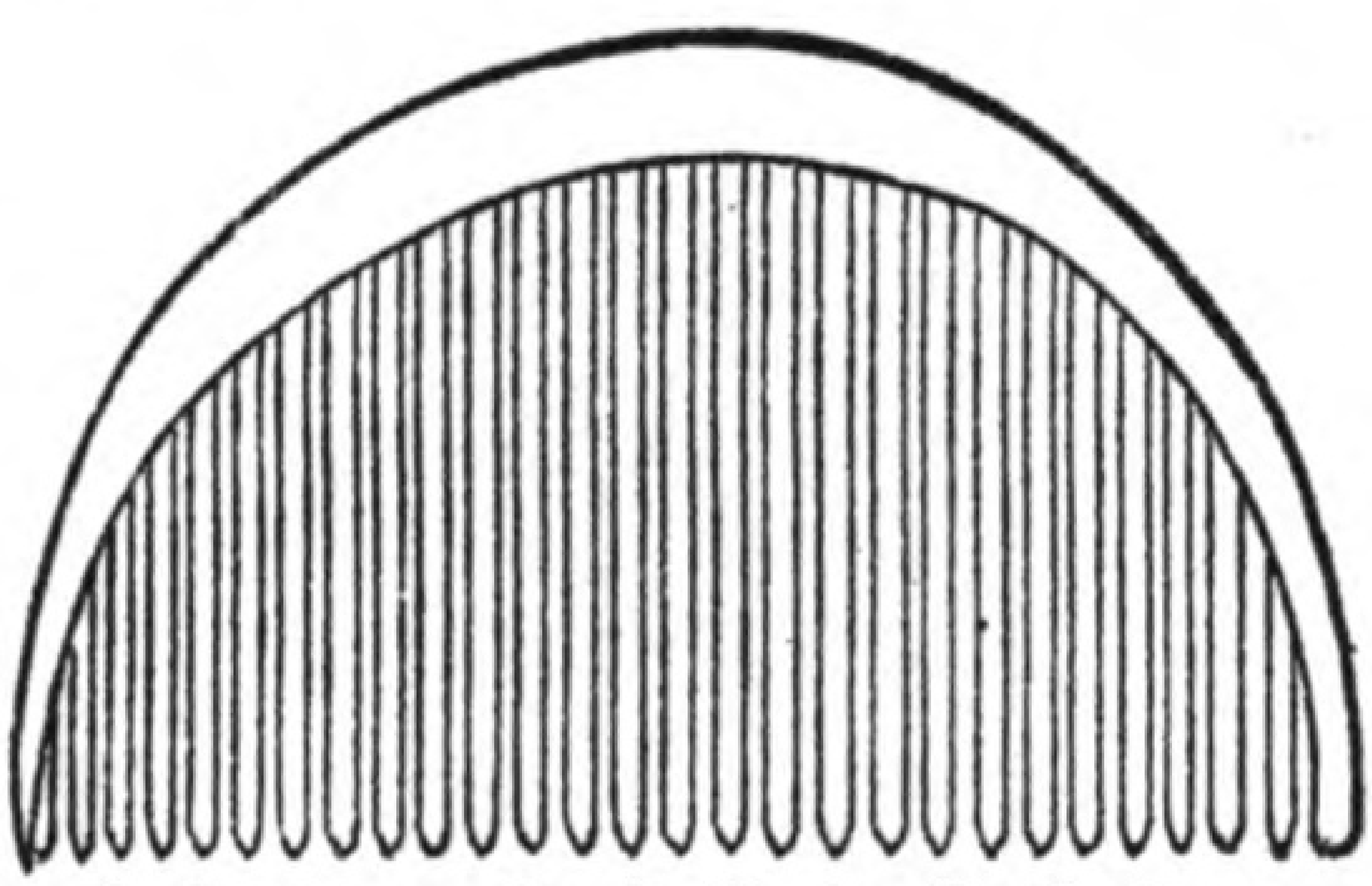
切金入りの折菊を蒔繪にしたのを、町の富豪のむすめがさした」こと、など澤山ある。

六　塗櫛と青貝の櫛

蒔繪の櫛が前述のやうに、餘程古くからあつたのを見ても、普通の塗櫛は其以前から有つたので、定家卿が五節の舞姫に引出物としてとらせた面白い趣向の話がある。それは大きな火桶の中に黒い櫛を炭と見せ、紅い櫛を火と見せ、合せて二十枚入れ、猶其の上に、白粉を加へて灰と見せたといふのである。

一寸こゝに此の五節の舞の事をいふ、大内で毎年十一月の丑の日から辰の日まで四日の間行はれた御儀式で、辰の日には公卿の家々の、まだ男を知らぬ處女を選び、それに舞をさせられたといふ事である。そして其時は各公卿衆が、それ〴〵前記のやうな趣向を凝らせた引出物を拵へ、それを帝の御前に近い所へ飾つて置き、すつかり舞が果てゝ終つてから、それを舞姫にとらせる慣例になつてゐたのである。

又青貝を摺り附けた櫛も、餘程以前から有つたと見えて、落久保物語の卷の四などにも「貝すりたろくし」とある。



これは類聚雜要に見えたる象牙の櫛なり「大治五年中宮立后の御料具の一つなり櫛の大さ幅一寸八分とあり

七　瑇瑁の櫛

瑇瑁即ちべつかふの櫛が行はれたのは極く近い事らしい、いくら古い書物を尋ねて見ても、その事を發見せぬが、裝束の石帶に用ゐたことはあつたらしい。唯古い新撰六帖といふ書物に

河の瀨に浮いたる龜のさし櫛ぞ
見し世ながらのしるしなりける。

との歌があるけれども、此れは決して瑇瑁の櫛のことを云つたのでなく、支那の故事から引張り出したものである。

一寸面白いから其の支那の故事を玆に引用して見ませう

「漢の靈帝の時、江家といふ所の黃といふ人の母親が、盤の中で久しく浴をしてゐる內、フト變じて黿となつた。そこで其附添の女中が驚いて、家人にその事を告げに行つた。すると何時しか其黿はころ〳〵と轉げて、其所の深い淵の中に入つて終つた。で、家人は止むを得ず其後淵の中に氣を附けてゐると、幾度も浮き上つて來た、しかもその頭には、始め母親が浴する時にさしてゐた銀の釵が、チヤンと其の儘にあつたので、於是黃氏累世敢黿肉不食」といふのである。

前記の歌は即ち、此の故事から、浮いたる櫛のやうに見える、とのこゝろから詠じたのであらう、されば瑇瑁の櫛の事を云つたのでは無いやうに思ふ。尤も支那には古くから有つたらしい。

日本では、何時の頃から用ゐられたか、天和年中作の笑委集に

「七がいでたつ装束には、肌には羽二重白小袖郡内のごばん縞あさぎの糸にて縫ひたる定紋の三ッ柏五所につけ桃色の裏付けて一尺五寸の大振袖を上にかされ横巾ひろき紫帯二重にきりゝと引きまはし後ろにてひき結び黒髪を島田とやらに結ひ上げ銀ふくりんに蒔絵かきたる玳瑁の櫛にて前髪を押へ、紅粉を以つて面をいろどりさもあてやかにいでたちけりとある。

此の七といふのは彼の八百屋お七の事で、一尺五寸の大振袖といふのは、昔の袖の丈がすべて短かつた故である。現在の振袖のこと思つて見れば、一寸お可笑い氣がするではないか。

要するに、瑇瑁の櫛のことは、此の後の書物には随分ある。



これは鎌倉志に載せてある、頼朝の室政子の櫛なるべし、櫛の徑三寸八分餘、高さ一寸二分厚さ二分櫛の背厚さ薄く彫りたる穴十三あり元は青貝をいれたるものにて今抜けたる跡ありこゝ青貝を入れたるも見ゆ、穴のくばり皆三二三二三とありて木質はイスといふとあり後世好事家あつてこの櫛を模作して政子形と爲し寛政の頃大に流行せりとなり

八　横櫛の事

お姫様達やお嬢様達には餘り拜見せぬやうだが、黄楊の櫛などを、鬢の横にさしたのを粋だといつて喜ぶ一部の人々がある。此の横櫛といふことは、實際御品の好いものではなく、業平の大和物語にも、次のやうなことがある。

「女の許行きたりけり、久しく行かざりければ、つゝましくて立てり、さて、かいまめばわれにはよく見えしが、いとあやしきさまのきぬ着て、大櫛を面櫛にさしかけて居り、てづから飯盛り居りけり、いといみじくと思ひて來にけるまゝ入らずなりにけり。」

此の面櫛とあるのは、即ち横櫛のことである。

又大鏡にも

「一品宮(三條院皇女禎子)の、のぼらせ給ひけるに、辨の乳母の御供に候が、さし櫛を左にさゝれければ、あこよ、など櫛は惡しくさしたるぞとこそ仰せられけれ。」とある。

然し、此の横櫛は、前に述べた五節の舞の時に、特に舞姫が、右の方の鬢にさしたのである

此れは特別である。

九　二枚櫛のこと

昔、二枚以上の櫛をさしたのは遊女のみであつて、徳川時代の末頃から、一般に其眞似をするやうになつたのである。

鶴山人の持つてゐたそゞろ物語といふ本の中に

「天正十八年大阪にて風呂屋といふ事いで來て、湯女とて女ども、入り來る客の垢を搔り、髮などを洗ふ故に、一名垢洗ひ女とも呼べり。髮をあらへば結ひもする故に、常に櫛をさす。此の湯女寛永の中頃に至りては容色を飾り、浮客等が酒の相手をもなし、櫛一枚は常なる故、諸櫛を二枚さして客の多きを見せ、且つ飾りとも湯女のしるしともしたるなりけり。然して種々色を賣るに至り、大湯女小湯女の名目ありて、大湯女は酌をとり、小湯女は垢をすり髮を洗ふ。こは慶安承應の間なり。かくて追々女の氣風浪華はさらなり、兩都にも起り、此風の爲めに島原(遊廓)の花もちりがてになれば、彼れが風を移して島原の遊女どもも飾りに櫛を二枚させりとぞ」、とあります



これは西川祐信の繪本「百人女郎」にあり即ち今より二百年前二枚櫛の用ゐられし時代の風俗也

此の外、櫛で占をしたことや、櫛を投げると親子の縁が切れるといふことや、櫛は人に贈らぬといふことや、皇女が齋宮として伊勢や加茂に御出での時、帝が自ら櫛をさしてあげられた慣例や、隨分面白いことも尠少くはありませんが、それは後日に讓ります。

○青柳の泥にしたるゝ汐干哉
○文は後に櫛さし出す使かな
○釣鐘にとまつて眠る胡蝶かな
○菜の花に遠く暮れたり櫛の波
○さくからに散る心ありいと櫻



級友の行衛

朧月夜

櫻の枝がほんのり蕾を出してそよ〳〵と吹く風が後れ毛を動しても氣にならぬ時候でした。恰度其時分卒業した者が集つて、さゝやかな茶話會を催す、會場は何時もの作法室で、委員の方は早くから奔走して塵一つ留らぬ樣に掃除して眞中には美して室咲の櫻さへ飾られてある。豫定の時刻少し前より二人三人宛來る人のあるのに委員の方が。

「まあ、どうぞ奧の方へ」、「いえ此處で澤山」と今日に限つて妙に樣子をして部屋の隅に小さくなり乍ら連の方と小聲に談をする人もある。かと思ふといそ〳〵と大きなリボンをかけて流石今日の嬉しさは隱せぬと見えて部屋の中を彼方此方と歩く方もあつた。

先生方も大抵出席されると委員の方の挨拶で會は開かれましたが、先生の一人がズット列んだ妾達を數へながら、「それで皆お揃ですかと」ら問はれる。と誰かゝ『松村樣が御病氣で……』と言はれる。其途端後の扉が靜に開いて卒業試驗中に病氣に罹られた松村樣の顔が現れた。物音に一同の視線が云ひ合した樣に其方に向ふとまあ、蒼いお顔！ それを少し伏目にして皆に會釋をなすつた時、頰の邊が紅に染つたがその樣が又なく神々しく、美しく見えました。

『よく來られましたね』と漢文の先生が仰ると『今日上らないのは何だか濟まない樣な氣がしまして』と許り。僅の病患であの御痩せなすつた事、痛々しい、御母樣が義理の方だつて申しますもの……。

四年の間どんなに卒業に憧憬れたらうて、妾など一年一年昇つて行くのが待遠くて、仕方がありませんで

した。けれども其時となると何だか今暫く御友達と一緒に居たく、先生の教も受けたく思ひます。況して今迄とは全く別の態度でどの方も親切にして下さると、今迄殆と責められて、聲を聽いても慄とした數學の先生に對してさへ其日は何となく懐しい、氣の毒なやうな情が起りました。男の卒業生はどんな氣がなさるかは知らないが、うら若い女の學校を出ると言ふのは何となく青春と別れ行く樣な趣があります。誰しも早く親元へ歸つて、どうせうと云ふ人は少く、たゞ去り難い樣な、心細い樣な不安の思が致します。

病氣の故と仰つて暫くで松村樣は歸られました。あゝ、あの後姿の弱々しかつた事……何時の間に電燈が點いて誰の顏も美しく輝きました。初めの席は何時か亂れて、或は過ぎ去つた出來事を語つて、儚ない回想に耽つたり、或は一寸した失策を數へ出して無邪氣に笑ふ人もありました。けれ共是が別れ、この際は、心からの笑の中にも潜んで居るので、最後に先生の一人が立上つて「愈よ皆樣と別れねばならぬ時が來ました」と前置して話し出された時は一座急に濕やかになつて中には啜泣する方さへありました……。

其翌日で、あす村松樣を除けた卅九人は同じ窓の下に學んだ事を深く記念せむ爲に銚子の濱へ旅行する事になりました。何しろ年頃の女が思ひ〳〵の身態をして盛つたのですから、遇ふ人々の注意をどれ丈惹いたか、分りません。汽車が武庫の隧道を通る時に暗闇を幸ひ、側向の人にそつと惡戯をして知らぬ顏をして、そして後で（貴女でせう、貴女でせうと）他の人を詰るのを見てどんなに興んだか。又隣席の人の羽織の襟にそつと（此女御用心）と鉛筆で書いて挾むのが何故あんなに可笑しかつたでせう。

海邊の一日は樂しうございました、緑濃き礒馴松の下に坐し、朗にどふり〳〵と折ち來る波を見つめつゝ過去の追懷や未來の望を語りました――

△

その時から、もう四年經つた、初の内こそ互に往來して親しくもしたが、其内に他へ行く人も出來、一人

減り二人減り、最初のお正月には所が分らないので年始を出せぬ人さへ出來た。それに自分だつてさう始終訪問ばかりしても居られず、一と月二た月と往來が絶えると其次遇つた時は妙に隔が出來て居て丁寧な言葉使等をするやうになる。

「△△樣が疾先にお嫁入をせられたとて寄會ふ毎に『どんな顔をして入來るでせう……』とお腹を抱へて笑つた間もなく早赤さんがお出來になる。御宅の側を通つた時偶と立寄ると、あの綺麗好のおめかし屋さんが根のぬけた髪をして、胸



の邊から汚れた襟が出て居た、ふつくりと友禪の着物を着せた赤樣を重相に搖り上げ〳〵しながら流石に嬉し相に。

「良人も留守ですし何卒――』と無理に通されたが見ると小道具の取り散らした六疊の奧の間は西向に庭に向つて居る。午後の日が赤く障子に映て御面を睽然と見せた――美しかつたお顔には怪しい雀斑も出來た樣。

その內嬰さんのおしめを代へられたかと思ふと其手も洗はず鬢の後れ毛を蒼蠅さうにかき上げ、軈てお茶

を入れて下さる。

お天氣の話をすると、此頃は日和つゞきで、『洗濯物がよく乾いて……』と仰しやる、あゝ、學校時代では天晴れクラスの明星と仰がれて、シエレーやキーツをかついだ人も、もう斯くなつては赤樣のおしめより外に考へに出でぬと見える。ふと後を向いて障子の間から庭を見ると植木一ツない無趣味な所に、物乾竿をかけ渡して樣々の縞や飛白の襁褓が風のまに〳〵動いて居ました。

それにしても可哀想なのは松村樣でした。卒業間際に惡かつた病氣が一時は治りましたが、あの結婚問題が持ち上ると復々ぶら〳〵とし初めて、醫師は今の間に轉地をせよと勸めました。すると繼母さんは「何れね……妾なんかの言ふ事は用ゐないんです、あれの病氣も一ツは氣から出るのですよ」と見舞に來る友達に話されたさうです。

看病に行つた人の話をきくと、憐な事が多かつたと言ふ、明日迄は持たぬと言ふ今日迄、氣は確かで、皆が隱して居たからでもあらうが、死ぬ等とは妾にも考へて居られなかつた樣子。恰度あの時分は梅雨の半ばで、じめ〳〵とした嫌に蒸し暑い日が連いた。何れ不用になるのならばと看護の人が繼母樣より黃八丈の袷を出して貰つて着せやうとすると、松村さんは、キッとなつて『皆がよつてたかつて妾を死者扱にする』と言つて、臨終迄、其着物を被られなかつたさうです。

△

私の友達には何故かう不幸な人が多いんでせう、無論關係のない人の事は、內情を知らないから幸福に見えるのかも知れないけれど……。

醍醐樣は御身分柄、今ときめくさる華族樣に嫁がれて、美しい嬰樣をお生みなつて、果報よと誰しも羨んで居ましたが、薄々きけば初めてお產なすつたお子樣が生つきの盲目とか、初の程は別に氣に止めず、可愛い、男子よと愛んで居られたのに美しい物を見せても知らぬ顏をして居たり、妙に手で物を探つたりする癖があるのに、是は怪しいと醫者に見せた所が、其始末

妾はつひに見ぬが春の暖い日に蠟塗の乳母車に坊様をのせ御邸の前の草原を美しいお母様の押して行かれる事もある相な。そして坊様が暖い日の光に向つて澄み渡つた眼を見張つて居られるのを見てはどんなにお幸いだらう。偶と近所の子供等が集つて來て草原で摘んだ花をあげませうと持たせたり、かと思ふと向ふに何か見附けたと見え皆々聲を立てゝ走つて行くのを、皆の行く處かどんなに良いと思はれるのか、其眼の見えぬなりに其方にぢつと耳を澄ませて居られる様を見るとお附の者さへ痛々しくて涙が出ると云ふ。」



其事を思ふと蝶子さんは幸福であつた、嫁かれる時は「マー女學校迄出て、今更商人等へ、私等なら一層オールドミッスで暮すわ」など悪口を仰つた方もありましたが、嫁て見れば却々どうしてどうして蝶子さん以上の文學好で御得意のものは和歌俳句、淨瑠璃、俳句は御夫婦連名でさる婦人雜誌に出されたし、夕飯後の縁側の蓆の上では千代萩のお稽古あゝ何が仕合になるか分りませぬ。恐らくあの人が私達の中で一番幸福な人であらう。

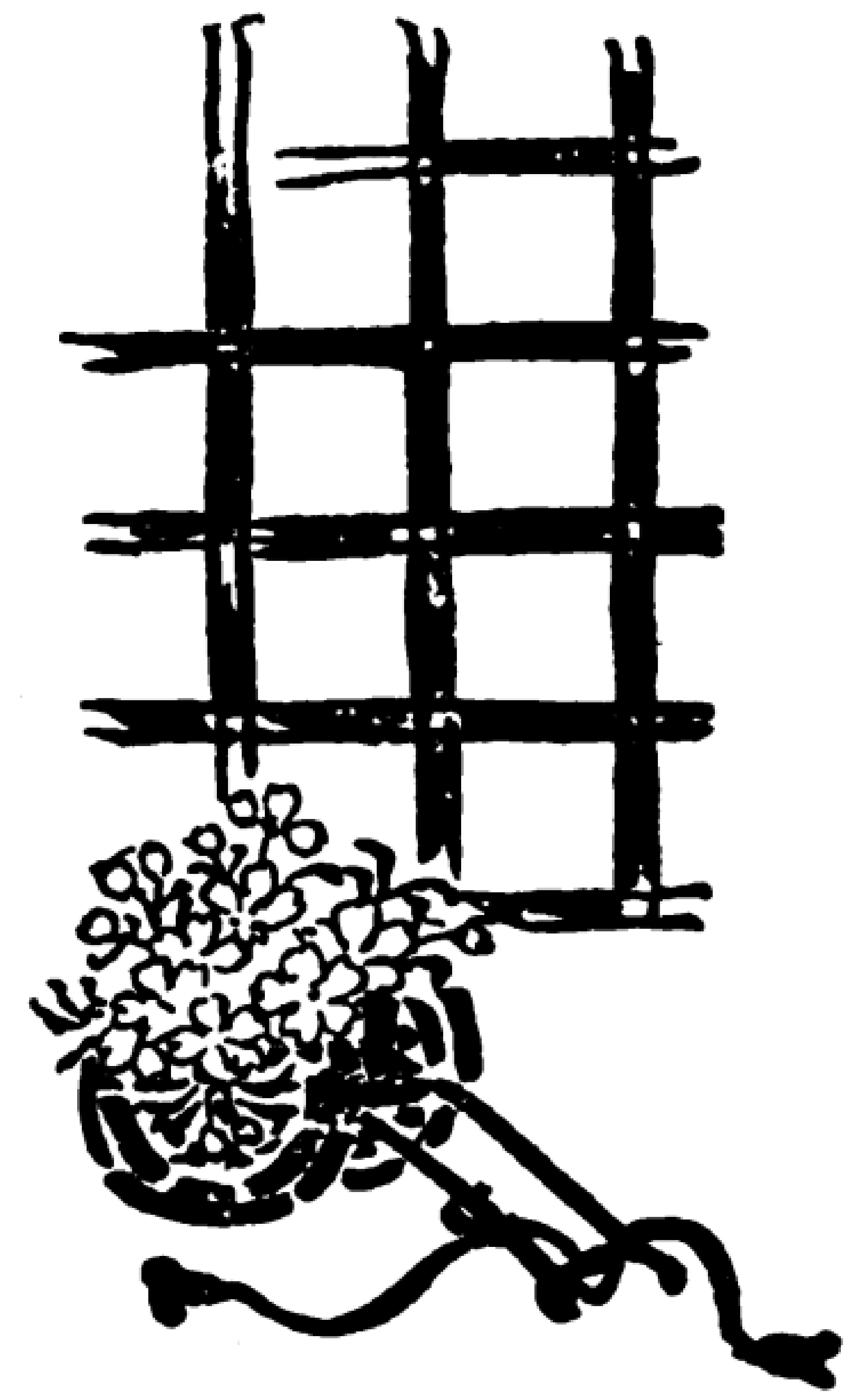
△

此間從姉が來た時、私の机許にあつた古い雑誌を何氣なく開けて見て居ましたが急に悸いた樣な貌をして「まあ六人も嫁を離別した姑がありますつてね」と云ふから

「えゝ、隨分ひどい人ねえ」と言ふと從姉は首をかしげ乍ら「どうも私には眞實とは思へない」

「いえ隨分やり兼ない人がありますよ」と言ふと「さうでせうか」と言つた切り、別に氣にも止めぬ樣子でしたが、姑と言へば何故あゝ意地が惡いんでせう。私は小夜子さんに心から同情します…小夜子さんは僅の義理から斷わられなくなつて、未だうら若いのに繼子のある處へ後妻に入らした。嫁く時は「幾ら繼子だつて私の眞心一ッで眞實の子の樣になるのでせう…と言つて居られたが、どうして巧く行かない樣子、時時思ひ餘つて姑樣の事等それとなく書いた手紙が來て其都度泣かされましたものゝまだそれ程とは思ひませんでしたが、此前逢つて、二の腕の傷、煙管で撲たれたと傷の跡と見せられた時私は一言も口がきけませんでした。それでも小夜子さんは氣にも止めない樣に笑ひ乍ら、「昔から女は皆、同し目に遇つて來てるんですもの、何も私一人ぢやなく…」と云つて居られたには其雄々しさに思はず淚がこぼれました——

不幸な人の話をしてよく引合に出るのは藤井さんです。此前の同窓會のあつた時藤井樣をよせてクラスの人が五六人落ちあひました、友達の話が出た後で一人が藤井樣に「貴女なんかほんとに氣樂ですわ、先生先生と敬まはれて學校へ出ればいゝんですもの…」と言ふと、直ぐ後について「ほんとよ、お姑も無いんですしね」としみ〴〵船川さんが言ふ、其後私獨りで藤井樣に遇つた時、同窓會の時の話が出ると「私そんなに幸福に見えて?」と問はれる故「さう見えますよと答へると。「まあ貴女迄が…」と少し鼻聲になつて「人に遇つた時笑顔さへして居れば其人は幸福だと思ふんだもの…私だつて人に言はぬ苦や悲は尋常の人より…と言ひかけて聲をのまれた。



新つれぐ草

磯ちどり

○

貯金と申す事は良き風にはあれど、程超ゆれば吝嗇に流れ、働の氣を乏しうす。幼き者の學校にて貯金せよと宣ひしかばとて一にも金、二にも金と曰ひ、葉書等出し來よと言へば其足代幾何たまふ等訊く。なべて實盃々々とのみ言ふは好ましからぬ事にして、諸々の事に徒費を避け、萬一の折に具ふる爲に貯あるは固より望むべき事乍ら勤儉を唯一つの美德の如く思做したるはいかゞ。今の人は慾を離れて何事をも爲すなく、若きも老いたるも男も女も利の前に迷ひ、なかくに世を味氣なき物にしなすなり。昔は小學校等にても年三度の祝日には「祝」としたる燒印捺したる我顏程もある紅白の饅頭配り、今時の樣なる永々しき修身訓話もあらざりしが、さりとて敎へ子の身修まらざりしとも覺えず。今の都の學校にては「こは勤儉の道を辨へぬも甚し。饅頭は其場限にて實盃無しく」とてあるは「二宮尊德」あるは「日常の務」等したる冊子分ちたり。されば今の子供は式ある日とても昔の子供の樣に彌なくは喜はざめる。此處(京都)なる或學校は運動會の賞品にとて郵便貯金の臺紙與へたるがあり。一等賞三錢、二等賞二錢、三等賞一錢。

○

怪しき事にはあれど人の顏には一眼見て覺え安きと覺え難きとがあり。こは穴賢その人の美醜によるものに非ず。美しくとも覺え難きがあり、醜くとも覺え安きがあり。夜、引き合せられたる人の、さして心に留

めであひたるに、其後晝間に遇ひたる折、向より挨拶受けて顏紅らむる事もあるよ。又尊むべき筋の人に初て逢ひし折、そが覺え安からぬ顏にて、日を經て後はその人を思ひ浮べ得るや否や、はた彼の人には髭ありしや。眼鏡ありしや等それのみ心に掛る事もあるが、こは我身のみの事にや。

町行きて見知らぬ人に禮されたるも心に懸る物也。斯る時は此方にても返しはすれ共、何處の人にや、見し事も無き人なるに等思ふ。また時には我身の後に人ありとは知らで、前より來る人の頭下げたるを我身にしたると心得へて同じく返したる後にてそれと心附きたる時は穴あらば入りたき心地す。

總べて己が事他人に知らるゝは快きことにて、我身の得意とする業の認められたる折は更なり、さに非ずとも我名我顏の如きすら人よりは夙に覺えらるゝは嬉しく、その覺え異れし人を懐しう思ふが常也。されば多くの人々の上に立つ人は心して下の人の名覺え、用ある折は必ず名を指して呼ぶべし。「おい」「お前」など申すは愼むべき事にこそ。

獨居の折靜に眼閉ち人の面影心に描くに、用もなき役所の小使、さては一度見し許りの物賣の顏等の怪しき許り鮮に浮ぶ事あれど、我戀しき誰彼の面影のみは、日に幾度となく思ひ出し、又寫し繪取り出す事もあるに關らず咄嗟の間には思浮ばず。かくて努むれば努むる程、直に思ひ浮びなむ心地はし乍らも、あらぬ人の面影のみ重り合ひて出づるもをかし。人の面影のみに非ず、我考にても然り。夢の中に見たる奇しき事共、あるは思ひ設けぬ折にふと心に浮びたる考の物の端に記し置かなむ等思ひつゝある間に、はたと打忘れて復想起し得ぬ事もあり。

○

返事に樣々あり。「はい」と答ふるは賢げにて「はあ」と言ひたるは馴々し。小娘の「あい」と此方向きたるは艶しく、四十男などの「うむ」とのみ言ひたるは不精氣なり。上方者の「へえ」と頭掻くは下司らしく、北の國の若き女の「やあ」と申すは外つ國の言葉の樣なるぞ

そかしき。なべて富山あたりの人の言葉遣は、「え」を「い」と誤り侍れば、土地の師範學校等出たる人は「蝗」の事を「えなご」と讀みインキを「えんき」と申すめり。されば上の誤る處下之に倣ひ、國中靡然として「えなご」「えんき」と申すなり。又上方にては「狐」を「けつね」「牛房」を「ごんぼ」「詩を讀む」を「しい讀む」と訛りたり。奥州は猪の樣に鼻にて物申したるもをかし。斯く譏りもて行くに、東の女原は我言葉こそ正しけれ、と鼻うごめかすべけれど、「ひ」を「し」と申し侍れば、實はいろは四十六文字也。怪し



土佐あたりのぢとじとを讀み分けたるは原稿の振假名

をも誤らで寫し。

何處の國に行くとも電話にて話す時のみは「ねえ、ねえ」と江戸言葉眞似る癖あるはいかゞ。

○

母親は若きより年老いたるが誠に母らしき心地す。母の十七の時生れたる己が身の早廿過ぎたる等は何となく崇め尊む情薄し。

今より十四五年前の母は年も若かりつべけれど、母とし言へば初より年寄なりし如く思ひ做し、こは母の嫁入の折の衣裳なりとて華美やかなる友僊見、あるは嫁ぐ前の寫眞なり等云ひて、古めかしき黑襟つけ物々しき髷に結ひ、琴前に置きたるなど見れば、さもありぬべき事なれど、眞とは思ひ得ず。況して今は鹿爪らしき顏し給へど我雙親にても愛兒の折もありつらむ等思へば何とはなしにをかしくて——

日頃怪しき癖あり。不孝此上もなき事なれど我母と名乘ります人が、眞に我生みの母なり。と思ふに、心懸になる事あり。されど世の中の人一人として生るゝ折の事見し者あらねば、是のみは證據もなし。(斯る事口にするは女にはあるまじき事乍ら、思ひ出でたる儘に書きたる也)

○

人と逢ふ折其顏しげ〳〵見るは無禮也」近眼の男の此方見定むるに、眼怪しう細め、眉ひそむるは、然せずば見得ずとは知りつゝも、快よからぬ物也。されば度強き近眼男は何となく性僻める樣覺ゆ。

○

我家に住む幼兒の八ツ許なるが、何持たせても一日と經たぬ間に落し來、時々は學校よりの歸るさ我包失ひ來る事さへあるに、母いたく怒りて「此度は容赦せじ。いつも〳〵物落したるは、如何なる心なるぞ」と責むれば、子は眞面目なる顏して「ばゞ蝗の心にて居侍る」と申しぬ。ばゞ蝗の心とは如何なる心にや。訊かまほし。

○

人の呉れたる物を其場にて打開き、家族打寄りて食

ふはよき習慣也。さるを、鴫、雉子、見榮よき菓子などの來たるを「我家にて食ぶれば其場限也。何々の方に遣してむ」とて又も贈りやる人もあり。かゝれば子供の本意なさはさる事ながら一つの鴫、雉子の家より家へと飛びめるき、折惡しくば初の家へと歸る事もあらむさる頃なりき。人の菓子折呉れたるに、包紙いたく汚れたれば中開き見たるに怪しき菓子の、はや黴生え、三十五日の志としたる札出でたる事あり。家持つ者の心得べき事にこそ。



○

春の日に心無しに備はるゝなと云ふ諺あり春の日は永く備はるゝ者の働く時多ければ也されど大工手傳等と中す者は隙あらば怠けむとし、朝は遲く來、冬ならば焚火などして

賤しげなる話爲合ひたり。夏は日永ければ晝の飯濟して後役の樣にして晝寢するなど心なき事の限也。さる懈怠の心よりするにはあらねど、心無き傭女は吩咐けにし事は忘れ果て、時々は忠義顔して鐵瓶の蓋鹽にて磨き、あるは苔蒸したる手水鉢を汚なげなりとて、無殘にも洗落しなどするよ。

○

西洋の事とし言へば何とはなしに、思ひ崇むるも怪しき癖とや言ふべき。舶來と言へば直に優れたる品也と思ひ、よろしき物を上等舶來と呼びたるは心得ず。學校等にても英語教へ給ふ君は、漢文等教へます君よりは必ず上席にて、知り人訪ぬる折にても金文字厳しき洋書見れば何となく尊敬の念増す。また彼の君は佛蘭西語にて堪能なりなどきかば、げに雲の上の人の樣に思ひ羨むよ。

都の街歩くに、彼の國人來るべしとも見えぬ汚げなる乳店にミルクホールと外國文字にて記したる。あるは九尺二間の店に理髪師と横文字にしたるはたはけたり。

斯く何事をも見眞似るは宜しき事乍ら、彼の國の人より見ば誠に笑止なる事々も多からむと朝鮮あたりの女の日本服着たる姿を此方にて打笑ふ事も思合されて可笑し。

奇怪なる風俗としては

洋服着て下駄穿きたる人の多き。男も着るなるまんと〻言ふもの釣鐘の樣にして女も着て見たる。女學生の靴家鴨の樣にしてはきたる。雜誌に洋文字混へて書きたるが多き、あるは縦にし、あるは横にして讀み煩ふ。

況して和歌等に羅馬字嵌めたるがあり。か〻る歌は敷島の道とは名くべくもあらねば、羅馬字の道とこそ呼ぶべけれ。

手紙書くにても初は「懷しき何々の君」と認め後は「可祝」と結びたる。

さる子供の公の御厠所の前なる札にW、C、としたるを「うえるかむ」と讀みたるこそ笑止なりしが。

○

世に友に持つまじき人三あり。一には賤しきより身を起して身分よくなりたる人。二には年老いたる人。三には病なく身强き人。

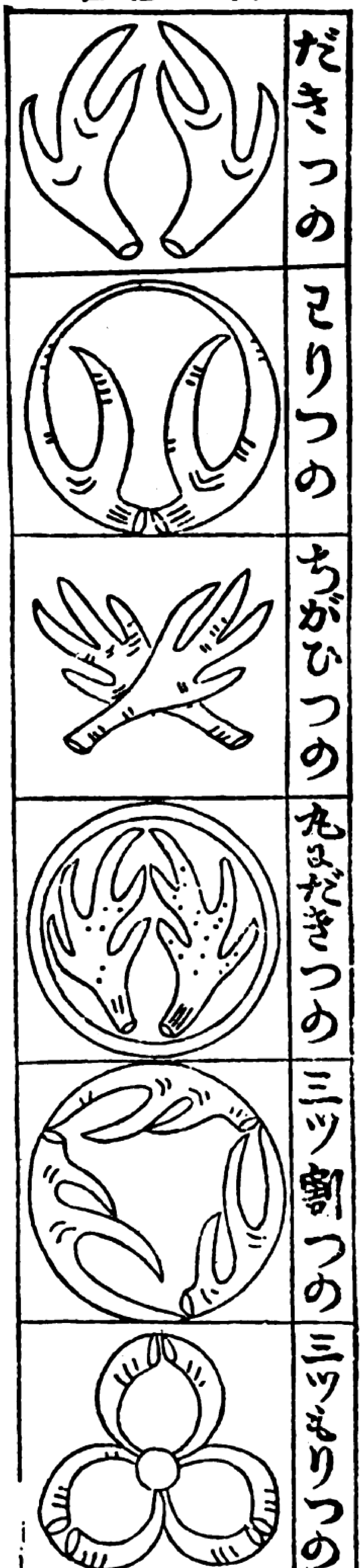
賤しきより身を起したる人は、己を誇る念强く、思ひ遣なく、昔の友の今も賤しくてあるに我身を引較べて己は天へも昇りたらむ樣覺え「己は彼の時に斯くしたり。」等功を誇り、さる雜誌に「己の無一文より立身したる經驗」など〻書きたるよ。

年老いたる人は萬事に慾深くて惡く、中には人の世話するを樂をすること見ゆる人もあれど、偶其人の言ふが儘にせざりし事の敗れしを見て「さればなり、我身がしか言ひしに從はざれば」と言ふ也。

病なく身强き人も友とすべからず、物事に心强く、思ひ遣りなきが多く、友の病むを見て「いたく苦しきや」など言ひ慰むるはよけれど、其口の乾ぬ間に「幸にも我身は藥と言ふ物飮みし事なし。病氣とは誠に辛き物にや」と言ひ、あるは梅の花美しう咲きたりとて他し方見居たるよ。

善き友三あり。己が辛き事、悲しき事は口に出さず心の中には泣く折も外には笑顏したる人。己が才學を忘れたる如くなる人。手跡よき人。

角の意匠





若き悲哀

みさご鳥

△

私も遂に十八の春を迎へて了ひました。

あと二年經てば最早十代とは永遠に別離と思ふと、有繫に波残り惜しまれて、若かりし花の時代がなつかしうございますわ。ホヽ未だ肩上げも取らぬ處女の身で……と御笑ひ遊すかも知れませんけれど私ね、あの光榮ある人世の春、再び會ひがたき人世の春なんで、こんな事云はれます毎いつも熱い〳〵涙が湧き出ます。儚い未來の希望を胸に抱いて暮す内が、やつぱり幸なのでございますはネ。美しい夢からさめて現實の國に入り、あこがれぬいてゐた青春時代を馬鹿らしいと氣づく頃は、もうわが世の春は過ぎてゐるのでございますもの。光榮ある人世の春も全く儚い、短いタイムにすぎませんわ。

先達ね千代樣の「夢よりさめた女」をよみましたらもう〳〵やたらに悲しい氣がして了つて、熱い涙をあのページへ落しましたのヨ。お互に華やかな花の時代を……捨てたくはございませんわ。

あゝけれど、年毎に春は逝きますのねエ。

此の間も兄樣つかまへて

「ねー兄樣私だつてもうすぐ二十になつて了ひますのヨ。ですからあと二年だけ空想の世界に置いて下さいねエ」

と申ますたら、初老にでもなつたんぢやあるまいしいやになさけない事云ふなおつて笑つてゐらつしやいましたが、私考へてみると本當に悲しい……心細い。

花散るあした、落葉こぼるゝ秋の夕べ、儚い人世を想ふては人知れず泣く事があります。

え？藤村さんの二代目ですつて!? あらどなたそんな事おつしやるのは……でも先達ね一高の三好さんに華嚴病つて云はれましたのよ。

ホヽヽまさかねエ!?

けれど私、今年は何故か不安なんです。

「女十八死と手を握ろ」

といつか私にさゝやいた久子さんは、三九の秋、病める肺を抱いて、三浦三崎のあの寂しい濱で逝きました。城が島のあたり、薄紫の雲が美しく浮んでゐる夕ぐれに……。

私それを思ふと悄なくて、花の時代を捨てて逝つた久子さんを偲ぶた

び、吾の胸に涙が出ます。十八と云へば、男ならこれからが活動すべき時機なのに……あゝなぜ女になんて生れたのでせう。法科の兄様だつて、一高の兄様だつて、今艦に乗つてゐらつしやる兄様だつて、みんな、みんな、美しい希望を持つてゐらつしやるでせうに……それは私にだつて望はある。けれど、到底成しとげられぬ事なんですもの 全く女はつまりませんはね……。

ですから私、空想も悲觀も好い加減にして、もうこれからは 樂天家にならふと思ひます。悲しい事もありますし、つらい事だつてありますけれど、私は最早何もかまはず、笑つて、而て樂しつゝわが世の春をすごしたいのです。

「樂しからずや胸の、光りの如きわが命、うれしからずや喜びの、雲雀の如き衣の胸、消えて儚き浮世も、我には深きさとしあり」

△

昨年十二月號の本誌に夜長のつれづれをお出し遊した方れ、一體誰だとおぼしめして？ 實の所私もつい先日まで存じませんでしたの。それだものですから、みなつくしの君のあれよんであんまりなと思つたものですから、一月のへ反對說（？）出しましたの。あとで伺つたら操さんですて！「御親友どほし筆の上で爭ふなんて仰々楽敵れ」つて千枝さんにも笑はれましたが、全く知らなかつたんですわ。

そしたら此の間御手紙が來たんでせう。なかしさこらへて封きつたら案の如く夜長のつれづれの御白狀！ 私も笑つて了ひましてよまあその御手紙がらなのでございますの。一寸おきゝ遊せな……

先日は早速お手紙頂きましてありがたう。寒に入りましてから一入お寒さがきびしいようぢやございませんか。

此の頃の夜の月は如何でございます？ 銀杏の梢にかゝつた時など、まるで月の中から霧でも吹き出すやうに、茫つとして美しうございますのね。凄いやうな美しさ！ 何となく恐ろしくなつて參ります。

そんな晩あなたは何を遊してゐらしつて？ 私今年になつて一番面白いと思つたのはたつた一度、それは十四日の晩でした。目白の不動樣の少し手前、あの崖つき窓を矢來から見渡しても却々詩的な景色ですはれ、あのそばの〇〇先生のお宅でその晩 新年 會がありましたの。御室に瓦斯をあかあかとつけて、やつぱり外は凄い月夜でした。

九時すぎ歸りますときに、あの坂を下りてまゐりますと、何とも云はれぬ崇高な感に打たれて、久世山が夢のやうにかすんで居りました。
忘れられぬ樂しい晩!! いつまでも記憶として殘るでせう。

幸樣!!! あなたはひどい。
私は多分あなたと、否あなたに違ひないとにらめましたから伺つたのにかくしてゐらつしやるのですもの……。
れ『夢見る花』あなたでせう。もうおかくし遊しますな、わかつて了ひました。

仰せの通り私も千代樣の文は華やかで現代の若い女性の氣質 をよく現してゐると存じます、然しあんまりはしやぎ過ぎる時はいやになりき

す。

みなつくしを誰だとおぼしめして？　ホヽヽ面白い事になりましたわ。誰だかおわかりになりましたでせう、誰にもだまつてゐらしつて頂戴よ……あなたの御胸にのみおとめになつてゝしかしれ幸様！私は決してあの通り私が思つたからわざと人の噂にして書いたのではございませんの。全く図書室のうはさをそのまゝ書きましたのよ、私はむしろ千代様がうらやましいのです。

あなたには独科のお兄様がゐらつしやるでせう

あゝなぜ私には友がないのでせう……

月の清い晩、花の美くしい春の日、語るに足るべき人のなきは淋しいものです

幸様!!!どうぞいつまでも私の唯一の友でゐらしつて頂戴！　筆の上の反抗はともあれ、心から反抗遊してはいやよ。ねどうぞ……。

今更私、噂にしろあんな事かゝなければよかつたと存じてをりますの皆から「悪いゝたづらをなさるのね」とも云はれ、又一部からは「痛快ねどしどしおやりなさい」とも云はれて、私はまんなかに立つてをります。

ほんとうににくまれ役になりまして、千代様崇拝の方達からにくまれぬいてゐるのでせうあなたもあんまりおからみ遊すことね。

全くの所私も崇拝の一人でございますからその人はともあれ、あれだけの事を持つてゐるといふ事に敬服いたします。

もう／＼こんなに御話しするのもあなただけ、私はどこまでも皆様にかくしてをります。

女子文壇御らんになりまして。私もちよい／＼いたづら致してをりますのいつか名文のゝりましたときに御知らせいたしませう

さらば健在なれ……君よ!!!

みなつくし

夢見る花の君へ

ホヽヽこれでございますもの。さすがの私も笑つて了ひましてよ。

M様と云へば、私がまだ少女世界の愛読者であつた頃に御交りしはじめた方　永遠にと契つた友の一人なのです。お目にかゝつたのはたゞ一度!!秋立つ空の雲流るゝ運動会のあの折に――。

でもね、けふこんな事申しましたの屹度だまつてゐらしつて下さいね。若しM様のお耳へでも入りましたら私ほんとうにこまりますから。

△

お天気も好し風もないので、午後から久しぶりで写真うつしに参りましたの。

は!?写真屋？いつも通り望月にいたしましたのよ、あの本郷の……。

私写真撮るの大きらひなのですされど……再びは来ぬ花十八の春姿……とホヽヽこれは一寸千代様の口真似ですがね考へて御らん遊せ、全くさうぢやございませんか。

春や昔、これでも一笑百媚の媚を誇つた處女の身でございますこと。

よ。うぬぼれてるってまあお口の悪いホーゝゝ
買って見ると丁度兄様方のお友達がゐらしつた所、私高髷見られるのがはづかしくて……でも仕方なし
「兄様。やっぱり甘黨の方ばかり？」
庭に面した方の障子あけて、小聲に伺ふと
「オー!!!」
「イヨー若奥さん!?」
皆さんしてひやかすんですもの…… 兄様が笑つてうなづかれたのを見るや大急ぎでにげ出しました。
食卓なかこんで大さわぎ。若々しい方のより合つたときは本當ににぎやかで好い!!
蠻聲あげて烈獣が猛る、追分が出る。用あつて一寸でもおざしきへ足を入れやうものなら却々出しては下からず、一郎さんは私つかまへちやつて例のコムパーヤストームのお話でもちきり…… 得意になつて話すんです。
「又十八番でもきかせやうか」
フォーク持つ手を下において、笑ひ乍ら淑さんが云ふ。
この方の十八番はれゐのそかよ節なんですの。それは／＼好い聲ー私はいつも涙ふき乍らきゝますのよ。
「あひやせなんだか館山沖で二本マストの海陽丸そかヨー」
おしまひには皆さん一緒になつて蠻聲あげて唄つて下さいました。

「風は吹くとも　元氣はつのる
　舷のり越す　浪の山そかヨー」
「月はかくるゝ　航路は亂る
たどり／＼　エトロ島そかヨー」
「月はかたぶく　潮は光る
中を分け行く　海陽丸そかヨー」
「泣いてくれるな　出船のときは
烏泣いても　氣にかゝるそかヨー
「かてはつくとも　勇氣はつのる
遠洋漁業の　いさましそかヨー」

唄ひ終るや皆さんして拍手!!
お部屋を出ると颯とつめたい風が吹いて…… 廊下をつたふてときどきお聲が洩れて來る。
「明妃去る時の涙、笑ふて枝上の花に向ふ狂風日暮におこり、漂泊して誰が家にか落つ紅顔人にまされば薄命多し……」
秀夫さんの詩吟、健一さんの尺八……
電氣のついたのに氣がついて皆さん一緒に玄關へとお立ちになるー
「失敬ッ」
長いマントに身を包んで、やがて歸り給ふ柏草の君たち!!
「然ようなら」
「失敬ッーーぢや記念祭には必らず來給へ……」

「孤館にして別る淮陰の市
月は照らす高樓一曲の歌
…………………
………………

美音そろへて、高らかに吟じ乍らお歸りになる。

前途洋々恭洋の如き若人の胸を想ひ見て…… 私は自分ながら情なくなりました。

△

今日品川へ行つた歸り、電車の中で若杉さんそつくりの方にお目にかかりましたの。

かすりのお召に縞のお袴…… 角帽の頭を一寸傾けて、ラインの方と何か語つてゐらしつたがあのお口ならお髭なら…… 本當にそつくり。

あゝ緑さんは今頃どうしてゐらつしやるかしら、お目にかゝつたのは去年十一月の末、大和路の旅へ向はるゝ折、新橋までお見送りしたそのときゝり……。御歸京間もなく又も旅にゐらつしやいました。今頃は錦子△△樣の樓上に、茫々限りない太平洋を眺め乍ら、お好きな詩集でも見入つてゐらつしやるのでせう。

旅がお好きでスケツチも却々お上手です。此の方は又大變○○の方をも御勉むで、宅へゐらつしやるたびよく「つぼるか」なんかなさいましたが、北州ならぬ若杉さんのつぼるか！これで一寸有名なんですよホヽホヽヽヽ

もう好い加減、大映師ともアデューして、花の都へお歸り遊せば好いのに――。又つぼさがゞ伺ひたい。

あゝ去年はれ、一高の記念祭にこの方につれてつていたゞきましたの[illegible]。

記念祭と云へば、だんく近づいて參りますことね。先達も「私あの日には朝早くから出かけますわ。そして一高の門のところに立つてますの」と申しましたら皆さんに笑はれましたけれど、本當に立つて居たうございますわ。

あの御なつかしい千代樣を、一目でも拜したいのでございますもの……。

水曜日？！三月一日。

私の胸は痛しいほどに高波を打つて……。

△

雲が亂れ飛んで……寂しい日！！

何となく人なつかしいやうな氣がして、スヰートソロー小聲に歌ひ乍ら手文庫かゝへて窓によつた。

水色封筒に包んだ、美しい一葉の寫眞！！

あゝそれは、私の爲めには永久に忘れ得ぬ人となつた君の面影。

狀貌魁偉にして筋骨逞しく、爛々たる眼光、堅く結べる唇、凛乎たる眉目の間にやさしき愛はあふれて……胸豐かな金鉄肩章、意氣に氣取つ

た短剣 宝!!!

ちつと見つめて居た私の瞳には、いつか熱い〳〵涙が浮んで、なつかしい記憶は又しても胸に湧く……。

想ひ起す八月十二日。

空種の流蛍乱れとんで、磯に寄る浪のひた〳〵と、蛩の囁やきにも似たる湘南小田原のあの一夜よ

仰げば大空に星燦爛として、地球創造当時の儘に輝く……大いなる獣示 深き黙示!!

嗚あの八月十二日も、やつぱりこんな寂しい宵でしたわねえ。鍵横?

二人肩をならべて渚をさまよひながら、低くロングサインを歌ひましたが…黙然として雲間の月を振り仰ぎ乍ら、独りかみしめて私は泣きました。

お好きな尺八お取り遊して、渺々たる相模灘の方に向つて吹いて下すつたのは、おゝ忘れ得ぬ曲よ。磯千鳥

嚠々として耳に入るのをうつとりとして伺つてましたら、

「浪が大きくなつて来た様だ来かないですかもう大分更けたれ……」

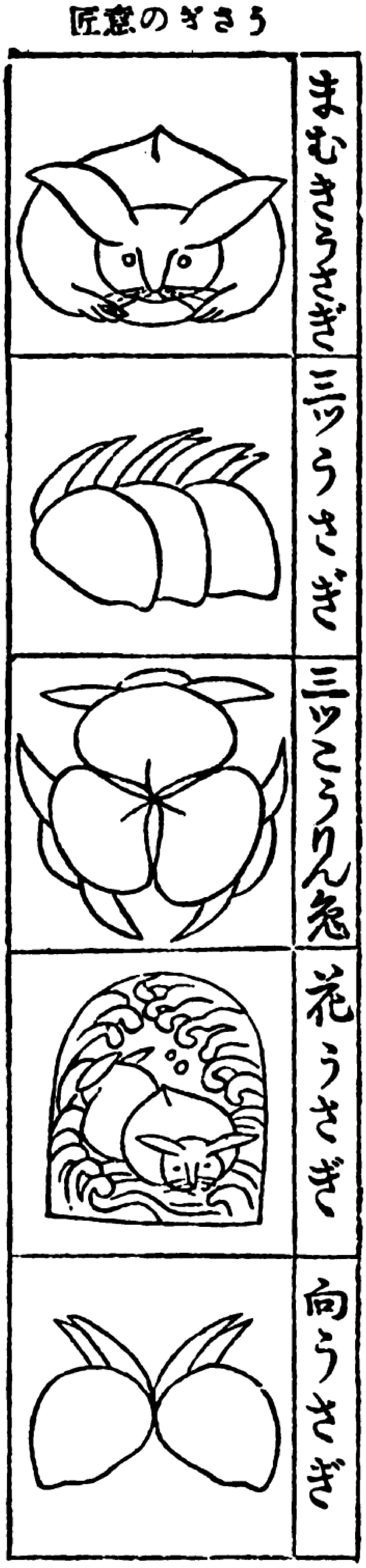
函嶺の彼方に月はかくれて、依然として寂しさは浪の音のみ……。美髯を撫してほゝ笑まれた。

あゝ今想ふても涙が出ます。あの宵。あの時?……。

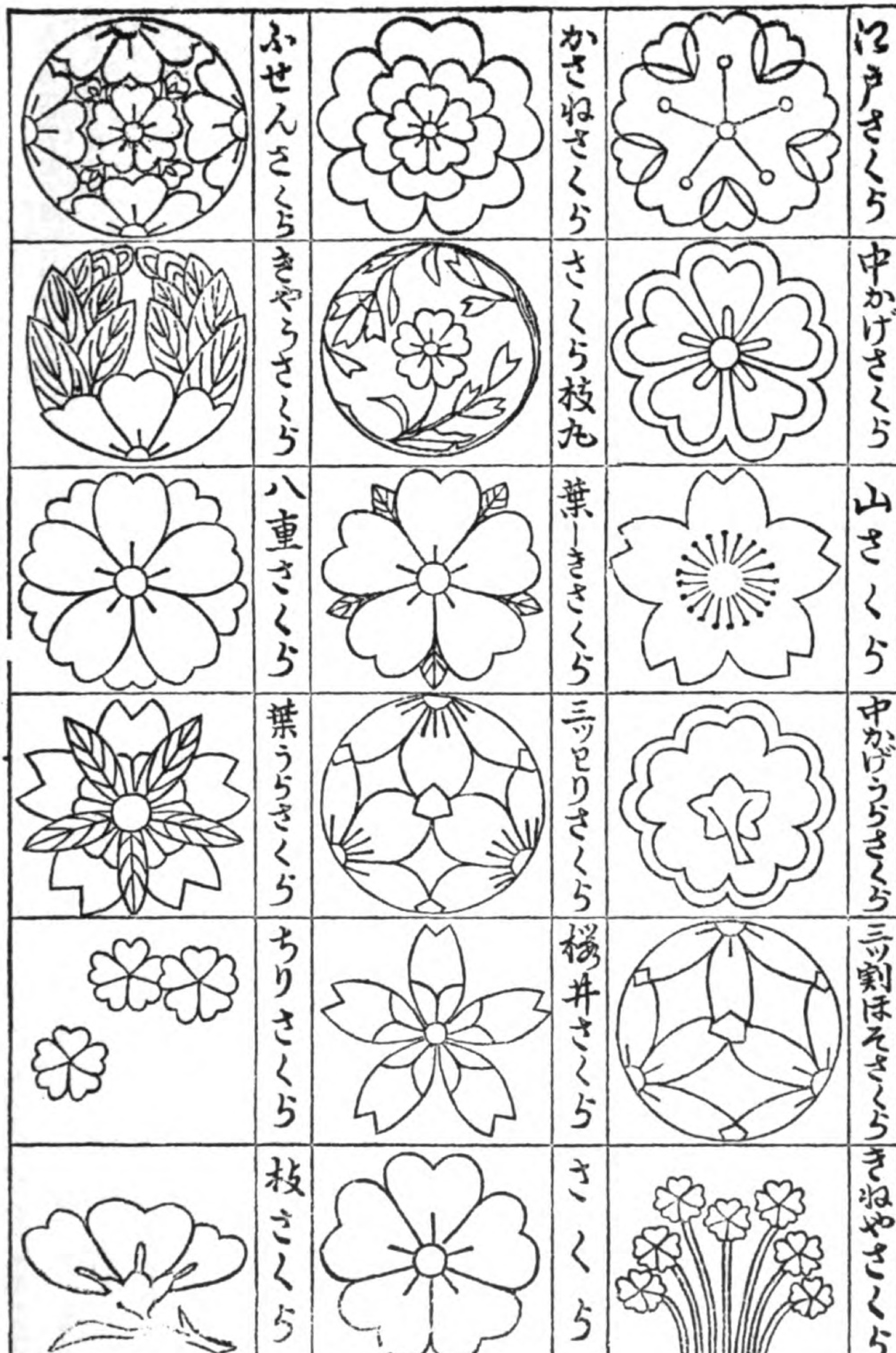
南洋まで航程正に七千海里。願くは運命の神の祝福は君の上にあれ。甲板に眺るサウザンクロッスの光、ハンモツクに聴く海食の音。男士の情を燃えしむるとす消えしむること勿れ。

さらばなつかしの人よ

到る処に 幸 あれ………!!!



櫻花の意匠


江戸さくら
かさねさくら
ふせんさくら
中かげさくら
さくら枝丸
きやらさくら
山さくら
葉しきさくら
八重さくら
中かげうらさくら
三ツとりさくら
葉うらさくら
三ツ剣ほそさくら
桜井さくら
ちりさくら
きねやさくら
さくら
枝さくら



日本印象記（三）

中村春雨

△半文明の高等批評

三四日の後、銀座の旅館から、龜戸の友人の宅へ引越して行つた、夜の電車が、銀座通りから、京橋を渡つて、日本橋の本通りを走つて行くにつれ、次第に街中が暗くなる、その癖、街燈の數はナカ〳〵多いのだが、第一、アーク、ライトが點いてゐないからパッとした光が見え無い、軒々の瓦斯燈は、唯、自分の家の名前とか、商品とかを廣告する丈の手段となてゐるので、通行人の便利の爲めといふ公共心や、公德心の影がさしてゐない、イヤ、も一歩進んで、帝國の首府の夜を美しく飾るといふ、愛市心が缺けてゐる、その點から云へば、晝間に見ると、例の『仁丹』や『ゼム』の、馬鹿げた醜怪な廣告繪などは、都市の面目を滑稽化してゐて、隨分無作法なものだが、夜の闇を、イリユミネーションで花やかに色彩つてゐるのを眺めては四邊の街燈の光の、薄ボンヤリして、意氣地のない樣子をしてゐるのとコントラストして、都會美の一景物となつてゐると云ひ度くなる。

△人間を荷物扱にする東京の電車

乘つてゐた電車は隨分混雜する、一體、あの釣り革へぶら下つて、立往生をしてゐるのなどは、歐米ではあまり見られない圖だ、歐米の電車內には空間を少くして、座席を多くする工夫がしてあるとか、乘車定員を限て、車臺の數を多く運轉するとか、苟も大都會の交通機關である以上、成るべく乘客に不愉快も不便利も感ぜしめないやうになつてゐる、電車の中の人間

そ、荷物扱ひにするやうな野蠻な風習が日本に行はれてゐるのは、

此も皮相の文明を眞似てゐるとしか思はれない、歐米の電車で釣革に下るのは、主として朝夕、勤め人の往復する一定の時間内に限つてゐるので、例外の場合なのだ、日本では、例外でなくて、それが當然の事のやうに思はれてゐる。

それから車室内で、老人や、婦人、小兒などに席を讓る風習は大分行はれて來てゐるやうで、頼母しく思はれるが、元來これは強い者が弱い者を扶けるといふ、義俠心から起つた事であるから、席を讓つた人に對して、

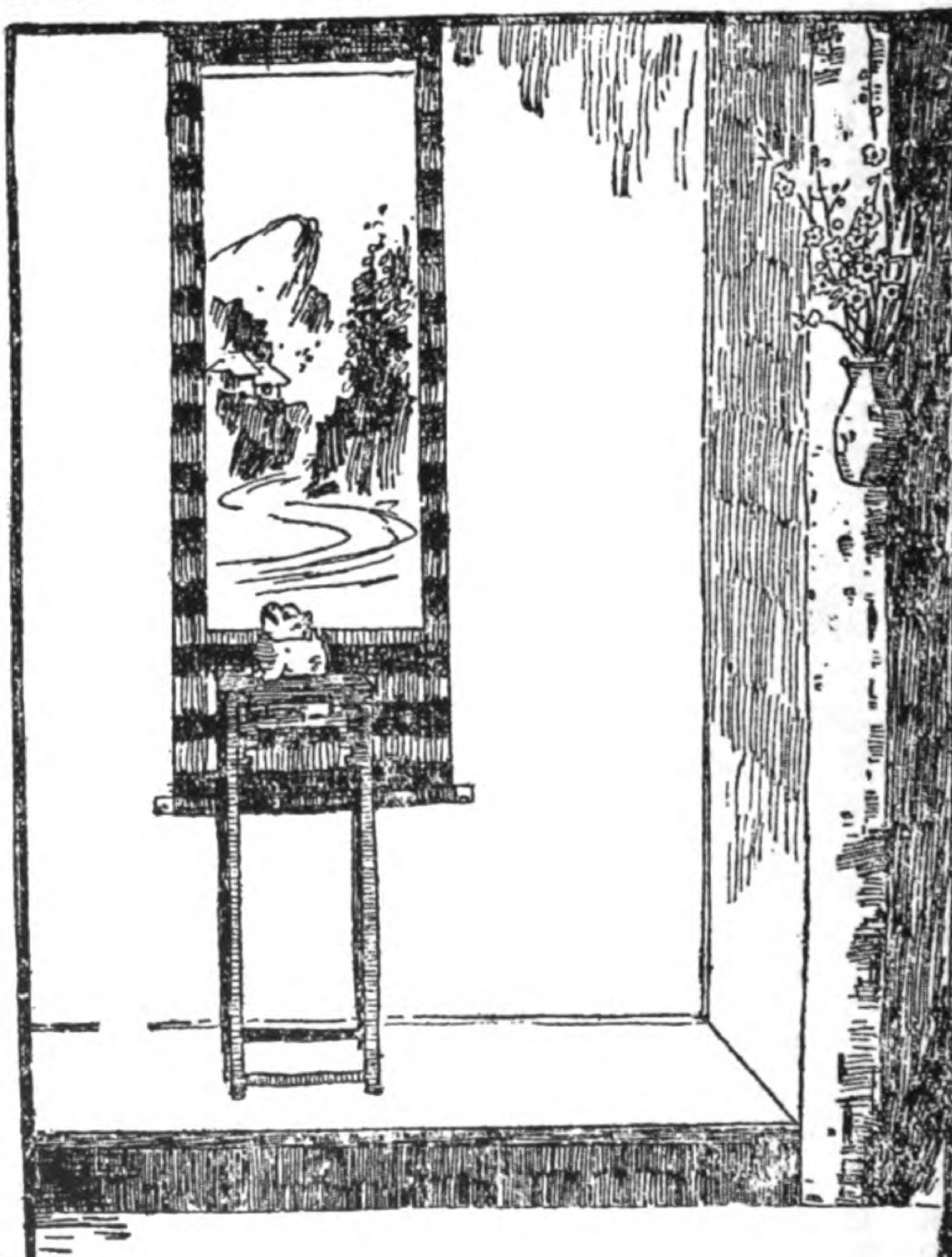
讓られた人は丁寧に謝辭を述べるのが當然である、優しい日本の婦人達には、この心掛を忘れる人はないやうだが、米國の婦人達などが、近頃大分橫着になつて、席を讓つてくれる男子等に對して、當然な尊敬を受けてゐるやうに振舞ひ「難有う」も何んにも云はなくなつたので、男子の方でも「何アに、生意氣だ」と、癪に思つて、この席を讓るといふ事が、次第に少くなつたといふ傾向があるらしい、無論、謝辭を述べないからと云つて、怒る方もよくないか知らぬが、人間は矢張感情の動物である、感情の最もよく發達してゐる婦人達は、今後も常にその貴い油を灑ぎかけて、社會的のいろんな活動を滑らかに、運ばせて行くといふ心掛を如何なる方面にも疎かにしてはなるまいと思ふ。

今一つ、日本の電車の、鐵線を空中に張り渡してゐるのは歐米では舊式として、大都會などでは見られないものである、苟も市街地の電車は、皆地下に電流を通はせてある、隨つて斷線から起る停電などは、メッタに起りやうがない、「電信の線、蜘蛛の網の如く」などゝ、云つて、東京市の繁榮を誇つてゐるのは、日本の物質文明の、西洋に比して、遙かに時代遅れであるといふ事を知らない者の言である。

△市中の慰藉にならぬ兩國橋

電車はやがて兩國橋を渡つて行つた、この橋の、鳥

籠でも見るやうに、鐵柱で側面を張り、天井を組んでゐるのが、又目障りだ。某工學博士があれは、鐵道の橋渠式だと、罵倒してゐたのを嘗つて聞いた事があるが、苟も巴里、ロンドン、伯林などの、文明國の首府の市中を流るゝ河の上に、こんな不恰好な、非美術的といふよりか、寧ろ器械的な橋渠をかけたものは一つも無い、一體人家の込み合つた、烟や塵埃の充ちた大都會に住む者が、ポッとした安らかな呼吸を吐く場處は、公園か、若くは市中を流るゝ大河の上に架した橋梁の上に來かゝつた時である、河岸には白い壁や高い塔が聳えて、遙かに黒い森の影も、くづれた雲の色も浮んでゐる、流の上には、帆船も走り、ボートも漕がれ蒸汽船も走つてゐる、大都會の側面圖が油繪か、水彩畫風に、ノンビリとして、美しく目に映じて來る眺望臺は、橋梁の上である、セーヌ河畔の橋梁や、テームス河畔の橋梁に來かゝると、大俗な都會を外向へ突き放して、美しく客觀する事が出來る、然るに隅田川の鐵道式の殺風



景至極な橋梁の上では、空の景色も、河畔の眺望も、縦横に寸断されて、何等纏まつた、畫面のやうな印象は得られない、舊式の永代橋や、兩國橋は江戸名所の錦繪の中に、シツクリ嵌つてゐるが、今の鐵橋では中學生の用器畫の手本にはなるかも知らぬが、水彩畫や、油繪の材料にはなりさうもない、よし成つた處が石版刷の田舎向の仕入畫位に掛けるのでは情ない、江戸文明の謳歌者が出たりするのも、成る程、この橋梁丈を見たら、御尤だと云ひ度くなる、併し歸朝後、始めて橋を通つた時には、夜の事だから、唯トンネルを通過した位に思つた。

△脚を虐待されつゝある日本の婦人

かくて、市街外づれの、愈低い屋根の不規則に連つた中を通つて龜戸の友人の宅に着いて、胡坐をかいて、牛鍋をつゝいた。

あの、日本式の膝頭を正しく折つて、正坐まるのは、當分甚だ窮屈で、人間の脚を虐待するのだといふ感がしてならなかつた、あれでは人間の身體の上半部の重量を、二本の脚丈で支へねばならぬのだから、血液の循環が惡くなる、時によると痲痺が切れるなどいふ現象が起つて來る、日本人は幼時からの長い習慣だから、自分にも氣附かずにゐるが、西洋で洋服を着て歩いてゐると、膝の曲つてゐるのが直ぐ西洋人の目に附いて、後方から見ても、日本人だといふ事が知れると云つてゐる。

男子の方は、時に胡坐をかくといふ事があるから、まだ善いが、婦人等には絶對にこれが出來ない、この社會的の風習までが男子には或種の自由を認め、女子には禁止的であるといふ不平等な有樣になつてゐる、これが西洋流に、皆椅子を用ゐる事となれば、かゝる不都合は無くなつて了ふのである、尤も一般が疊を捨てゝ、腰掛制度にするといふやうな、事は、容易に行へさうにもないが、少くとも男女混合の、宴會とか、集會とかいふ、社交的の場處には、成る可く椅子を用

ゐるのが宜しきを得てゐる事と思ふ、又次第に、然ういふ風になつて行きつゝあるものと覺える、女子の方にしても、明治の新教育を受けて、卓、腰掛に慣らされて來た者は、その方を歡迎する理由があると信ずる。

△珍無類の牛肉鍋

それから又、牛鍋といふ御馳走は、世界一品で、日本人が發明したものである。「肉を煮ながら食べる」といふやうな考へは西洋人には毛頭ない、皆、庖厨で料理した上で、始めて食卓に上るのを大人しく食べて行くのが西洋流である、寄集つて、焚火をして肉を燒いたり、鍋を掛けて、肉を煮るなどいふ事には、多少蠻風も殘つてゐやうが、そこに又自然の面白味もあるので、ビーフステキなどよりも旨く食へるあの牛鍋は、西洋文明を理想的に日本化し得たものと云へると思ふ、西洋人などの中にも、日本人から習つて、この頃はボツ〳〵牛鍋黨に加入する者もあるらしい、尤も、牛鍋を賞翫する以上は、矢張、日本の醬油の味を解せなくてはならぬ、あの色が不



封建の面影(13)備後福山城

快だとか、惡臭があるとか云つてる仲間は、隨つて牛鍋黨にはなれない。兩者が併行して、日本文明の趣味の西漸の一歩を踏み出すものと見るべきであらう。

△風俗壞亂者と富士の山

かくて暫時の假りの宿が定まると、それからは歡迎會やら、招待會やらで忙がしく日を暮らして行つた、日本の宴會の席に大抵附き物になつてゐる例の「ゲイシヤ、ガール」にも折々、出會はせた。「ゲイシヤ、ガール」といふと、日本の貴婦人社會からは白い眼で見られてゐるが、併し日本の婦人を小い、白い、優しい、美術的なものとして、歐米の社會に汎く紹介したものは、「ゲイシヤ、ガール」といふ名前で、櫻の花と日光廟と富士山と共に、日本を代表する登錄商標となつてゐるといふのが、實際の有様である、日本へ旅行する西洋人は、「ゲイシヤ、ガール」を見るといふ事を一つの樂としてゐる、西洋人が夫婦同伴で、「ゲイシヤ、ガール」を招んで、三味線の音樂を聞いて、一宵を過すといふやうな事が、時々、日本の新聞記事などに載れて居るのも、西洋人が往々、彼等を一種の純日本の音樂者として、理想化して見てゐる傾向を語るものである。

併し、「ゲイシヤ、ガール」が日本の貴婦人社會から指彈されてゐるのは、尤な理由がある、所謂、風俗の壞亂者、道徳の攪亂者の如く云はれてゐるのは無理でもない筋がある、それにも不拘、何故、彼等が次第にその數を增し、公私の宴會に無くてならぬ者のやうな一の勢力となつてゐるか、これは研究に價する一箇の眞面目な問題ではあるまいか。

△お轉婆の惡名を避ける主婦

一體、日本で、他人の家を訪問して見ると、餘ッ程懇意な間柄は兎に角、普通の知合位な中では、一家の主婦たる妻君は、メッタに顏を見せない、假令、一寸位、顏を見せる機會があつても、主人公の方で別に紹介してくれない向もある、妻君の方でも兎角引込思

案で、あまり口など利かないで、引下る方を禮儀だ位に心得てゐるらしい、假令、又懇意な間柄で主人夫婦と客と食卓を圍むといふ場合にも、妻君の方は兎角、話題が少い、世間が狹い、時事問題などは婦人の喙を出さないのが、或は善い事かも知れぬが、文學とか、美術とか、演藝とか、婦人の趣味の勢力範圍たる方面にかけても、あまり是ぞと、云つて話相手になつてくれない、それに度々中坐して、酒食を運んだりなんか下女の代役をも立働くといふ場合が多くて、交際といふ方面の訓練を受けてゐないやうに思はれる。

隨つて、公開の宴會の席などへ、夫婦連れで出席して來たといふ場合など、婦人同士は殊に席の讓り合ひなどに許り氣を採んでゐて、話があまり端まない、控へ目勝にしてゐないと『お喋舌』とか『お轉婆』とかいふ惡名を受けるだらうといふ心配、遠慮許りが先に立つて、兎角席が白け勝になる、假令又、舌に油が乘り出しても話題が乏しく、趣味が淺い、男子とは太刀打が出來ない、斯うして至極、殺風景に了る恐れがあ

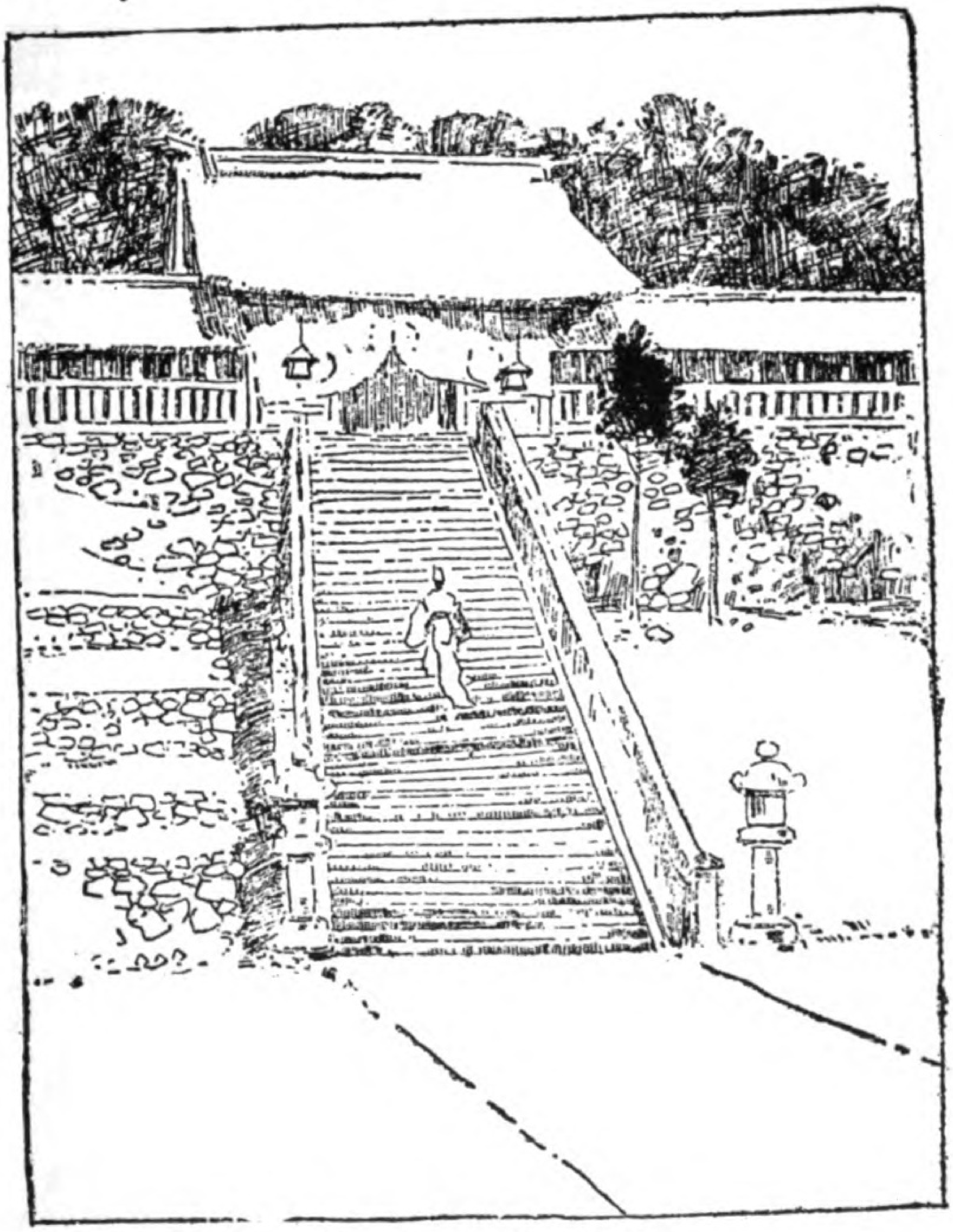
庭の眺め



りはしないかと思ふ。

△女王の權威ある西洋の妻君

處が洋の家庭に行つて見ると、これが宛で反對である、苟も主婦たる者は一家庭の女王である、訪問者は先づ、その女王陛下に握手して後、始めて主人公と握手する、食卓に就くとなると、女王が先づ正坐を占めて後、客は下手の席へ就く、主人公は女王とさし向ひで卓の一端の下坐を取る、いろんな御馳走は、最初に女王の前へ献げられる、女王は客の數を見計つて肉を截り、魚を分け、自分が先づその一片を取る。かくて次々に御鉢が廻はつて行くのである。



長崎諏訪神社

これは普通の下宿屋でも、同じ事で、下宿屋のお主婦さんが正坐の席に着いて、客は下手へ居流れる、そして食事が濟んで、いろんな雜談が出る場合になつても、主婦が席を離れない間は、「御免なさ



封建の面影（14）丸岡城

い」と云つて、客は始めて中坐するのである嘗て獨逸滯在中、食後の雜談に、日本では、一家の妻君が下手、主人公が正坐に着くのだと云つて聞かせると、婦人連は眼をパチクリさせて『それぢやあ日本なんかへは決して行かない』と異口同音に云ひ出した事がある。

社交的の夜會とか、宴席とかいふ際にも、客は玄關口に出迎へてゐる妻君から先きに、次に主人公へ挨拶する、日本から洋行したての人が、大使館の夜會に招かれて、大使の方へ先に挨拶した爲めに、大使夫人に睨み付けられたといふやうな滑稽談も珍らしくない、坐席の配り方も、顏の新らしい男女を組み合はせて、談話を交換せしむるやうになつて居り、又社交慣れた婦人と云つたら、オペラ、演劇、音樂、文藝、美術、あらゆる方面に渉つて一通り見聞してゐるから話題も豐富で、

辯も爽かに滑る、手眞似をしたり、眼顏に表情を見せたり、ワツと笑つたり、噪いだり、唯一場の雜談が、花やかに生命のあるものとなつて、一座に春を生ずる

といふ趣がある、それのみならず、夜會の終局は、例の舞踏會である、燦爛たる色衣を裾長に曳いた花の如き美人等が、白襟に、黒燕尾服の紳士連の腕に凭つて、翩飜として胡蝶の群の如く、オケストラのハーモーを刻んで舞うて行く、かくて夜の白むまで興は盡きないのである。

△高等下女思想の弊害

斯の如く西洋の婦人は公私の交際にかけて一面、女王の權威を持ち、若くは持たせられてゐると同時に、他面に交際術の駆引に熟練して、日本の『ゲイシヤ、ガール』乃至は女俳優的の技倆までも備へてゐる、西洋の宴會には『ゲイシヤ、ガール』なんかの必要のない程趣味が充ち溢れてゐるが、日本の宴會には、何んだか物足らぬ處がある、趣味の十分でない空虚の部分がある、これが『ゲイシヤ、ガール』をして跋扈せしむるに至つた一原因ではあるまいか。

少くとも古來の習慣として、猶一層、その頭を擡ぐるに至らしめた理由の一つではあるまいか？

自分は無論、日本の婦人等を、直に西洋婦人の如く、交際術に熟練せしめやうといふものではない、又それが一朝一夕に實行出來る譯合のものでもないし、假令、實行が出來ても、他面に害毒が生じて來る恐がある、併し、今の女子教育を受けた若い婦人等の、趣味が淡くて、智識欲の少いやうに見えるのは、將來に於ても社會の一の缺點となつて行くと思ふ、女子教育といふ事が、誤つた教育方針の結果か何うか知らぬが、兎角嫁入道具となつてゐる傾はなからうか、花嫁の資格として、學校卒業の免狀を取るといふ風になつてはゐまいか、無論、新たに一家の主婦となつた以上は家事の爲めに、幾多の時間と勞力とを費さなくてはならぬのだから、趣味とか智識欲とか云つて居られない場合もあらうが、併し女子が、『人間』としての修養の最も大切なのは、其處女時代、若くは學生時代よりも、主婦として一家の責任を兩肩に擔つた時代にある、此の時代に於て、唯引込思案の、朝から晩まで庖厨の事や、

山吹の意匠



家計の事に許り、アクセクして、趣味心も荒み、智識欲も止み、「人間」といふ自覺も忘れて舊時代通りの、名は妻君だが、その實は高等下女となり濟すやうになつては、一方、家庭的、他面、社會的に、暗い、濕々した空虛が出來て、一種のバチルスを培養する素因を作るものである。

兎に角、西洋人の日本婦人を見る眼は、矢張、西洋の婦人を標準にしてゐるから、自然それと何處か類似點のある「ゲイシャ、ガール」が何時も引合に出される、日本婦人の固有の德のやうになつてゐる貞節とか、義烈とかいふやうな事が、「ゲイシャ、ガール」の上に附け加へられて、演劇や、オペラの題材となつてゐるといふ有樣である、隨つて、日本人が見ると、甚しく滑稽で、不自然で、唯噴飯せしむるやうなものがあるが、伊太利の作者、リ、カ、グラコサ、兩人合作、プシニイ作曲の、オペラ「お蝶夫人」即ち、「マダム、バタ－フライ」のみは、先づ立派な出來榮えとして、歐米の評判非常に高く、第一流のオペラ俳優に依つて、紐育、巴里、倫敦、伯林、羅馬、その他、各國の首府のオペラ劇場に屢々繰返して上演され、クラシック物、即十八番物の一つとなつて常に人氣を吸收してゐる、で、次には、このオペラが、如何に日本婦人を觀察してゐるか、西洋人の眼に映じて、理想化されて日本婦人は如何なるものなるかを紹介せう。



天候と古今の名句

余語穎雄

俳句は自然の現象を有の儘に詠じたもので、決して込み入つた理窟を含むものではないが、數ある古今の名吟の中には、往々氣象學上の複雑なる原理現象を僅々十七文字の中に遺憾なく含蓄説明して居るものがある。

夕立や西に晴れたる峰の松　白麻

夕立は降雨區域の極めて狭いもので、明かに其の限界を認むる事が出來るのみならず、我國の降雨區域は凡て西より東に向つて移動するのであるから、此の一句はよく氣象の原理を説明して居る。即ち天候の良否を豫知するには、西の空に注意することが肝要なのである。

夕焼けて日和になりぬ秋の雲　子規

夕焼の黄金色をなすは晴天の兆、黒ずんで赤いのは雨の兆、黄色なのは西方の晴れた象である。

朝曇り觀月會の用意かな　子規

早朝曇天の日は、雨が降るよりも寧ろ晴れることが多いのである。

五月雨や晴るゝと思ふ朝の内　格堂

諺に「朝でつかりは當にならぬ」と云ふ、早朝より日光輝々と照るとも必ずしも晴天とは限らない。

から風や吹くほど吹て霜白し　知足

「から風」とは乾燥した風のこと。此の風が吹き止むと、氣温が益々低下して、霜は雪の如うに地面を覆ふのである。

初霜や日の出前から晴るゝ山　樂齋

曉天霜多く寒威强きは晴天の兆である。

初霜や日和のつゝく山家かな　青波

前の句と同じ意味である。凡て露や霜の出來るのは晴れた夜に多く、曇天の夜には少ない。

いふかしき星の光りや夏の雨　烏吟

降雨前には大氣中の温度が増すから、水蒸氣の爲に星の光りが散射して、妙にヒラ／＼と光つて見ゆるのである。

鹽魚も庭の雫や五月雨　太祇

夕立や厩の匂のほつとする　徐寅

降雨中は勿論、降雨前も、空氣中の濕氣が鹽分に吸收されて、昆布や乾魚等は濕ふて變な匂を放つものである。

はら雨や燕さわく塔の上　虚子

夕立や燕いそく村はつれ　可全

燕の低く飛び、群鷄塒に急ぎ、魚の水面に躍る等、禽獸蟲魚類の不安の狀あるは、大抵雨天の兆で、鳶が高く舞ひ、鷄の高處に登りて朝を告ぐるは晴天の兆である。

寢れぬはなほ肩のころ霜夜哉　一具

霜の降りさうな晩、寒さが身に沁みて肩のこるは有勝な事である。極く神經過敏な人は雨の降る前に憂欝を催し、神經痛、僂麻窒斯等を惹起す。斯かる人達は空模樣を見ないで能く天氣を豫知するものである。

東風吹くや雨のにほひの夕曇　鶴英

降雨前には多くは東風が起るもので、風向が急に東に回はるのは雨天の兆である。

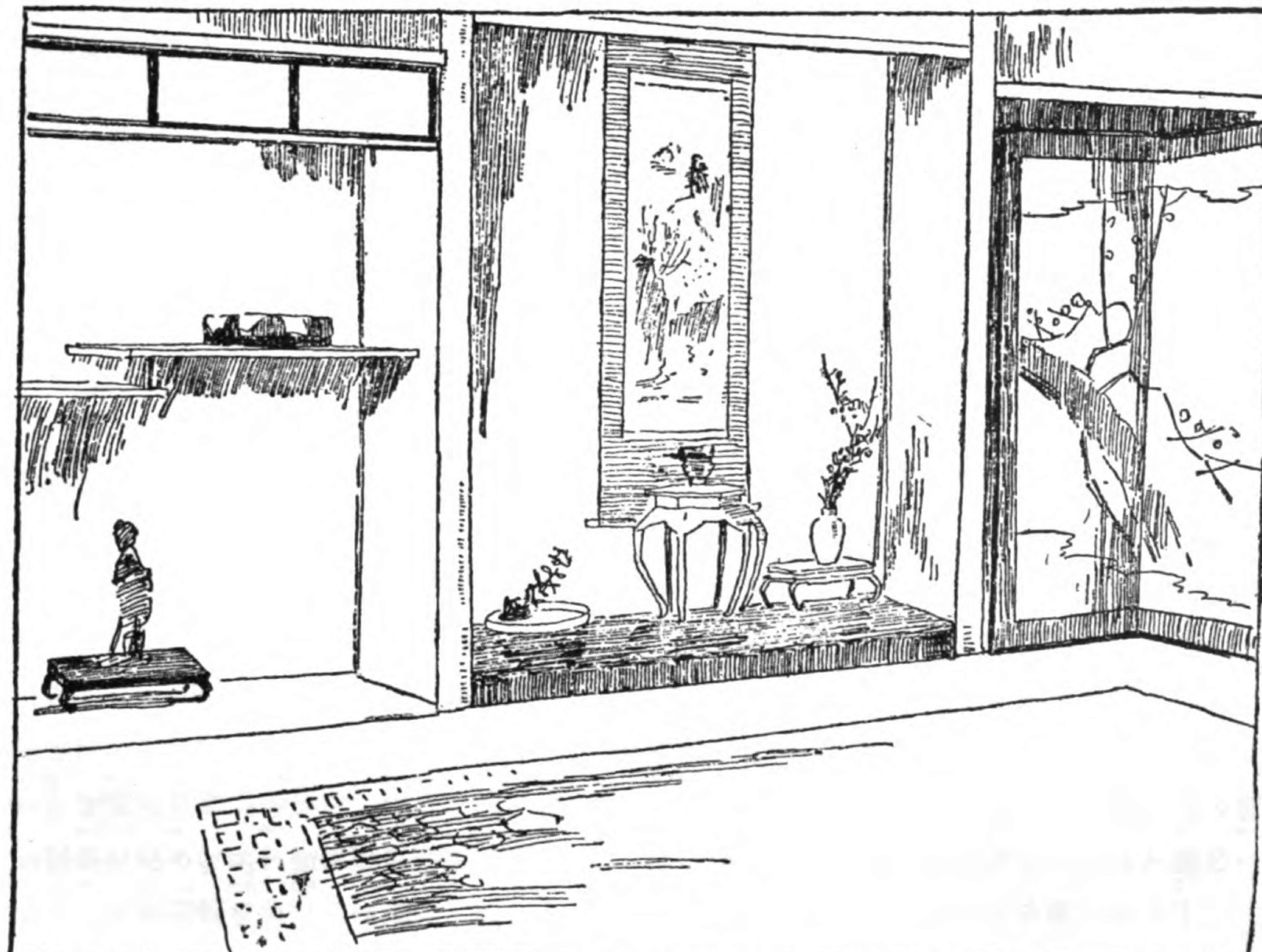
雨音や誰も來ぬ夜の暖かさ　烏吟

右の如く雨の降る前や降り始めには多くは東風が吹くが、此の風は南を迂回して暖められるから、大抵蒸暑いのである。

夕立の霽るれは寒き山路哉　武陵

降雨後は普通北或は北西の風が吹くもので、爲めに急に寒さを増す。

春の装飾



汐干狩の趣味

夕凪



ぢきにお節句が來ります、けれども未却々お寒う御座います。月の光も星のまたたきも凄い程さえて居りますもの春が來るといふ感じも致しません朧月夜に櫻の花の下のお茶會、今年もする心組ださうで御座います、お茶會と申せば先日は錦織様で大層なお席開きで御座いましたつてね、お手傳ひも大變で御座いましたでせう、祖母が御馳走になつて歸つて參りましてからね、もう羨しがつて許り、「家ぢや米倉を壞して彼處へ建てるといいが、眞一（父の名）が米倉を壞させまいて。なんて申して居ります、貴女のお手前が大變結構で御座いましたつて、お前も身に浸みてしなきやいけないつてお叱りを蒙りました、「澄様お髮は何にしてゝ」つて聞きましたら、まあ老人と申すものは、こんなでせうか「さあ、何だつたらう、さう云へばおみ帶も何だつたか覺が無い」つて、申しますのよ、冷淡ですわねえ、お正月はお島田だつたと申すぢや御座いませんかよく存じて居りますとも、田舍は一里位離れて居てもすぐ分りますわ。

お節句がもうぢきに參ります、お雛様のお顏を見るのが樂しみで仕様がありませんが、それよりまだ樂しみが今年は御座いますの、それはね少し時外れですけれど、お節句にかるた會のやうな事を致したいと存じて居ますの、變な時にと思召でせうけれど、それが珍らしい事が動機で御座いますのよ、あのね祖母の發言でする事になりましたと、許りでは譯がお分りになりませんでせうけれど、私も初め祖母が「さあちやんや私もう一度かるた合戰がしてみたいと思ふのぢやが」

と申し出した時には目を丸く致しました、よく聞きますとね藤井様に古今集の二百枚かるたが御座いましてそれが祖母の師匠様のお筆なのださうで、祖母が十二三の時には源平合戰に夜更しをした事もあるさうですの、それを此頃ふと思出したら、一度老後の思出にとつてみたくて仕方がなくなつたのださうで年をとると子供になるものと見えますのね、ですが嘘のやうでせう、昔は餘り人に後れを取つた事はなかつたさうですが、もう四十五年もした事がありません、老武者の昔を忍ぶ戰ひ振を見るのも面白いぢや御座いませんか、半世紀も前のかるたのとり振を、是非見においで下さいませ。



去年は學校で面白う御座いましてね、今でもお得意はかけしやと、みそぎで御座いますが、私あの時分に、その札を貴女に拔かれまい〳〵とした癖がついてゐるせいか、此頃も中村先生の處でした時に、皆様があれを私のお得意にしておしまひなさいました、さう〳〵、その時でした、ランプに酷い目に合はされましたのは。臺ランプ置いてかる

たをするのは危う御座いますのね、私達はそんなに激しか御座いませんからよう御座いますけれど、お上手な方だつたら大變ですわ、私先生の村雨を前つからねらつてゐる、綺麗に拔くつもりで「ハイ」‥‥と勢よく手を出すと、肩が一寸ランプにふれたものですから、ガタ〳〵と少し搖れたのです、吃驚して支へた暇に「失敬ッ」と次の札を見事に拔かれて仕舞ました、ほんとに間の拔けた風でしたネ‥‥家ぢや釣ランプですから御心配なくネヽヽヽ

家のかるたは舊正月にしやうかとも申したのですけれど、それは餘り田舍臭い‥‥田舍者が田舍臭いも可笑しう御座いますが‥‥と云つてとう〳〵一ケ月延ばしましたの、こゝいらが田舍者で氣が長いのですね。

澄樣の方もさうでせうが、この邊は舊正月が多う御座いました。凧の唸りを聞くのも錢湯で朝湯が沸くのも、皆舊正月、娘さん達の春着も無論この時、新正月には荷車輓いたり、機織つたりして居た人達が、皆紋付の短い羽織着て、扇子を持つてお年頭に來ます、可笑しいのは年末の進物も、お年玉も皆お歳暮と申します、それから盆賀もおせい暮ネヽ、まつたくです、妹達は二度お正月をします。

△汐干狩

海がよく干くやうになりましたので、妹達と三人で潮干狩を致します、お魚を入れるバケツや、手籠を提げて手拭を被つて、跣足になつて干潟を漁り廻るのです、そこいらに落ちて居るほたて貝でもつて、砂を一生懸命に掻きますと、小さな貝がコロ〳〵と出て參ります、小さなのならいくらでも有りますからお雛樣のお道具のお下りの手籠なんか、ぢきに一つ杯になつて仕舞ます、人の足音に驚いて貝殻を脊負つた蟹は、プクプク泡をふいて砂の中へ逃げこみます、さうすると私達はなほ追つてやるのです、それからこん度は足先程の水溜へ入つて、干潮に殘された小魚をとらへるのです、みつちやんと百合ちやんは蔭にかくれて居るのを見つけ役で、私は捕役ですがそれは、早く上手に逃

げますので、却々つかまへられはしませんよ「そらそらそつちへ行つた、あらあつち、そら姉さんの方へ：おやつ！見えなくなつた、今のは大きなのだつたわ。あゝ惜しい事したつて二人の見つけ役はいつも見失なつては大きかつた大きかつたとて云つて居ます、そんなに大きなの許りでもないでせうにね、逃がした鯛は大きいつて申しますわネ、、、



處が私もまた苦心して隅へ追ひつめて、此度こそと少し位袖もぬらしてザブッとすくふと、どうでせう、手には矢つ張砂許り、お魚はつうつと足の隙から逃げて仕舞てゐますの、人間三人が小さなお魚を追ひまはして、お魚におもちやにされてゐるのですけれど私達はつかまへる迄が樂しみなのです、さう／＼ひげ

男の蝦すくひの舞は丁度こんな處を歌ふのですね。

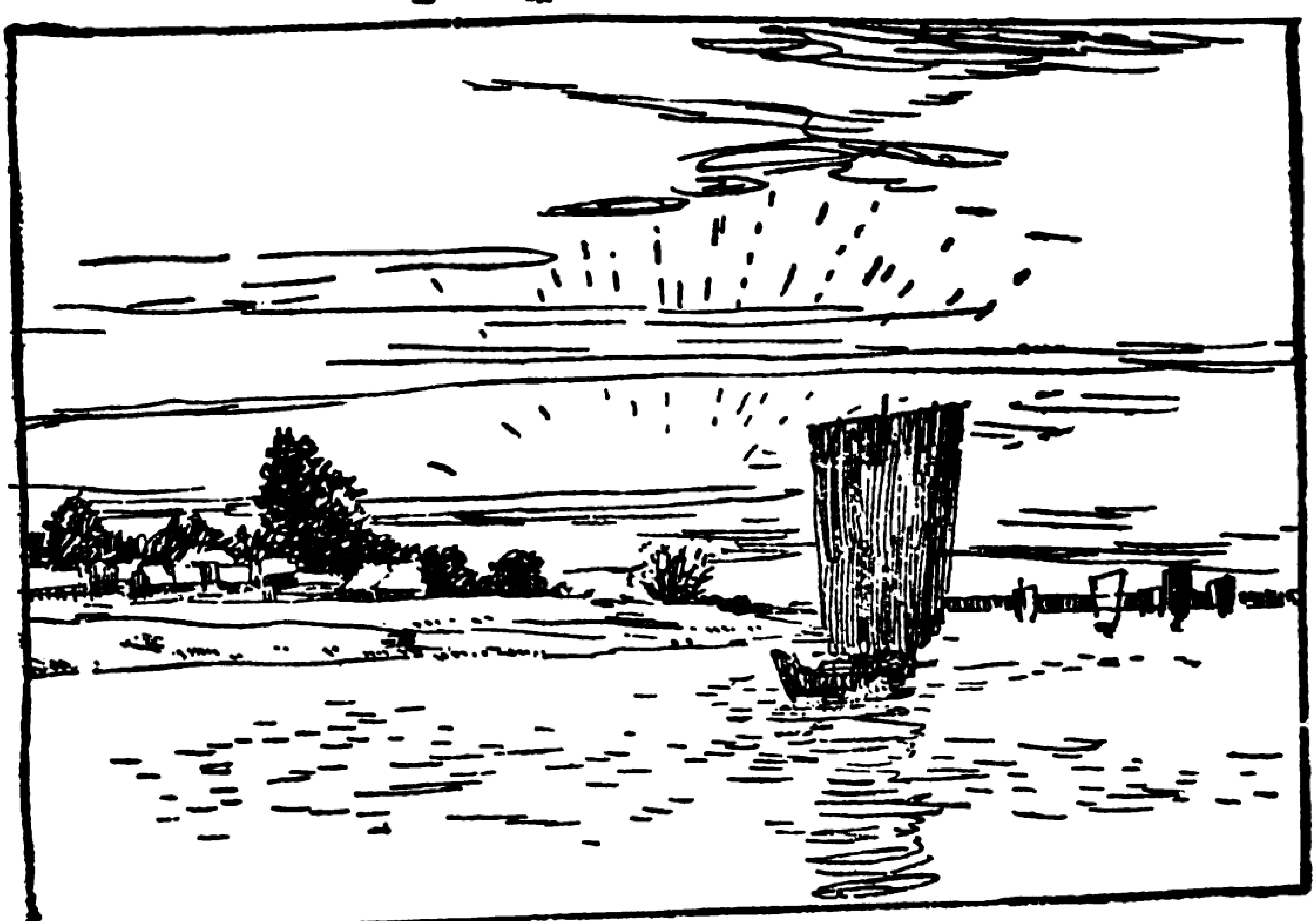
こたびこそはと大男、鵜の目程に目を睜りて、棕櫚の葉程に掌をひろげ、捉らんとすればついと逃ぐ、追へばまたぞろついと逃ぐ、くる〱追ひまはせば、

つい、つい、つい、のついと逃ぐ

ホヽヽこの通りこの通り、ほんとに〱逃げ上手です。一時間程遊んでゐる隙に、五六尾は捉へますが、可哀想ですから滿潮になると岩の上から逃がしてやりますの、嬉しさうに勢よく逃げて行くのを見ますと、何とはなしに涙がこぼれさうになります、百合ちやんが「姉さん龜ぢやないから龍宮樣からお迎ひもこないわねえ」つて…幼稚園の生徒はそれらしい事を申します。

一年中で一番よく潮の干くのはお節句で御座いますから、御一緒にお魚と鬼ごつこを致しませう、私が作つたえんどうも實がつきました、是非々々御入りをお待ち申して居ります。

羽田の暮色





京都女の半面

深山櫻

「まあひどく混雜ますのれ」うすら寒い朝風をあびながら私は秋さんと高島屋の門に立つた。今日は惠比壽切れの賣出しとて、此地では一年一度の大紋日。まだ夜の明けない中からもう一ぱいの人立。門の開くのを待ち兼てる。

京の女は着物本位だとは聞いて居たが、まさか是程とは思はなかつたお婆さんも娘も奥さんもハイカラも、女といふ女はすべての種類が集つてる。「三人よつてさへ姦しいと云はれる女が是丈けよつたのだもの實にすばらしい勢ひだ。何でも今日は先着數名には特別に袋物とかの景物があるといふので此の人氣なんださうだ。私等は離れない樣に手を握つたまゝ押されながら立つて居る。「おあげ申します」若者の聲がしたかと思ふと見る〳〵前の人達は、なだれを打つて突貫をはじめた。あんまりひどい勢だから恐ろしくなつて外へ出やうとするがもう身動きさへ出來ない。呼吸が止りさうだ。人の力で押込まれて中へ入つて、漸くホツト呼吸をしたが二人共羽織も帶もよれ〳〵になつてしまつた。

家の中は廣い所を幾つにもしきつて、絹物木綿物小切と整然と部わけがしてあつて今入つた人々は早先を爭つて思ひ〳〵に其目的物をあさつて居るが小切部が一等繁昌してる樣だ。皆は何でも安いものを買はふと夢中になつて探してる。「お母はん、これえ、柄えなあ、長じばんにええなあ、安いやないか、こんなものあらへんは、ほしいわ……そないにお急ぎいでもまだもつとえゝのがあるも知れへん、もつと行て見といではおは。そんならお母はん是見てゝや」と母親に番をさせて置いて又他を見にゆく。

こちらではあれも是もと望む物の決心しかねて見てゐる。横から他人に取られて殘念さうに、まあ厚皮しい人やおへんかと顏見合せて苦笑するのもあれば、思ひの儘に買込んで得意滿面の人もある。どちらを見ても只よい物を安く買はんとの一念ばかりと見えて、髮も姿も亂れたまゝ眼色を變ての奪取競爭。常のやさしさに引き替へて今日はまあ餓へよつても喰ひつかれさう。氣の弱い私等は呆氣に取られて手も足も出ない。

木綿部も大そう人がたかつて居る後からそつとのぞいて見ると、双子やつむぎや大島絣などが山と積んである。同じ價でも柄に却々大差がある。成程是では先きを爭ふのも最もだと思つた。此所には年增が多い

一反買ふのに、二十反程も持ち出して別席で撰んで居る人もある。町家のお神さんらしい人が大きな行李を丁稚に持たせてやつて來た。仲買人かと思つて居ると驚いた。丁稚や下婢のお仕着せを仕込に來たのだといふ。今の間に陣取てゆる〳〵探がし出したのを見て居ると、手織木綿のごつ〳〵に、紺木綿の裏地小倉の帶いくら見たつて違ひのありさうにもないものに朝から晝過ぎ迄かゝつて居る。お供の丁稚こそよい迷惑、こんな所へ來ては彼等に何の趣味もない。といつて居れむりもしかれて、つまらなさうな顔をして、つくれんとしてゐる氣の毒さ。

絹物の部へ來ると流石に少しは落つきがある。新婚らしい若い夫婦が買物をして居たが男が少ない今日は大そう目立つて可笑しかつた。綺麗な嫁さんがお召を一反持つて來て「最前此店で買ひましたが尺が足りまへんよつて取替とくれやす」と云つてたが店員は「常の日なら何時でもお替へ申しますが今日のは見切り物ですから」とけんもほろゝに斷つて居た。私等の名も知らない樣な物が澤山あるがどれもよく賣れる事。あんな容姿をしてと思てる人がづん〳〵、いゝ物を買て行くには驚いた。秋さんは「そりやれ一年中がまんして〳〵一日千秋の思ひして待ちに待つた本領發揮日なんだもの此位の事は當り前ですわ嫁入仕度でさへ此所で取揃へるのですもの」と仰有る。まあ一生一度の晴着を此んな棚ざらしで——京都の人にも似合はない、見切り物なんぞ延喜がわるいぢやありませんか」と云へば「それどころか古着を縫ひ直して新調の樣な顔してるのが仲々多いのですもの、見切ものでも新しい丈けがまだましだと仰有る。人間もそうなつちやあだめだわ、秋さんなんか國民教育のオーソリチーだから少し努力なさいよ。いゝえどうして〳〵迚も及ばない事よ病膏肓に入りだからだめよ、國民教育の大任を負ふ先生の價が服勢できまるのだから堪らないわ、あの先生は何時も同じ着物をきて居るだとか、この先生はお衣裝持だとかと親が云つて聞せるものだから——困つたものよ、一般がさうですから今日なんか京都中の女が狂氣の樣になつてるから家庭に衝突も起るし、いろんな罪惡も出て又隨分滑稽もありますよ。何しろ今日は大きな包を持つて歩くのが名譽なので、いつかも反物のかはりに塵紙を澤山買つて歸つた見えぼうがあつたとやら、ホヽホヽ隨分ねえ、聞けば聞く程沒常識なので、成程是れでは意志の弱い人達が思はぬ罪も犯すのだと思つた。あんまりで、いやになつたから、外に出やうとして又驚いた。出口には店員が數人居て「お包み申しませう」と出る人の包を一々開けて、體のよい點檢をはじめる。まるで罪人扱ひぢやありませんか、私等二人は幸か不幸か何にも買はなかつたから此侮辱を免かれたが、皆は侮辱を感じないのみか彼等の顔には小さなほこりの色が見えてゐた。



老婦人の懷舊談

三田村楓陰

△全盛時代

私は今では親もなければ子もなく、樂しみもない代りに、これといふ心配もなく、ほんの一人星で氣隨氣まゝに日を送つて居りますが、顧みれば、樣々の憂い目つらい目に出逢ひました。姉妹五人あつて、一番姉が私。次が今では孫の四人も持つて居る駒子。其の次が瀧子と申して姉妹中でも變り者。容貌は醜うございましたが、七八歳から繪筆持つことが好きで、誰に習はねど、畫が一寸書けまして、十五六の頃には裁ち縫ひのわざよりも、歌よむことが執心でございましたので、大層父に愛せられて居りました、これは二十歳の時に小玉といふお醫者さんへ嫁ぎましたが、二十四歳を一期として、一人の娘を殘して夭死致しました。

さきだちてわがわくらばの散る迹に殘る若葉をそれと見よ君

これが其の夫に殘した辭世の歌でございます。此の瀧子の次はたつ子。其の次が富子、何れも女兒のみで、男の兒は一人もありません。これが抑も私の家の運命の傾いた原因です。娘五人持てば、長者の身代でも傾くといふ位ですもの、長者ならぬ私の家が、次第に悲運に向つたのは當然でせう。併し私の父は舊藩の頃には大小姓、式部組、壯士組、番手組々頭などを經て、後には武藝場目附といふ役になり、終には羽振りの善い郡奉行を務めまして、食祿百五十石、役料百石といふのですから、手許も裕かであつたものと見えまして下女下男を召使ひ、馬丁も置き、華美な生活をして居りました。此の家屋も當時新築したもので、今こそ荒れ果てゝは居りますが、庭園茶室などにも數寄を凝らし、春の花、秋の月には賓客を請じて、賞で樂しみ、五人の娘が坐に出てゝ酒を侑め興を助けし全盛時代もありました。あの茶室の前の一幹の老松、あれは屋敷の昔から生ひ出でたものださうです。また年々歳々、

素知り顔に咲いて居るあの八重櫻、あれは父の好みで、わざ〳〵奈良から取り寄せて植ゑ付けたものださうです。

もちろん、今のやうに女學校や裁縫學校などいふものはなかつたから、私共の教育といふても、高の知れたものですが、家庭で一と通りの女藝は仕込んでもらひ、裁縫は、特に中村流といふのをみつしりと仕込んでもらひました。藝が身を助ける不仕合とはいへ、今日でも皆さんをお相手に、かうしてお針の御指南をして、のたり死にもしないのは、全く其のお蔭でござます。そして父はまた八木立禮先生の門人で、敷島の道に心を寄せて居ましたので、見やう見まねで。私と死んだ瀧子とは、時々三十一文字をならべて、父に添削してもらふこともございました。それが此の年になつて、かういふ寂しい生活をして居る身に取つて、どれほど氣保養になるか知れません。私等姉妹はこんな調子で、何の苦勞も知らず、娘盛りを、面白をかしく過しましたので、維新の後も、父は津藩の權大屬を務めて居りましたから、暮しむきに、さまでの變動もなく、明治の二年には伊勢參宮をさせてもらひ、五十鈴の川の清き流に嗽ぎ、神の御前に額づきては、遠き神代の昔を偲び、二見の浦の日の出、ふし拜みて、始めて海といふものを見た喜びは今でも忘れません。越えて明治の四年には、私と瀧子と。たつ子とが、下男召し連れての京見物、祇園、淸水、智恩院、よい傳手あつて金閣寺も拜見しました。今でこそ汽車の汽船のと便利なものがあつて、蝙蝠傘一本に、手提鞄一つで、お金さへあれば何處へでも容易に旅行は出來ますが、どうして〳〵此の時節の不自由さ、男子さへ他國へ出るは容易のことでなかつたのに、女風情の私どもが、參宮の京見物のと、まことに贅澤なことで、人々に羨まれたものです。それがまゝならぬは浮世の常で、私ども姉妹が、段々と成人するにつけて、養子の嫁入のといふ問題が、ぼつ〳〵と持ち上つて來ずには濟ます、さうなると、一人二人なら、まだしも、五人の娘の身の片付、どうして容易なことではなかつたのです。

△婿取り

粉糠三合持てば養子に行くなといふ位で、今ほどではありませんが、昔でもやはりお婿さんを貰ふのは、むづかしいものでした。唯さへ養子がむづかしいのに、私なんぞは、づらりと四人の姉妹娘が家に揃うて居るのですから、そんな所へ誰が物好きにも養子に來るものですか。大抵の男なら、恐れ入つて逃げて仕舞ます。で私の婿を迎へるには、先づ妹共から身の方を付けねばならないので、駒子、瀧子、たつ子、とみ子　それぞれ貰ふ遣ると縁談が調ひまして、次々に他家へ縁付きました。まだ家運の衰へて居らぬ時のことですから何れも箪笥長持、幾棹の荷に虚飾を張り、餘り恥かしからぬだけの、こしらへを持たせて嫁らせましたが、其の入費は容易ならぬことでした。ところが、こちらの惡いのか、向ふさんの惡いのか、だうも尻が落ち付かないで、歸つて來て遂に離縁となつたのもあれば、また歸つて來ないのは、瀧子のやうに死んでしまふとか、或は早く夫に死に別れて、止むを得ず再縁するとか、とかくに父母の心配は絶えませんでした。私は一番の姉で、其頃はもはや二十四五歳になつて居りましたから、父や母の相談相手ともなつて、少からず胸を痛めましたで何うか斯うか四人の妹の身の納まりの着いたのは、私の二十七歳の時で、もはや中婆さんでした。これからが私の婿取りといふ一段になつたのですが、私は妹どもの身の片付について、世の中はさうしたむづかしいものかと悟るにつけ、一層このまゝ獨身で押し通さうかとも考へましたが　跡目相續の男子がないから、強て之を言ひ張ることも出來ず、いよ〳〵婿を迎へることを承諾しましたけれども、さて長し短しで、さう何もかも揃つた良い婿さんの來てくれるはづはありません。第一に私が御承知の通りの御面相に、姉娘の我儘ものでせう、第二に此の時には早や私の家の身代は左まはりなつて居て、謂はゆる士族の商法、しかも墨製造といふ突飛な事を思ひ付いて、散々に失敗をした後でせう、ですから滿足な養子なんか來てく

れるものですか。とう〳〵梅花で名高い月瀬村の或る農家の二男を貰ひ受けることに定まつて、四海波靜かにめでたく三々九度の盃を濟ませました。これでも、一度はそんなこともしたのですよ。さて其の翌年一人の女兒を設け、幾千代かけて名さへ榮と付け、父母の悦も一方ではなかつたが、それはほんの一時の夢、婿と父上との間がとかく圓滑にゆかず、中にたつた私は、生れて始めてのつらい思をしましたが、どうも穩かには納まらず、とう〳〵其の翌年即ち私の二十九の歳に、婿を離別することになり、私は榮の生長を樂しみに獨身の生涯を送ることに決しました。

△便りの綱

其の榮が生きて居つてくれたら、私は何の不足もなく、泣きもせず、愚痴も申しませんが、それが十九の歳の正月に、たつた二日のわづらひで亡くなつたのです。毎日々々年頃の子の顏を見るにつけ、思ひ出すのは亡き兒の俤　親といふものは、ほんとに愚痴なものでございます。

婿を離別してから、再び婿をと父母や親族の勸めもありましたが、何だかもう婿の養子のと、聞くのも嫌な心地がする上に、再び後の夫を迎へては、何も知らぬ榮が氣の毒、こゝは覺悟の極め處と思つて、ふつつり縁談を斷りましたので、其後は絶えて話しは出ませんでした。それにしても父は此の時はや五十の坂を越え、副戸長といふを止めて後は郡書記を務めて居ましたが、もう昔しの元氣はなかつたので、心の中ではよき婿迎へてと思つて居られる事だらうさぞ心細いことであらう、こゝは女ながらも、うか〳〵と暮すべき時でないと心を勵まし、細腕ながらも針子集めて、聊かの謝禮も家計の補ひとなし、一方には便りの綱の娘を引き伸すやうな思ひで養育致しました。辛苦のかひあつて、娘は日に增し成人し愛らしくなるにつけて、さしもに淋りがちであつた我家にも、たまには笑ひ聲の起ることもありました。かくて娘が十八の春を迎へた時に父母は、早く榮によい婿取つて安心させよと急ぎま

した。同じ思の私も、一日も早く孫の顔を見たいと思ひましたが、現在私が養子で失敗してゐるから、今度こそはと大事を取つて、いろ〳〵と詮議を重ね、後ち或人の媒妁で松坂の或る醫師の次男を貰ひ受けることになり、其の年十一月八日といふ日を擇んで、祝言をさせました。

　夫婦の間も至て睦まじく、又私を初め祖父祖母にも至極やさしく孝養を盡してくれますので、一家いづれも、またなきものに思ひ、明くる年の正月に、若水汲むはさしづめ花婿の役目、



門の松飾も例年になく大いのを建てゝ久々でめでたく太箸ぞ取りまして、何となく家内に陽氣の滿つる心地がしましたが、それもほんの束の間で、一月三十一日に娘は俄の病で死んだのです。それも十分に介抱しての後ならば、また諦らめも付きませうが腦充血といふ急症の病、これは大變と慌て出した時は、もうはやだめなんでした。夢に夢見るとは全く此の事でせうよ。婿は茫然として、もはや冷くなつた娘の手を握つて居る、私は娘のなきがらを搖すぶつて、聲を

限りに呼ぶけれども、ウンともスウとも返事をしません。一家四人の者は娘の遺骸を擁して、誰れ一人起ち上らうともせず、唯もう其處に石のやうになつて坐つて居りました。

　鶯にあらぬものからこの春は啼きてのみこそ日を
　暮しけれ

これは當時の父の述懐です。明けても暮れても、噂は娘のことばかり、庭前の八重櫻が、もろくも風に散るを見るにつけても娘を思出して泣きました。けれど父母の身になつて見れば、孫が亡くなつてはたよりになさるのは、やはり我が身であるから、これはうか〳〵として居られないと思つて、それからは昔し老莱子とやらいふ人が、子供の赤べゝを着て親を慰めたといふこゝろもちで、私はぐつと若い氣になり、時には面白い事の一つも言つて父や母を慰めました。養子は居つてもらひたいのは山々だけれど、嫁のない婿さんに何時までも世話になるわけにもゆかず義理にも、私の方から離縁を言ひ出さねばならぬから、その事にはからひ、泣きの涙で別れましたが、其の後ある處へ入婿になつて、今でも時々尋ねてくれます。

△打續く不幸

一つあることは二つとやら、娘を亡くして後、母はガタリと張り合を拔かして、どう慰めても、早く榮の後を追ひたいなど口癖のやうに申して居りましたが、とう〳〵翌々年の秋の初つかた、桐の一葉と共に亡くなりました。母の前半生は多少面白い目もしましたでせうが、五人の娘を育てあげた其の苦勞は大したものでした。まして後半生には不幸がうち續いて、お仕舞には便りにした孫に先きだゝれ、それは見じめなものでした。そして父は孫に先だゝれ、また妻に先だゝれ後は親一人に娘一人の、それは〳〵寂しい暮し。私の妹どもはたまさか尋ねては來ますけれど、女といふものは他家へ嫁つて子持となれば、親に取つては何の便りにもならぬもの、まだ泣き言をいふて來ぬが、せめてもの仕合な位ですから、父は唯一人の私をたよりに

して、「お前だけは己が死んだ後に死んでくれよ」と時時申しました。かう、さかさま事が續くと、また私にまで先だゝれやうかと、それが心底氣になつたものと見えます。



此の時には父は郡書記といふ繁劇な職をやめて、菅原神社の社掌をつとめ、傍ら和歌の師匠をして居りましてその後また國幣中社敬國社の禰宜に轉じました。もちろん大した收入があるではなし、貯へとてもありませんが、父子唯二人のことですから、生計には何程も要りません。榮耀榮華も出來ぬ代りに、氣兼もなく、まことに平和な暮し一層こがれ氣樂でございました。昔し山陽先生とやらは、母を奉じて數々嵐山や芳野へ遊び、老後の情を慰められたと承ります。彼は母、是は父、彼は男子、是は女子、境遇も身分も固より違ひますが、私もせめて何なりとして老父の晩年を樂しませたいと思ひまして、乏しい中からも少しづゝお金を貯へ、或る年の春、父子うちつれて京見物に參りましたが、これは私に取つては二十八年目でございました。故郷

に待ち佗ぶる者とてない身ですからゆつくりと名所古蹟を見物し、それから大阪へ出て二日あまり逗留し、限なく所々を見物しようと道頓堀の芝居を覗き、父が好物のやぐら餡もたべさせました。が一層の事にと神戸から須磨明石まで足を伸し、數々の歌枕を得て歸りました。それから三四年して又芳野の花見と出掛け河内の道明寺にも參詣し、和歌の浦も見物してまゐりました。此の二度の旅行を父は非常に滿足致しましてもう死んでも思ひおくことがないと喜んでくれました。

父は元來强壯なたちで、お酒は少しも戴きませんでしたが、若い時には御飯は針のやうな强いのが好きで、薯蕷のとろゝ汁なら、擂鉢に一杯でも食べるといふ位でしたが、段々年と共に嗜好が變つて、さすがに晩年には、極柔らかいものより戴きませんでした。それでも好奇の心は何時までも止まず、あの敢國社へ詰めて居りましても、ふと蕎麥を食べたいと思ひ出しますと、八十の老人が一里餘りの道をわざ〳〵歸つて來て、私を驚かしたことも度々でございました。それも唯蕎麥一杯で滿足するのですから驚きます。こんな元氣の人でしたが、年には勝つことが出來ず。近頃位階を授けられたのをしほに辭職を願ひ出まして閑散な身となり、後間もなく八十四歳の高齢であの世の人となりました。

後に殘つた私はそれこそ、ほんの一人星。廣い家に住んで居るから、人さんは怖しくはないか、さびしくはないかと勞つて下さいますが、慣れて見ればさびしくもなく、お金がなければ强盗のはいる氣遣ひもなくのんきなものでございます。唯困るのは地震と雷。地震はしかたもございませんが、今日はどうも雷の鳴りさうな日と思ひますと、家を閉めておいて、飯米持參で妹共の處へ押しかけるのです。それから、思ひ切つたやうでも、まだ思ひ出すのは娘の事、親の事で、或る中秋の夜にこんなのを詠みました。

照る月に去年のこよひを思ひいでゝなきたらちねを
偲ぶかなしさ

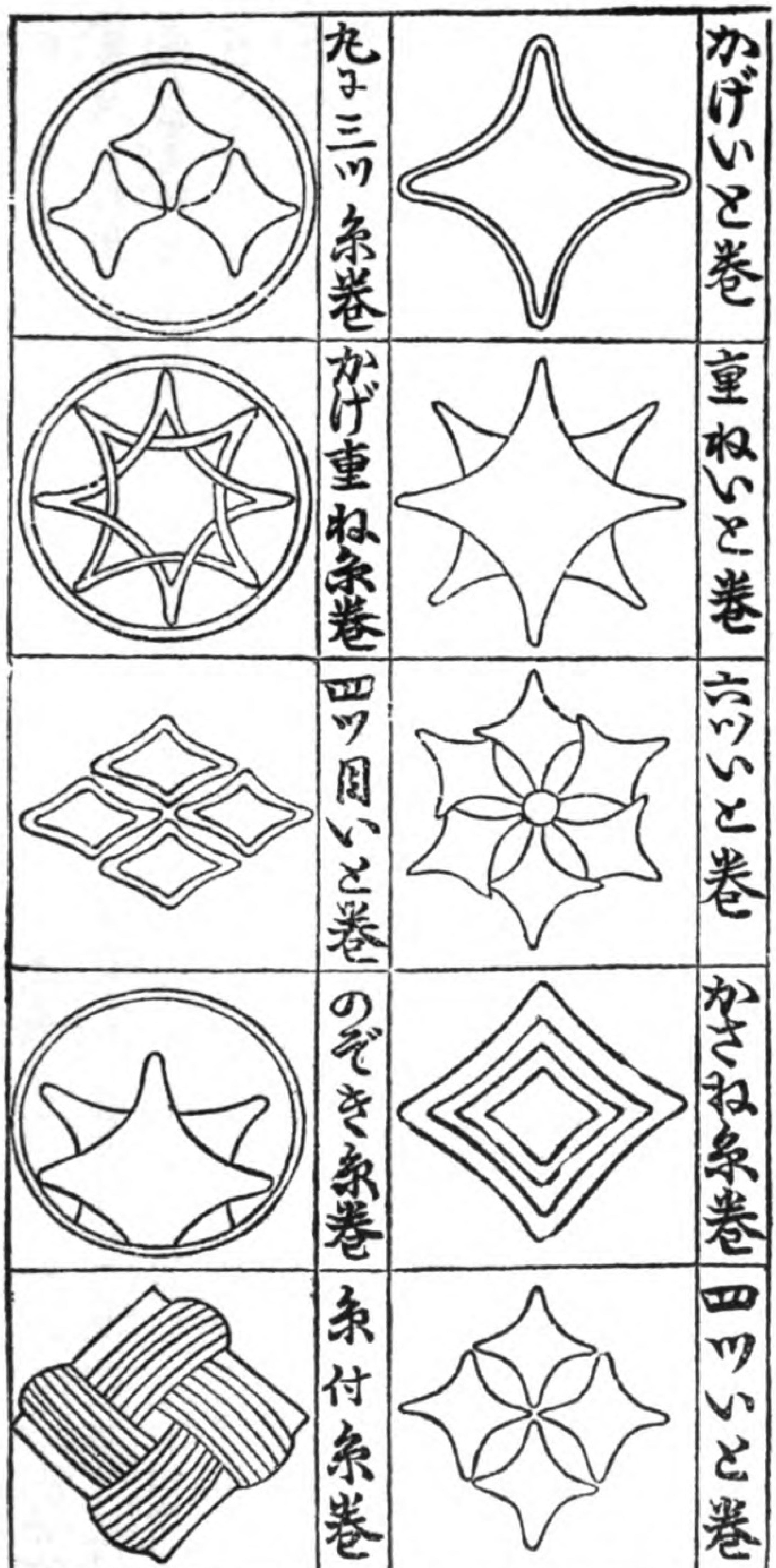
去年のこよひ共にめでにし父はいま高天原の月を見るらむ

これは歌ではありません、唯思ひのまゝを三十一文字に綴つて見たゞけです。それから昨年五月にはまた一人で和歌浦へ遊びにまゐりまして

いつ來てもかはらぬ和歌の浦景色ながめに浮ぶ父のおもかげ

景色は變らねど、父と一緒でないのが遺憾でございました。併し私も娘が死んでから十五年の間、父に仕へまして痩世帶ながらも、父に出來るだけの孝養をしまして、今では、もはや重荷をおろした心地。たゞ此の上は生きて居る間に、一つでも名所を見たいものと思つて居ります。

糸巻の意匠



春鶯囀

蒲公英

漸やく床を離れた、まだ咳が出るので、母様が暖くなつてから御起きつて仰つたのに何だか早く起き度くつて、そつと床をぬけて、化粧室に入る。尚子はいや。何時でも、髪を結つた後毛だらけにして置くから、十日も寝て居たので妙な癖が付いて居る、幾度も御湯を取り換へて撫直しする、でも何時もの様には出來なかつたが好い加減に思切つて少し許顔に白い物はいて室を出やうとすると峯が「郵便が參りました」つて薄紫の横封を持つて來た、輝さまよ嬉しいと夢中で封押し開けば――マア、御上達遊ばした事、此の頃は目に見えて御手が上る。

――まだ御悪くつて？　心配でなりませんの、學校でも淋しくつて淑様と貴様の御噂ばかりして居ますの、何本早く癒つて頂だい！　別に變つた事御座いませんけどね、英語は、あなたが御休み遊ばしてから、四頁　進みましてよ、先生の御機嫌が此頃は少々斜なのよ、是れも公様が休故と――誰が申しましたの、御怒り遊ばしちやいやー

もう／＼あのね、公様御存じでせう？　去年の卒業生の田中さん、あの方ね、近々御嫁き遊ばすのですつて、エ？　文學士とかに――あのい、い、い、すましやさんのマダム振り、如何でせうね、文學士が全く似合つてるワ。

「御姉様増刊が來ましてよ」と、けたゝましい聲に吃驚して振り反ると、尚子が二コ／＼して立つてる。

「どれ？　拜見？」て夢中で取り上げた、先づ目を落すは最初の目次眼を皿の様にして幾度か見たが――無い――無い――がつかりして口惜まぎれに、紙も切れよと許り、手荒にパラ／＼と頁を繰れば「夢よりさめた女」の七字が妙にイラ／＼した胸を突く、一通り眼を通して「つまらない」と其の値打やつて仕舞ふ、私も生れ乍らに文才が有つて欲しい來む世には内藤様は愚か名有る天下の　作者を皆集めたのより以上の文才有る人と生れて來やう。

その内お醫師様が見える、診察して頂いたらまだ二三日は藥をのまればならぬ。

「姉様私ね分らない處があるの、御教へ遊ばして頂戴な」

「何？　ピアノ」

「ストーブはよく燃えてますか長くはいけませんよ、腰掛けてると冷えるから」とやさしい母様の御注意「ハイ」と輕く答へて西洋間に入る。

〇〇の百三十頁の處繰返して二三度弾いてやる。

「久し振りで歌い度いけれどもまだ御惡いでせうね」

エゝでも私弾くから御歌いなさい」と尚子の好きな「夜の歌」を弾く、好い曲だ、靜かな、私も好き、去年の春、丁度櫻の花が散りはじめた頃私の伴奏につれて幾百の人の前で淀みなく歌つた尚子の様が目に浮ぶ。

あの時は私まで艶なゆつたりとした其の聲に魅られて手はたゞ無　意識

にキーの上をすべつてわけもなく恍惚として仕舞つたつけ我妹ながら美はしき聲よと賞めずには居られなかつた。

いま亦それにもましての麗はしい聲を私だけ聞くのは餘りに物足りないやうな氣がした、もつと彈き度かつたが母樣の御注意もあるので其のまゝに此室を出る。

×

A　文壇のクイーン萩香樣とやら此度は篤樣を自分の者にして仕舞つてね。

B　エヽ全く、一體何でせう?、篤樣が養子に來た樣に書いてあるのね千代樣の御家といふのは餘りあれなんでせう? だのに篤樣は赤門出で——實際とすれば隨分好いハスを見付けたものね。「晨夜のつれ〴〵に」と云ふのに大分暴口が出て居たのね、讀むで好い氣持だつたは。

A　私も——先日私の友達——湘南に居る——から手紙が參りました時にね千代子さんと云ふのはやつぱり女ですと。丈の高い、色の淺黑い、イーエ、そんなに御美しい方ではないんですつて、妹さんはね有るんすが矢張り先生の御花に成る程可愛くはないんですとさ。

それで千代子樣は小學校もろくに卒業して居ないんですつてよ、其れなのに不思議ね、如何してあんなむづかしい字等好く知つてるのでせうね。

B　何しても誌中の怪物よ、ホヽヽ

A　全くさうよ、其れから上原綾子樣ねあの人は一流の生活して居らつしやる樣ですがほんとでせうか、ムーンライトやベエトウベエンに憧憬して居らつしやるのね、美しい文ですヮ。

B　私は內藤さんよりよほど好き、だけど○○學校ぢや萩香さんと同じ人だつて云つてるんですと。

A　さうかも知れないのね、だけど文の種が違ふヮ綾樣の方がよほど落付いてるんですもの。

B　品評めでもする樣だけど野菊さんて好いのね、品格の高尙な方のやうね。

A　私大好きなの、あんな姉樣をほしいの、どんなにか美しい御家庭なんでせう羨しいのね。

B　貴女も御卒業後は早々に御實現でせう。

A　アラひどい、貴女こそ。

B　森隆子樣つてあの方でせう?

A　エヽさうらしいのね、それから玉露さんも好き、御子樣が澤山御有の樣ですのにまめにお書き遊ばすのね。

B　感心ですヮ、私には眞似も出來ない、生中投書したつて出なければ失望する許つまらないヮ、內藤さんなつて下手に出來ても何でも千代子さんて名さへあれば名にチヤームされて出して仕舞ふのよキヤツト。

A　さうかも知れないのね・・・貴女も大分御盛ね。

B　貴女だつて隨分いろ〳〵仰つたぢやないの。

A　御互樣ね、女は兎角暴口が云ひ度いのよ。



矛盾の多い世の中

野末庵子

△世の中には隨分無常識の人が有るものです細君が難産の手術料に、敷島煙草十個を送つて名醫を驚かした、高女教師のお話は一昨年あたりの本誌上で宮川すみ子先生から伺ひましたが、先日私が他のお家へまゐつて居りました時、近所の車夫のお内儀さんだと云ふ人が新蕎麥を拵へて持つて來ました、すると其お家の奥さんは、さつさとそれを下女にあけさせて、『マッチを一つ入れておやり』と仰つたきり、御自分で珍らしい物難有たうとお禮を仰るでもなく、お茶も出さないで臺所から歸へしておしまひなさいましたのには、驚き入りました。

そりや、親戚とかもしくは友達などで、身分の釣合つた家から何か送られた場合なら、又物品を禮に返すと云ふのは失禮か知れませんが、只今のお話などは指折の資産家と其日暮しの哀れな車夫なんですもの、困る中から工面して大家樣へ新物があげたいとて折角持つて來たものを、あれでは餘り思ひやりのない薄情ななさり方だと存じます。私、こんな貧乏人から何か貰つた折などには角別にも其志を歡受して、矢つ張り相當の物を禮にやる方が人情の自然を得て居るだらうと思ひます。

△婦人會で懇意になつた婦人が一人有ります。もうお年は三十越していらつしやるさうですが、非常な美人なのでやつと二十四五にしか見えません、此方に弟樣が有りますがお髭なんか作つていらつしやるもんですから一寸見てはお兄樣かと思はれます。で、ある時私何の氣なしに

『まあ奥樣にはあんな大きな弟樣がいらつしやるんですね、私本當に驚いてしまいましたよ。』

と申しましたら、不思議々々々、今迄面白く笑つたり語たりなすつた方が急に風むきが變つて、にがい顏して歸へつてしまはれました。まるで私は狐につままれた樣にぼかんとして、何うした事やらさつぱりわけがわからずあとで友達に話しますと、

『そりやあ、貴女があんな弟さんがおあり〻遊すなんて仰つたからでせう、女つて者は何でも若く〳〵と見せ掛けたがるもんですのに、お宅の弟さんが有るなんかと云はれゝば、餘り若く見られた譯でもありませんからねえホヽヽ、ホヽ』



と申ました、成程ね、私はまあつい氣なしでとんだ事を云つてしまつたと、悔やんで見たところでもう十日の菊、それつきり其奥樣は、婦人會などで顏を合せてもにつこりともなされなくなりました。

全く滅多な事は申されませんね。

△木枯さむう、落葉悲しい夕ぐれでした。一寸用事が

出来て〇〇町を通りました、私と並んで急ぎ足に行くのは、近所の娘さんらしい十七八のまだ肩上の深い、色白の目の美しい上品なおとなしさうな娘で御ざいました、まあなんていゝ娘さんだらうとうつとり見惚れて、何だか話でもして見たい樣に思つて居りますと、急に其女が「アッ」と小さく叫んで横に駈けて行きますから、びつくりして私も其方へ足をむけますと、まあ可哀想に、旅人らしい六十餘りのお婆さんが、石につまづいてころんで脊負てた風呂敷包がとけたので、色々なものがそこらへ飛び散らかつて困つて居るので御ざいました。

　あまりの事に道行く人は皆立ち止まつて見て居るばかり誰一人手の出してもないのに、其娘さんは親切にも汚ない婆さんを助け起して、體へついた土を落したり道に散らばつた物を拾つてやつたりして甲斐々々しく勞はるのを見て、ポカンと立つて見て居た自分がつくづく恥かしくなり、私もつい手傳つて杖なんかさがしてやりました。荷を脊負はして貰つた婆さんは其娘さんに、自分の行く道を聞きますと孫がお祖母さんに仕へるやうに手を引いて、暗い横町へ曲つて行く姿を見た時には、私何とはなしに胸がせまりました。

　這麽女がお嫁になつたら、さぞ〱年寄がたに親切で家が平和におさまるだらう、戯談にも新舊思想の衝突などゝ勝手な我儘を云つて、家庭を亂す樣な事は有るまいと存じました。

△新聞でよく、女子の堕落…盗みをするとか甚だしきは大切なる女の節操を賣とか云ふ事を、見ますが、よく其原因をたゞして見れば、皆是れ、金が欲しい、美衣が得たい贅澤をしたいと云ふに外ならぬので御座います。無理が有りませんわね、全く金に限ります。金がなければ智者も其志を達し能はず、猫でもシャクシでも金さへ有ればお旦那樣三行の論文が作れなくつても代議士になつて、自由な椅子がしめられると云ふ難有い御時世です、お嫁をとるにも持參金附となると大した景氣、四方八方から貰手引手が有餘るのに、

さあお金がない仕度もろく〳〵ないと云ふ樣なのは、たとへ本人が賢こくも優しくも、まあ、賣口の惡い方がたんとですね、え、そりや非常な美人でゝも有れば、所謂氏なくして玉の輿と云ふ、幸福？な身分になれんとも限りませぬが、併しこんなのは千人に一人か萬人に一人かわからないから一般の標準にはなりません。

見渡しますにこの金のないために、賣れ殘つた女の方がより多く前申ました樣な、新聞种の罪惡を犯すやうで御ざいます、畢竟自暴半分ですね、哀れなものでは有りませんか。今日是れを救う道として切實に女子に職業の必要を感じます。



どうしても嫁資のくるしい家に生れた女子は、何か一つの職業を得てお金を取る道をこしらへるのが一番よい、お嫁入りの方法でせう。女子師範の卒業生に羽が附いてると云ふのを聞いても世の有様が大抵知れるぢや有りませんか。

△「軍人遺族及其幼兒撫育、一般貧困者其他不時の災難

を棄られし人々を救護する資に充つる目的なんですから、何卒御同情を寄せられて、いか程なりとも御寄附が願いたいもので……」

「ハア左樣で、それは誠にお立派な結構な事で御ざいます、御同情もいたし又嬉しく感謝もいたしますが……あの是れは決して貴方をお疑ひ申すんでは有りませんが、世間にはよく慈善事業と云ふ美名のもとに、色色……」

「ハツいえ御尤もの仰せです、慈善事業を笠に着て强請的に金品をうばう惡漢の橫行する事は、私も屢々聞きます、が併し私共は決して左樣な不都合なものでは有りません、此の規則書にもある通り、ちやんと內務大臣の許可を受け、又縣知事閣下の御賛同を得て、公にやつて居ります事業なんですから決して御掛念なく、一つ御援助を願ひます。」

「イヽエ、前にも申ます通り、貴方をお疑ひするんでは有りませんけれど、今迄度々さう云ふ慈善の名をかたる惡者のために、無駄にお金を捨てましたので宅ではもうこり〱致しまして、是れからは眞僞に不拘、募集員の方にお金をお渡しする事はやめて一應本社へ問合せました上、何程なりとも直接本社へお送りいたす事にしまして、もう決して貴方をどうかう思う譯では有りませんが、私共の主義がさうなんですから、兎も角も本部へ御紹介致した上、力相當の事はしますから、まあ今日は失禮ですがお歸へりを……」

是れは先日或るお家へ上つた折、障子越しに聞いた奧樣と、救護會の寄附金募集員との問答ですが私は聞いて居りまして、何とも云へぬ恐しい感にうたれました。

此問答をハヽア奧樣めんどうだから絕はつたんだな位にきゝ流してしまへば何でも有りませんが、目を瞑つて深く考へて御覽あそばせ、奧樣が仰つたわづかのお言葉のうちに、不德義極まる現今社會の一端がよく窺はれるではありませんか。

蝿頭笑話

靈女

此間壽美子さんを訪ねました時、こんなことといつて笑はされました。

「昨日ね弟の着物を縫ひかけて居ました、そしたら其着物は今晩入るから早く縫へ、といふのでせうそりやあまり無理だわ、などいひながら、大急ぎで縫うて兩袖ともつけたぢやありませぬか、そしてねよく〳〵見ますと、右の袖と左の袖とがあべこべなのよ。せく事はおそいとか、ほんとに大失敗でしたわ。

それから先達てね、一廉ハイカラ風を吹かせた積りで林檎のジャムをこしらへたぢやありませんか。

そりや、なか〳〵ご大層なことでしたよ。本箱の中から、筆記帳を探し出すやら、衡を出して砂糖を量るやら、まあ〳〵大騒ぎで、やつと出來上りました。處がね、驚く勿れですよ、あなた、ビショ〳〵よ、後で先生に伺ひましたら、「裏漉しにしてゼリーをとり。」といふことを筆記するのを忘れて居たのでしたわ。先生に笑はれて眞赤な顏、垂れた首さへ上がり兼ねましたの。」

罪のないお話ぢやありませぬか、壽美子さんが人にお好れなさるのもこんな所があるからですよ。

此間の日曜日に先生をお訪ねしました、四方山のお話がありまして、何れも感心致しましたが、中でも雜話として最も適當な材料だと存じましたのは、鳩翁道話の中にあるお話でした。

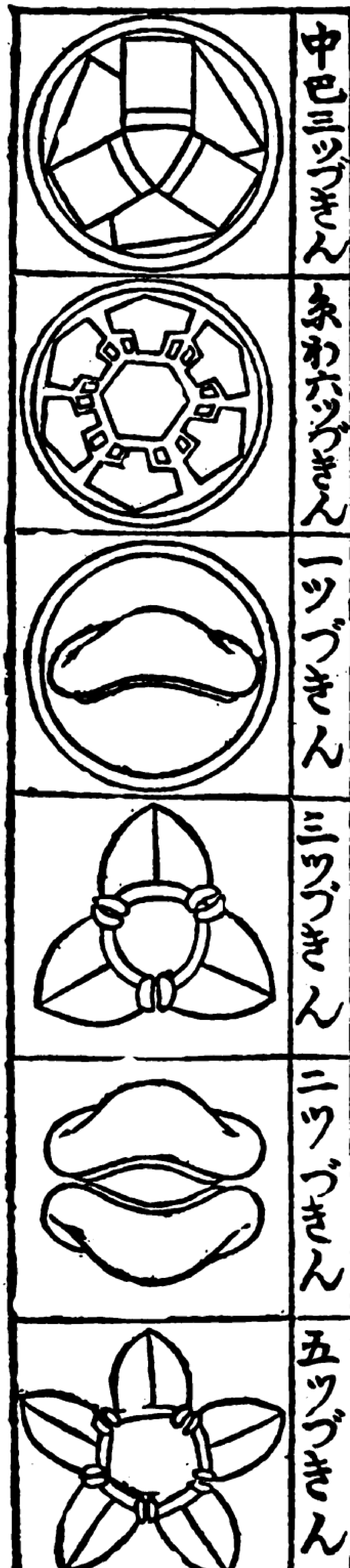
どんな話だつたかつて。それぢやお話致しませう。

「或所に年頃の娘さんがあつたのですつて。此娘さん容貌も、なか〳〵美しく、財産もあるので、あちらからも、こちらからも嫁に呉れよ、聟に行かう、と申込む者、引きも切らず、それは〳〵降るほどの緣談であつたさうです。其內に父母の眼鏡で、これはと思ふ候補者が見付かりましたので、或日のこと父母は其娘をそば近くよんで、お前も最早年頃になつたので、嫁に

ゆかねばならぬ、それについては毎日々々多くの申し込み者の中で、これはと思ふのが二人ある、其一人といふのは年も少し長けて居る樣であるし、容貌や品格はないが、何さま氣立てはよく、財産が非常にあるといふ。今一人は年もずつと若く、容貌は非常の美男子で、又氣立もよい只財産がちつともない、といふのだが、お前はどちらにするか。と問ひました、ところが娘さんは眞赤な顔をして下をむききさも恥かしさうに、疊の上を撫でゝ居る、其の態度を見て兩親は頻りにうなづき「左樣であらう、〳〵恥かしいのも尤もだ、我我にも其覺えがある。それでは父も母も後をむいて居るから、其間によく考へて見て、若しも前のが氣に入つたらば、右の肩をぬげよ、後のが氣に入つたらば、左の肩をぬげよ、さあこゝが一生の運のきまりよく考へて一二三を合圖に決斷をしなさいと約束して兩親は後をむきました、暫くして、一イ二ウ三イといつて娘さんを見ると、こはそもいかに、其娘さんは兩肌をぬいで居ましたとか。

此娘さんは多分晝は金持の方へ、夜は美しい方へ行きたかつたのだらう。困つた娘さんぢやないか。つて大笑ひいたしました。

頭巾の意匠



惡症の百日咳に奪はれし嬰兒の命

田中義子

山紫に水淸きてふ平安の都は鴨川つゝみにそひて出町橋の畔の實家に去年八月下旬假しは初產の紐を安らかに解きました。裏のはなれの八疊二間を天地としてやさしい看護婦と兩人、綠子の養育に餘念もなう、初めて持ちし子てふ者のこよなう愛らしう乳房ふくまする樣の可笑とて母樣に笑はれ乍らも可愛いゝ口許で吞まれるのが擽ぐつたくつて〳〵。

日曜毎に大阪から、良人が見舞つて下され其度に好める品など持つて來て下さるのを、何よりの樂しみにし週番なんぞの時はそれは〳〵待ち遠しくつて、良人も又どんなにか大きくなつたかを樂しみにして下さつた。

丸々とふとつた手頸を撮つて見たり、林檎を薄絹でつゝんだ樣な頰にキッスしたり、無心のほゝ笑みに恍惚してしまつたり、ぱつちりした黒眼勝のあの凉やかな眼がまだ見えないんでせうかつて幾度も看護婦に尋ねたり、或時はすや〳〵と天使の樣な寢顏を見つめながら遠き未來を眼前に浮べて紅のリボン美はしき幼稚園通ひの稚子を想像し、今更等閑だつた育兒敎育を考へなどして、照子が爲にのみ日を送りました、九月二十三日には賑はしく皆に送られて我家へ歸り、一家の寵愛の的となりました。

十月にはもうよく笑つてウクン〳〵お話をするやうになりました。

すると十一月二十八日、少し咳が出るやうで近傍の醫師に診察て戴いたら輕い流行性感冒との事に、けふは良くなるか明日はと、食事ものどへ通らぬ程案じましたが、追々咳は烈しくなる許り遂に堪へ兼ね回生病院小兒科の診察を受けましたら、氣管支加多兒と百日咳との事、驚いて早速入院さして實家より母樣に來て戴き良人も休暇を取られ、夜間交たいで看護しました。

國からは舅様が來て下さつて初孫のいぢらしい有様に御心弱い舅様は早や老の眼に涙さへ浮べて居られた。課長様や副課長様は親切にお見舞ひ下され看護婦取締はやさしい情をこめて尋ねて下さる。しかし照子の咳は日に〳〵烈しくなる許り苦しげなる様を見るにつけ親の身の何とせば宜からむ代らるゝ事ならば我身に病引き受けて可憐の照子を本復させたい、何とて罪もなき身のかゝる苦しみをするぞ…牛乳はけふは四合昨日は三合二合と、のどのたゞるゝ爲めと咳の爲めに入らず、哀れの者よ。

物も得言はぬ身には父の顔を見つ母の顔を見つ頸ふりて…あゝ苦しみを訴ふるなるかおゝ又もはげしき咳は可憐の吾子をせむるよ、冬期休暇の爲女學校在學の妹は姪の病を憂ひて來阪す。十二月二十八日午前十時小兒科長柳瀬博士の廻診に先だつ十分！　妾と妹と二人眠りに落ちし照子が枕邊に詞もなく打ちまもりし時コンとかすかに咳せしと見る間にくちびるの色あせて、顔色青黑に變り行き…驚きて抱き上げ「早う早う先生を」と叫び照ちやん〳〵と呼べど聲なく…隣室に居給ひし舅様も母様も良人も、馳せ出てさわぐ内妹の知らせと同時にドアの開きてドヤ〳〵と御廻診……

小さき胸もあらはに烈しき人工呼吸に、浣腸に、カンフル注射に、やうやく顔に生氣の色つきて、カアといふ泣聲と共に、あゝ照子は蘇生つて呉れたのか。ああ併しやつぱり苦しみの照子であつた。日に〳〵弱り行きし彼女はもう咳を仕様とすると呼吸が窒つて仕舞ふのだもの。

お前は此世に苦しみに生れて來たのか…母は病に苦しませうとてお前を生まなかつた、咳に窒息する身とは思はなかつた。

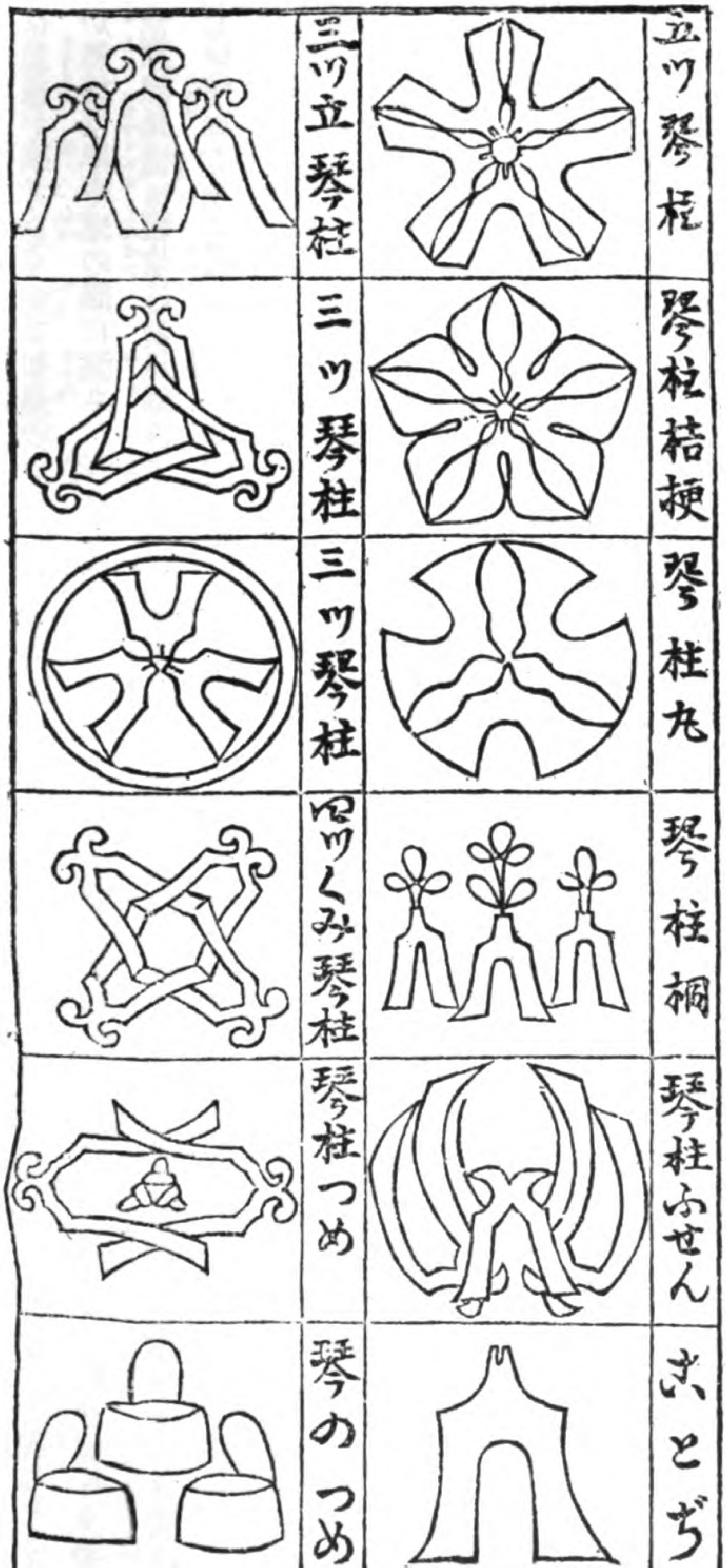
想ふには餘りに哀れに餘りにいぢらしき我最愛の照子が最後よ。おゝ恐ろしき窒息は十三回、注射は十四回、右手に三つ左手に三つ右胸に四つ左胸に四つ　十二月三十日午後六時最後の窒息に注射の功もなく、父母はじめ近親の人々に取りまかれ電氣によりてやうや

くばつちりと美はしき〳〵眼を開きつ。

右手は父に左手は母に、ひしと握られて懐かしげにわが顔を見つめかすかに口をおのゝかして毛筆にひたしてしめし遣りしに、我乳房ふくみしとき、其儘の愛らしき口付してさも甘げに舌つゝみうちて、さて靜かに頸をめぐらして、父の方をながめ、人々を打ち見やりて我顔を殘り惜しげにしばし見たまゝ……あゝ其儘……

照子は永劫にあゝ逝いて仕舞つた……弦月は玻璃の窓を透して神々しき迄にひやゝかな我がいとし子の冷き骸も泣き伏せる人々も一樣に物凄く照して……。

琴柱の意匠





人情の表裏

河岡潮風

▲福澤諭吉翁は「人を見れば泥棒とおもへ」と云ふ在來の俚諺を嫌ふて、「人を見れば善人とおもへ」と訓へたさうな。眞に達人の言である。錦にも裏あり。鏡にも裏あり。物はみな兩面を持つてゐる。人にも光明面と、暗黑面とあり。嚴密な月旦をすれば、誰だつて完膚ないであらう。目をつぶつて差支へのない處は眼をつぶるべし。無闇に人を泥棒視するよりは、最初はすべてを善人視して、出來るだけその光明面と長所とを見て尊敬して交際したいものだ。

尤も、人を善人とおもふと云つたとて、薄ボンヤリして鼻毛を拔かれる謂ではない。心の緒は強く堅く引き締めて居らねばならん。夫や父兄などの保護者のある婦人は、その智慧を借りて、比較的うまく猫をかぶつて世を過す事が出來やうが、夫を失ひ、乃至父兄に先立たれて、一本立になつた時は猫をかぶる餘裕はなくなるのである。人を見ては泥棒、雲を望んでは嵐と、心つねに安からず、十歩百歩の先を考へるのである。世に未亡人老孃などゝ稱せらるゝ階級の人で、眞に獨立自營をする人の目つきのやゝ鋭く毅然たる態度があるのは此の爲めである。僕は父に早く別れて、母の手一に二十年を育てられた故に、よく此の間の消息に通じてゐる。

女は忘れても若死する亭主を持つべきものにあらず！

▲『第一高等學校の時計臺と、東京市廳の大時計とはいつも止まり勝ちだがなぜだらう？』『夫れは新渡戸

さんと尾崎さんの奥さんが西洋人だから」こんな話をどこかで聞いた。

▲法科大學の某君の紹介で、隨筆様のものを出版したいが、どこかへ紹介して呉れぬかと擔ぎ込んだ人があつた。著者は僕と同鄕の神戸の女。

兎も角も拜見すると、いや飛むでもない凄じいもの。月を呪ひ、花を憤り、恨、綿々〳〵として長へに絶えずと云つた風の文章だ。よほど心に深き傷手を負ふたらしく、僕の如き樂天坊には、頼まれても愛讀は出來ぬ。よく聞けば、此の女史、かつてコンノート殿下御來遊の砌接待の役にあたつてから、氣が變になつたとの事。大英國の貴賓に失戀する大膽さ加減！流石に明治の女性だ。

尤も出版はとう〳〵見合せになり、同女史の草稿、更に怨恨の頁を增した事であらう。

▲先日女學校の校長會議があつた時、某女學校長のした話は、大いに現代の思潮をあらはしたものであつた。

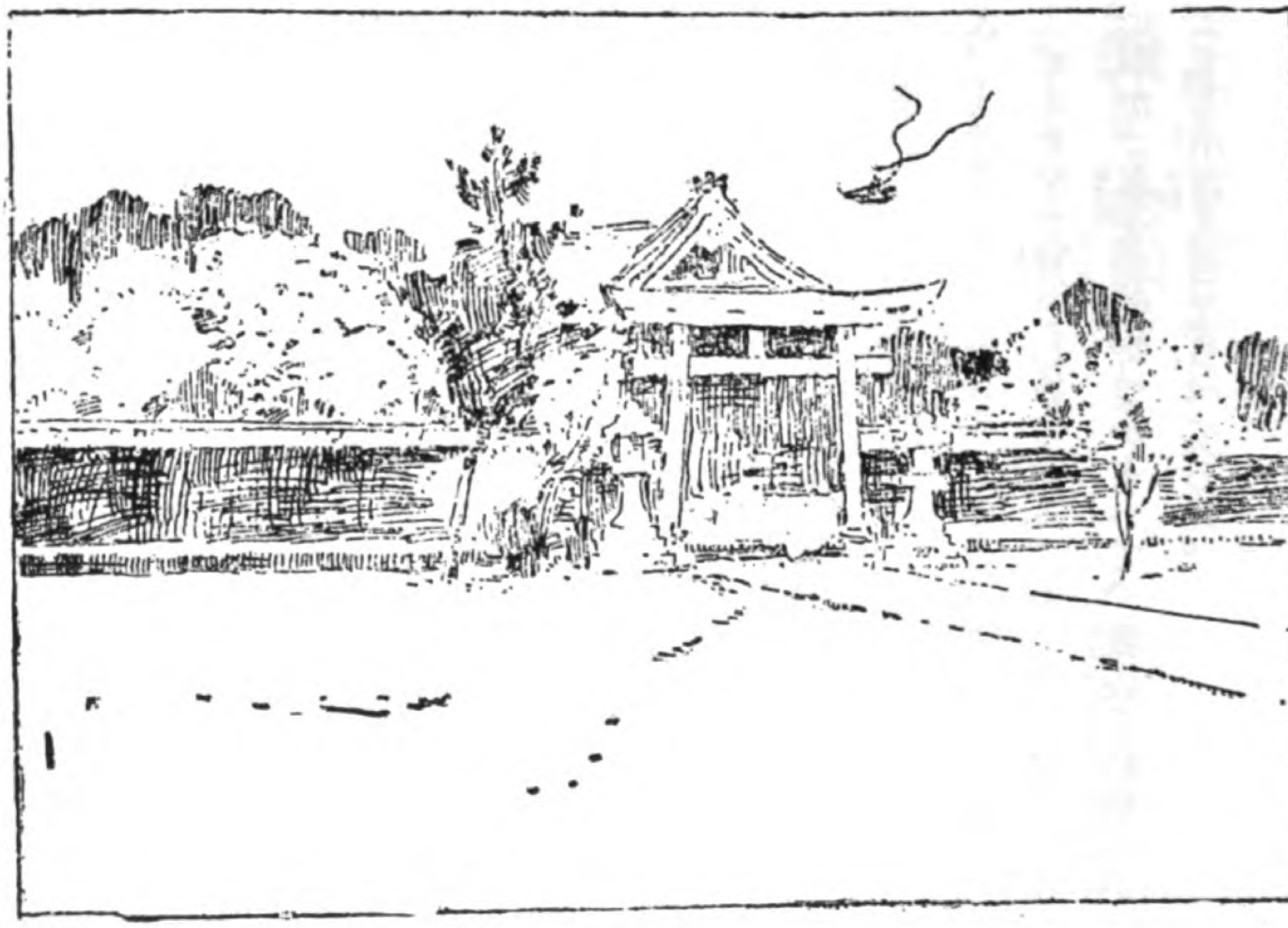
東京に近き女學校の一生徒、市内に名だゝる女學校へ入學を願ひ出た。生憎缺員もなく、かつ、此の生徒の資格に多少不備な點もあつたから、膠もなく斷つたが、種々手づるを求めて再三再四賴むで來る。致し方なく調べて見ると、成績も良い方だといふ。夫れでは許してやれと通知を出したが、いつ迄待つても、やつて來ない。あの位熱望しておき乍ら今更いやになるのは不思議だと、更に問合せると、其の爺からの返書が振つてゐる。曰く、

「近來御校出身者の肖像、少しも諸新聞の花嫁花婿欄に出でず候に付、御校入學の件は中止仕り候、折角の御申越に候へども惡しからず…」とサ。並み居る一同開いた口が塞がらなかつた。

花嫁花婿は主に、日比谷大神宮で結婚したものを出すのであつて、校運の消長とは全く沒交渉である。こんな手合が世の父兄連に多い中は、女子教育は百年黄河の澄むを待つ如しと申すべきであらう。

▲日比谷大神宮で思ひ出した一珍話。

吉野の宮の柑櫻



成金熱の旺んな時、十萬金か二十萬金をつかんだ男うれしくてたまらず、同大神宮の一等扱の結婚式をやつた。星移り物換り、昨日の榮華は槿花一朝の夢と消え、もとの木阿彌となつた處、女は忽ち逃げ出した。二度目の妻を迎へて、又ぞろ日比谷大神宮の御厄介になつたが、懐ろ都合わるく、三等扱か何かにした。折あしく、大神宮の執事記憶のよい奴にて、

『オヽ、貴郎はいつか、一等で式をなさいましたね！』

流石の鐵面蛙顏先生も、此時ばかりは、顏から火が出る思ひであつたさうな。

尤も之が大神宮だから無事に濟むだのだ。火葬場であらうものなら取りかへしはつかぬテ。

▲外濠の森甲武電車ハ事を一部の學生間では花電車といふさうな、幾多の美少年、美少女を載せるが故に。

朝の登校時、夕暮の放課時間に行つて見ると、新月の眉の持主たる少女、星の眸を持たる少年。お茶の水の附屬、三輪、學習院などの學生が、滿載されてゐる。花電車とはよく云つた！

少し大きなのは悪澄ましに澄ましてゐるが、幼ないは天眞爛漫だ。我輩の友達の法科大學生は、擊劍のお面、お小手、竹刀など持つてろの

で、馬鹿に人目を曳き、浮山、少さいか友達をこしらへて仕舞つた。聞けば、毎日乘り合はす大學生などは幾人もないから、彼らの中で、色色仇名がついゐるのであるさうな。色の黒いのが「烏さん」大きな聲なのが「雷さん」と云つた調子だ。

「あれ今日は烏さん、手袋の尖が破れてゐるわ!!」

「雷さん風邪ひいて、聲スッカリ駄目れ」

こんな事を話すやうである。花電車もなかなか油斷がならぬ!

この顛末を聞いた、例の大學生のお[illegible]母さん。「今時の子供はそんな時分からお轉婆をおぼえるのだからたまらない。嫁入りしてからが思ひやられる」と嘆息した。

▲ある靜かな夜、書きものをしてゐると、裏の家のくゞり戸が開いて人の出る樣子。

「○○や、お湯に行くなら、私の糠袋をつかつてもええせ」と老いたる女の聲。

「いえ、よござんす。洗粉がありますから」と若き女の聲。ピッシヤリ戸をしめて去る。あとで、婆さん怒るまい事か。息子か何かつかまへて、糠袋で結構垢がおちますと小言八百ならべてゐた。

こんな些少な邊から嫁姑戰爭の火蓋は切られるのだとおもつた。

▲もし我輩に現代の婦人に缺けたる三點をあぐるを許すならば、愛、樂天、謙讓を數へやうとおもふ。

獨逸の教育家ヒルテーは女の友人にあつる手紙に擬せし中に愛を說いて曰く、愛は同情の源である。卿らその兒女が恣ぎはに翫ふ、可憐の蟲を故なく、ひねり潰すを等閑に捨てゝおいてはいけない。特に女の兒に於て之を注意すべきである。萬有みな命あり。生きとし生けるもの、命を惜しがらぬものはないのだ。抵抗力なき小蟲を殺したり、花園の草花を摘んで來ながら机の上へ投げておいて、枯死せしめたりする罪は、小にして小にあらず。決して立派な婦人となれぬ云々と。僕此上に蛇足を加へる必要を見ない。

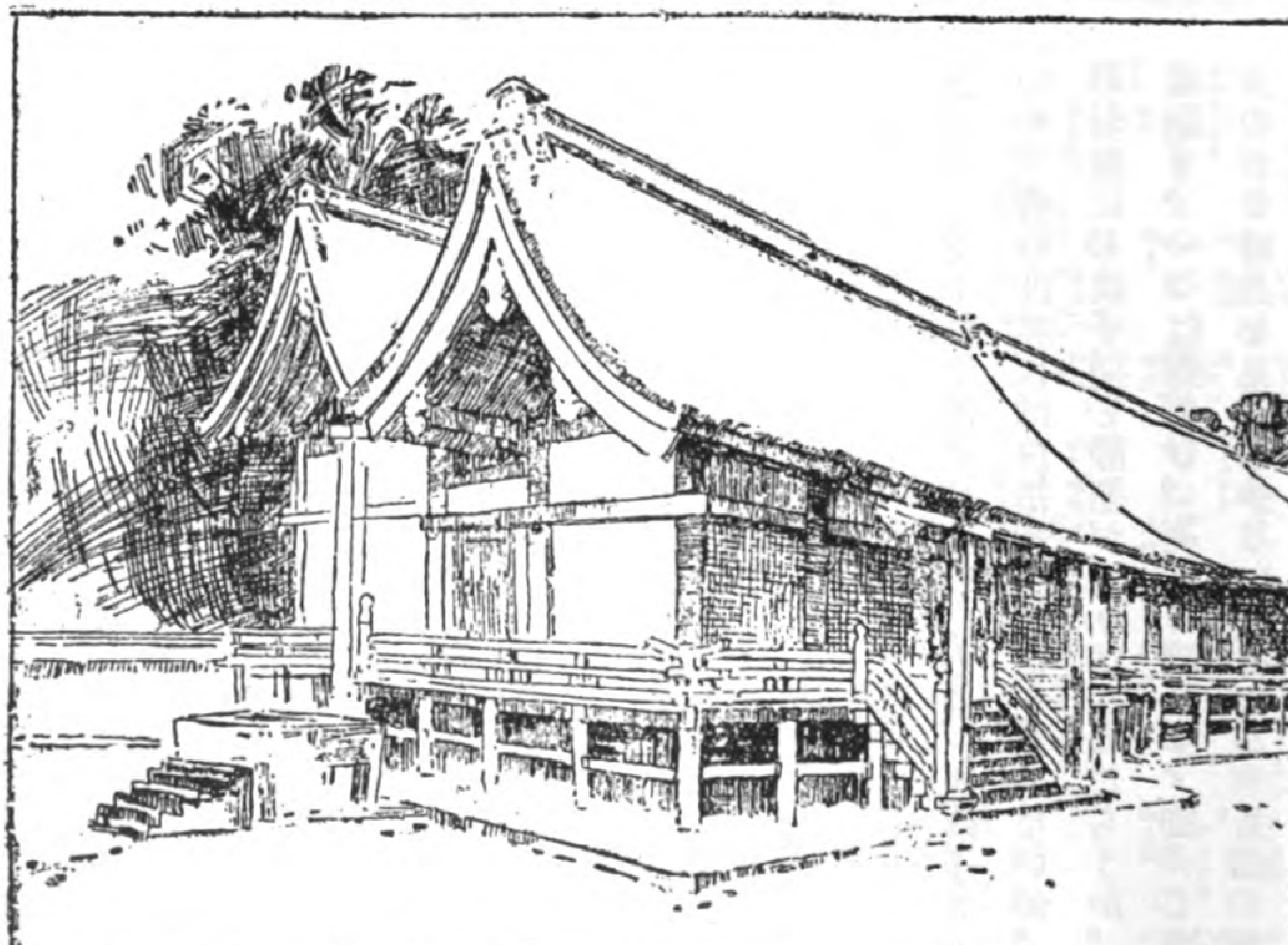
▲人事往々意の如くにならぬもの。一々癪にさはつたり、心配したりしてゐては、身體が續くまい。何事にも平然たる態度が望ましいではないか。男にも、女にも。

幕末の風雲兒、高杉東行、心、平らかならざる事あ

つて、
『面白く事もなき世に面白く』
と高唱した。望東尼和して
『住めなすものは心なりけり』
と云つたとやら。ダイヤモンドと三越と、ゴム輪の車とは決して、不平の最良薬でない。心をよくおちつけて、到る處に樂しみを求めらるゝ樣にならねばならぬ。

老父は疳癖強く、老母は長病に臥し、肝腎の亭主は海軍人で、留守居勝ち。それへ持つて來て、夥しく世話の燒ける弟や妹のドッサリある家の主婦となり山と積む艱難を、笑つて征伏し、沙漠の如き此集合(敢て家庭と云はぬ)をとう〳〵温かき家庭とした、敬服すべき樂天家を知つてゐる。彼の女は實に心一つの持ち處がよかつたのだ！

▲謙讓の德は時めく婦人ほど必要なものであつて、事實上流ほど行はれぬものだ。これは虛榮心が累を爲してゐるのではあるまいか。僕之については多く云は



宇佐廟宮水殿

ぬ。何となれば、虚榮心に囚はれた女が、その縛めより脱るゝ事は、一文筆のよくする處でないから。

▲夫れについては相談がある。現代の社會は、尊稱尊稱の安賣大流行で、旦那、奥様と、お孃様、途法途鐵もない人にまで用ゐて怪まない。明治になつて出來た高尚なる一階級、貴婦人など云ふ言葉の原語、レデーは、なか〳〵大した字だ。一寸手近の辭書を引いて御覧になつてもわかる。よろしいか。夫れ！

『騎士、及、それ以上の妻』『伯爵及それ以上の階級の娘』『洗練せられたる技能を有するすべての婦人に奉つらるべき稱號』――云々

新ダイア指にあり。オデコかくし額にあり。それで汽車に乘るとき青切符でも握れば、すぐレデーだと心得てはいけない。二人曳飛ばして、慈善音樂會へ行けばすぐに、レデーと心得てはいけない。レデーは男のロードに對する位の言葉、此の安賣はしたくないぢやないか。

レデーの事を獨逸語ではダーメと云ふ。同じ意味ではあるが、ダーメは國音「駄目」に通ず。一寸皮肉である。故に僕は思ふ。信に貴婦人たる資格ある人は、之をレデー〳〵と云ふも可也。でなくて、似而非貴婦人は、之をダーメと呼ばうではないか。

▲此間鎌倉の師範學校から招かれて、演説に行き、「紫の王國」と云ふ題で四十分ばかりしやべつた。眼にはさやかに見えねど、この社會を劈いて横さまに流るゝ二つの潮流がある。一つは赤色を以て代表せられ一つは青色を以てシムボルとする。赤の世界には榮華と歡樂と、權勢と名聲と富貴とが取るが儘に滿ちてゐる。青の世界には智惠と悲哀と、悟と涙とが溢れてゐると說き出し、鎌倉の歷史にあらはれた英雄美人二十四人をこの二つの色別けにした。男の方は今、おいて云はず。女で紅の世界に住むだのは、源政子其人でないか。青の世界には白拍子靜があるではないか。現代の女流にも政子型と靜型がありはせぬだらうか。一つは驕り、一つは悲しむ。高みて誇らず・衰へて自らやぶらざる婦人を見る事少ないのである。夫れ！赤と青

小石川牛天神の欅



との合せし色は紫である。お互ひに赤と青の世界の長所をとつて、活動せねばならぬ。こゝに紫の王國は建設せられるのだ!!

▲積極的の金儲けと、消極的の金儲けとがある。働いてなにがしかを稼ぎ出すのは前者で、金を使ふとき無用の失費を省き、若干をあますのは後者だ。これまで家庭の主人は多く前者を司り、女は多く後者に手腕を見せた。生理的、精神的に、幾多の障害ある女が、なまじ積極的金儲けをする事は、かへつて家庭の平和を害するものとされてゐる樣であつた。

勿論それは一理ある事。今後もある場合ある事情のもとには永久の眞理であらう。が……。

が、眞理は多角形だとも云ふ。僕は更に此以上の眞理がありはせぬかと疑ふ。

生存競爭の叫びけたゝましき今日此頃、何事にも消極的は許されぬのである。「汝の劍短かくば、敵中に踏み入る、更に一歩を深うせよ」と子に訓へた、スパルタの積極的を尙ぶのである。少し儲けてケチ〳〵暮す

よりも、大いに儲けてドシ〱使へ。女だつて遠慮は御無用。稼ぐ腕があれば、ウンと稼ぐサ。僕は消極と婉曲とは大嫌ひだ！

▲二月二十六日は日曜日、久し振りで閑居して、本など讀むでゐる處へ舞ひ込んだハガキ。先輩、押川春浪氏の長男なる、武俊さんが、急病でなくなつたとの知らせである。其數日前まで健康であつた坊ちやん！僕は狐につまゝれた心地。

その翌早朝、車を飛ばして訪ふた時には、もう武さんは清き白布の上に靜かに横たへられてあつた。

武さんの數へ年は七ツ。春浪氏唯一無二の男の子として、誰にでも愛せられてゐた。死ぬ子容色よしとやら、武さんは可愛くて賢かつた。病名は急性脳膜炎。僅か二十分の苦痛であつたさうな。その蠟細工の様な顔の美しい事、今にもパッチリ目をあけて「河岡のおぢさん」とでも云ひ出しさう。シカシもう武さんは此世の人ではない。

僕は永眠の文字が如何にも武さんの爲めに作られた文字の様に思つた。

瞬くは灯の光、薫るは香の煙。生前遺愛の兵隊數名は、劍付鐵砲で、儼然と、枕頭を守つてゐる。色々と臨終の話を聞く。そのうちで成程と思つたのは、此の病氣の遠因がお母さんが、脚氣の時の乳を飲んだのであつたらうと云ふ事。現に、ミルクで育つた、他の三人の女の子達は皆な達者なのを見てもわかる。

近因は、春浪氏が、膽力を養成せしめんとて、數日前、離れ座敷の黒暗に武さんをおいてきぼりにして、ひどく駭かした事だらうといふ。死生命あり——何も、此の二つが脳膜炎をおこしたと斷定は出來まいが。推察は出來ぬでもあるまい。

越えて二十八日、おごそかなる葬儀は執り行はれた。會葬數十人。みな心から武さんを悼んでゐるものばかり、かの多くの葬式の形式の行列とは違ふ。武さんは此意味に於て死むだとは云へない。永久に武さんを識る者の心の中に生きてゐる。僕は今更の如く靈の不滅を感じた。

（ゐの一）

新案彫刻指環

(1)



K18
ダイヤモンド入
金四拾八圓

(3)



K18
ダイヤモンド入
金卅七圓

(5)



K20
春かすみ組
花白金彫刻
金廿一圓

(7)



K20
荒波彫刻眞珠入
金十五圓半

(2)



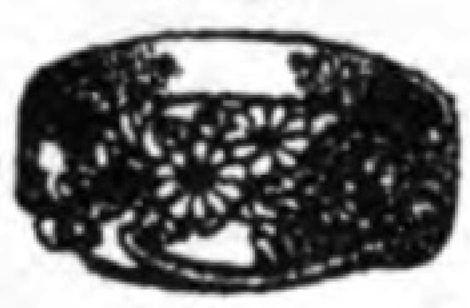
K18
ダイヤモンド入
金卅五圓

(4)



K18
ダイヤモンド入
金廿五圓

(6)



K22
水邊菊花
白金彫刻
金拾九圓

(8)



K20
枝櫻彫刻眞珠入
金十二圓

營業目錄
送費四錢

東京市神田區鍛冶町
白牡丹中西
電話本局二〇四〇番
振替口座一五三二四番

根治確証
わきが
新治療藥
ラビヨニ

忽ち臭氣を全滅せしめ速に用ひて苦惱を脱せよ
定價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔淨驅逐し惡臭を止むる作用を有する最近發見の有力劑にして如何程劇烈の難症も甲價特別製を用ひよ送料拾五錢

毛のぱへる
毛髮生長液
原名ヘゲネス

めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他の所に毛なき人用ひよ毛髮増生す◎頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止

化學製品
色の白くなる
防ハンドコロン溶液

皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

價A印壹圓B印特別製壹圓五拾錢送料十五錢本劑は貴紳淑女婦士間に高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば皮膚は次第に新陳代謝をなし

分の力
主性

月やくをとろし

月經不順より起る子宮病血の道を治し古血を一拂す
速に流經す月經不順又は血塊にはり特製を用ひよ
價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓參拾錢參圓五拾錢小包料拾貳錢(凡テ郵券代用一割増し)

メリルビン此藥は子宮を痛めず長き經月とまりも下るも三月位のは一劑も用ゆればすぐ下る二三ケ月以上のと

專賣 東京神田小川町東明館前 オリエンタル藥館

女(るの二)

◀新學期開講▶

女子大學 家政講義錄

二ケ年修了

四月廿日初號發行

▲會員募集▼

本月中申込に限り特に入會金免除

▲朝野の諸名士賛同の下に女子大學講義を發行せる本會は▼
▲新に家政講義を開講通信教授により女子教育普及を圖る▼
▲悉く家庭を中心とせる科目は直に實生活に應用し得らる▼
▲講師は多年教育に經驗あり熟練なる斯道一流の大家なり▼
▲内容豐富にして淸新興味の裡婦女切要の學藝を修得し得▼
▲講述頗る平易叮嚀懇切なるが故初學者も了解に難からず▼

會則附き見本申込次第進呈

東京 小石川目白臺 日本女子大學校通信教育會

女子大學講義

小石川久堅町 精美堂 電話番町二三九

女(その四)

肺病患者に警告す

醫科大學藥學專攻
藥學得業士　金澤巖

肺病は難治の疾病にして病理診斷等の幼稚なる時代に於ては殆ど不治の病と稱せられたり此習慣久しくして今日尙必死と信ずる人多く敎育ある醫師と雖も患者が肺病の診斷を以て死の宣告となし失望悲嘆するを恐れ最末期に及び治療の目的なきに至り始めて實を告ぐる事多し故に輕症時代に患者は其覺悟にて充分攝生服藥せず又家族は平素消毒豫防せず爲めに一家傳染滅亡する事多し是實に大なる迷信にして此考への爲めに生ずる人生の不幸は極めて多大なりとす不肖往年肺病に罹り一時は不治と決心したるも多數の成書を渉獵し大に悟る所あり現今醫學上の方式を原則として自ら實驗に實驗を重ね攝生療養に力を盡し又藥化學上の原理を應用し一新藥を發明し終に自個の病軀を全治し爾倍の健康を得るに至れりその藥物を**キニトール**と號し發行せるに既に幾千通の全治輕快の報告實證を受領せり爾來十箇年間に於ける學界の進步と實地の經驗を鑑み數次の改良を經て『第三**キニトール**』を發行せり此新藥は少くとも現代に於ける理想的肺病治療藥にして消化器を害せず食氣を進め全身の營養を增加し精神を爽快にし熱を去り痰を切り咳を鎭め肺病の各症狀を寬快し病原菌を擊退し漸次體量を增加し全治に至らしむるもの也同病患者にして一度使用せらるゝ時は自覺する所を得べし尙委細は東京市下谷區上根岸町金澤巖宛御申込ある時は報告と同時に詳細の養生書一冊を進呈すべし（文句の盜用嚴禁）

婦人技藝材料

營業目錄
袋物、造花、刺繡
摘ミ細工、果實、瓶細工
編物、器具並に材料

東京市本鄕區弓町二丁目
倉持商店
電話下谷三五一三、振替貯金口座壹七壹壹壹

此切取を添へ御申越しの方へは美術技藝の栞並に定價表無代進呈す
（○女學世界四月號○）

通信販賣 博 博通社特賣品

米國 ウオルサム スタンダード 金側懷中時計

精良品を最廉價に提供するは當社の本領!!



ウオルサム及びスタンダード時計製造會社製懷中時計は世間既に定評あり弊社は特に世界に冠たる兩社製品を斯くの如き廉價を以て推薦す然れども數に限りあり此の好機會を逸せられず速やかに御購求あらんことを乞ふ

◀送料 市内無料 内地十二錢 海外卅錢▶

●ウオルサム會社製月星印正十八金張廿ケ年保險梨子地側瓶双三枚蓋十五石入アンクル十三形婦人持 特價貳拾六圓五拾錢

●スタンダード會社製正十八金張十ケ年保險梨子地側瓶双三枚蓋七石入アンクル十三形婦人持 特價拾七圓五拾錢

●スタンダード會社製正十八金張十ケ年保險梨子地側無双三枚蓋七石入アンクル十六形男持 特價拾二圓五拾錢

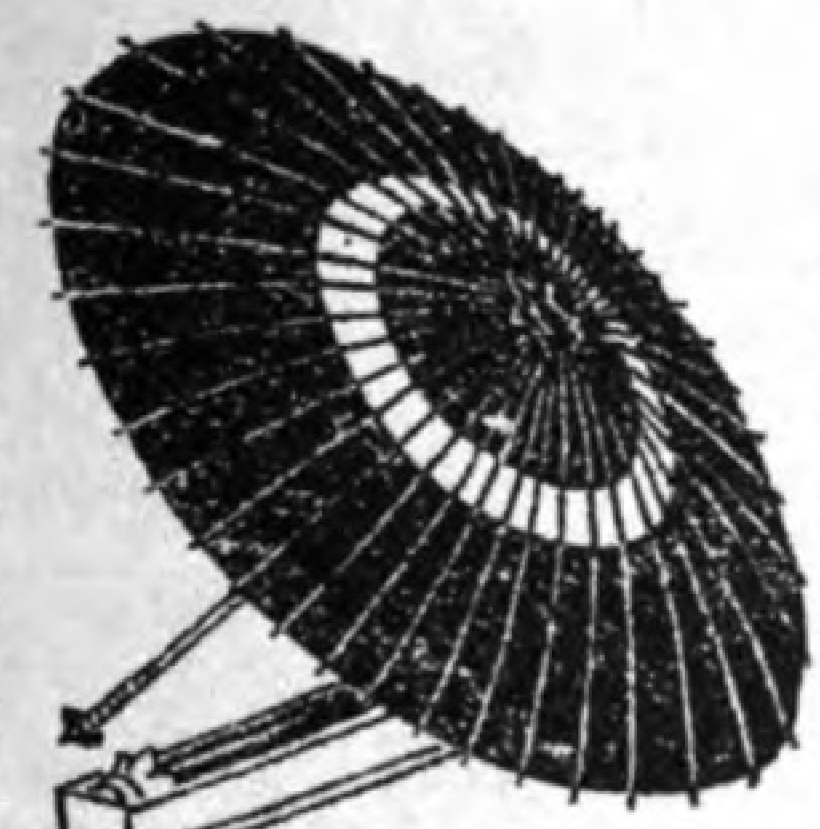
(1) (2)



銀引七寶 一輪挿花瓶

七寶界有數の技術家の製作に係り巧妙にして瀟洒なる粋人の是非共机上に缺く可からざるものなり 高さ三寸口徑七分五厘 木製箱入價格同一 市價一圓五拾錢 特價 壹圓貳拾錢

▲送料市内四錢内地八錢海外卅錢



新流行春雨傘

粋で高尚で人柄で、持の良きこと請合で、而も直段が割安な萬人向きの春雨傘

●一號紺蛇目男持女持 同價特價一圓八拾錢

●二號蛇、墨小持女持 同價特價一圓參拾錢

●三號蛇、墨男持女持 同値 特價八拾錢

▲送料内地廿錢海外卅錢

無代進呈 當要者製造家共に便利有益なる弊社營業案内 再版出來!!

大橋、メール、オーダー、ビジネス

東京日本橋區本町一丁目 博通社 振替口座東京五十番 電話本局六百十四番

竹貫佳水君著
太田三郎君畫

少女思出の記

爰に優梨子と呼べる可憐なる一少女あり、世の荒波に引分けられて母に別れ父を失ひ、他郷に流離すること幾星霜、涙と共に記念の指環を抱いて都に上り、圖らずも幸福の手に救ひ上げられ、涙繁かりし往時を追想して優しき筆にものしたる少女思出の記、同情深き大方の諸嬢よ、繙いて春の雨夜の友とせられよや。

全一冊四六判
洋裝美本
紙數二百餘頁
定價二十八錢
郵稅六錢

東京日本橋本町三丁目
博文館
振替口座東京二四〇番

脫毛術美顏術色素漂白術を行ふ

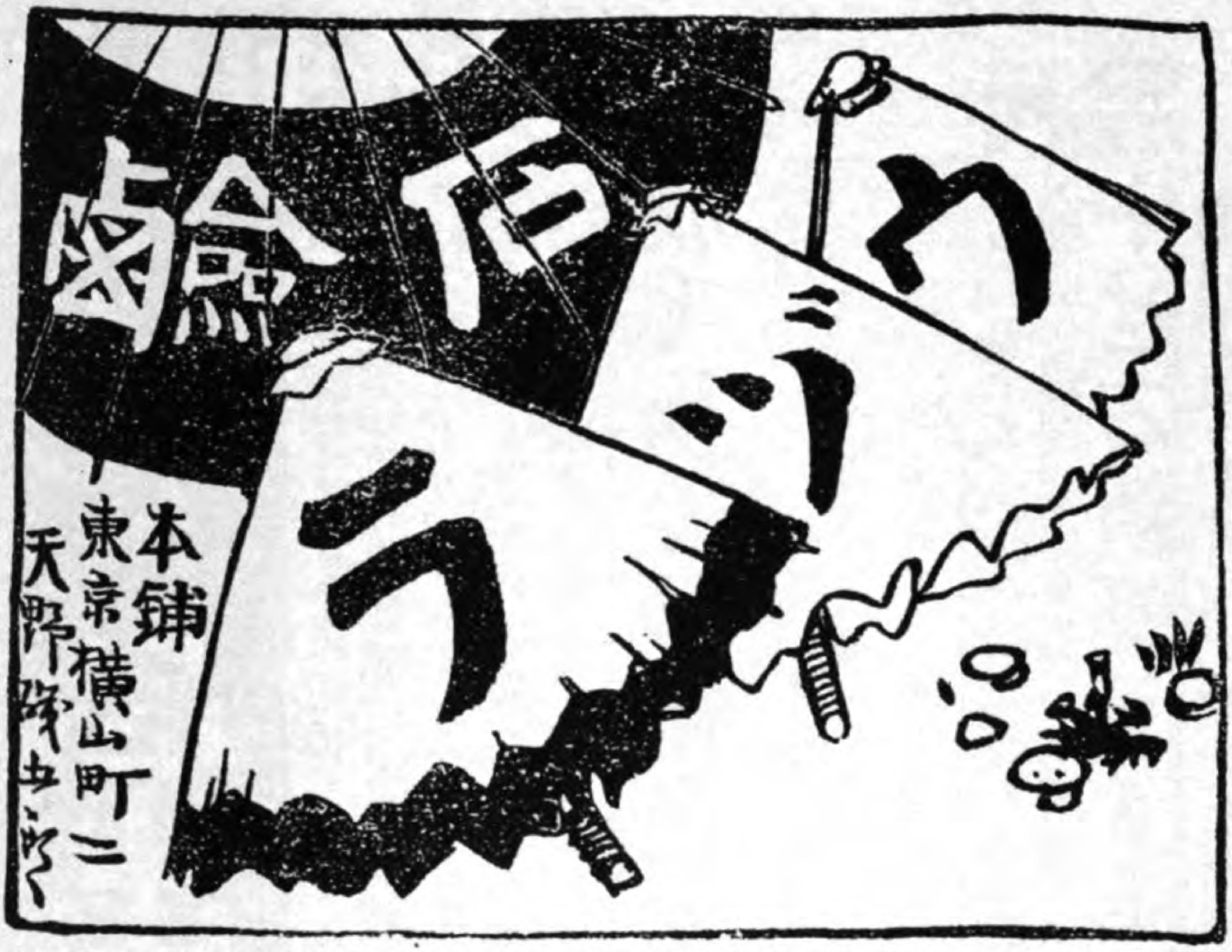
本郷お茶水
東京美容院
院長 北原十三男
電話下谷一六八三番

遠地は右に要する藥品を送る委しくは返信料封入紹介の事
化粧品藥品目錄美容の栞等を送る尚

院長保證 やせる新藥メグルール發賣
説明書進呈

本郷東竹町廿九
東京美容院藥品部

女(ろの七)


本舗
東京横山町二


美髪料
薫司香油
金壹円 金五十銭 金卅銭
本舗
東京
浅草
百助
商店
宮内省
御買上の
より特に
光栄を
蒙むる

其の八



新郎新婦の性格

金子百合子

A様

帝大法科〇法四回生、お美麗な方でネ、よく宅へ遊びにいらつしやる時分、近所の人が眼をつける程、凛とした色白の細面、英姿颯爽、度のつよいお近眼鏡に制服角帽がよくお似合ひあそばす。たしかお二十六‥‥‥でせう。お顔にも似合ぬ、それは〳〵お口もお人も悪くつて、私なんか何を伺つたつて、すなほに御返事なすつた事もないので御座いますよ。もう焦らしておこらして、とう〳〵泣聲を出さしたりして、御自分は笑つてゐらつしやいますの。でも今年は御卒業ですから、この頃は眞面目に御勉強してゐらつしやいますわ。

　御不承知だつたのを義理にせまられて、この一月から一家の主人公となり、小石川に新ホームを作つてゐらつしやいますが、ちつとも夫人おありの方のやうには見えませんでネ、美登子様お可哀想で御座いますわ。跡見の御出身とか、泪のこぼれる程しはらしい美しい櫻草のやうな奥様。いつもふつくりとしたお丸髷か可愛らしい桃割、お色の白い丸顔な、欲にはいま少しお脊があつたら‥‥‥ですけれど、ほんとにお似合ひの御夫婦と存じますに、A様あんなでゐらして夫人には随分おきびしいので御座いますつてネ。

　よく御卒業後の話なんか出ると、僕なんかまだ五六年は放浪生活だ〳〵つて私達にとつては随分耳の痛い事ばかり有仰つてたのですけど、やつぱりかう云ふ御身分におなり遊ばしてとひそかに微笑まれますわ。

お短歌がお上手なので御座いますよ。高等學校時代にはなか〱お振るひになつたものださうですわ。一たい法科には趣味ある方達が……金子とはまるで御氣性がちがふのですけれど、それや仲よしで御座いましてね。私のお友達で金子とも御親友なのはこの方ばかりで御座いますもの。それに美登子樣もあんな風でゐらつしやいますし、度々お手紙下さいますの。一つちがひのお姉樣、すら〱と美しくお書きになりますのよ。

御就職などゝんな方面をおのぞみなのですか、例の御氣性故私達にはおもらしになつた事もありませんが、この方ばかりは遠くお別れしたくないと斯つて居りますの。先日も美登子樣と半日お話しつゞけで、美登子樣も泣いてゐらつしやいました。

あゝ主人が日毎にせまり來るたゝかひ、活世間へ出ての奮闘！思へば〱なか〱に心もとなく、不肖ぬ我身のうらめしく、たゞおど〱と暮して居るので御座いますわ。

M　樣

法學士、この方で御座いますのよ。私がポンチ繪の達磨樣なんて尊稱を捧げ奉つりましたのは。太いおん眉、丸い眼、床屋へ行つて三日目にはもう一分程もありさうなお髭がお頰をうづめて了ふと云ふ獰猛さで、そのくせちつともこはくはない、滑稽まんまん、いつでもニコ〱と他を弄かつたり、イヤがらせたり、それやアお口のわるいこと、お聲の大きいこと。

御卒業なさるとその年文官試驗も首尾よく通つて、〇〇〇へ御赴任ときまり、御結婚もあそばし、さアこれからと申すところを、惜しや御病氣でいま大學病院のベットの上に呻吟してゐらつしやいます。あんな方でも肺の御病氣なんかあるかと思ふと可笑しくて……：お氣の毒より何だか柄にもないと云ふ氣がいたしますのよ。けれどほんとにお可哀想で御座いますわ。この方の奥樣、約婚時代から兄樣〱てそれやア大へん

で御座いましたの、ホヽヽヽ私達あんなハスなら此方から願ひ下げにするわつてよく笑ひましたけど…。

美登子様のやうな美人ではありませんけれど落ちついた奥様らしい方で、始終頭高の束髪にお結げあそばしお脊の高い口数の少ない、この方がまあお手紙と云ふとよくあんな憧るゝ式の甘つたるいことお書き遊ばす……エ、ホヽヽヽよくM様のお机のあたりから徴発して拝見した事が御座いますのよ。何に、M様だつ



て見て貰ひたくてゐらしたのですわ。見ちや不可、見ちあ不可、てお縁がは中追かけまはしたりなさるのも人前への義理ですわ。でも奥様がゐらしてからは以前のやうに御遠慮なしの口も利けなくなつて了ひました。お互ひに陰辨慶でね。

どうぞ〳〵早く御全快遊ばして、かねての御理想に御敏腕をふるはせ給ひたく、奥様もどんなにか御心配でゐらつしやいませう。お謡曲がかくし藝とか承りました。日本女學校の卒業

生で御座いますとか。たゞね御良人樣とちがつてちつと思ひ上つた御氣質ぢやないかと存じますけど、これは私がこんなかまはずやですから、御自重の態度を取つてお出なのかも知れません。……

一度御見舞に伺はなければ、すまないんで御座いますけれど……。

L　樣

「未來の外交官」「眼鏡」「才士」なんて云ふのがこの方のニツクネエムなんで御座いますよ。エ、JでA樣と同じ科の三回期生、華奢だらなA樣とは趣をことにしてますけれど、これもまた申分のない美丈夫、柔道にきたへられて氣持よく發達したその胸、かひな、お脊が高くて鴨居の下は首をかゞめてお通りなさる。お袴もよくお似合ひあそばすし、また制服の時は弟の樣に叱つても上げたい程若々しい。

二高時代にはボートの選手にあげられてゐらしたのですつて。

この方のお近眼鏡がね、評判なので、細いつるの、別に特色もないんですけれど、ほんとに「眼鏡」と云はれても仕方がありません。凛々しいお顏がまた一入お立派に見えますのよ。御家庭が順境のせいか、坊ちやま氣質の可愛い人、まつたく外交官が御志望、文學好きで新刊の小說など、かゝさず私にも拜借させて下さいます。尺八スト、ピアニスト、お書もなさるし、筑前琵琶がお得意なのださうですが、あれは墮落書生のやるものですつて一度もおきかせになつた事はありません。藤村詩集に羊羹がお好き、お嫌ひなものはお酒とナマヅ、ドゼウ。

昨年避暑先でそつとお髭をお立てになつたとき、私まちかまへて居ましたら、お歸京の時はもう以前の通りきれいに落してゐらつしやるんですよ。私のほこ先を受けとめかねて、奥樣にあつたら六尺の男子かたなしだつて知らない方にまで御吹聽あそばすのですと、意氣地のないこと。

夫人はまだ約婚中、學習院女學部の才媛、ピアノと

語學でもてはやされてる方で御座いますつて。お年はお十九、私外ながら一度お見うけ申しました。濃いお髮をルイザ卷に、いかにも輪廓の正しいお顏につんと高いお鼻、しまつた口許、端麗の二字をもつて評すべく、海老色のお袴裾長うすらりとしたお姿は御洋裝もさぞかし……。○○會社長の御令孃で御座います。エ、私L様とはどうしてお知己かと有仰るの……ホヽヽ、大分追擊がきびしう御座いますこと。御安心あそばせ、金子と同じ高等學校の御出身なので御座いますもの……。



S 様

これはお登志さんの御良人です。横濱あたりへおつとめで、毎朝洋服自轉車でお出かけ。一寸氣取つたネクタイなんか、髮をきれいにわけて、一名「ヤンマ（とんぼ）の元帥」ッて申しますの。

お登志さんは大きな丸髷結ふてすまして居ます。私つたら先日の晩もおもちや屋でビックリ箱を買つて來

と、妬けて〳〵なりません。果敢ないものね。良人もお母さんも早く子どもをこさへておくれなんて有仰るんですつてね。

まあ私なら腹が立つて了ひますわ、赤ん坊の事なんぞ云はれると……。

だまつてきいてゐなければならぬ久江は、どんな氣がしてゐるので御座いませう。

縫子様

陸軍歩兵中尉夫人、私とは昔からのお友達で御座います。

美しいお髪、大きいお眼、紅いくちびる、いかにもはき〳〵と印象深いおん面立ちで、御體格もお立派だし、軍人の夫人にはうつてつけ。しつかりした意志の強い方のやうに見うけますが反對で感性のするどい詩人肌な、激しやすい、それだけまた旦那様には眞情を捧げておつかへ遊ばし、中尉さまがまた大切な〳〵婚約方、記念のお寫眞頂きましたわ。眉目秀麗な軍服凛々しいハス様と、高髷に裾模様の縫様がおならびになつたところは、緑も深き月桂樹によりそふ白百合とでも申しませうか、ほんとにお羨しいやうな御夫婦で御座いますの。

縫様も私と同じ父様なしで、それにお母様がおちがひ遊ばすし、早くから随分御苦勞なすつたので御座いました。學校も高等小學の中途でよしてお裁縫のけいこに通つてゐらつしやいました。あの頃からみると、この頃はお幸福でゐらつしやいませう。御二男の事ですから御兩親と御一緒なのぢやなし、お料理やお活花をお習ひ遊ばしてで御座いますとか。

何しろ中尉さまが何でもかでもあの方でなくてはと云ふ御熱心、お一人娘の事故いろ〳〵御條件もあつたのでせうが、萬難を排してもと云ふおん意氣ごみで、やう〳〵お望みが叶つたので御座いますわ。

縫様更けてゐらつしやるのねえ。お二十とは見えません。はアお丸髷ですとも、太きな〳〵平打さして：：…。そして

「私ねえ、話のきまつた時なんかまだどうしても自分のことのやうな氣がしませんでしたのよ、中尉を嫌ひと云ふんぢやないんですけれど、どうしても進まなかつたんですが、あの、嫁てみればだん〱愛情も出てまゐりますわネ」

なんて恐れ入るやうな事おきかせ遊ばすのですよ。けれどこれはほんとにさうだと存じます。あの、美耶樣ネ、〇〇〇〇に御在學中からいまの旦那樣、その頃の早稻田の方と噂が高かつたので御座いますわ。自由結婚とやらで、昨年御良人が御卒業なすつて、御一緒に大阪の方へ行つてゐらつしやいますが、どう云ふわけか、平和にゆかないで、美耶樣あんな御氣性とてヒステリーのやうにおなりなされたと風の便りにきゝました。これにつけても愛情は使ひ過ぎてはならないものですとか。

縫樣は先日、いゝ無地お召の半コートが出來ましたのね。



R　樣

危險人物ですのよ、この男は。

それやア美人でも醜婦でもマダムでも令孃でも子守つ子でもかまはない、何でも女の親友が欲しくつて仕方が

ないんですね。私なんかほんとに――困つて了つたので御座いますわ。此方ぢや何にも知らないうちに金子さん〳〵をふりまはして、人に紹介したり、ノコ〳〵宅へやつて來たり、最初はそんな人物とも知りませんから、人なみにあつかつて居ましたが、僕は一度御交際したら、決して一生放れませんよ、なんか申しますんでせう。多感多涙と云ひますか、多情多恨と云ひますか、ぢき男泣きに泣くんですよ。美しいお髭のお顔を手放しで……。

はア、何處か私立大學でも出たんでせう。何だか目の丸い髭のピンとした犬張子みたいな滑稽的の人だと思つてゐましたけれど、美男子だつてなか〳〵評判だつたので御座いますわ。何度とりつぱなしてもこりずに、今でもちやあんと御機嫌伺ひをよこしますのよ。もしやあのお言葉のまゝに近づいたらどうするつもりなんでせう、ほんとに腹の立つより馬鹿らしうて……。それが今度御結婚なさるのださうですよ。ホヽヽホ、披露會にはぜひ御出席を願ふ、御招待狀は今からポケットに入れてあるのですつて。きつと隨喜だかいゝ、もがらだかの涙をこぼしながら、鏡と首引で顔面の研究に苦心してゐらつしやるのでせう。大いにお好きな米國式を發揮あそばせよ。どうぞ夫人によろしく。

K　樣

帝大生、長脇差の分子を含んだやうな、ハイカラなやうな、おめかしやさんの、學生らしくないイヤな方あら、御交際してるわけではありませんけれど、兄樣の御親友だもので、時々參り合せる事が御座いますのですわ。先方樣でも私がお嫌ひで御座いますとか、洋銀ブチのお眼鏡をとうして『奧さん』と云はれると、『何で御座いますの』つて顔をそむけずには居られませぬ。あの△法科なんで御座いますつて。この方が一高の御出身とは少々悲觀したくなつちまいますわ。

〇〇〇は憧憬雜誌だつて有仰るから、まあ男のくせに何故あんなもの御らん遊ばすつて云ひましたら、貴女は僕にそんな事云ふ權利があるのですか、つてま

お飛んでもないとこへ……私驚いてお顔をみて居りましたわ。御風采が上らないつて云ふんぢやないんですけれど、制服なんか些ともお似合ひ遊ばしやしないのよ。詰友倶樂部の片隅にまでお眼を通して、ほんとに油斷がならないんですよ。

この方の奥様……奥様とは申せませんね、何屋の娘とか、それも普通の處女ではないんで御座いますつて大へん高條な美人ださうです。

年中厭世したやうなお顔してゐらして、女嫌ひ女嫌ひと人も許し、私や君子様のつきとほすやうなピードロ聲をきくと、腦のぐあひがわるくなるなんか有仰るんですのに……。



けれども御成績はわるい方ぢやないんで御座いますつてネ、莨とお酒は随分飲るやうですわ。この方きつと神經衰弱にかゝつてゐらつしやるんですよ、ジロリと人を御らんになる時の眼つきがちがひます。

まあ、私。好きた事ばかり申しました。これですからお登志さんに嫌はれます。皆様御免遊ばせ。今日は金子が學校お午前だけなので御座いますつて……。



智識の泉

笑ひを以て克つ

東京　白梅

何が御氣に召さぬのか、今朝は御出勤がけに頭も尾もなくたゞガミガミ被仰るまあそんなに強く遊さなくても と、謡ひ一つ二つ言葉に角も立つて來る。そんな時には、あゝと胸に手を置いて。昵と頭を押し付けていつぞや猫が衾をかぶせられて、座敷中ころげ廻つた時の狀態を思ひ出す。そして、明日からお靴もつとよく光らしておかう、今晩は少々張り込んでビーフでもこしらへておかう、おゝさう〳〵三鞭も一本伊勢やに云ひ付けて置いて、夫れから、お腹の皮のよれさうな話の種を探しておいて…… 今日は久し振りで丸髷に結つ見てやう。私は日々斯樣な精神で、他人に對し世間に處し、良人につかへ、兄を敬へて居ります(入賞)

安眠の仕方

兵庫　中川玲子

私は平素寢就きの悪るい性で、床に就いてもいつも二十分乃至一時間も苦しんでゐましたが、近頃次の樣な法を考へて行つてゐます。先づ床に入る前二三回深呼吸を行ひます。そして床に就けば務めて何事も想はず、一心に自分の呼吸を數へるのです。(呼吸はなるべく鼻息を立てず大きくする。)だん〳〵數へるとしらず〳〵に寢入つてしまひます。

又私は此法を腹の立つたとき、悲観した時などにもすぐ行ひます。すると見事に氣がおちついて來て、改ためて物の道理を考へる事が出來ます。(入賞)

稀鹽酸の用法

京都　梅原美枝子

稀鹽酸と云ふ薬は、普通薬で何人にも易く買ふ事の出來るなか〳〵遣い道の多い薬です。宅などでは始終遣つて居ります、鍋釜などの器具の汚くなつた時に、此の薬を少し布切にしましてふけば、見違へる樣に美しくなります。又夏向西瓜や桃などたゞ食べた後に此の薬を少し飲んで置くと、あまり障りが無い樣です。少し位の下痢や、胸つかへの病人にお湯呑に三四滴之を落し、薬用ブドー酒を三杯位に薄すめ砂糖を加へて與へれば、病人は鼓舌よろこんで飲みます。そしてお腹の工合はよくな

りますo此處方は醫者の方でも鹽赤劑と申てよく遣って居ります(入賞)

胡麻豆腐製方

讃岐　志津子

分量は白胡麻一合、上等葛粉一合、水四合の割合にて、まづ一合の胡麻を一時間水に浸し置き、徒米をとぐ様に仕て胡麻の皮を去り、一寸焙烙で狐色に炒り、擂鉢に入れて、どろ〳〵に成るまで根氣好く擂ります。杓子にかけて糸を引く様に成りましたら、裏漉にかけてカスを去り、別に四合の水で一合の葛粉を溶かして、前の擂胡麻を交合て鍋に入れ、文火で搔廻し乍ら煮ます。能く煮えましたら卸ろして流箱に移して冷して置きます。流込む時青海苔を振りかければ風味宜しく、固く成つたら適宜に切つて沸騰したお汁に入れて一寸煮立て藥味をそへいただきます。普通の豆腐より大に美味です。或は山葵醤油にて食しても結構です葛粉の代りに寒天を用ひても宜し。されど寒天で固めた胡麻豆腐は再び煮れば溶けて仕舞ひます故、ただ山葵醤油でいたゞきます。(入賞)

鹿兒島のつけあげ

朝鮮　長谷場信子

宅では御客様に、よく頭をおはづし遊ばさるやうにと申して此の國のつけあげと申すものをよく出します。製法は魚肉、エソが一番甘味しう御座いますが、鯛でもよろし、其肉ばかり取り、よく骨をぬき、身をすり鉢の中で七分（肉がヤシ〳〵になるまで）すり、其中に味淋少々玉子(大きなエソ三尾位なら)一個、砂糖、鹽、をよいかげんに入れ、又よくすりおく。一方には人參と牛蒡の皮を取り、一寸湯煮し、厚さ一分、巾五六分長さ一寸三四分位に切りて、(牛蒡の巾せまければ二三枚一緒にするもよし)前のすりみをぬりつけ、上等のゴマの油で揚げます。其の頃合は出來上つたら大抵上に上りますから、その狐色になつた時に新聞紙の上に取ります。あつさりした美味しい揚げものです。(入賞)

恐ろしい中毒

大阪　植田ひろ子

私の兄は風邪にて醫師にかゝる每に之れまで五六回も手足の指間、口びる、腕等に赤紫色の斑點を生じ、主治醫は何病とも認定されずいつも湯治に一週間餘參ると全治致すが例でしたが、あまり度々の事とて大學病院に診察を受けし處、こはアンチピリン中毒なり、百人に一人位は此の藥におかさるゝ人有りと申しました。尚知己の奥様もにこんな人があつたから、これまで何病氣かとひそかに心配して居られた由で、私が注意を申上げた爲になほつて非常に喜ばれました。

胃病の妙藥

越後　操子

私の父は大層胃が弱うございまして、色々の藥を買つて飲みましたが

左程よくなりませんでしたが、某博士のおすゝめにより、毎朝かゝさず御大根を食事毎にいたゞきました、所が、大變に宜しうございまして、少しも苦しまない樣になり、よろこんでおります。皆樣御存じの通りお餅など食したときには、誰も大根などを食しますけれども、平常も少しづゝ食しておりますと、消化を助けて大變宜しい樣でございますよ。

ヒステリー自療法

千葉　戸村登志子

男でさへも神經衰弱の憂鬱症のと、青い息を吹く世の中に女の身のともすればヒステリーになるのは、決して意氣地がないと咎むべきものでないと思ひます。それで療法としては藥を用ゐるのもいゝでせう。氣を丹田に籠めること、まあ坐禪の樣な事をするのもいゝでしやう。けれど、もこれは相當の修業を積まないと、さ程の効もない樣です。妾が實驗した中で一番簡單なのは、首を仰向ける事、つまり後頭を襟へ附ける樣にするのです。かうして暫として居ると、色々の雜念や氣にかゝる痛痛しい思ひも雲と散つて無念無想となり、眞如の月が顯れて來ます。これはヒステリーでなくとも悲しい事や苦勞した時に應用しますと、確に効を奏します。

料理の研究法

朝鮮　長谷場信子

私は木暁は勿論他の雜誌上の料理法が、なり大きな一冊のノートブツクを左の如く入つに部類分けになして、寫し取つて居ます。

日本料理の部

魚、(魚類)、　肉、(肉類)、　野、(野菜類)、　雜、(雜の部)、

西洋料理の部

F(フヰツシユ)　M(ミート)　V.(ヴエナテーブルス)　Vn.(ヴアリアス)

菓子と果物とは小さき手帖を別にいたして居ります。此樣にして毎月毎月珍らしき料理を其部々々に寫し込み、數多くなりゆくのを見る毎に、一種の興わき出で、何ともいへぬ樂しみです。又其等を見て甘味い料理が出來た時は、誠に嬉しう御座います。

手輕な糟漬の製法

大阪　花子

即座にお魚の糟漬を造る方を御知らせいたしませう　鹽をしたお魚を其鹽をよく出して置きます。そして御酒の中へ少し白砂糖を入れたものをよく沸して、それを又冷めたくなるまでさまして置きます。そして冷めたくなつて初めて前のお魚の肉を其御酒の中へ漬けて置きますと、一時間程經過しますと　普通の糟漬と少しも違はぬ美味いのが出來ます。


京都の春
北野の梅

まあいゝお天氣ですこと。それにけふは日曜けこんな日にぢつとお裁縫ばかりして居るなんてほんとに氣がきかないわ。けれどお友達もなしに一人で、ぶらぶら散歩するのもいやですしどなたか入らつしやればいいのにね。

此間高島屋で買て戴いたお召の袷を縫ひながらこんな事を考へてると門の格子がチリリンと明いて玄關で御免遊ばせつて鈴のやうなお聲。私は指貫を針箱になげ込んで飛んでいつた。

「入らつしやいまし」坐つて障子を明けると從妹の君子樣は妹の貞ちやんと二人きれいにお化粧して立つてる。

「まあよくね淋しかつた所よ——さあどうぞお上り」

「姉樣けふはね。あんまりいゝお天氣だし觀音樣の御命日ですから三井寺さんへお參詣するのよお祖母さんも入らつしやるからね姉樣もお誘ひしてくるやうにつて」

「あらさういゝこと——私母樣に申上て來ますわ」

十八にもなつて肥つた大きな身體を障子や襖にぶつつかりながら奥の離れへどたん——ばたん——あまりのうれしさに——

本家のお祖母さんも御一緒といふので母樣はお小言を仰しやる筈もない。私はあんまりかまはない性質だけれど日曜日丈はいつどこにでも行かれるやうにと誰にもいはないが自分の心でお化粧はちやんと念入にしてあるので着物だけ君子樣とお揃ひのに着かへて早速お伴する。

他國の方にはのろいとか、むさいとかいはれるが之でも日本では元祖の電車私の生れた時代から既に通ふてるおなじみですもの悪からう筈はありません。七條停車場前で下りて東海道上りの列車へと乘込む。稲荷山科、大谷を過ぎるともう馬場、お祖母樣こゝで乘りかへるのですよつて今度はお玩具のやうな汽車にのる。それでも相應に速力はあるのでまたゝく間に大津についた。君子樣と私とは片手にお辨當片手にお祖母さんと貞ちやんの手をひいて、お正月三つもあるやう

にぞろ〳〵と歩くお二人共下ぶくれの愛くるしいよく似たお顔して貞ちやんはお色の白い處へ紫矢飛白のお袖の長いお召の袷に緋のもえたつ樣な大和錦の丸帶を惜しげもなうはそこに結んで五インチ巾のとき色リボンがお下げの髮にひるがへつてる。姉樣に手をひかれながら時々後をむいて嬉しさうに、につこりする可愛らしさ。丁度雜誌の口繪が動いてるやう私と並んでゆくお祖母樣も此可愛い孫逹と樂し相に見て入らつしやる。觀音樣の坂は一寸高ので三度も休んで上つた。

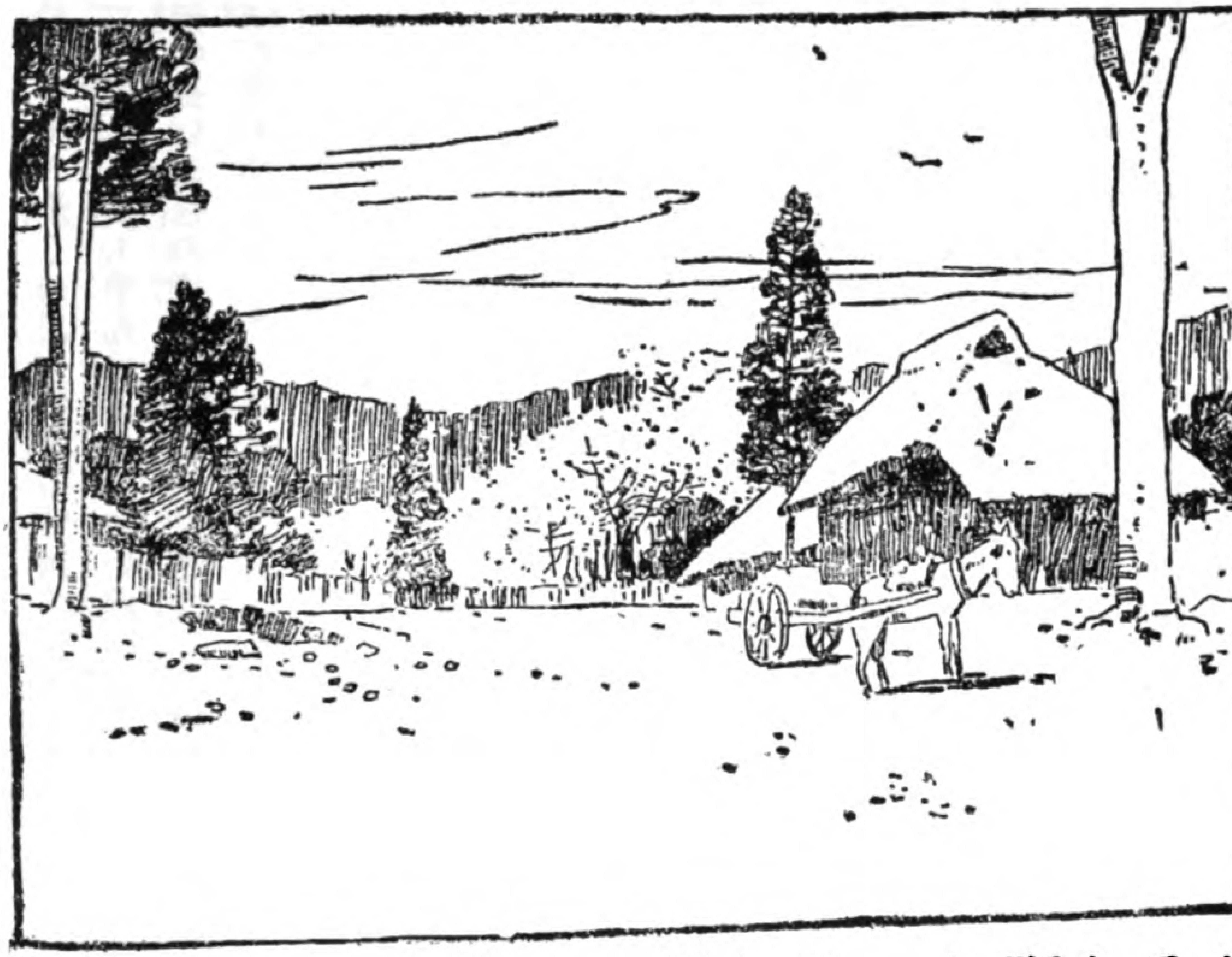
どこの方でせう、よく肥つて丈夫さうな女學生さん二人袴のすそを、ちよいと手にさゝえてトン〳〵〳〵と誰も〳〵追越して走り上つた。石段の半に苦しいとて休んで居つた中京あたりのお家さん、さも驚いたといふ風に、お伴の女中を省みて。

「なあお豐どん、あれやさかいになあ。皆女學校へようやらんのどすえ。まあ〳〵女らしいしはらしい所はどこにおす。ほんまになあ、あの河本はんのも此間退校さゝはりましたえ。無理もおへんなあ」と頻に感心してる。女學生さん一向におかまひなし私共が石段の三分の二位の所でもうちやんと御參詣をすませて歸途につかれる。あの樣に機敏にやつてこそ一列車後れの見物も出來るのである。一つ段を上つてはやれ〳〵二つ上つてはオヽしんどそんな事でどうして旅行を出來やうと思ひました。併しお祖母さんとてもやはり此お仲間お口へ出しては仰しやらないがお心でお轉婆だとお思ひになつたには相違ない。私は君子樣と顔見合せて笑つて居つた。

お山では辨慶の力餅却々の繁昌、澤山の人が皆思ひ思ひにお辨當をひらいてる。

見渡せば大津の町は眼下に並んで太湖汽船會社の蒸氣船でせつ、湖面に遠くかすんで走る。東山又西山とどちらむいても山ばかりの京都に住んでる私共には此はれ〳〵とした景色が、何とも例へやうなく心地がよい。丁度濱寺か和歌の浦にでもいつたやうな氣持で、此水がからくないといふのが不思議な位。又無理はないでせう、川といへば加茂川丈それも大かた水がから

山驛の春色



からで海なんてどんなものか知らぬ人が多い位の土地ですもの、鮭といへば初めから赤くからく鹽氣のあるもの、魚といへば身の少し軟かいもの位に思ふのが普通漁夫の娘が三里も四里もよく泳ぐといふても却々ほんたうに思はれないのですわ。

お祖母様は私共の年をいふて、一々におみくじを引て下すつた。幸に皆大吉ばかりなので一同縁起がよいとて大よろこび、裏坂を下りて鍋だの鐘だのを見て歸途についた。

君子様も貞ちやんも姉様私まだ疏水を知らないのですから、船にして頂戴なつてせめる。私は十年前に一度父様につれてつて戴いた事があるけれど、子供の時ではつきり覺えないから今一度乘つて見たくない事もないのでお祖母様に御尋ねするとお前達のいゝやうにと仰しやる。それではと船の乘場へゆいて十錢づゝで切符を買つた。觀光團の五十人許りがや〜〜とやかましくいつてる、世話をする人がお幾人ですかと尋ねるから三人半だといふと、それではすぐ此船へのつて下

さいといふ。見れば二十一人づめの船に十七人丈のせて四人たりないとのこと。やかましくいつてる人も皆のりきれないので仕方なしにせまい通路をあけてくれたから私共は首尾よく乗船した。

汽車のトンネルでさへいゝ氣持がしないのに之はまたざぶ〳〵と下は青すいた水ですもの、何だか恐ろしいから四人しかつと手をつないでる。船夫が一寸物をいふてもクワツとこだまに響いて物すごい事例へ樣がない。其中をギー〳〵と靜かに下る。まあ暫時のる丈でもこんなに氣持が惡るいのに此穴の中を毎日通ふてる職業もずゐ分いゝ加減のものだと感心してると。上に上はあるもので、船夫はまだ時々明るい所へ出られるけれど。今は疏水の第二工事とかで此中で火をともしてカランコロンと作業してる人もある。丸で坑夫其まゝ、げに上見れば限りなし笠きて暮らせとは實によくいふた詞だと思ひました。

「ちよいと姉樣今横に道がついてゝよ」

「あらさう、どんな廣さ」

「丁度ね此半分位よ。見てゝ御覽。あら又火がともつてゝよ、そらあね。あるでせう。前と同じよ」

成程丁字形に横道をつけてる最初のトンネルに七つばかりもありませう。大津から入つた入口が電氣燈でもつけたやうに白くかすかになつた。もう小さくて見えないといふ時分にまた行手を見渡すと一寸位の丸い火がともつたやうに穴の出口が見える。一種しめやかな而して陰氣な空氣が身にしみて冷たさうな物すごい水がちやぶ〳〵といふ外何物もないかのやう。かすかな電燈は時々についてるがまあ白晝の暗黒境。ほんに太陽の光といふものは難有いものだとつら〳〵悟りました。もしも此船が此まゝかやりでもし樣ものなら私共の命は到底だめだと思ふとぞつとする。神經かもしれないが船の速力も少しにぶつた樣子、あゝ早くトンネルを出てくれゝばいゝのに。

やがて船がトンネルの半程位までゆいた時分に、船夫は何やらいひ出した。初めはギー〳〵こぐ艪の音とちやぶ〳〵いふ水の音とで聲の餘音ばかりが、こだま

にひゞいてよくも聞えなかつたが幾度もくり返すのでをしまひには別る。

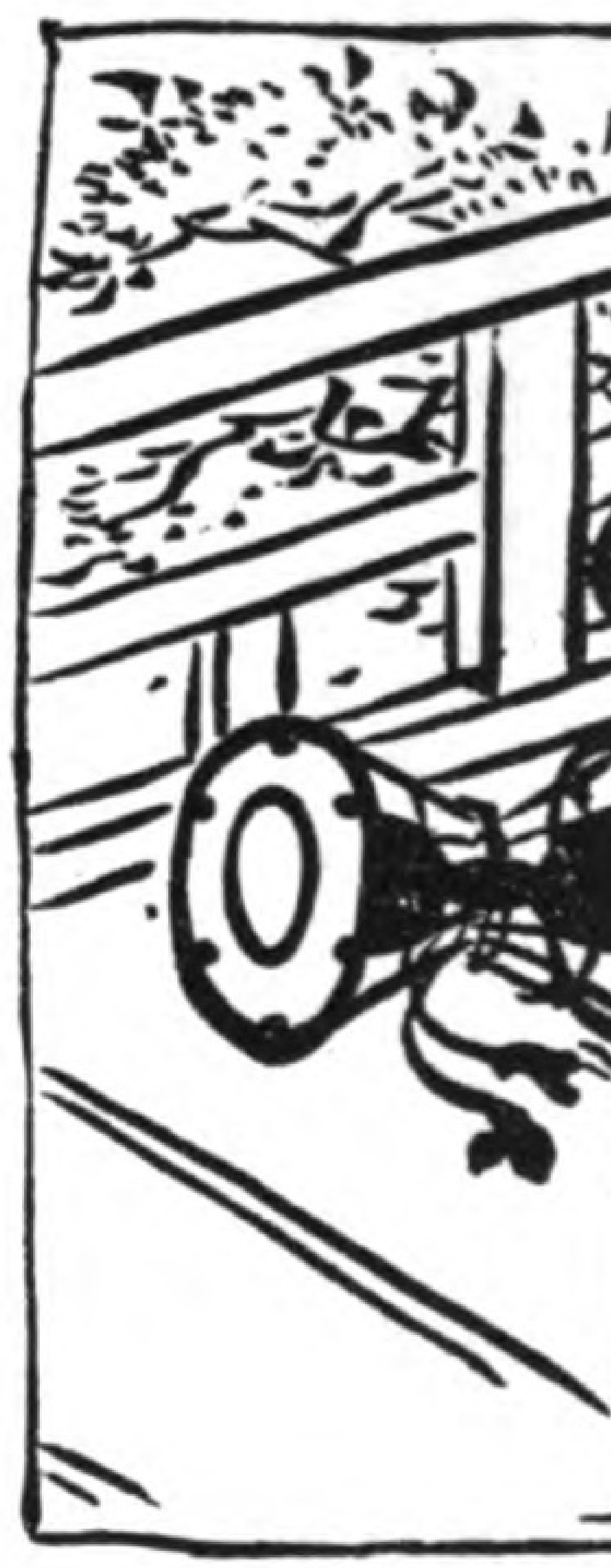
「お客樣——船夫が一つきばるからの——一人前一錢づゝましてやつておくれよう」

とあゝ之で船の速力のにぶつた譯もよく別つた。——につくき船夫——生活の難は都もひなも同じなのか。僅か一錢の金。もしも之が船にのつた明るい時か、さもなくば一つ丈でもトンネルを越して明るい所へ出た時にでもいひ出せば二錢でも三錢でも增してやる。丸で昔の盜賊が深山へでも連れ込んで未開の人をおどしつけるかのやうに、眞黑な所で人の不安につけ込んでこんな橫着な事をいひ出すと癪に障つて仕樣がない、誰が一厘でも增してやるものかと思つてると乘合の人も同じ心と見えて誰も／＼返事をしない。七八度もいふて見たが、返事がないので仕度がないから諦らめた樣子。汽船會社の社長さんは部下の船夫共が此暗黑の中でこんな事をいひ出して、客に不安の念を起させるのを少しも御存じないのでせうか。それとも公の秘密で十錢の船賃以外にお許しになつてあるのでせうか。十八人も二十人もの乘合せだからいゝやうなものゝ、もしも客がなくて四五人の時にこんな事を穴の中で申されたら、婦人の客はどんなに心細く感じるでせう。それにしても妙齡の方はしつかりとした監督者なしに此樣な船にはのるものでないと思ひました。漸う第一のトンネル丈出ますとそこは山科あたりでせう。

「姉樣今のトンネルの中に電燈が五十五ついてゝよ」

と貞ちやんがいふ、大人には氣がつかないが子供は却却よく調べて居ます。第二のトンネルは極僅かで、第三のものは最初の半分位の長さ、まあやつと無事に南禪寺の下について、疏流橋から又おなじみの電車の客となりました。





文苑

春

黒木白萩

朝に夕に清い薫りを懐かしんだ白梅も、早や散りそめて、藪鶯のさゝ啼きが聞える、

琥珀色の麗らかな日ざしに燃ゆる 萌える様な小草は、そよ風にサヤサヤと小さい葉ずれの音を立てゝ囁く様になつた、

静かに眠つてゐた冬の野は、一日々々に華やかな眺めと變つて行く。

あの雁回の蕾が深紅の霞に包まれる頃は、この里も春は闌、柳の絲に春風ゆるう戦ぎて、桃も櫻も一時に咲く、野は小草の花の綾に彩られて、

胡蝶は甘い花の香に酔ふて舞ふ、

嗚、春々！晴雲と悲哀とに充されたこの胸にも、かすかながら歓楽と希望の光がほのめく、（一等）

赤児

横濱　高橋八代重

「何故泣くのでせう」と言つて私は床の上に起き上つた、其時に家を圍つて居る木立に風があたつて不意と騒がしい音をたてた、木のゆれる音、雨戸にあたる響は、何物かこの家を襲つて來た様である、清は又聲をあげて烈しく泣く、母は赤児を抱き上げ、姉は傍へよつて行つた、聲をふるはして母は子守唄を唱はれたが、唱つても〳〵赤児は泣き止まぬ

何物かこの闇の中に立つて居るものが其の眼に映る様におびえて聲を限りと泣く、赤児のおびえる聲につれて、一家の者は顔を見合せていよ〳〵不安な思ひ、――外では尚風の音、――縁起の肩がゾク〳〵と膚ら寒い、（二等）

さびしみ

美作　田鶴子

私の好みの古代紫に、スッキリとした若竹の絣模様、白茶地に有職風の菱繍を刺した厚板の丸帯を、キュッと立矢の字大鏡にすらりとうつつた容姿は我ながら美しくも嬉しかつた、フックリとした前髪に手をやつた時、ハラリとこぼれたくれなゐの襦袢の袖のあでやかさ、でも何だか淋しいのは肩のあたりとソッと撫でてみた、それを「よく相應ふ」とはあゝ恨めしいお母様、

艶のない此の肩を伯母様は何と仰有るだらう、伯父様が若がへりの祝宴に私はこんなに老けてゆく、（三等）

松島より

牛込　平塚白百合

のどかな春の海を鹽釜から小さい舟で乗り出しました、海草が舟底にサラ〳〵と音をたてゝすれ、うなぎ釣りの小舟が四五艘黒い泥をかいて居るを見ながら進むのも風情、島の遠望もきくやうになりますと、海はコバルト色に美しくないで、翠がいをかざした島々は右に左に、島は

浪に洗ひけづられて、木の木目を見るやうです。島の一方に石門のやうな洞のあるのが材木島、松の一本もないのが裸島、沖は遠く紫の靄がこめて、その奥迄島はつゞいて居ります。松島に上つて、寺に參詣いたしました、昔人の住んだとつたへられる土穴が兩側にズーッとつゞいて皆十疊敷或はそれ以上なのです。伊達樣の木像も拜見いたしました、八つ房の梅はもう花がちつて、北國とは申せ古木の櫻は入日をあびて美しうございます。夜觀月樓迄を逍遙いたしました、烟つたやうな灣の中に島はおぼろにちらばつて、すぐ近くの五大島までかすんで、海の水は動いてゐるとは思へませんでした。（秀逸）

雛祭り

千葉　山口秋子

美くしい花瓶に挿した緋桃の花瓣が、金屏風廻した内侍の君のお肩のあたりに、ひら〱とこぼれる、雪洞の火影が薄ら寒い夜の風に靜かにゆれて古びた雛の顏が美麗だ、お芝居を見る樣な心地で上から下へと見下ろせば、幼い思ひ出がして昔がなつかしい、十五の春迄で抱いて寢た京人形は、みどりの燃ゆる草餅に可愛ゆい眼を落して、……白酒に頰染めた妹は、緋房の横笛靜かに取つた、そゝろ樣な音色が秋の空氣にたゞようて、高く低く……嗚呼妹の春はこれからだ。（秀逸）

靜春

東京　若紫

ゴットン、ゴットン、水車の音が絶えず響いて、聞き慣れない耳には隨分うるさいけれど、慣れて見れば平氣と見えて、水車小屋の爐のふちに、水車番の平作は、眞い氣持さうにいびきをかいて居る、お媼さんは何を考へ出してか、ニコ〱と笑みながら、それでも手は休まずに糸を綴ぢて居る。

「ヤア乞食、乞食だ」、汚い子供がガヤ〱と大勢騒ぎながら後をついて來るのにもかまはず、鼻緒のゆるんだ日和下駄を引ずつて、黑木綿の羽織を着た、六十近い盲人が、尺八を熱心に吹きながら橋を渡つて行く黄色くなつてしぼむだ梅の花びらが、ハラ〱と風に散つて、若草をついばんで居る雛の上に落ちた、（秀逸）

樂しきまどゐ

明石　千鳥

あたりの襖たてこめて、きちんと片付いた四疊半に、父樣母樣と私の三人は炬燵のまはりに坐つた、私は父樣に竹生島の先きを教へて戴かうと思つて本を炬燵の上に置いた、炬燵に入つて謠のお稽古、これも家族的の樂しみの一つなり、どうも六ケ敷くていくら後についてやつてもうたへない、「月海上にうかんでは」の所を、父樣が、「かい――」と首を下に下げて、「しやう」と首を上に上げるのだと仰しやるから、其の通りにやると母樣は聲を出さずに口の中でうたつて、首を上げたり下げたりなさる樣子が可笑しかつたので、思はず笑ひだしたら、父樣もお笑ひになつて、其の樣に内證でうたはなくても皆と一緒にうたへばよいにと仰しやる、母樣もお笑ひになる、あまり笑つたのと炬燵の暖かいのとで耳と頰とがほてつて、ぽか〱としてきた、寒い風がさあ――と吹いて雨戸をはらつた、

氷魚

根室　齋藤ふじ子

「氷魚、氷魚、――氷魚、よござんすけえ」、呼び止めて、幾らかと聞くと、十錢に二百尾と云ふ、少し買つて屋根

に乾す、
此頃は何處の家でも氷魚乾で忙がしい、今日の樣な天氣のよいのを幸ひ私もほしにかゝる、
赤い襷、印半纏、白い腕が忙がしく働いて、屋根、空地が總て白い美しい魚で滿たされた、冬の日がキラ／＼と上を照してゐる。
ボョ／＼と赤い旗を翻して馬橇が走る、
街路を辷る少年の姿が勇ましい。

寒い朝

山形 英子

時計の音に目が覺めた、オヤ何時か知ら、六時だらうか、五時だらうか、室は未だ暗い、どうも六時だつた樣だが、私の耳の聞き違ひだらう、と無理に五時にしてしまつて寢返りをした、外ではヒュー／＼と風の音がする、寒いのを思ひ出して又急に此の温つたかい床を離れるのが嫌になつた、
最う少し位は好いだらうと又好い心地でねむつてしまつた、
ガタンと何やら落した樣な音にびつくりして目が覺めると、すつかり明るくなつて居た、
まあ大變、又叔母樣のお目玉頂戴か、

越路より

埼玉 中村みどり

おなつかしいおハガキ、昨夕落手、うれしさにみどりは泣きました、遠く漂泊の身は、何につけてもなつかしき御地の空に思を馳せて居ります、もう三芳野の梅が盛りを過ぎて散りぎはですつて——、昔戀しい其花陰も今はたゞはるかに偲ぶより詮もなし、まだ／＼雪國の春は遠うございます、見渡すかぎりはてしもなくつゞく雪の野、水鳥が低——く啼いて、深い沈默に眠る夕べなど、淡暗い室の机に凭れながら、そゞろにありし昔の華やかなりし日を慕び、落魄かぎりなき今の身を思つて泣きますの、こんな弱い心ではと自らを責めますけれど、矢張り、——どうぞ寂しいみどりをお忘れなくたび／＼おたより頂戴な。

硯にそへて

東京 みをつくし

海もあり陸もありて、おのづからなる一つの小さき世界をなしつ、海は深からねども、底にはたふとき玉もあるべく、陸は峻からねども千々の言の葉も出づべし、兄上富士登山の歸るさ、二つもとめて歸りたれば一つを別ちまゐらせ候、硯のあした、筆さしひたさば、花の香に匂ふべく、月の夕べ、すみすりながさば、たなびけるむら雲をもたゞよはすべし、更にたのしき折、かなしき折につけて、心一つにあまる思ひを紙に殘すはこの石のいさをに候へば、よろづに秀でさせ給ふ君が清き机の上におきて、日ねもす海をあさりて玉を拾ひ、陸を耕して千々の言の葉をつませたまはゞ、たゞに妾の本意のみならず候、

梅櫻桃李の春

牛込 輝子

とき子樣、御手紙と共に御送り下だされし梅の花、たしかに戴きました、色も香も少しも褪せずに、ハラリと落ちて出ました時、どんなに嬉しかつたでせう、當地は今まだなか／＼の寒さで、少し夜が更けますとランプに火の付いた儘で、ザイ／＼と音を立てゝ石油が氷つて仕舞ひますの、そんなですから、梅の花なんて未だ／＼です、五月頃になりますと、梅桃櫻をはじめつゝじ山吹に至るまで、一時に咲きます、其時の

美しさ、眞に百花爛漫でございます。

春の夕暮

島根　青柳秀子

日は菜の花の末に落入らうとして、紫や黄の花片の合ひ間／＼に閃き、緑の葉、萌黄の莖にほのかに光を拋つ、空は薄く霞み地はほんのりと樺色に染り、地平線上二丈がほどは、今し坩堝を出でた紫金を刷の先でなでたかのやう、鐵鎚が一度下つたら、幾條の火花が虚空を飛んで、草の葉木の根、小川の渚、堤の上にも燃えたちさう、小井戸の汀に、根芹、薺の若葉が重り合ふ、日は段々と沈んで行く、菜の花の中には、白い手拭を被つた里の小娘が見え隱れに北へ／＼と消える。

夜の集り

豊後　名なし草

天井も低く、さして廣からぬ室の一隅、ランプの光を浴びつゝ立てる老牧師、今しあふるゝばかりの熱誠もて神の道を說く、集れる聽衆は僅かに十數人なれど、そが肺肝より出づる言葉に感じ、我れを忘れて聞き入る、外には折々木枯の音して、遠くの方に犬の聲さへ淋しく聞こゆ、机上にいけられたる白梅、蕾は未だ開かれど、淸く高き心を語り顏なり。

都の友の許へ

廣島　蘆田鶴

御池の汀をヴアイオリン肩にスラリと立たれし君の御姿、白魚と躍る双の御指、高く低く奏で給ひし別れの一曲、今も倘ほ其の哀音の餘韻長く私の胸をえぐる樣、追憶の淚は頰に傳ふて……、嗚呼丁度今夜の樣なさえた夜でしたのね——、今は雲二十里隔てゝ、君は都に我は鄙…、「八重の潮路は隔つ共變へじ變らじ永久の睦みよ」、と誓つた言の葉は、今も忘れで、幾度か、吁幾度か胸に繰返しました、花も恥らう美しの君がマガレットに、胡蝶と舞ふ紅燃ゆる巾廣のリボンかざして、ヴアイオリンのサツク片手に藤紫の御袴の裾長く、春風に長い雨の御袂靡して目白へ御通ひ遊ばす華やかな御姿、想像して、獨り微笑むこともあります、來んヴアースデーには是非とも ハイカツタその御姿をレンズに入れて御送り給ひてよ。

理想と現在と

京都　京子

文子さん御無沙汰いたしました、赤ちやんも日ましに御成人でせうも う、よくお笑ひになりますか、貴女も早や三人のお母さんね、私も御同樣お産迄が相前後して而かも男子二人に女子一人の數迄同じだとは、よくよくふしぎな御緣ね、そも／＼放蕩の幼稚園から學校を出る迄影の形に添ふごとく離れた事はなかつた仲ですもの、當然でせう、思へばあのなつかしい校庭の海棠の花臙脂の色も艷に咲きみだれてゐた下で、恩師の君と共に取つた記念の寫眞や、青柳の糸長き下陰に校長の君が最後の教訓に袖をしぼつたもはや一昔、もゆる胸いだいて校門を出た其時の理想と今の現實と、文子さんどんな感じがあります。クラスの秀才とうたはれた百合子さんは、理想のホームにまだお子樣はなく、いつ／＼迄も花々しき御姿で交際社會に雄飛して入らつしやる、其裏には内々ゴム輪で婦人科病院へ御通ひなさるとか、とても私等には物質上に欲を滿す程の物は得られませんけれども、精神上に於ける慰安と滿足、溫かいホームは愛らしい若草が生ひ育ちます。文子さんお互樣に 大切な身體です自重しませうね。

歐米諸國漫遊土產

法學士小西眞雄氏夫人 小西完子

小西完子夫人は伊丹の酒家として有名な小西家の當主、法學士小西眞雄氏の夫人で大河内子爵の令嬢、學習院女子部を卒業して小西氏に嫁し輓近夫妻相携へて世界漫遊を企て先頃歸朝したる人なり。

一、整頓せるシベリヤ鐵道

私が主人と一しよに世界漫遊に出ましたのは昨年の三月末、主人の同窓の方々が、多く獨逸や英國に居られるので、遊びに來いとすゝめられましたのが動機で夫婦同行を思ひ立ちました。往きは西比利亞鐵道で、歸りは桑港から太平洋の航路を取りました。シベリア鐵道の汽車の旅は、淋しいだらうと内々覺悟をして居りましたが、どう致して汽車が壯麗で、内部の整頓してゐる事は豫想外で、中で芝居も見られる音樂も聽ける其他の娛樂機關の整ふてゐるのには驚きました。

莫斯科へ一寸おりまして雜貨店を見ました時、その綺麗で壯觀なのに心を奪はれ、日本ではとても類はあるまいと褒めましたら、これから、伯林、巴里、倫敦紐育と次々へ立派なものを御覽でしたら、どうなさると、案内者に笑はれました。

最初に參つたのはベルリンです。町が綺麗で、屋並の整つてゐる事には感心致しました。こゝで三ケ月滯在致し、それから南歐の國々をめぐり、アルプス山も一萬尺の餘登りました。其序にライプチヒへ寄りましたが、はからずも大した事になつたのでございます。

二、夜會のクキンとせらる

私どもが來府で享けました歡迎會はルスマンといふ製革會社の持主によつて開かれました。この老人は大層な日本贔屓で、日本の美術品や骨董類を澤山集めて知己の人々に展覽せしむるのを樂しみにして居られます。丁度參つたのが五月の二十八日——日本海々戰の記念日で、ルスマン氏は、そのお祝ひを兼ねて、夜會

を開いて下さいました。私は西洋へ行けば何かの用で日本服が役に立つとおもひましたから、振袖を持つて參りました。夫れを着て出席しましたところが大層評判でした。處が驚ろいた事には女のお客は私、たつた一人。西洋の風習の通り、正座にすゑられ、右にライプチヒ高等法院々長、左にルスマン氏と云ふ調子になつて仕舞ひました。私、獨逸語はごくおぼつかないので、どんなに困つたか知れません。八時に始まつて十一時まで、色々の珍らしい料理が出ましたが、それをどうして食べるのか一寸分りませんで大分困らせられました。大分時間もたちましたからもう散會だらうと内々一と息ついて居ますと、急に樂隊が現はれまして夫れを先頭にして、パルメルガルテンと云ふ公園へ練り出しました。私はルスマン翁に手を引かれ、夢中で歩きますと、公園の中に、日獨塔と、東郷塔と申す大きな石の燈籠がありましたが、それを一週して皆さんが日本の國歌を合唱して下さいました。そして歸ると又ぞろシャンパンを拔いて宴會が始まり、代る〳〵席を立つて、私の前に來て、祝杯をあげられたのです。さうこうする内時は進んではや二時にもなります。私は席に居たゝまらず心臟の鼓動さへ劇しくなる位でしたが、席を外さうとすると、かの地の作法として皆さまが、私の手に接吻されました。中には片膝ついてなすつた方もありました。けれども其時は六十幾人といふ客ですから、全くのぼせ上つて仕舞ひました。宴會は誠に難有い次第ですが、御馳走になる丈けの準備のない私には全く地獄の苦しみでした。

三、佛國婦人と英國婦人

それから巴里へ參つて三週間ばかり滯在致しました巴里の氣質は獨逸などと、非常な相違で、あく迄賑やかに、あくまで綺麗です。しかしフランス人は立派な名刺を作りますが、用事がすんで歸る時には、それを取りかへしてゆくと云はれるほどなものです。外見だけ立派に奉さう〳〵としてゐて内實は却々吝だそうです。しかしパリ風俗と、ウキンナ風俗とはよく似通つ

た點が少なくありません。

私が一番感服しましたのは英國の婦人社會で御座います。一體に英國は着實で、高尚で、君子らしい國です。日本人の氣質にはどうしても英人がよく合ふかと思ひました。

巴里の流行は維納に入り、ヴヰンナの流行が伯林に參るのだと申します。欧洲の大陸諸國は、みんな佛蘭西の眞似をするに骨を折つてゐる風が見えますけれども、一歩海を挾んで英國だけは、どんなに劇しい流行でも、よく消化して英國化して仕舞ひまする。貴婦人のスカートなど、巴里では、直徑僅か一尺位のものが流行り、見ても苦しさうに、チヨコ〳〵歩いてゐます。その反對に帽子は非常に大きく、電車に乘ると、首を傾けても、出入に困難な程のを用ゐるのでありました。この風がロンドンに入ると、チヤント堅實なる英國風と變つて、スカートの裾は廣くされ、ボンネットは小さくされて、實用的のものとなりました。



英國の婦人には所謂美人と申す方が少ない樣です。貴婦人は白粉をつけず、禮儀正しく、家庭の女王としての威嚴は自づと具はつて居ります。ニヤケたやうな男子には誰も爪彈して相手にしません。外

貌より内心が堅實で態度の紳士らしく、雄々しいのを尊重し、氣骨ある男子を理想としてゐる樣です。

英國は人間ばかりでなく、その建物を見ても風景を見ても、みな重々しくて分が厚くて雄大でしつかりした品格を備へて居ります。詩人スコツトが妹と一しよに住むで、不朽の作詩をのこしたカトリング湖畔などは、幽邃で、實に昔の英國の面影が殘つて居ります。別莊を造るなら、こう云ふ處にしたいと、幾度思つたか知れません。

四、獨逸風と英國風

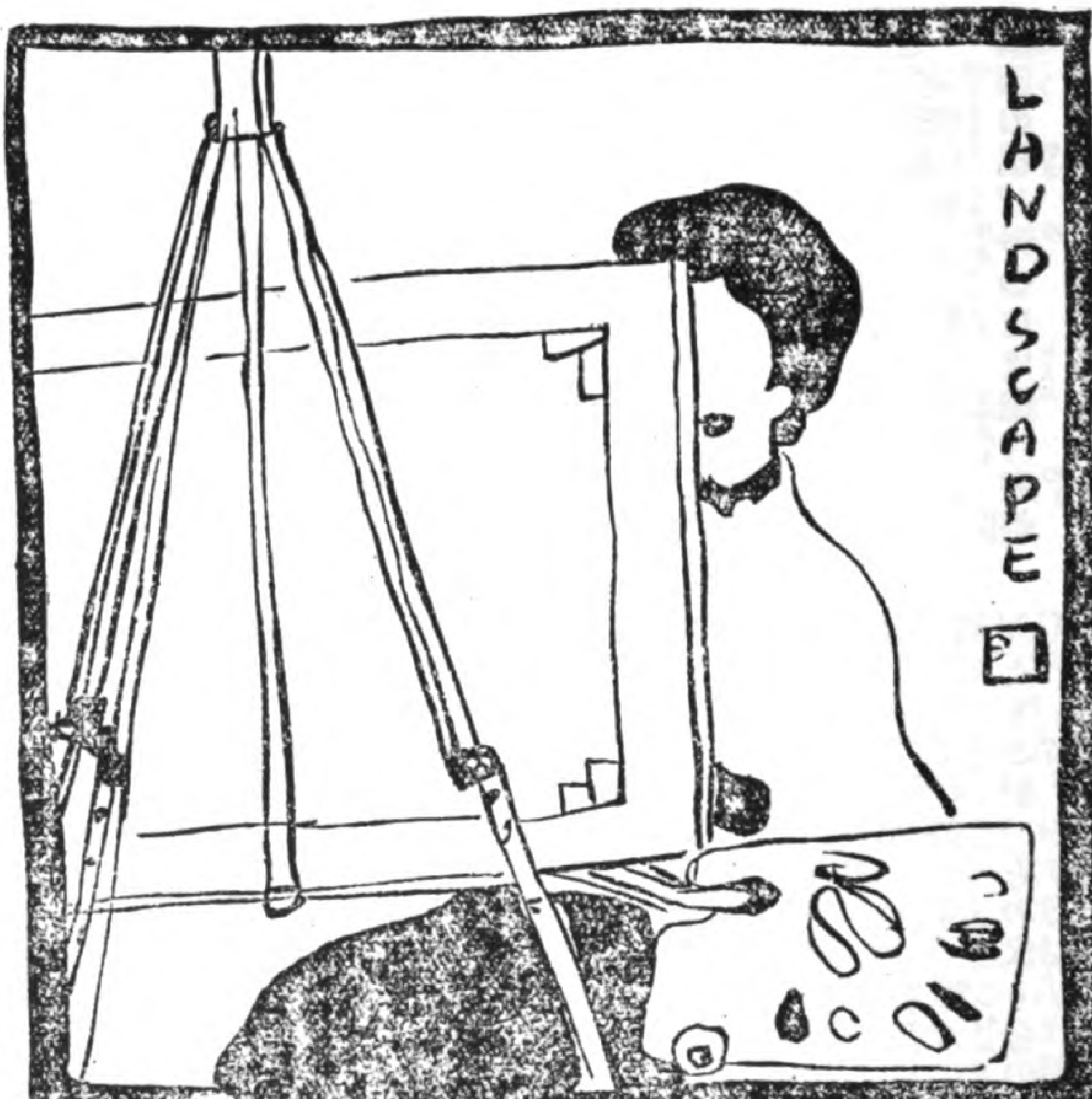
私の感じましたところでは獨逸人は何となく輕薄な樣で、信用がおけない感じがしました。寧ろロシア人の方が、眞實に親切で、且つ素朴の中に高尚なところがある樣に思はれました。しかも英國人の君子の風があるには叶ひません。英人氣質と云ふものは、はじめはどく調子のよくないもので、私共を御馳走に呼んでおき乍ら、握手をしやうともしませんでした。やがて食堂が開け、色々話をして見て、この人ならばと見込がついたので御座いませう。別れる時にはあちらから、手を握らうと致しました。見込みがつかなければ別れる時も全く握手しないとか申します。

英人は一度握手を交して交際の端を開きますれば、もうそれからは、百年の知己の樣になります。獨逸人なぞは初對面から、お世辭がよう御座いますが、其代り翌日すれちがつても、時と場合では知らぬ顏附をして居ります。

五、海外の日本婦人

ホテルの待遇は非常によう御座います。それは無論あちらのホテル業者の拔け目のない、商賣上手なにもよりませうが、一つには日本人の氣質がさうさせるのです。さうして日本人は金のない癖に其の使ひ方が綺麗といへば結構ですが、つまり荒い方です。歐洲のホテルで評判のよいのは米國人と日本人だと申します。此の點丈けは實にえらいものですが米人は元來無茶な

お金の使ひ方を致しますし、日本人は、よく勝手のわからぬ處から、且つは恥をかいてはならぬと思つてまあどうしても餘分に拂ふからでせう。汽車が停車場へつくと、赤帽は爭つて日本人の處へ馳けつけて來ますこれは賃錢を與へるのに大ざつぱで剩錢などを取りませんからでせう。シカシ米國人は落ちつかないそゝつかしい國民でありまして、日本人の方が沈着ですから一般の氣受けは日本人が一等よい樣で御座います。



海外在留の日本人の數はごく少なう御座いますので米國の西部をのければ日本人は到る處で珍らしがられ、尊敬をうけてゐます。別して婦人は大層重く見られるのであります。英國には郵船とか正金とか、三井とか云ふ大會社の支店が多い處から、その重役連の夫人も十人以上は居られますが、皆相應の年輩です。又米國を始めとして、佛、獨などの國々に在る日本婦人連は、まだ至つてお若い方ばかり中には婚禮後間もないのが多ございました。あちらにおい

での日本婦人は交際社界にお出かけになるのは殆んどありません。大使、公使、領事などの夫人は別として會社の支店長の奥様などは格別交際上の必要もありませんし、其上、日本人と西洋人とは、とても對等のつきあひが出來ないほど、富の程度が違つてゐます。何しろエルゼと云ふ日本びいきの後家さんさへ、大きな一軒の家を持つてゐるのに、日本大使館は、二階住ゐであると云ふ位ですからね、とてもお話にはなりません。たゞ一つアメリカの高峰博士御夫婦は、交際社會に打つて出て、花々しくやつておいでゞす——恐らくは　世界の日本人を通て、博士夫婦の様なのは、稀れな例でせう。尤も、博士は富もあり且つ夫人は米人ですからでせう。

六、劇しき流行と生活難

交際費がたまらないと云ふのは、一つには流行が劇しいからで、その移りかはりは實に目まぐろしい程で御座います。私が日本を出る時、鼠色の服裝が流行ると聞きまして新調しましたが、巴里につきますと、鼠色なんかはトックの昔の話、その時は眞ッ白なのが全盛を極めて居りました。鼠色では恥しくて外へ出るわけにも參りません。致し方がないから白いのを新調させましたが、夫れが、しばらくすると他の流行に移りました。萬事がこんな風ですから堪りませんよ。

生活費も國々によつて多分の違はありますが、日本からくらべてまづざつと五倍から十倍です。獨逸は安い安いと申し乍ら、先づ普通の部屋借が、朝飯だけついて、一ケ月八十マルク——ざつと四十圓ですもの。英國では一週間が四ギニー——即ち一ポンド一シルリングですから四十二圓ばかり、一ケ月百六七十圓につきます。一寸自動車に乘れば一時間幾圓です。右を向いても金、左を向いても金、迂かりして居ちや身代を棒にふつて仕舞ます。歐米の生活は溢れる樣に愉快がありまするが、その代り金の點では、なか〳〵窮屈で御座います。

七、米國から日本についての驚き

米國へ渡りまして私共は、其の規模の壯大に魂を拔かれました。佛國は華麗で、英國は堅實で、獨逸は武骨で御座いました。處が米國は思ひ切つて人目を惹く樣な事をしてゐるのです。紐育の摩天樓の我勝ちに立つてゐる有樣――丁度入港したのは夜でしたが、四十八階とかのシンガービルデングがイルミネーションをして居りました光景は一寸譬へ樣がありませんでした。まあ何と申しませうか、相模灘から富士山でも仰ぐ樣な心地が致しました。

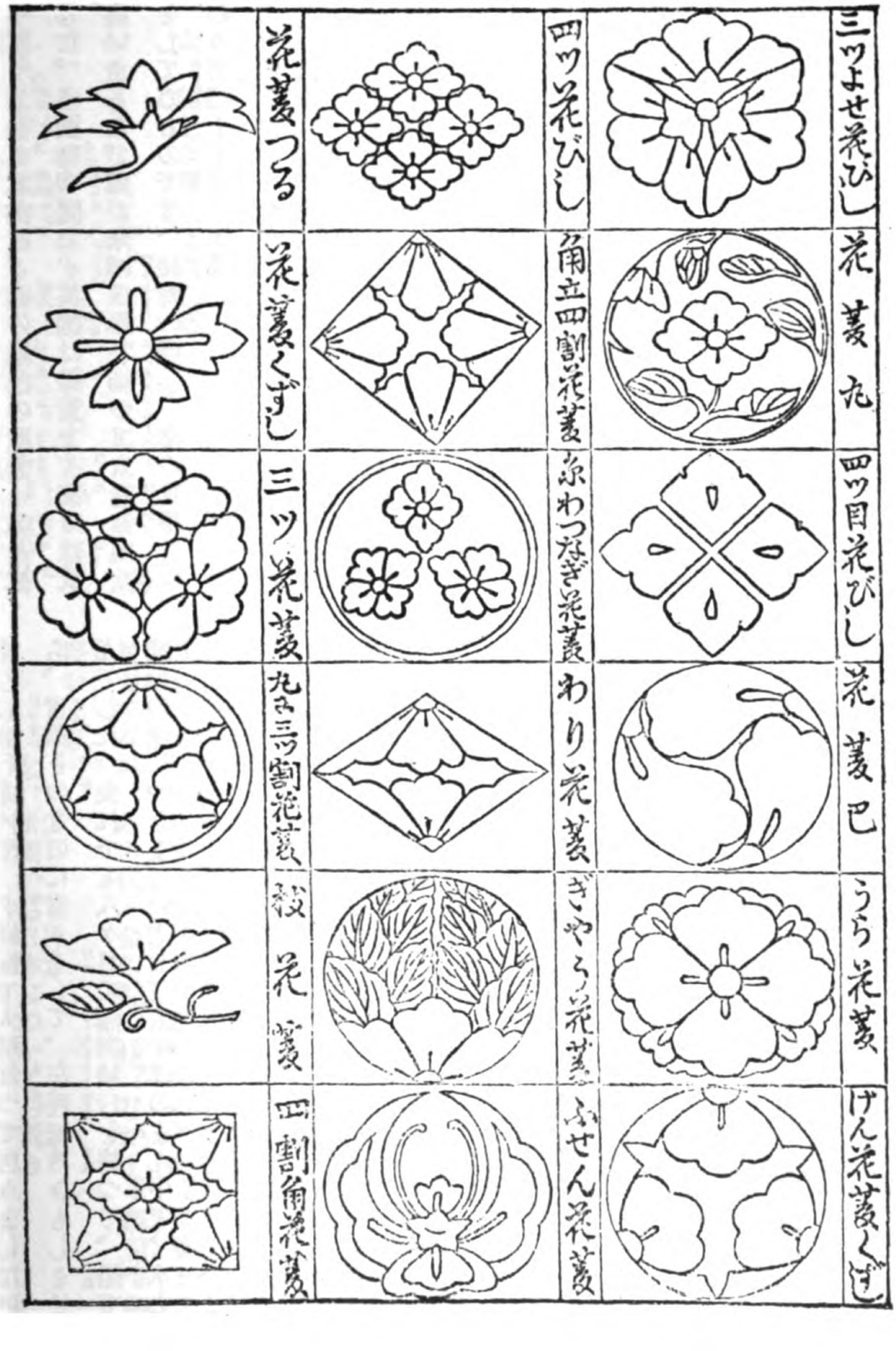
米國の男女には一定の型はありません。思ひ〳〵の風俗、思ひ〳〵の贅澤をつくして、賑々しく、騷々しく日を暮して居ります。皆さんがさう仰います世界で覇を爭ひ得る國は英、獨、米、そして日本であらう。日本は物質では一番劣つてゐるが、精神文明で補ふてこれまでやつて來た。これからは物質でも勝たねばならぬ。と聞きましたが、物質文明と云ふものを、私は米國で殘る處なく見る事が出來ました。

私共は所詮赤毛布旅行をして來たのに過ぎませんが幸ひに旅行案内や、名勝記で大略知つて居りましたから、實際そのものに當りまして、左程驚ろきもしませんでした。夫れでも八ヶ月の極樂旅行を終つて、船で歸朝の途につきましたとき、太平洋のまん中で、水と空とばかり眺めて考へて見ますと、まあお金は使ひましたが、よい學問をしたとおもひました。成程モスコーの雜貨店を褒めて、笑はれたのも道理、紐育のマーシャルフヰルドの雜貨店の十分の一にもおつゝきません。だん〳〵お仕舞ほど、大きく美しいものを見せられて、井の中の蛙が大海に泳ぎ出した時の感じと、獨りをかしう御座いました。

横濱につくと今更らしく、屋並の低くて小さくて往來のせゝこましいのが目についてなりませんでした。



花の意匠


三ツよせ花びし
四ツ花びし
花菱つる
花菱丸
角立四割花菱
花菱くずし
四ツ目花びし
糸わつなぎ花菱
三ツ花菱
花菱巴
わり花菱
丸に三ツ割花菱
うら花菱
ぎやうゝ花菱
紋花菱
げん花菱くずし
ふせん花菱
四割角花菱

畿内見物

高安月郊　薄田泣菫
蒲原有明　與謝野晶子　共著
淺井忠　中澤弘光　畫

京都の卷（再版）
大和の卷（新刊）
大阪の卷（近刊）

鳥子紙極彩色金文字箱入頗美本

正價各金貳圓　特價各壹圓五拾錢　小包料各拾貳錢

（三月號に特價壹圓とありしは誤植）

淺井忠中澤弘光二家の靈筆に成れる **木版彩色畫**（三十一頁）**原色版**（二十四頁）コロタイプ版（三頁）**寫眞版**（六十一頁）版）及無數の繪畫（木版及寫眞版）を挿入し高安月郊蒲原有明薄田泣菫中澤弘光與謝野晶子五氏が畿内遊行の美文を蒐めて濃麗高雅目もあやなること眞に出版界絶無の美本也今や百花蕾を破らんとし人皆遊行を懷ふの時畿内の勝景を酷愛し兼て美術文藝に趣味深き諸君は勿論繪畫修學諸君の座右姑くも本書を缺くべからず希くは淸鑑を給へ

著者	書名	版	定價	送料
井上哲次郎　蟹江義丸	日本倫理彙編	十冊	金拾五圓	小包七十五錢
河東碧梧桐	一日一信 三千里	再版	貳圓五拾錢	小包拾貳錢
與謝野晶子	春泥集	新刊	金壹圓	郵税六錢
二葉亭四迷	浮艸	再版	壹圓貳拾錢	小包拾貳錢
正岡子規	子規短册集	新刊	金壹圓	小包八錢
兒玉花外　中澤弘光	東京印象記	新刊	金七拾錢	郵税六錢
敎厚發堀	柳公權金剛經	新刊	金五圓	小包拾貳錢
須藤光暉	天覧台覧 愚禿親鸞	六版	壹圓五拾錢	小包拾貳錢
須藤光暉	天覧台覧 空海	再版	金貳圓	小包拾貳錢
須藤光暉	天覧台覧 法然上人	再版	金貳圓	小包拾貳錢
二條基弘　東久世通禧	天覧台覧 孔子之聖訓	四版	金八拾錢	郵税六錢
赤司繁太郎	基督教聖典	新刊	金壹圓	小包八錢
トルストイ	イエスキリスト	新刊	壹圓五拾錢	小包八錢
佐野天聲	簡易聖書	再版	金六拾五錢	郵税六錢
木下尚江	法然と親鸞	再版	金五拾錢	郵税六錢
京都大學内京都文學會	雜誌藝文	一日	金貳拾錢	郵税一錢半

發兌元　麹町區平河町五丁目五番（振替東京三八一七番）　金尾文淵堂

藏版書目往復端書申込進呈

女（その一）

少女世界

▽少女世界 第六巻第六號 増刊



菊判紙數百廿八頁

口繪石版眞寫版澤山

正價十錢 郵税一錢

女(その二)

○四月十日發行○

さくら草はやさしい花です。その花よりもやさしくて美しい少女世界の増刊號を御覧下さい。さま〴〵の面白い物語と、麗はしい口繪とは、必ず諸嬢に深い感じを與へることゝ信じます

◉花ちる下‥(口繪の色版)

◉二度刷眞寫版……八ページ

(記事)

▲少女對話 芝居狂……巖谷小波

▲少女雑感……沼田笠峰

▲當選の少女小説……

▲學校だより ▲少女の日記

▲昔のクラスメート ▲卒業紀念

▲花の窓より ▲野より都に

その他、文章、和歌、俳句など、さま〴〵の有益な面白い記事があります。賣り切れぬ中にお讀み下さい。

東京 本町 博文館

女(その四)

□□ 冒險世界 第四卷第六號 增刊 □□

當世學校生活

大判紙數百廿八頁 口繪石版寫眞版入 ● 四月十五日發行 ● 定價十五錢 郵稅一錢五厘

タッタ十五錢で東京の學校の活事情がスッカリわかる本！

トムブラウンの「學校生活」と云ふ本を讀んだ人は、あの汚ないラグビーの寄宿舍が、どんなに英國の文明につくしたかを知るであらう。年を經て舊師アーノルド博士の墓參りをした、名士の心の内は定めし昔を懷ふ情が溢れてゐたらう。現代の學生諸君は次の時代には、日本を背負つて立つべき人々だ。その學校生活はどんなものか。お互に研究して見る必要があらう。それはく碎けて面白く書いてあるよし！

立志小說 書生一代記
押川春浪

- ▼赤門より一筆 青學者
- ▼學校亡靈譚 潮風生
- ▼各校ぬすみ聞き 天魔生
- ▼四疊半の王樣 神田生
- ▼早大豪傑 潜龍窟 △△子
- ▼神田諸校評判記 ……
- ▼東都の運動界概況 ……
- ▼圖書館の評判書類 ……
- ▼陸海軍の四校 天風生
- ▼最近の慶應健兒 KO坊
- ▼スートム記 一高生
- ▼現代名物書生番附 ……
- ▼各校の秀才錄 てうふう
- ▼私學不平集 理詰屋

最新最詳 東都學校案內記
河岡潮風

口繪＝東都諸校の實況みな新たに寫せしものを集む！

東京 博文館 本町

女（その七）

齒の衛生

醫學士　石原　久

近來我國に於て、齒の健全な人が甚だ少なく、且つ次第に齒の悪い人が增加する傾向を呈して居るが、世人はこれに對して餘り注意を拂ふて居らぬやうである唯一口に齒ぐらゐと思ふて居る人が多いやうであるがこれは最も恐るべき現象で、一日も等閑に附すべからざる問題であると思ふ。

△齒と健康の關係

食物が口に入ると、齒は之を嚙み碎き、唾液は之を潤して胃に送る。そこで胃は忽ち消化液を出して之を消化し、更に之を腸に送り、營養分は此處で吸收せられて全身の營養となるのであるが、若し其食物が口中で十分咀嚼されない時には、それが胃に行つても消化液即ち鹽酸の分泌が少ない。其の爲に更に又腸に送られた時に、腸にある黴菌は忽ち其内に繁殖して食べたものは營養分とならないのみならず、却て其れが爲めに病を起すことがあるので、齒と健康とは非常に深い關係を有つてゐるのである。或は直接に疾病を起すに至らぬ迄も、食物の營養が不十分であれば、身體は貧血して段々衰弱に陷り、其の爲めにやはり種々の疾病を起して、遂に斃るゝ事がある。

多數の子供に就いて發育の不十分なものを診察すると、齒牙の不健全なるものが其の大部分を占めてゐる而かも之れは多くは親達の不注意に原因してゐるやうである。世の親達は小兒の齒が腐蝕することがあつても、何うせ拔け代るものだからと云つて捨て置く人が多いやうだが、之れが恐るべき結果を他に及ぼす事が屢々あるのである。私の診察した或る小兒は非常に貧血で、如何に滋養物を與へても効がなかつた。醫者は一意專心に消化機の治療を施したが、衰弱は依然として恢復しなかつたが、適々齒醫者の注意によつて齲齒の治療を受けて見ると、齒の疾病が治ると同時に、胃腸の病も癒つて、身體は非常に壯健になつた。

△初生兒の齒の注意

初生兒に齒の發生するのは大抵七八ヶ月付頃からである。最初は下顎骨の前部に二枚の齒が發生し、次で上顎、其の左右と漸次に發生して、凡そ三十ヶ月目には上下併せて二十枚の齒が生える。乳齒と稱するのは即ち之れである。それから六歳頃になると、此の乳齒の奥に、又上下左右各一枚づゝの齒が發生して、乳齒に代りて消化を補助するの準備をなす之を六歳臼齒 又第一小臼齒と稱する。それから七歳頃になると、乳齒の齒根が吸收せられて齒牙は自然に脱落し、其の跡に新しい齒が發生して、こゝに齒牙の交換が始まる。此の際注意すべき事は、六歳臼齒の甚だ疾病に犯され易い事である、もし此の齒が十分役を務めないとなると、乳齒の脱落した時に咀嚼を司るものがない是非なく異常な咬み合せをなして、是れが爲め時によると下顎骨が前に突出し、或は上齒が所謂出ツ齒となつて、醜き容貌となることがある。のみならず、第一大臼齒が病ひに罹ると、十二歳頃に至り第二大臼齒の發生した時、忽ち之れに傳染し、次で他の齒牙をも悉く浸蝕するのである。

また乳齒にして疾病に罹つて、齒牙の硬組織内に包藏してゐる齒髓を腐蝕せしめると、齒牙交換の際に、齒根を容易に吸收しないから、ために乳齒は自然に脱落せず、從つて新たに生ずる齒は其の前後に生えて、八重齒或は犬齒となり、不整頓なる配列をなして醜き所謂亂排齒が出來る。そして此の亂排齒は最も疾病に罹り易くて、彼の蟲齒といふのは斯る配列の齒に最も生じ易いのである。

△齲齒の恐るべき事

昔は、齲齒は小さい蟲が齒の中に浸み込んで齒を喰ひ減らすものだとか、或は黴菌の作用によるとか、或は營養狀態によつて口中に酸類が分泌して腐蝕せしむるに至るのだとか、色々に言つたものであるが、當今の學說によれば、齒の表面或は隣接面に食物の殘屑等の汚物が附着すると、細菌の働きによりて乳酸の醱酵を起し、此の乳酸によりて齒牙を組織する石灰鹽が溶解せられ、殘りの蛋白質中へ口中或は外氣中にある他の無數の黴菌が浸入して、蛋白質を消化して泥狀となし、漸次に齒髓まで腐蝕するので、其の爲め激しい疼痛を覺ゆるのである。

元來齒髓は血管や神經に富有なる軟き海綿樣の組織である。夫故に齒髓の曝露したる時には少しの刺戟にも忽ち充血を來たし、疼痛を起し、頭痛、眩暈、肩のこり、消化不良、便秘、腦神經の衰弱、ヒステリー、等を起し、甚しきは精神に異常を生ずることがある。之を齒狂と稱する。其他齒牙の腐蝕が遂に齒膜に達す

れば、疼痛が最も激しくて、四十度以上の發熱を來たし、骨髓に炎症を起し、顎骨は化膿して所謂骨髓炎となり、是より膿毒症や敗血症を起して死することは隨分稀ではない。時によつて、病毒が神經或は淋巴管や血管を傳ふて眼球の後部に膿瘍を形成し全く失明する事がある。或は反射運動によつて一時的失明を來たし或は顏面神經に痙攣を起さしめ、耳鳴、耳痛を伴ひて一時的に神經作用に變化を起さしむる事が往々ある。

△西洋の面白き奬勵法

小學校に就いて兒童を調査すると、百人中七八十人は腺病質のものである。元來腺病は結核性のものと考へられて居たが、齒疾に原因して顎下腺や頸腺の腫れるものが其の大半を占めてゐる。是れは齒髓の壞疽に陷りし時、其の毒素が淋腺を刺戟し、或は種々の病原菌が侵入して之を腫脹或は化膿せしむるのである。歐羅巴に於ける結核豫防會議の報告によれば齒牙の疾病と結核とは、密接の關係を有してゐる樣である。人體の發達は齒の發達と反比例を示して居る。衞生上の智識發達して食物に人工を加ふる事の進むに從ひ、齒の作用は次第に減じ、遂に之を退縮せしめて、疾病に罹り易くなるのであらう。結核豫防會議にては、殊に之れに注意し學校生徒の齒牙に深く注意を加ふることになつた。近頃歐洲にては齒牙の發育を好良ならしむるために、特に幼兒をして黑麵包の皮の如き硬きものを嚙ましむる事が行はれてゐる。誠に不健全なる齒牙は消化機を損ひ、身體を衰弱せしめ、腺病を起して結核の導火線となるのである。

△口中の不潔な産婆

また近來出産時に於て、産褥熱を起すものが增加して來た。産褥熱には種々なる原因が存するも、産婆の口中の工合が與つて力あることを發見した。ゲツトマン氏は之れにつきて調査した事がある。氏は廿六名の産婆及び同數の補助者を集め、其の口中を檢したるに、此等の婦人は皆悉く口腔不潔にして、疾病に罹り、或は義齒を用ゐてゐた。まて氏は彼等をして各々一メートル、即ち凡三尺三寸を隔てゝ黴菌培養器に向ひて談らしめたところ、二百七十乃至三百づゝの種々なる黴菌が其の内に繁殖したと云ふことである。更に九尺を隔てゝ試驗せしに、尙五十乃至百餘の黴菌を發見した。然るに口腔を淸潔になし再び一メートルの距離に於て試驗せし時には、十乃至六十の小數であつたと云ふことである。されば産婆の口の淸不淸は病毒の傳播について、大關係ありと云はなければならぬ。特に不潔なる唾液の飛沫が入らないとも限らぬから。妊婦は産婆の選擇については此等の點についても注意を要する次第である。

△齒の淸め方

不潔なる口腔は、黴菌の巣窟である。其の状態は膿中の内容物よりも猶ほ不潔である。故に能く注意して其の消毒を行はねばならぬ。先づ毎朝三十八九度乃至四十度位の湯にて含漱をなし、ブラッシにて縦横無盡に能く磨り、汚物を除去し、且つ食後及び就寝時に於て之をなさば、大抵清潔を保つ事が出來るであらふ。ブラッシは毛の粗く柔かき物を用ゐ、毎時之を乾かすやう注意し、歯磨粉は餘り屡々用ゐぬが宜い。在來の歯磨粉は往々歯の琺瑯質を磨滅し、爲めに害を來す憂がないでもないから、歯磨粉の選擇は甚だ必要である。小楊枝は餘り烈しく用ゐない様にせねばならぬ。時によりて之が爲に病症を起す事がある。これは柔なる物を選び、金屬或は角製の物を避け、先の尖らざる薄く扁平なるものを用ふるが宜い。

義歯を用ふる者は、毎夜三十七八度乃至四十度の湯にて之を洗ひ、冷水につけて翌朝含漱後、又洗ひて之を附くるやふにしなければならぬ。歯齦粘膜の老廃物或は他の汚物が之れに附着し、遂に腐敗して非常な惡臭を發し、之れが爲めに却て營養の不良を起し或は刺戟の爲に彼の恐るべき癌腫の原因となることが屡々ある。

歯牙の疾病は前述の如く恐しい結果を招く、兵役は歯牙の不健全なるものを用ゐない。然るに歯牙の病氣は年々増す様である。されば我が國民をして健全ならしめ、國威を發揮し、益々進歩發展せしめんとするには、歯及び口中の衛生もまた忽にすることは出來ないと思ふのである。（右は明治母の會講演の概要也）

◎寶玉は永久の財産

寶玉は元より高價のものでございますが、併し其價値は幾年經つても少しも變りませぬ。否その燦爛たる光輝は子々孫々までも、一家の財産として傳へることが出來ます。のみならず榮華久しきを願ふは、總ての人の情ではありますが、變轉極りなき人生の、若し不幸にして不遇の境界に立ちました場合にも、一小粒の寶玉は、好く其持主の急を救ふことが出來やうと思ひます。此點から申しても、寶玉は強ちに奢侈品にはあらで、立派な財産として見ることが出來やうと思ひます。社交界に立つ貴婦人方が、其身分に應じて寶玉を身に鏤めらるゝことは、強ち奢侈ではありますまい。

外科室の印象

患者の憂悶と醫員の活動

清水濱子

○

手術は今終つたらしい、脊の高い看護婦が準備室のドアを開けて、「只今濟みました、患部から膿が澤山出ました」と、言葉少なに云つて外へ出て行くあゝ矢張り化膿してゐたのだと、始めて我に歸つた。

副室に扣へた四十分、隨分待遠しかつた。晝夜の痛みに疲れ〳〵た病兒は、手術の何は知らず、只痛みのとれるを願ひ、早く〳〵と早朝から看護婦を促がし、迎ひの運搬車で手術室へ運入たのは四十分前である。

係員の外、入るを許さない手術室の様子は、知る様も無いが麻醉劑をかけるのであらう「臭い〳〵取つてくれ」と、泣き叫ぶのも束の間、其聲が段々聞えなくなつた。

嗚呼、今や愛兒の患部に刀の閃めき、と思ふともう堪へられ無い、鼓動烈しい胸を抱いて其處に蹲んでしまつた。

鼻を衝く麻醉劑の香、カタンコトンと響くのは、靜かに動く看護婦の下駄の音か、機械の盤に觸れる音が寂とした手 術室の寂寞を破つて淋しさが胸に沁み通る。

一時も早く無事に濟めかしと、祈りつゝ又立上つて人無き室内を無意識にゆきゝする。

ガラス越しに狹い庭が見える。芝生の緑色美しく緩い春風に金剛纂がそよ〳〵と招く。

ドアが開いた、覆面をとつたばかりの手術服の儘なる外科長は、濃い血膿の入つたガラスの膿盤を持つて「此通り澤山出ました、病名は急性骨膜炎、腹膜の極く傍まできてゐました、萬一病勢が其方へ進めばむづかしいが、左様云ふ事の無い限り、ちと長びくでせうが全快します」と、明瞭言はれた。

不治のカリエスにもあらで、長びくとも、全快する

とのお言葉が暗夜に光明を認めたやうに嬉しい。
後ろで看護婦が「坊ちやんのお召を」と云ふ。用意の衣服を渡す。
今麻酔から醒めた病児は、母さん〳〵と呼ぶ。死だものが生還きた様に思ふ直ぐに運搬車で室へ歸る。
やゝ整つた室の内、枕元の瓶臺にはガラス入りの金魚が置てある、積重ねた手遊箱の上へ、好みの金柑の籠入りをのせ、枕の下に油紙を敷て小さい金盥を傍に置く、さいはい吐氣もなく、口が渇くので頻りに氷を求める、無論食欲は無い。
日脚が大分廻つてパタ〳〵と廊下の行來が繁く炊事場の厨爐が盛に鳴る。
朝から見舞はれた、二三の親戚も手術後異狀が無いので一先づ歸へられた。
看護婦は験温をして日誌を持つて診察場へ行く。體温三十八度五分。
水枕して氷袋置て、うつら〳〵疲勞に眠る病児を見守りながら、良人は柱に寄つて深い息をついてゐる。
まだ耳なれぬ蒸氣の音が妙に胸に響いて病院の淋しさを感じると同時に家に殘つてゐる子供らの上を思ふ。
静かにスリツパの音がしてドアが明いた。科長とT先生の特別廻診、一應診察が濟んで何か看護婦に注意せられ「異狀は在ません」と輕く會釋して出て行かれる。

○

枕元の花瓶の櫻と菜の花がほのかに香る。
咲續く菜の花道見渡す麥生は青嵐をたゝへ、昇る雲雀の聲も長閑けき古郷の春を思ふ。
熱發、又熱發、親の欲目にも衰弱が見える。骨膜炎夫だけでも輕い病で無いのに筋炎まで併發した切開せねばなるまいと昨日科長が云はれた時は、全身麻酔は出來ず、局部の麻酔でこの衰弱した幼ない身が堪へられやうかと思つた。
もう九時過ぎ「昇降器を上て下さい」と看護婦の聲がする、診察が始まるのであらう、時計のセコンドが

身に迫る樣で堪へ難い。

今朝は珍らしく御飯が甘しいとて二椀食べた、此頃の習ひで朝飯後うとうと眠る、眠り乍らも繃帶交換の厭苦が氣にかゝると見えドアが明くと目を開らき迎ひに來たかと泣聲になつては又眠る。



午後に妹が見舞に來る、カードと躑躅の造花を貰ふカードは大層氣に入つて大喜び、ネーブルを剝いて病兒も少し食べる。

○

掃除を終つた看護婦は窓を明けて室內の空氣を入れ替へる。

霞棚引卯月の空はどことなく長閑で、花の香送る春風に蝶が一羽ヒラ〳〵と、櫻の盆栽に止つた。

長らくの病苦で神經も過敏になり僅かの事に癇癪を立て隨分無理を云ふのを厭な顔もせず親切にして下さる看護婦には感謝せずには居られない。

今日は換帶が早く濟んだ、熱も無く氣分がよいので大木さん(看護婦)に雜誌を讀で貰つたり、御話しをして遊んでゐる。

うら〳〵と陽炎もゆる樣な春の日は室内くまなく映して、掻卷の芭蕉模樣が鮮やかに、黒ビロードの襟に顔を埋めう〳〵としては苦さうに呻吟めく又熱が出るのでは無いか、と案じられる。

午後四時大木さんは檢溫して無言で氷袋を持て室外へ行く。

○

夜中に偶然目が覺めた、枕元の時計を見ると二時十五分氷袋と水枕を替へてやる、熱も下つたらしい、瘦れた横顔が電燈のほかげでいとゞ蒼ざめて慘はしい。

枕を替へ氷袋を置くと心地よげに寢返りして又眠る昨夜は看護婦も起し詰所へも行て貰つたが今夜は樂と見え能く眠る。

醫員當直室の電鈴が深夜の寂寞を破つてけたゝましう響く。何處にか重症患者が有ると見える子の上か親の上か付添の家人の心を察しながら床に入る遠くで氷を碎く音が寢られぬ枕に響く。

○

手術を受てから凡そ六十日も病院生活をしてゐたので大分日が永い海蠃廻しも輪投げも厭きて運動に行ふと云ふ。久留米飛白に黒メリンスの兵兒帯昨日散髮したので顔つきも大層よく成つた。

幸ひ敗者には成らないが、怪しい腰つきでスリッパ履いて娯樂室へ行く。

小鳥の嘴ばむのを見たり、雜誌の口繪を擴げたり池の金魚にビスケットを與つてゐると外科診察場の前は大變な人立だ、何事かと聞くと受付は顔を顰めて「大變です足を一本めちや〳〵にした患者とても助らないでせう。」

恐い者見たさにそつと覗いて見ると血浸みた仕事服

を着た男氣息唵々として鮮血淋漓たる身を戸板の上に横へてゐる、外科室は活動を始めた。

今日の當直は美髯の先生、手術服を腕まで捲り用意甲斐々々しく驅血帶をとつて大腿の止血をして居られる。傷部を檢して責任の大なるを感せられたか面に懸命の色が見える。

患者は頭を冷させ土氣色の面乍ら時々目を開く、印半纏を着た付添の二三の若者は額の汗を拭ひながら、低く力ある聲で「確乎しろ傷は淺いぞ」と氣を落させじと口には云へど輕らかぬ此負傷者の安否を氣遣ふ憂の色が見える。嗚呼助かるかしら妻子も有うに氣の毒なあの足は什麼成るだらうと人事ながら氣が揉める。



廻診を終つて豫診室の椅子に掛けられた外科長のT先生は看護婦の報告を聞いて

「外傷患者?諾」

と徐に立上つた、いかにも落付た態度でスリッパの上に下駄を引かけ看護婦の手も待たず油紙のエープロンを掛け「小池フルスは」と注意を與へながら手の消毒をしてゐる。

外科長は傷を改め付添の若者に向つて「誰か患者の親戚の者は居らんか」「ハイ遠方から來た者で當地に親戚は御座いません」「夫では會社の重立た人を呼で貰ひ度い」言はれて印半纏は急いで電話室へ驅けて行く。

治療室は臨時の手術室と成つた

機械室から手術機械を運ぶ人ガーゼ罐を下げて來る人、消毒藥を手荒く作る人、手洗臺を運ぶ人、注射器持つて行く人。

活動！目覺しいもので有る、十人餘の看護婦は側目も振らず沈着に而かも手敏こく各々其任務に就く。午後の日光は引絞つたカーテンを斜に治療室の夕、キを鈍く照す、機械を消毒する蒸氣釜がシユー〳〵と悲しい音をたてる。

向ひ側の娯樂室ではカチン〳〵と玉突の音賑やかな笑聲が聞える、そこは樂しいゲームを爭ひこゝは生死の境である。

科長は再び治療室へ這入る

其處には最早光り輝やく機械が、機械臺の上に、順序よく並べられてある、あの櫻炭を切る樣な小形の鋸あれで足を切るのかと思ふと胸も轟く、S氏が脈膊を取り、Y氏がエーテルの麻醉を始めた、一滴！二滴！あゝ患者の心中は什麽であらう、凡ての準備は整つて治療室のドアは締められた、治療室から洩れる強いエーテルの香、患者の呻吟き聲。





慈善會へ行つて見た記

婦人記者

△社交の花

今日は役員會久々で出席して見樣。回章には一時からと有たけれ共いづれ此土地式の時間だから一時間は大丈夫と澄し込んで二時から出掛る新調の單コートを初着して。二月の風は烈しく頬を刺す。暫く御無沙汰してたから何だか勝手が違つた樣に思ふ門を入ると突當りの玄關脇に人力がおりてる而も田舍には珍らしいゴム輪だハヽア會長さんだなと思て入る綺麗に並んだ下駄は色樣々に美を競ふてゐる其片隅に後向きにぬいで上り手袋をコートの袂に入れ肩掛と共に掛るズラリと並んだコートの數は十八九こゝにも女の命より二番目が競爭してる廊下を通つてると奥樣入らつしやーいと聲を揃へて憐れな孤兒が紅葉の樣な手をついて我養ひの親を迎ふア、不幸に生れし可憐の者よ子を持てる身は一入あわれも深い賢いねおとなしいねと土產の菓子袋を置いて役員室へ行く、障子を開ると數多の眼は一齊に此方を射る、靜に末坐に着いて會長さんから銘々へ御挨拶、ヤアお珍らしうとは理事兼會計の田邊さん、相變らず人懷敷い笑顏に、銀髯をなでゝ、役員の方々へは略して御一統にて濟す、マア暫くの間に早や知らぬお顏の方々も澤山になつてるから驚く、これを見ると擂鉢などはまだしも井底の蛙と云ひ度位、四方は山で包まれて何處からと現代的風潮の入つて來る處のない此土地でも、やはり進歩して居る者と見えるそれに此頃は旅團が出來たからお陰で將校夫人があでやかなお姿も見受られる樣になつた、目覺める許りの

御化粧に、輝く裝ひの姿を見ては、目を見張り、マアものお頭、あれがハイカラと云ふのかしら、着物も燒のを借着してる樣だとは嚊樣連の目引、袖引、井戸端會議の種となつてる、其も其筈十五六ではや處女の誇とも云ふべき肩上げを取つて世帶じみ子供を生んでは親の顔が鬼に見えるからとて惜氣もなく綠の眉を剃り落す等一世紀も二世紀も遲れた此土地だもの商店に電氣の光を見る樣になつたも二三年來、まだに牛肉を嫌つて鍋を別にしたり、ランプを恐れる御隱居樣もあるとか、而し會へでも御出ましになる方々は違つたものだ、そんな遲れた周圍を見下して超然と進んで入らつしやる方許りだもの。新しい方々はきつと將校夫人に相違ない、お互に名刺の交換をする、田園夫人の集りだつてマア酷いいくら井蛙だつて咲くに變りはない社交の花々紅に業に咲き誇つて居ますものを。

△會來の品評

窓を背にして向ふから手招きして入らつしやるは富さんだわ、後から廻つて側へゆくと、マアこれへお坐りなさいよとて、私の手を火鉢の上へ引き寄せなさる互にかざした手と手、マア恥かしい、私の世帶に荒んだ赤い人参の樣な指と、細根大根の樣な指にルビーの輝く富さんの手と實現と虛榮との道づれの樣だ、而し恥かしい等とは過ぎ去つた昔の夢よ、さめた私の心は決して何物にも惑はされぬつもり。保姆がお茶と菓子と運んでくる、オヤ保姆も變つてるよ（一寸保姆が變つてね）と富さんにきくとハア（今日御披露がある筈よ）と指でお顔をさしながら（美麗でせう）（ほんとに何處の者でせうまだ若いわね）（十八ですとさ羨やましいわねと一度あの位の年になつて見度わ）いつ迄夢見て入らつしやる富さんだらう。

Ａさんはと見ると丁度此方むいて私を見て入らつしやる目と目が通ずると、互ににつこり、ＢさんはＣさんと御話し最中、皆それ〴〵氣の合つた人と、火鉢を挾んでやかましく言葉の花を咲かしてる、中には口角飛泡的の方も有、富さんは私の膝を一寸つきながら

(アノ郡長の奥樣から二番目の眉の濃い方ね、黒縮緬のあれが憲兵隊長令夫人園田さんよ)(マアさうお幾ッ位でせう夢二式の方ね)(あれで三度目の奥樣ださうですよ)(オヤ……Bさんの向ひのルイザ巻の方は)(ありや例の別莊に入らつしやる山内さん)(へーえいつか新聞の一件の御主人公)(お聲が高いわ)(末席の方は京町の洋物雜貨店のお神さんぢやなくつて)(さうよ)(よく入會してねえ保守的な家だのに)(そこは貴女商戰方略といふものよやつぱりそれ奥樣方とおなじみになつておくと大變店のお品も違ふ勘定だわね)(成程ねホヽヽ)



△會長の資格

皆の騒がしさをジッと眺めて始終ほゝ笑み給ふ會長の君お年はたしか五十お幾ッと承つてゐる、それでも十は若く見える、澤山なお毛には白い筋一本見えす、上品な束髪にくつきり、白いお顔は眉の邊り開けて大きなお眼、細面には不釣合なお鼻、口元にこぼるゝ愛嬌が大きなお眼を柔和にして、三十年の昔がしのばれる、プローチのダイヤに黄

金鎖燦たる腕輪と共に、さすがに旅團長令夫人のお貴格は十分だと拜し奉る。此方は又下風町のチャンとも云ふべき流行界の寵兒頭の頂邊より足の爪先きに至る迄一分のすきもないのは岩田さん、旦那樣は當時株式界の覇王と歌はれて飛ぶ鳥落す勢力、金に飽したお身なりは慥かに會長の君と一對して、會の明星であるお里は都に名高い料亭で其愛娘であるとか垢ぬけのした粹な奥樣振りいづれは金が言いふ世の中會の會計も半ばは岩田さんで持てゝるとは有位の奥樣方でも金の前には頭は上らぬア、あさましき浮世哉。

△今日の決議

もう大抵お揃いになつた樣ですから今日の決議の件を申上ます尙是を御覽下さいと罫紙へ書いた物を廻された、見ると（一）保姆の披露（二）履婆交代の件（三）顧引の件である。田邊さんは鬚髯をひねり乍ら（前の保姆が辭任してから保姆なしで居る内に御承知の通り、長官に不意に見舞はれて思はぬ面目を失ひました、それ故急に探し出して岩田さんの御盡力で今の人が參りました、當町某の娘で高等小學卒業の履歴ですが、こゝ等の保姆には澤山でせう月給は相變らず五圓です皆樣御異存なければ辭令を渡します、今時五圓位では來る人がないですからね）と皆忽ち賛成した。次には履婆の交代、あれは此度婆さんの方から暇を貰ひ度と申出たです、これには深い譯の有る事で、其内容は書記の町田と、婆との暗闘が基となつてゐます、殆ど猿と犬ですな、婆はあの通り口喧ましやで、其割合手が働かない、幹事の方が見えぬと拭掃除もせぬ有樣、で町田が書記の威をしめさうとすると、婆は古參者だから新米者の町田が何をとの氣が起つて、どうも二人の仲がよくない、是と云ふのも監督が十分に出來ぬからだらうと思ひます、毎日お二人づゝ交代で出席下さるべき幹事の方々が、此頃では一人もお出ましがない樣で如何しても雇い人任せでは旨く行筈がありません。

オヤ〳〵遂々御鉢が廻つて來たわ、互に顏見合せて耳が痛い等とさゝやいてる、何處でも雇人難はまぬか

れぬと見えるア、うるさいものだ。

△御寺と慈善

多數決で婆さん解雇と決する銘々の錢入が開いて三十錢づゝ前に置れた、集めて見ると四圓餘五圓に足して謝禮金とする。婆を呼んで皆の前で當らず障らず圓く解雇の宣告を下す、これ等はどうしても世なれた岩田さんの技倆にまたねばならぬと感心した。

今度又福引でもしてはとの提議がありますが、皆樣のお考へは。去年の福引には非常に好評で一舉三百圓程會へ金が入つたから今年も又する



と云ふのであらうが、每年さう旨くゆく物ではない、まして物品の寄附から賴まねばならぬものを。

（去年は發會でしたね、簞笥と長持とが一番呼物になつて）だが物品の寄附を賴みに歩くのがねー、ほんとにいやですわ、少少でも出してくれる家はいゝんですけれ共、まるで乞食扱ひにされる處があるんですものこれでも相當顏の有奧樣方が頭を下げて賴みに行くんですのにねー私所はマアお斷りですなんてやられるとほんとに馬鹿々々敷なりますわ。

ほんとに此地の人は頑固ね舊弊崇拜な人許

りだからこんな事業等は大概ひそれに女の癖に出しやばつてと惡口してるのですもの。
妙な物ですね金滿家でも志の無い家とさ程でなく共濟山寄附してくれる家も有ますわ、お金許りは法の力でも動かせないものです。
それにお寺氣狂ひですよヤレ講金だの法要だのつて隨分お寺へはをし氣もなく入れるんですもの今度の智恩院や本願寺でも大變なものね坊さんが參拜せんか參拜せんかつて進めに來るんですよ一番下等の參拜料が二圓ですつて此地等の團體は八日ださうです幾百萬と云ふんですから大したものでせうね其爲に梅小路ステーションが出來た程ですもの。
私の家は宗旨も何もありやしないからいゝわ。
なんで又進めになぞ來るでせう諂り度人はお諂りするんですのに。
それがねー本山の方からお前の寺からはいくら寄附せよお前處はいくらと皆末寺へ寄附の高を割あてゝあるんですつて、ですもの坊さんだつて堪りませんわせいせい進めて其寄附の金を拵へねばならぬですもの。
地獄の里も何とやら、ほんとにお寺樣も商業ですね
アノ宮川のお春さんね今度智恩院へ五百圓と敷石五十枚の寄附ですつて、マア。
今時の生臭坊さんにそんなに入れ上げたつて坊さん墮落の資本を貢いでる樣なものですわ。
死んで行事ばかり考へて無形の極樂とかを願つたつてつまらないわねー。
こんな時ですからとても福引の寄附を頼みに行つてもだめだと思ひますがと田邊さんは延期を主張なさると皆樣も雷同して秋迄延期と決した。
春の日足は長いけれどはや硝子障子を通して薄暮のほめきが迫る。それではこれで閉會と致します、皆樣御苦勞でした。雛樣然と坐つて入らした會長さんも坐を立たれた、ゴム輪の車は音もなく門の外へ。續いて奥樣方の敷石を踏む下駄の音。奥樣さようならと誰れな孤兒の聲が淋しく背からしみ込む樣だ折から五時の汽笛が空にひゞいて靜な町はくれかゝつた。



和歌



一等

○　大阪　花子

この日ごろ何ともわかぬかなしみを君にかくれて泣く身となりぬ

評、若き人妻の、やさしき悶へを歌ひ出でたる筆なるべし。

二等

○　名古屋　森井せき子

むしろ帆に夕日うすれて木曾川の両岸一里さくらちる也

評、光景躍如、書も及ばず。

二等

○　川越　綾部登美子

夜毎々々うり上しるす矢立ふで昨日は戀のうたもかきしが

評、鹽原多助の妻などが、婚後數日の感慨にも似たらむかし。

三等

○　本郷　佐久間千代子

窓をもる灯影うすれて白梅もおぼろにけぶる春雨の宵

評、情趣掬すべく、美くしとも美くし。

三等

○　大森　もゝ代

雁の音に小袖縫ふ手のたゆたひや櫻散るらし朧夜にして

評、雁の音に小袖縫ふ手を留めて、忽ち思を戶外に馳すれば、月朧にして落花あり。春愁殆ど堪ゆべからざるものあらむ。

三等

○　下谷　斎藤くちなし

つらしなど思ひしおのがさだめさへ忘れて過す日の多きかな

評、人情自ら然り。

秀逸

○　東見　都美子

逝きし母を慕ふ妹をなぐさめて小雨ふる夜を添寢するかな

評、讀むもの、同情一掬の涙なきを得ず。

○　横濱　原　瑠璃

ものがたりふととだえたる時を降るみぞれまじりの夜半の雨かな

評、着想面白く、聲調亦又堅實、敬服の外なく候。

○　石見　登　志子

苫舟の話もうとくなりゆきて灯くらく春の雨ふる

評、前者と相比すべし。

○　對馬　小森谷　松江子

まつはれる貧のうちよりちさう笑む心のくまのやすけきほこり

評、其誇りを貴むべし。

○　廣島　加藤　かほる

白壁は柳の蔭に見えずなりて小雨に暮るゝ江南の村

評、水彩畫の如し。

○　富津　い　と　子

つぼみそめし庭の櫻に身をよせて春の夕べは人戀ふによし

評、下句殊に妙。

○　靜岡　野　の　花

流れ來る花の筏に蝶とめて春の女神の戯れ事嬉し

評、題の新鮮を採る。

○　横濱　小豆澤　四枝子

菜花畑すぐれば白き海みゆる松の林の中のわが家

評、宛然畫、

○　白金　二木　こま子

空は蒼く地は八千花のとことはに偉なるかな我が歌の國

評、豪宕。

○　三島　遠山　雪子

キャラバンの駱駝の群の雲に入りて霞むともなし砂の海原

評、埃及邊の光景ならむ歟。

佳　作

○　赤坂　塚田　ひで子

一もとの名無し小草もほこらじの春は小さき榮えにほゝ笑む

○　栃木　片岡　孤子

うつくしき新鞍おきて躑躅咲く垣につなげる栗毛の駒

○　東京　中川　しげ子

人さます夕にしあれば野にのこる雪をみつゝもしづこゝろなし

○　岩代　長谷川　吉野子

小雨ふる浮世小路の春の宵桃割二人柳潜くゞる

○　深川　紅　梅

花しばし衣をあざやかに散ると見つあゝかへらずよわが微笑は

○　千葉　加瀬　喜々子

春の海潮の遠音も春めきぬ少女も笑めりされど寂しく

○　牛込　平塚白百合

沈丁花高にさゝぐるものとしもこの少女らは覚えそめしや

○　越後　田鶴子

うちふるふ唇かみて涙しぬ妻なればこそ女なればこそ

○　伊豫　白帆

顔高に傘さしかけて立つは誰ぞ小雨そぼふる春の夕べを

○　北多摩　北園美子

午道の影は霞に消えゆきて月に残れる草笛の聲

○　越前　野口凉子

あたゝかき春日のもとに咲く花の色美しき君なりしかど

○　本郷　つゆくさ

花まけば花にむつれて散しけりにくし犬の子うちてやならん

○　三河　山田静子

たが筆の何のすさびか人の世のいろさま〳〵の彩り模様

○　札幌　俣野恭子

ひる下り鶏なきて女学の寮舎並ぶ白壁の家

○　京橋　菅原雪江

待ちわびし花もや咲くと春雨の空たのめしてふる日かすかな

○　大阪　野村鶴子

白蝶はやさしくまひて花なつむ少女のうへをひとまはりしぬ

○　駿河　許尾たか子

こみどりの駿河の海に潮来節流るゝころよ南風は吹く

○　布哇　浅海薫の人

[illegible]木色なるが鉄柵に倚りて咲きゐる朝の径行く

○　佐賀　岡　芳子

蠟燭を添へてひとり詩集を繙き居れば疲れし文机に梅が香匂ふ

○　伊豆　深谷せい子

朧夜や酒くせ悪しき車屋のみめよき娘京に売られぬ

○　紀伊　山田松子

香煙のゆらぐ御前に卒業のしるしさゝげて終日を泣く

○　尾張　野村眞名

看護婦の衣更へて行く後ろ影日毎見送る病院の門

○　大阪　田中れん子

王朝の人のこひしき夕月に梅の花ちる玉のきだはし

○　三河　石野くに子

ほろ〳〵と庭の垣根にまた一つ亡き人愛でし椿こぼれぬ

○　本郷　横田佐久

母なくてこの廿歳を草深き田舎の乳母の家に育ちぬ

○　四坂島　渡邊梅子

[illegible]ながら君はおとなび過ぎ行きぬむらさきにほふあけぼのゝ道

○　牛込　渡邊妙子

ともに見しひがん櫻をなき人にたむくる今日のうらめしきかな

○　京都　岩田弘子

いぶかりし師說の物意解しとけり紅梅おぼろ松明の灯見て

○　京都　船島なほ

渡ります女神の装いかならんいみじく奇しき虹か彩橋

○　新舞鶴　片山春香

先淋の裾模様の夜着かろく夢見る稚子の笑み美しき

○　岐阜　西郷芳子

ともすればすさび勝なる我心いづちに行きて明り求めん
○　下野　白楊

うす紅の花の灯かげもうちしめり病室のさまものあはれなり
○　加賀　館久田鶴子

その昔母に別れし風して君を送りぬ黄昏ときに
○　米國　大池龜惠子

打ち笑ひ双六を友囲むらんわれは異境に一人なく夜を
○　廣島　美和

千代ふともいかで忘れんわたつ海のそこはかりなき君の恵を
○　神田　岡田すみ子

温泉の街をひとりあゆめばそことなく硫黄の匂ふ春のゆふぐれ
○　京都　高木夕濱

灰色の壁に身をよせ我は泣きぬ屑上のなきあとをさぐりて
○　上總　木島芳子

おだやかに夕べの鐘の鳴り渡る海岸町に春雨の降る
○　神戸　桐原みつゑ

よべの雨少し晴りし其縁に奥静もえて桃の花さく
○　越前　吉田うめ子

金扇を持ちて教師の舞の子はちさくうたひて藤花を行く
○　函館　南ふみ

もしほやくはまの煙もなびきあひて浦わ深くもかすむ夕ぐれ
○　清國　清水眞久子

死の病ペスト流るる北支那にあゝはらからか色ひさくひと
○　麻布　濱子

三日月のほのかにかすむ夕ま暮丁字の花の香りなつかし
○　名古屋　田邊さは子

いくちひろ空にみだれて糸遊のゆく方しらぬ春の長閑けさ
○　麹町　高賀ゞ琴

いとし子よと姉は笑まひぬ抱きし手に赤き毛糸のふさたれ下がる
○　福井　伊藤愛子

朝ぼらけ霞こめたる下京や紅屋が門の柳けぶりて
○　長野　柳田稻子

朧月夜芝居歸りの里道を打ち興しゆく若人のむれ
○　深川　佐久間貞子

きり〳〵と帆くる音して夕暮の風なき海は白く光れり
○　長崎　塚野登子

入日さす波も色よし雲も美し沖ゆく船子漕ぐ手とゞめよ
○　伊勢　三井さへ子

聞えつゝ經し廿とせを黒髪はわれにふさはぬたけとそなりぬ
○　豐後　水江晶子

うつくしうぬるゝもおかし春のあさ小雨の中を花賣る少女
○　高松　美藤靜代

金扇に面かくしてはつらひし島田うつくしき十七の君
○　横濱　増枝

眼閉つれば君が姿のおほろげに小暗き野邊をひとり行く見ゆ
○　京都　福島直

ゼラニユーム若き十五の思ひ出を語るか如く淡紅にさく
○　朝鮮　佐藤白花

三尺のきせるくはへて驢馬にのり花野を通る朝鮮の人



俳句

武田鶯塘選

天

焼石に淋しき雨や萩萌ゆる　廣島　小松さよ子

地

梅未だ杣が假屋に春寒し　神戸　山本愛子

人

館の春や小琴に掛けし絹薫る　越前　梅が香

秀逸

象に乗りて上洛の使や春長閑　肥前　隈部よし子

鳩の羽にあたゝかみある日和かな　京都　高木夕浪

舞ふ男雛謡ふ女雛や桃の御代　横濱　長尾はる子

勅使参す御陵の朝や東風渡る　長崎　林田まさ子

管絃の果てゝ櫻の月夜かな　盛岡　佐藤京子

行く雁の啼いて野山の朧ろ哉　北豊島　赤羽みどり

小雨やうめには小さき鉢二つ　宮城　鈴木菊枝

散る花を踏が悲しき桃見哉　大阪　寺部琴子

馬車馬の白きをつなぐ柳かな　尾張　榊原みれ

スカートを持つ手美し春の宵　近江　中村清子

茶所を開く町の灯の湖に見ゆる　紀伊　田植登美枝

春浅き飾り俵の埃なり　香川　猪熊蝶子

もみうらの人形の衣ほす日かな　新潟　岩本芳子

乳搾る牛一聲や鐘霞む　小石川　越沼夏子

駄馬にしく峠三里や風薫　福岡　井上かつ子

東風吹くや絹糸うれる針の山　香川　大井裕子

春風に飛行器試す廣野哉　丸龜　まつのゆき

焼残る小松の中や雉の聲　和泉　北野くま子

白酒に静もの丶花の浮びけり　兵庫　岡本　あさ
唄ふ人泣く人もあり春の雨　紀伊　上田まつへ
桜散るや馬にまたがる美少年　奈良　内田　孝子
土堤ゆく里の輿や嫁の供　釜山　靜　子
冴返へるこき口紅のからびかな　大阪　佐々木かよ子
留守の戸を叩けば笑ふ梅かな　三島　遠山　雪子
隣見に来た振りもせず梅貰ひ　伊豆　深谷せい子
暮おそき日のます客の湯殿かな　香川　猪熊さい子
菜の花の畝二筆や線引手　青森　藤井紫煙女
釣る人の船に音あり春の水　京橋　菊　枝　女
水の京に染糸洗ふや春浅し　大阪　ま　こ　と
春風や平等院の桃寒し　島根　青　柳　女
春の旅緑なき宿をなげきけり　芝区　北野きよ子
押絵師の似顔つくるや春の宵　栃木　波多野まさ子
凧もなく吹き廣がるや春の風　麻布　鈴木寿惠子
話すこと多き桜の散る日かな　大阪　森　月見
しら梅に瀬の音とほき月夜かな　紀伊　山本すがえ
石切の鑿も疲れて囀りす　麻布　小倉ふみ子
書読の音の光や春の雨　三河　山田　静子
廣き野や人三すに霞鳥　横浜　稲毛たき子
白酒やちよくに残れる紅のあと　大阪　栗野　光子
旅の人と奈良の町見る春の宵　越後　東樹喜勢子
裾裏のすれ音床し若菜つみ　新潟　東樹　常子
母親の小鏡に匂ふ梅かな　奈良　河原　町子
出代りの下女に取らする小袖かな　紀伊　山田　松子

遠山に石材を伐る霞かな　兵庫　吉田　よし
鵯越や源氏将軍の旧跡　牛込　三橋こう子
嵐山の霞に急ぐ野馬かな　牛込　菊　如
髪に鉄なまゐらする男雛　市ヶ谷　富田たか子
紅裏の袷衣に春の宵寒かな　伊勢　角田千代子
鳥の巣の野溜り水も温みけり　長崎　服部ふじ代
とがむれば梅折る人の歌よみて　越前　山口　靜枝
雛の主乳母にむつかり給ひけり　牛込　日高きみ子
残る雁行く雁名残りつくるばや　肥前　服部　信代
新領の歸順の民や雁名残　長崎　荒木つき子
つばめまちて古巣のちりを拂ひけり　長崎　深見つゆ子
漁くれて網干す浜や春の風　福島　鈴木　久野
病みてます夫痛ましや花の暮　岐阜　今山　ちゑ
登り行く女同士や春の山　小樽　渡邊　秀子
匂ふ娘のかゞみに香あり宵の春　深洋　しづの女
春風や青菜うりの聲なふく　横浜　中田　雪子
山吹のなはといてやればみだれけり　小樽　古藤　てる
春風に舞へ〱孫の風車　大阪　木山　綾子
暇去りに迷うて梅の月夜かな　下野　片岡　濱子
御座近く神官召すや椿の実　福井　西山　正子
秋は田を耕ふ溝や三葉芹　神戸　入　重　子
虻鳴くや頻りにうごく驢馬の耳　麻布　吉田かつ子
公達の弓の稽古や糸柳　旅順　田中きよ子
春の水澄んで紅映く小星かな　奈良　坂本鹿の子
浮れ男の月の朧を小謡哉　旅順　山本やすえ

家庭に於ける小兒服裁縫

梶原久聞吉

△寸法を測る心得

此頃子供服の作り方を知りたいと言はれる方がよくありますから、當時流行の極く簡單な服の作り方を一寸述べて見ませう。之はルンナンプラサスと申して、圖の如く男女の間はず着用の出來る服で、非常に快活な最も愛らしいもので、仕立方も簡易であります。地質はカシユメヤでもフランネルでもよいが、成る可く派手な色を選んで作り、前も後もソナに截つて、左の前に卸釦として革のバンドを輕く前へ廻して締めるものです。此の寸法を測るには豫じめ左の事柄を知らねばなりません。

1 襟廻り　これは首の周圍をいふのです。
2 總丈　これは襟附から裾の折目が少し隱れる迄の長さ。
3 胸廻り　これは腋下の周圍を乳の邊の最も太い處で測ります。
4 袖丈　これは袖附即ち肩の下から手首迄測るのです。

此の寸法を測るにはインチテープといふ布へ白ラツク塗にして麗く目を盛つた吋尺が要ります。それが無い時は曲叉は鯨尺に直してお測りになつてもよろしく結果は勿論同じであります。今寸法を左のやうなものに假定します。

胸廻り　二十四吋、總丈　二十四吋、
襟廻り　十二吋、袖丈　十一吋、

小兒服を裁つには先づスケール即ち胸格といふものを定める必要があります。是れは胸廻りの半寸、即ち二十四吋の胸廻りとすれば、其の半分即ち十二吋へ、更に一吋を加へた十三吋を胸格と名けて型紙を割出す基礎とするのです。故に型紙を作圖する説明に、胸格の半寸といへば、前の寸法の半寸で、六吋1/2に成ります。三分の一といへば四吋1/3に成ります。これは素人方には面倒でせうから、紙を十三吋に切り、三分の一は三折にし、六分の一は六折にし、四分の一は四折にして用ゐれば便利です。此の折れた巾を型紙の線を引く處へ當てゝ記しを附ければよいのです。紙は新聞を繼ぎ合せても間に合ひます。其の外直角尺といふ四角に線を引く道具が必要ですが、是れも菓子折の蓋の樣な四角な物が有れば間に合ひます。

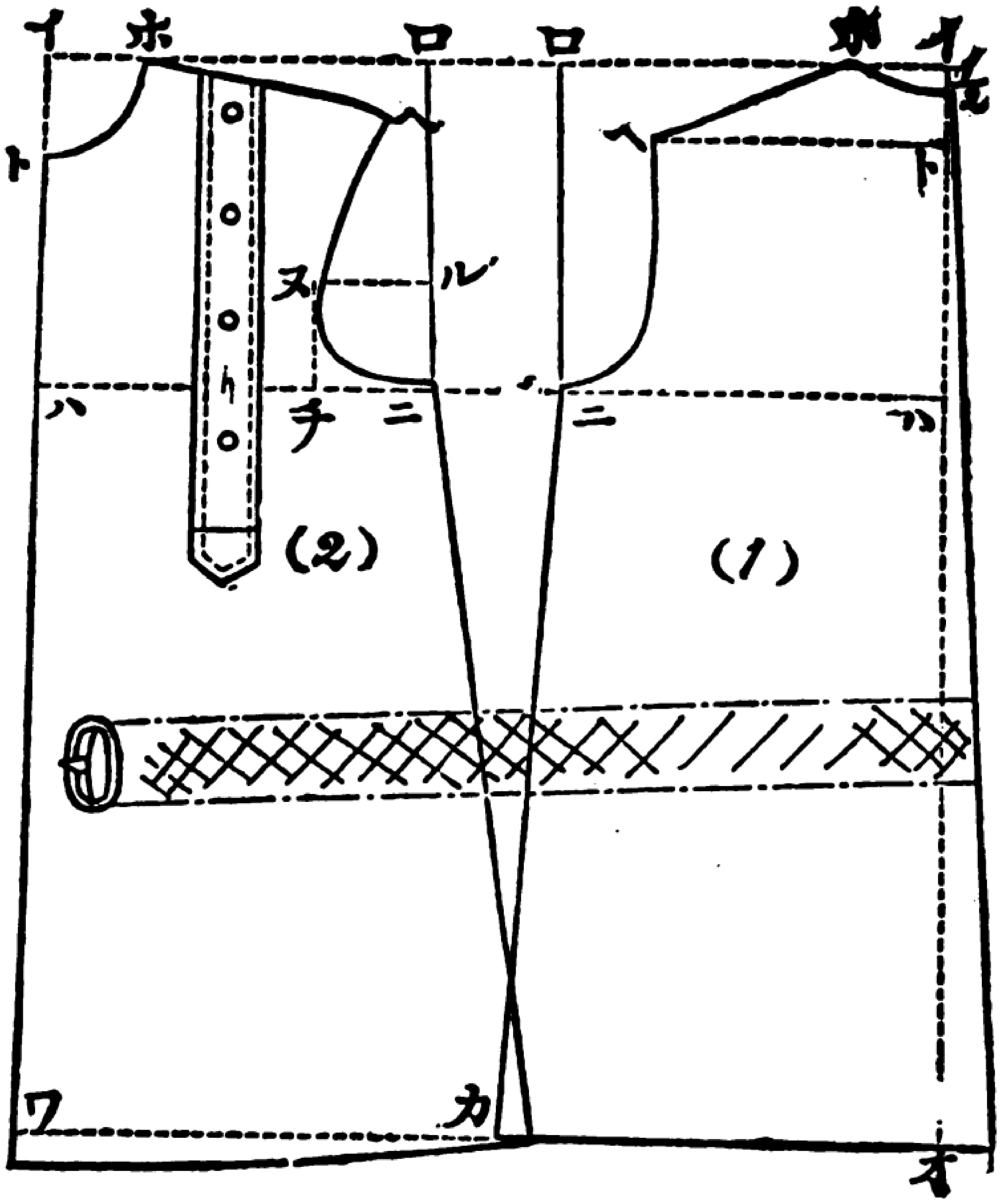
△背部の型紙

第一圖は背部の型紙で、此圖を引くには、イからロ迄と、イからホ迄とへ直角に鉛筆かチヨークで線を引きます。イからホ迄は總丈で廿四吋イからロ迄は胸格(十三吋)の半寸へ又一吋を加へた寸で都合七吋1/2で、イからハ迄は胸格(十三吋)の半寸へ1/2吋を加へ都合七吋で、ハから二迄はイからロ迄と同幅でニからロへ線を引て置きます。イからホ迄とイからト迄は同寸で襟廻り(十二吋)の六分の一を用ゐるので即ち二吋です。イから1/2吋下つた處からホへ圖の如く少し刳た三数の線を引きます、ト

からヘ迄は胸格(十三吋)の三分の一に一吋を加へた幅で凡そ五吋半程に成ります。そこでホからヘ迄少し剰た肩縫目を引き、而してヘから二迄図の如く腕穴を作ります。オの線から後へ一吋帯てイから背筋の線を引き、オからカ迄の幅をハから二迄の幅よりも三吋廣くしてカから二へ脇縫目の線を引きます。是れで背部は出来たのです。

△前身部

第二図の前身部は又イからロ迄とイからヲ迄へ直角に線を引きます。イからヲ迄の総丈は背部のイからオ迄の総丈より一吋長くします。イからロ迄は胸格(十三吋)の半すに一吋を加へたすで即ち七吋半で、イからハ迄は胸格(十三吋)の半吋に1/2吋を加へた寸即ち七吋であります。ハから二迄はイからロ迄と同寸で、此の二からロへ線を引て置きます。イからホ迄とイからト迄は同寸で襟廻り(十二

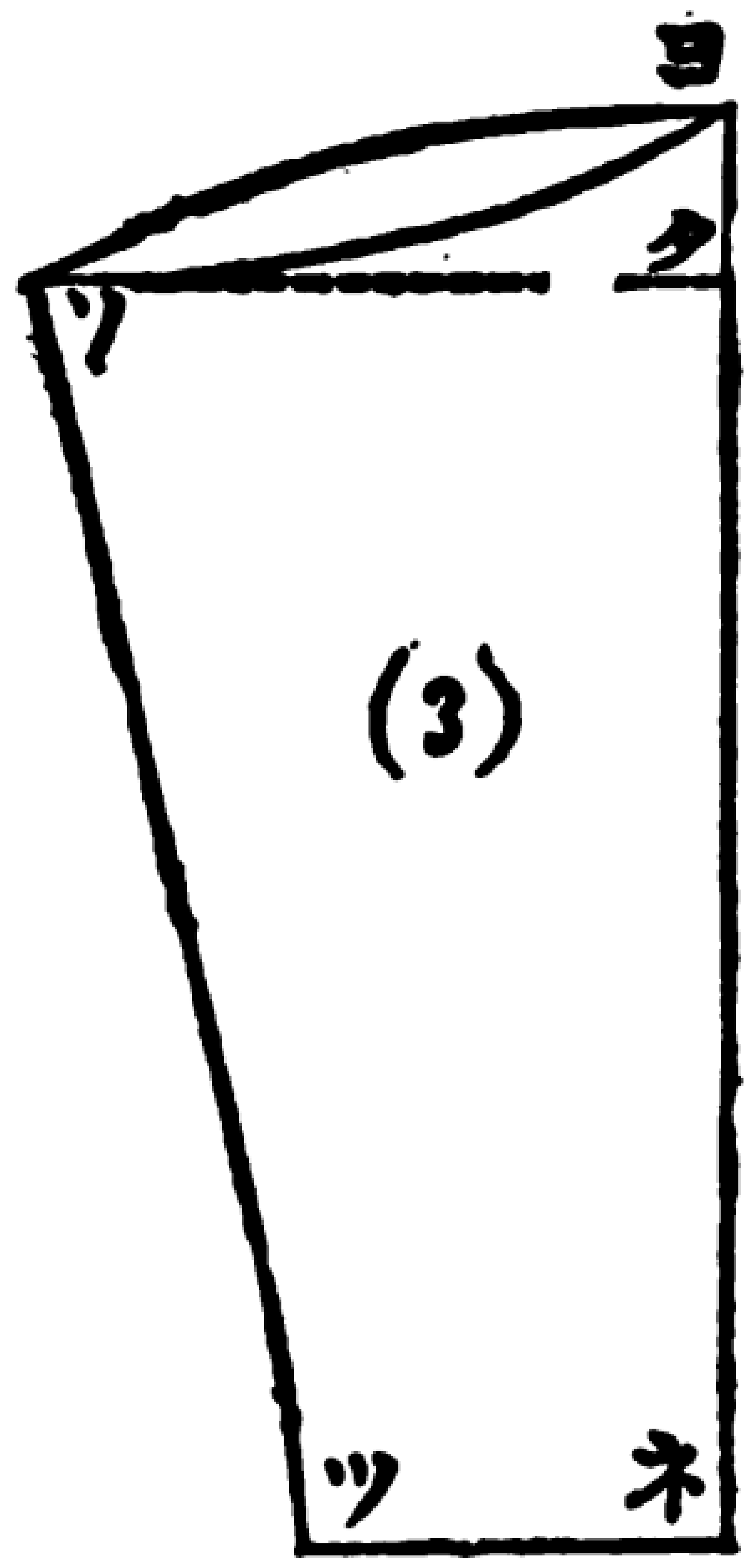


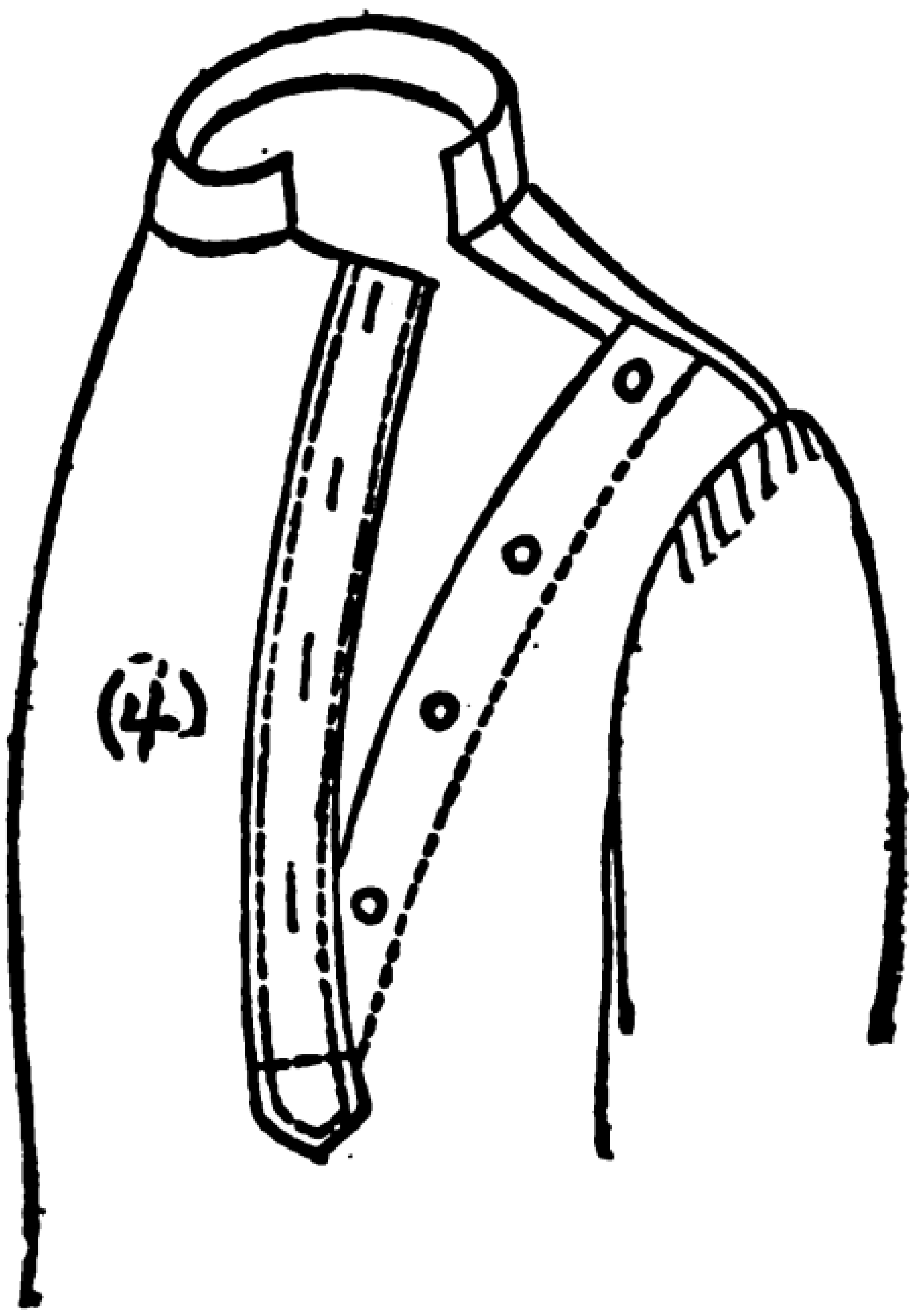
吋)の六分の一即ち二吋で有ります。ホからトへ図の如く衿刳の線を作ります。ホからヘ迄は背部の肩縫目なるホからハ迄と同寸で、ヘはロからホの水平線より一吋下つた処であります。ニからチ迄とニからル迄とルからヌ迄とは三ヶ処とも同寸で胸格(十三吋)の六分の一即ち二吋或は今少し狭くして二吋1/4位にしてもよい。そこでヘからヌへ掛て図の如く二迄腕穴の刳を作ります。ヲからカ迄の幅はハから二迄の幅より二吋以上三吋迄廣くしてカから二へ脇縫目の線を引きます。是れで前身部も出来たのであります。

(注意)背部のイからオの外の線迄はヲナ地質から裁ちます。前身部のトからヲ迄もヲナで有ります。夫故有る時肩が通らないから地質を裁つた後此のヲナを開いて左手の力へ出来上つた図の如くホから一吋帯て下のカへ十吋切明けます。

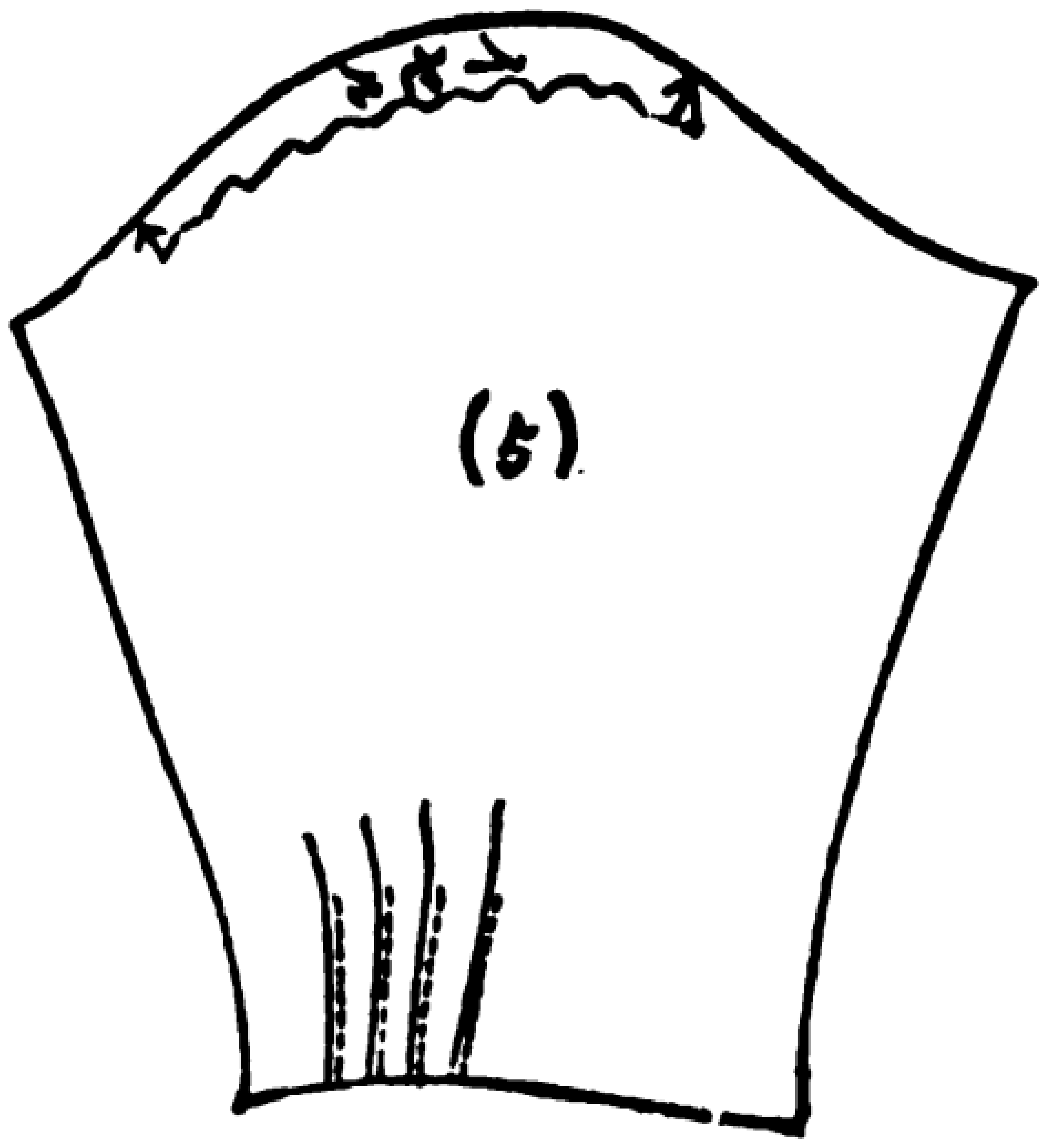
△袖

第三圖の袖はシャツの樣な裁方で、先づヨからネ迄線を引き、ヨからメ迄は胸巾(十三吋)の六分の一より少し多くして二吋1/4にします。メからツ迄は胸巾(十三吋)の半寸に1/8吋加へて七吋にします又ヨからソへ圖の如く少し圓みを附て線を引きます。これは前身の方へ附ける部分で、少し離た線を引いたのは背の方へ附ける部分に成ります。メからネ迄とソからツ迄は腕下寸で十一吋乃至十二吋位の丈にします、袖口のネからツ迄は胸巾(十三吋)の三分の一で凡そ四吋1/2で、此のツからソ迄圖の如く線を引けば袖の型は出來上ります。此の袖もヨからネ迄の線は地質を裁つ時にワナで採ります。



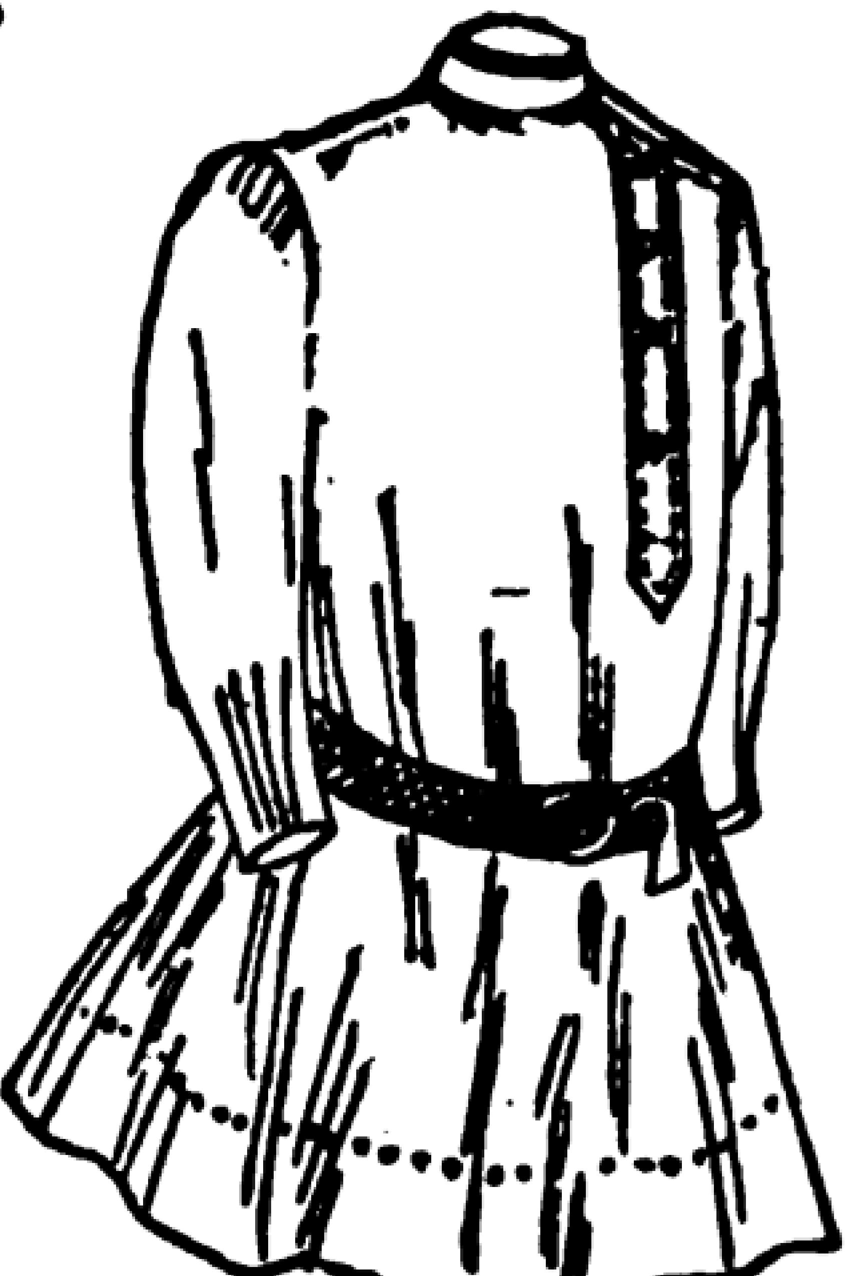


地質の採方は品物に依て一定出來ませんから背筋と前身の中央と袖の中央とはワナで採る樣に型紙を掛みて何尺何寸で採ると見込を立てゝ地質を買はぬ無駄が出來たり採れないやうな事が起ります。

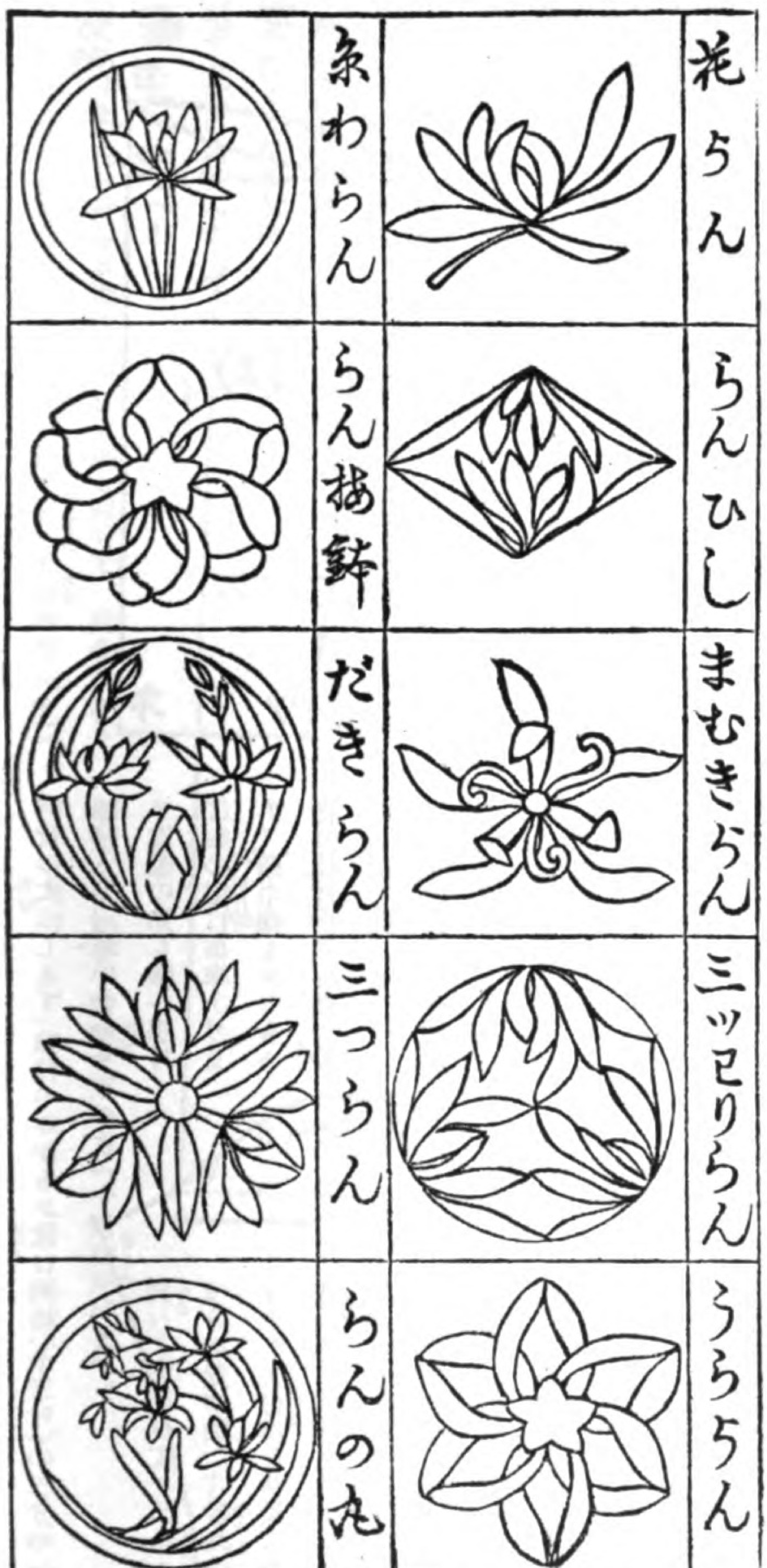


△縫方

縫方は單純なもので圖で見ても解りますが一應説明致します。先づ單衣ならば脇縫目を片返しに縫ひ、端飾のミシンを掛けます。厚い地質ならば縫ひ割ります。冬物は裏を附ける



蘭の意匠



から割放してよし。

第四圖の前身の釦掛にする處は、圖の如く幅折上り一吋1/2巾位に成る樣に三吋半程の巾に裁ち、左り前に釦掛にする故、右手の方が上前に成から、上前へシャツの前のメッの樣に乘せて縫ひ附けます。下前は一吋巾の物を裏の方へ附けて釦を附ける力裂れにします。そこで脊部の欄附へ寄った處へ竪裂れを持出しに附け、前は圖の如く裏へ見返しを少し附けて、襟は巾上り一吋位にして左の肩縫目でホック掛にします。

釦穴は四ケ處明けて、裾は單衣ならば三吋も裏を折返してミシンを掛けます。袷は裾を一吋も見て縫ひ返せばよし。此の裾の折返し尋は型紙より長くして置くのは勿論であります。第五圖の袖は口先を圖の如く三四本襞を取り、下袖を縫合せて、型紙のヨの處を中心にして前へ多く後へ少く身ごろの腕穴に適當するだけにイセます。而して身ごろへ附ければ出來上るのであります。



奇特な孝子マルコ

淡路　搖

△其十五

明る朝の四時頃、幾つもの車が長く續いて、大きな音を立てながら、星の光に輝らされて動き出した。車は何れも六頭づゝの牛が牽いて、其の後に又代りの牛が澤山について居た。

　マルコは車の上の袋の上に乘せられて眠入つてゐる。

　目を醒して見た時には、人々は淋しい處に日に照されて休んで居た。やがて火を焚いて、犢の足を一つ丸燒にして、其廻りに皆が集まつて一緒に喰べ、一眠りして又た出かけた。

　毎日、朝五時に動き出して、十時に休み、又た夕方は五時に休んで十時迄旅をした。人々は馬に乘つて、長い刺針で牛を追つた。マルコは火を燃したり、牛に草をやつたり、飲み水を汲んだりして働いた。

　小さな藍色の木の大きな林、其所此所に家の散ばつた小さな村、昔は鹽水のあつた湖水の跡らしい見渡す限り白くキラ〳〵と輝く廣い地面など、あたりの景色が幻のやうにマルコの目の前を通りすぎた。たまには馬の群れを引き連れた旅人に行き遇ふこともあつたが、それも旋風のやうに一と飛びに行き過ぎてしまつた。

　來る日も、來る日も、丁度海の上の日と同じく、退屈で退屈で、仕方がなかつた。其の中に人々は一日毎にマルコを酷く扱かうやうになつて來た。

　大きな秣の束を運んだり、水を汲んだりするので、夜になると非常に身體は疲れるけれども、車は始終烈しくゆれ、風が吹くと、細かい赤い脂のやうな埃が、夜着の下からどん〳〵目口へ飛び込むので、容易に眠ることも出來ず、マルコは日毎に元氣がなくなつた。

　頭の男が、折々親切な言葉を掛けてくれるので、幾らか慰められたけれども、着物は切れ〳〵に破れるし、大事にして居た袋の中は段々空になるし、車の隅で、袋を顔に押し當てゝ人知れず幾度か泣いた。

　朝起きて、あたりを見廻せば、矢張り何時も同じ果

しのない平野ばかりが見えて居る。
　取扱は愈酷くなつて來た。水を汲んで來やうが遲いといつて、一人の男がマルコを打つと、外の男共までが、代る〳〵に其の眞似をする。
「やい、この宿なし奴」と云つて、足で蹴るなどは珍しくなかつた。
　とう〳〵彼は病氣になつた。三日の間、小さな夜着を掛けたまゝ熱病と戰ひつゝ、車の中に横になつて居た。頭の男は水を持つて來たり、脈を取つて見たりして與れたが、外の男共は誰れも來て見ない。マルコはもう駄目だと思つた。
「お母さん、〳〵、來て下さい、死にさうですから、お母さん、もうお目にかゝれませんかね、お母さん、僕は道ばたで死んで了ひます」と幾度となく母の名を呼び、胸の上に兩手を組み合せては、お斷りをした。
　其のうち頭の男の親切な看病のお陰で、段々と好い方に向いて來てやつと直つたが、病氣が直ると又恐ろしい時が來た、人々と分かれて、自分獨りで歩いて行かねばならぬ時が來た。
　二週間程經て、トクマンとエステロの道の分かれる所へ來た時に、頭の男はもう此所でお別れだと言つて、行く道を懇に敎へ、歩くのに邪魔にならぬやうに、袋を肩へゆわい附けてくれて、別れを告げて行つてしまつた。あまり話を交はしては却つて悲しくなつて來るから、無理にそつけなく別れてしまつたやうに見えた。
　之れまで酷く扱つた人々も、今は可哀想になつて來たと見えて、手を振つて別れを告げた。マルコも手を振つて挨拶をした。
　人も車も赤い埃の中に包まれて、見えなくなつてしまふまで見送つて、獨り淋しく歩き出した。

△其十六

　獨りになつてからも又悲しい事ばかりであつたが、只だ一つ彼れの心を慰むるものがあつた。今までは只だ茫漠たる野原ばかり見えて居たが、今度は行く手の方に、高い、そして頂上の眞白くなつて居る山々が見

えて來たのである。其れを見るとマルコはアルプスの連山を見るやうな氣持ちがして、自分は再び伊太利に近づきつゝあるやうな感じがして嬉しく思つた。此の山々は亞米利加大陸の脊骨のやうになつて遙かに北極の氷河まで走つて居るアンデス山脈である。

進むに從ふて氣候は次第に暖かくなつて來た。

所々に人家があつて、少しばかり物を賣つて居る店があるので、喰べる物は僅に調へられた。

土人の女や子供が地面に坐つてマルコの通るのをヂーツと身動きもせずに眺めて居るのを所々で見た。顏は土色で、目は斜に傾き、頰骨は高く出張つて、マルコには初めて見る人間であつた。

初めの日は力の續く限り歩いて、夜は木の下で眠つた。二日目には進み方が前の日よりもずつと少なくなつた。

靴は破れて足に怪我をするし、食物が惡い爲めに胃も惡くなり、大分元氣が衰へた。そして夕方になると、一寸した草むらの音にも蛇でも出やしないかとびくびくし乍ら旅をした。否實際出る事があるのである。

或時は恐しくて歩きながら泣く事もあつた。其んな時には、氣を取り直す爲にお母さんの事を考へた。と、お母さんがゼノアから出かける時の言葉が心の中に浮んで來た。又小さい時分に、寢床へ入ると、お母さんが夜着を直してくれた事を思ひ出した。或は自分を抱いて

「ね、お母さんと一緒にかうしておいでよ」と云つて、頭をマルコの頭の上に乘せて何か考へて居た事も思ひ出した。そして懷かしさうに

「お母さん、もう一度お目にかゝれるでせうかね。」

と獨語しつゝ又た先きへ〳〵と歩いた。

見慣れない木の林、廣い甘蔗畑、果ての見えない野原の中を、遙かかなたに聳え立つ高い山々を眺めながら歩いて、四日たち五日たち、一週間經つた。

根氣は段々無くなり、足からは血が流れた。或る日の夕方、人が

「トクマンはもう五十哩だ。」

と云ふのを聞いて、失せた力が一時に戻つて來たやうに喜び勇んで歩き出したが、其れも一時で、力は忽ち盡きて、或る溝端へ倒れてしまつた。

其れでも心は希望に充たされて、今夜のやうに空を眺めて美しいと思つた事はなかつた。

眠らうと思つて、草の上に横になつたまゝ、ヂーッとキラ〳〵星の輝く空を仰ぎ見た。そして



「お母さん、あなたは今何處に何をしておいでなさる

の、僕の事を思ひ出していらつしやるでせう。マルコは今こんなに近くまで來て居ります。」
と獨りでさゝやいた。

△其十七

彼れは今お母さんが何んな有様になつて居るかを知つたなら、如何に無理をしても飛んで行つたであらう。お母さんは今メキネズ家の一室に、病氣になつて寢て居るのである。

メキネズ一家が不意にブエノスアイレスから、コルドヴアへ移らねばならなくなつた時に、既に病氣に罹つて居たので、其後幾度か轉じて空氣のよい所へ行つても、其れがよくならずに居るのである。

そして家へ手紙を出しても何の便りもなく、夫の從弟からも亦た何の便りも來ず、毎日々々何か不幸が起つたのではないかと、絶えず心を惱ますなぞ、其んなこんなが非常に病氣の毒になつて、今は大變、重病人になつて居るので、二週間前からは起き出づることも出來ないのである。

一生命を取り留めるには、外科手術をせねばならぬといふので、マルコが草の上でさうやつて居た時には、丁度こちらではメキネズ夫婦が病人の寢臺の傍へ來て、手術を受けさせやうとして色々宥めるが、病人は其れを厭ふて泣いて居る所であつた。

「いゝえ、旦那樣、とても駄目で御座います。私にはもう力も何もありませんから、手術を受けても、受けて居るうちに息が切れてしまひます。其れよりか、どうぞ此の儘逝かせて下さい。もう生きて居たいとは思ひません。何もかも駄目なんですから。どんな事が家に起つたのやら、何も聞かないうちに息を引き取つた方が宜しう御座います。」

と、かう彼女はいふのである。

主人夫婦は、其んな事を云はずに元氣を出さねばいけない、此の前の手紙は眞直にゼノアへやつたのだから、きつと返事が來るに違ひない、國に居る家族等の爲めを思つて是非手術を受けるやうにと說き聞かせた

が、今までも既に弱りに弱つて居た彼の女は、今家族の事を話されて、却つて餘計に力が失せ、前よりもなほ苦しみを増して來た。

「あゝ、子供、子供。」

と言つて、両方の手をぎりぎりと握り合せ、

「多分あれ達ももう生きては居ないでせう、私も死んだ方がよいのです。旦那様・奥様、有りがたう御座いました。手術を受けても治りません。私はもう生きて居たくはないのです、此所でなくなるのが私の運でせう。もう心を決めました。」



其のうちに彼の女は疲れ切つて、目を閉ぢて、眠つてしまつた。

主人夫婦は微かな蠟燭の光に輝らされつゝ死人のやうに眠つてゐる彼の女を見るにつけ、つくぐ其の身

の上を不憫に思つた。
家族を救ふ爲めに、六千哩もある異境へ死に來た此の母親、あんなに一生懸命に働いて、とう〳〵こんな所で死にかゝつて居る此の母親、如何にも正直な善良な不仕合せな此の婦人を、心から氣の毒に思つたのである。

△其十八

マルコは次の日の朝早く、袋を背負ひて身體をまげて、跛引き引き、トクマンの町へ這入つた。
此の町はアルゼンチン中で若い盛んな都會の一つで、再びコルドヴアや、ロサリオや、ブエノスアイレスを見るやうな氣持ちがした。
此所にも矢張り同じやうに眞直ぐな長い通りが縱橫にあつて、同じやうに低い白い家が並んで居るが、右にも左にも、茂つた大きい木があつて。空は紺碧に澄みわたり、空氣が特に香るやうに思はれた。
幾つも通りを通つて行くうちに、丁度ブエノスアイレスに着いた時と同じやうに、心の中が烈しく騷いだ。そして若しやお母さんに遇ひはせぬかと思ひつゝ婦人に逢ふ毎によく顏を眺めて過ぎた。
誰れかに尋ねて見やうと思ひつゝも、それも能くせず、ぶら〳〵歩いた。
ボロを着け、埃にまみれて哀れな姿で居るから、遠方から來たのだと云ふ事をあり〳〵と現はして居る。
さて誰れに聞かうと考へ乍ら步るいて居るうちに計らずも伊太利人の名の書いてある宿屋の看板に目が附いた。家の中には目鏡をかけた男と、女が二人居た。近よつて思ひ切つて。
「メキネズさんと云ふ技師のおいでなさるのは何所でせうか、御存知ありますまいか。」
と尋ねた。
「技師のメキネズさん？」
と宿屋の主人は聞き返した。
「技師のメキネズさんです。」
とマルコは小い聲で答へた。

「メキネズさんはトタマンには居ないよ。」
と主人が答へた。
　マルコは胸を刺された思ひ。泣いて其處へ倒れてしまつた。
　主人も女達も立ち上がつた。近所の人々も走つて來た。
「何うしたんだい。え。どうしたんだい。」
と主人はマルコを店へ引き入れて、腰を掛けさせて言つた。
「なにも其んなにガツカリしなくてもいゝ。メキネズさんは此所には居ないが、此の近くに居るんだ。二三時間もかゝれば行かれる所に……。」
「え!?　何所に??　〳〵。」
とマルコは飛び上がつて叫んだ。
「此所から十五哩ばかり行くと、河の岸にサウデイリヨと云ふ所がある。大きな砂糖工場や新しい家などが普請中の所だ。其處にメキネズさんがゐる。家は誰でも知つて居る。」
と主人が話した。
　其處へ寄つて來たといふ一人の男も
「一月前に私はメキネズさんの所へ行つて來た。」
と言つた。
　マルコは目をパツチリ開けて、其の男の顔をつくづく見つめ
「其んなら其所の奉公人に遇ひませんでしたか、伊太利の婦人に……」
と青くなつて尋ねた。
「ゼノア人だらう。あゝ、遇つたよ。」
　マルコは思はず咽び泣いた。其の半分は笑ふので、半分は泣くのであつた。
　やがて固い決心の様子で
「何う行くんでせう。直ぐ行きます。敎へて下さい。早く」と尋ねた。
「でもお前ぢあ一日かゝるよ。其んなに弱つて居るんだもの。休んで明日おいで。」
と皆なが口を揃へて止めたが、

『イエ、一寸も待たれません。直ぐに行きませう。道で死んでも構ひません。』

と何うしても聞き入れさうにもないので、人々は、

『其んなら神様に守られておいで。森の中に道があるから、其れを通つて行くのだよ。其れぢあ無事においで』と言つてマルコを立たせた。

一人は町の端まで附いて來て、道を敎へ、心得になることを丁寧に聞かせて、マルコの行くのを見送つた。

二三分するうちに、袋を背負つて、跛引き引き行く其の姿は、道の兩側の大きな並木の蔭にかくれてしまつた。

日はもう黃昏に近かつた。

△其十九

此の晩は病人に取つては最も危險な夜であつた。非常な苦しみに、脈も張り裂けるかと思はれるやうな聲を擧げて時々は全く知覺を失ふこともあつた。

メキネズ夫婦は勿論附切りで看護してゐるが、殆んど手段も盡きてしまつた。

人々は、病人がたとへ手術を受けるのを承知した所が、醫者は明日にならねば來ならいから、來ても手後れになりはせぬかと氣遣ひ始めた。

然し落ち附いて居る時の様子を見ると、病人が苦しむのは、身體の苦しみの爲めといふより寧ろ遠くにある家族を思ふての事であるらしかつた。

痩せ衰へた身體をベッドの上に横たへて、兩手を髮の毛の中にうづめ乍ら語る所はかうであつた。

『本當に、何と云ふ事でしやうね。こんな遠くへ來て二度と子供等の顔も見ずに逝くとは。可哀想に、あれ達ちも、お母さんに亡くなられて、ほんに可哀想な子供等ですわね。あんな小さなマルコ、脊の丈けなぞ之ればかり外ないのに。好いやさしい子ですのにね。あなた方は御存じないけれども、それはいゝ子なんですよ。私は出て來る時に、頸から彼れを離すことが出來ませんでした。あれが又それは悲しさうにシク／＼泣くんですもの。泣いて泣いてね。可哀想に私は、胸が

裂けるやうでした。あゝ、あの時死んでしまつたら、皆んなが御別れを言つて居るうちに死んでしまつたら、あゝ、本當にあの時死んでしまつて居たらと思ひますよ。……でも、お母さんがなくなつたら、後で子供は何うしませう。困つて、困つて、物貰ひにでもなるんでせうか。マルコが……私のマルコが餓死しさうになつて、手を出して、……あゝ、いや／＼。厭です、いやです。死ぬのはいやで



す。先生！　直ぐに先生をお呼び下さい。來てもらつて下さい。此の身體を切らせて下さい。この胸を割いても構ひません。狂人になつても構ひません。只だ生命丈け助けて下さい、直りたい／＼。明日、……いや今、直ぐ。先生！　助けて下さい／＼。」

女達ちは病人の手を握つて慰めた。神の事や希望みの事を話し聞かせて、少しづゝ、落ちつかせた。

が、やがて甚く樣子が變つて、白い髮の毛の中へ兩手をうづめたまゝ、泣いたり、呻いたり、する中にも折々、

『あゝゼノア。家。あの海。マルコ、マルコ可哀想なマルコ。今は何所に居るんだらう。マルコや。』など云ふことを切れ〴〵に言つて居た。

△其二十

マルコは眞夜中をもかまはず大木の生え繁つた森の中を撓はず歩いた。

高い木の梢は白く月に照らされてゐるが、森の中は恐しい大きな木、植物界の怪物が枝を交へて眞暗である。

暗闇の中を透かして見ると、眞直ぐなのや、曲がつたのや、嚇かすやうな風をしたもの、戰ふやうなもの、地上に倒れてはびこる雜草に覆はれたもの等樣々で、實に恐ろしい眺めである。

時々非常に眠くなつたが、彼の心は忽ち又お母さんの方へ飛んで行つた。

血の流れる足を引き〴〵此の大きな森の中を一人で進んだ。

時々見る人家は大きな木の下にあるから、蟻の巣のやうにも見える。

疲れ切つて居りながら、彼れは其れにも氣が附かずたつた一人でありながら、恐ろしいとも思はなかつた。母に近づいた事、森の壯大な景色が彼れの魂を大きくしたのであらう。

先に渡つて來た大海、幾度か出逢つて打ち勝つて來た恐怖や苦痛、今まで現はして來た堅い決心、などを思ひ出して、彼れは思はず眉を釣り上げた。強い氣高いゼノア人の血が流れ返つたのである。

そして心の中に一つの新しい事が起つた。此の時まで斷えずお母さんの姿を心の中に浮べて來たが、其の姿は二年の間離れて居たので、幾分かぼんやりして居た。其れが此の瞬間になつていよ〳〵ハツキリと浮んで來た。お母さんが自分の直ぐ傍に居て、鮮かに物を

言ふのを見た。お母さんの目や唇の動く有様も顏色も、姿も、心の中にすべてハツキリと浮んだ。

これに勵まされてマルコは更に足を早めた。新しい愛情が心の中に湧き出でゝ、涙が知らず識らず頰を傳ふた。

暗い道を進みながら、彼はお母さんに話をした。

「お母さん、僕は此處に居ります。もうあなたお一人を置いて行くやうな事はしません。屹度一緒に歸りませう。船に乘つても、これからはお傍に居て、決して離れませんよ。」

月の光りが大木の梢に消えて、夜がほの〴〵と明けかゝつたのにも氣が附かなかつた。

△其二十一

其の朝の八時頃、メキネズ家へトクマンから若い醫者が一人の助手を連れて來た。主人夫婦は一緒になつて熱心に手術を勸めた。然し其れは皆な無駄であつた。病人は又様子が變り、自分の力が盡き果てゝ手術を受けても駄目だと思つて、なか〳〵承知しなかつた。

「手術は少しも危くはない。少し勇氣を持つて受けさへすれば、屹度命は助かるのだが……」

と言つて勸めるが、

「いゝえ、私は死ぬる勇氣はあるけれども、此の上無駄な苦しみをする勇氣はありません。どうぞ此のまゝ逝かせて下さい。」

と言つてなか〳〵聞入れない。

病人は奧樣の方に顏を向け、微かな聲で、最後の願ひを語つた。

「奧さん、此の少しばかりのお金と、私の骨を、どうぞ領事に賴んで、家へ屆けてもらつて下さい。何だか今此の場になつて、家のものは皆生きて居るやうな氣持が致します。どうぞお手紙でさう言つてやつて下さい。私は何時も家の者の事を思つて骨を折つて居たつて……。もう一度遇はれないのが殘念だけれどと言つて祈りながら逝つたつてね。其れから、夫にも、長男にも、マルコの事を賴むつて……」

語りつゞけて、彼の女は不意に兩方の手を握り合せて、

「マルコや、マルコや、〳〵。」と叫び出した。

主人夫婦は呼ばれて室から出て行つた。

急いで歩く足跫や、ヒソ〳〵語る人聲や、抑へ附けたやうな叫びなどが、隣の室から聞えて來た。

病人は何事かと思つて室の入口に目を附けた。

二三分すると醫者は何時もと違つた面色して、室へ這入つて來た。續いて主人夫婦も面色變へて這入つて來た。三人は仔細ありげに病人をながめて、又低い聲で何か語り合つた。醫者が

「直ぐの方がいゝでせう。」

と言ふと、夫人は

「ヂョセフアや。」

と顫へる聲で病人に呼びかけ、

「いゝ事があるよ。いゝかい。御聞きよ。」と言つた。

病人は熱心に夫人を見つめた。

「いゝ事があるんだよ。うれしい事が。」

と夫人の語氣は段々せきこんで來た。

病人は目をぱつちりと見開いた。

「ね、お前がね、大變可愛がつて居る人が來ましたよ。」

と夫人は續けて言つた。

病人は烈しく身體を動かして頭を上げ、目を輝かせて、夫人の顏と入口の方を交る〳〵眺めた。

「たつた今、思ひ掛けなく……」と云つて、夫人は蒼くなつた。

「誰で御座います？」と病人は恐しさうな聲で云つたが、忽ち又鋭い聲を立て、不意に身を起して寢臺の上に坐り、兩手を握りしめてジーッと目を見すゑた。

ボロを着て、埃にまみれたマルコが、片手を醫者に支へられて、入口に立つて居たのである。

病人は、「神よ、神よ」と叫んだ。

マルコは走り寄つた。母はやせた兩手を開いて、マルコを固く懷きしめた。餘り嬉しさに彼の女は息が詰まつて、枕の上へ倒れてしまつた。

が直ぐ又た元に返り、氣が狂つたやうに子供の頭に

幾度となく接吻しながら、「何うして此所へ來たの。え、お前に違ひないね。大きくなつた事ね。誰れと一緒に來たの。獨りでかい。病氣ぢやないの。ね、お前はマルコだわねー。夢ぢやないわね。ああ何とかお言ひよ。」

又不意に調子を變へて、醫者の方に向ひ、

「先生、早く、どうぞ早く、私よくなりたう御座いますから、直ぐにどうぞ、直ぐに……マルコはあちらへ連れて行つて下さい。聞かせたくありませんから……。



マルコや。何でもないんだよ。後で話すよ。先生、サ、サ、どうぞ」

と言つた。

マルコは次の室へ連れて行かれた。主人夫婦と女たちも急いで室を出た。醫者と助手は後に殘つて戸を締めた。

夫人はマルコを遠く離れた室へ連れて行かうとした

が、根が生えたやうに立つたまゝ
「何うしたんです。お母さんは何うしたんです。お母さんを何うするんです」と言つてなか〳〵動かない。
夫人は尚ほもあちらへ連れて行かうとしてツッと
「ね、お聞きよ。お母さんは病氣で少し手術を受けねばならないのだからこちらへおいで」と云つたけれども、
「イヽエ、私は此所に居ります」とマルコは尚ほも言ひ張つた。

マルコはブル〳〵震ひ出した。
鋭い叫びが不意に家中に響き渡つた。
マルコはお母さんが亡くなつたのだと思つて又叫んだ。が、醫者は入口に現はれて、
「お母さんは助かりました」と言つた。
マルコは醫者の足下に身を投げて咽び泣いた。
醫者「さあ、お立ちなさい。お母さんの助かつたのは勇ましいあなたの御蔭です。」

（をはり）

ジフテリヤの症狀

病氣は、何が原因で發病するか又其の症狀は何故であるかと云ふに、一つの目にも見えない小さな惡るい蟲が其處等邊を飛んで居て、其れが呼吸をする時、空氣に交つて咽喉に入り、少しでも蟲が喰ひ付くに都合のよい處がありますと、直に其處へ喰ひ付いて繁殖します。體が至極丈夫で、別に變つた所さへなければ、其の蟲が咽喉から氣管に入り込んでも、喰ひ付くところが出來ませんけれども、萬一其の際風邪を引いて居るとか何とかして、體に故障があると、忽まち其の蟲が氣管に喰ひ付いて段々繁殖します。之れを素人流に云ひますと、咽喉が腫れて膜を持つと云ふことになるので、元來氣管は極く細い孔でありますから、それが爲めに直に詰つて仕舞ひます。サア左樣なりますと、呼吸が爲難くなりますから、殆んど之れ以上の苦痛は無いと云つて差支ひない程です。呼吸が辛うじて出來る位ですから、子供などは顏を顰め口をゆがめて喘へに喘へますけれど、泣く聲は更に出ず、又力を盡して目を釣り上げ、一種特別のヒイ〳〵と云ふ息をするに止まります。此の際は胸と鳩尾へ全力を入れる爲めに著しく凹み、さうして呼吸の出來ない結果全身の血液が廻らぬ爲め、體の色は眞青になつて仕舞ひます。斯樣な狀態になりますと、餘りの苦しさに自分の手で夢中に頸や咽喉を引つ掻く事があります。此場合の治療法は、咽喉を切開して所謂腫れ物の膜を取り去るか、血清療法を施すの二つで、切開をします時は、普通ならば麻醉を用ゐますが、斯る場合には苦しさの餘りに患者は少しも切開の疼痛も感じない位です。で咽喉を切開しますと、膿が滾々と出て、それと同時に今迄塞つて居た空氣の孔が初めて開いて、切開した孔から呼吸が出ます。呼吸が出來る樣になりますと見る〳〵中に身體中の今迄蒼白であつた皮膚の色が血色を帶びて來ます。（飯田小兒科病院長）

讀友倶樂部

▲前略樣、私今度此の遠い〳〵西の國に參りました、神田で生れた江戸ッ子も、地方へ出ましては異なる風俗習慣にまごついて居ります、當地風俗の一端を申上げますと、派出な秩父や米流の袴長う、五吋のリボン美しく、藤蓍な佛蘭形の靴穿いて、ひるがへす袴の裾からペチコートがチラリなんて姿は、鳥渡當地では見當りません、大抵紡績絣か瓦斯絣で、羽織より被布が多う御座います、下駄は日和下駄が多數、髮は三四年前に流行した所謂庇髮（前髮を突き出して平たくし横へ張切つて張らした形）で、ルイザの上品なのは少なう御座います、但し高等官吏や軍人の奥樣達には可成振つたスタイルの方も有ります、大一番の髷形に燃える樣な眞紅の手柄も此の種の人の中に見られます、兎に角人生の花の年頃の方が、餘り質樸過ぎて、物たりない氣がいたします（岡山にて調生）

▲本誌口繪の寫色美人畫は、上村松園樣、鏑木清方樣、河崎蘭香樣と、女流美人畫家のお揃ひで、とり〳〵に美くしいですが、松園樣のは落ついて品位高く、清方樣のは洒落にしてよく當時の處女の風姿が表はれて居るやうです、蘭香樣のも面白うございます、墨畫の繪手本には加藤南山樣と前の蘭香樣がいつも筆を揮つておいでになりますが、南山樣は此の派の大家だけあつて、落つきもよく、筆もなか〳〵老熟して手本としての上々でせう、蘭香樣のも黒き墨でべたべた書かれる中にも風韻があつて結構です。（朝香女史）

▲靜岡短信、春未だ淺けれど、梅は盛りを早過ぎて候、霧晴ける三松の寺、池のほとり、築山のこなたに生ふる若いし白梅の花瓣、風なきに散りて池に小舟を漂へつ、はた若芽に止まりて時ならぬ花を咲かせ候、川を隔てゝ安倍の山麓に棚引くは、雲か霞か、櫻は未だ早やし、賤機山淺間、又は喜多川邸の櫻樹、皆はつてど綻びそ候、そが笑むは本月下旬の頃となり候べし、暖地の事に候へば、花咲く事も早ふして、又散る事も早ければ、何となう心もとなく存ぜられ候、若草萠え、田は温み、芹摘む人も見受られ候、（南窓の梅を眺めつゝ多代女）

▲三月號の物集先生の、春の小草の栞れる趣味ほんとによう御座いますのね私いつでも物集先生のを何より〳〵たのしみにして待ち侘びます、中村春雨先生も私大好きですわ、與謝野晶子先生の御說もおもしろく拜見いたして居ります、然し私は全然心醉は致しませんわ、あの通りにやつた日には殆ど世の中と衝突ばかりしてゐなければなりませんもの、御說は拜見してゐて、それを取捨しなければ、やつぱりだめですわれこれは失禮（赤坂すみ子）

▲記者樣、昨年九月の増刊に、松村介石先生のお話にあつたあの小間板（プランセット）を、私わざ〳〵取寄せてやつて居ますけれども少しも動きません、私を嫌つて出ないのかと、又他の者にやらせても、矢張り出ませぬ、記者樣は御實驗なさいましたよし、念じるのは何かとなへるのでせうか、實況を、次號でお教へ下さい、御願ひします（越前澄子）――記者はあの記事にもある通り實際實驗を見ましたけれども、自ら實驗は致しません、之を行ふ人の話によれば、柔和なる信仰を以てあの板を抑へ、何か問ひを發して、どうぞ返事をお願ひ申します、と丁寧に頼めばよいのださうですが、どうも之れは其の人の精神狀態に關係がありますから、誰れがやつても出來るとは言はれぬやうであります。

▲夢子樣、三月號に、同境遇者、袖をさいて涙をふいてやると、おやさしいお筆をみて、嬉し涙にむせびました、發病して丁度三年なので、ぐちを言つたようではづかしく思ひます、さのみ疾には泣きませんが、眞心には心から泣きます、おなつかしい夢子の君樣、一度でもお姿がみた

いと思ひますが、できませんから、誌上お筆をみるを樂しみにしてゐます、御自愛遊ばしませ、(純子)

▲私は米國桑港に淋しく暮す雜貨商狂の一人です、何卒故國の姉上樣方、御見捨てなく御交換を願ひます、又コダックやカメラに趣味をお持ちの御方に、お手製の寫眞交換を願ひます、着大業至て見惡いですが、手製ので人物や景色のを御送りいたします、二月十日、西川鈴子より、(Sizuko Nishikawa 1843 Buchanan St. San Francisco.Cal.)

▲千代子樣と綾子樣と野菊樣此の御三方のマダム振を占つてあげませう、千代子樣は己れありて主人ありと云ふ風だから、場用によつては眞妻の極、綾子樣は良人に對するに眞實なる侍女野菊樣は分に安んで而して毅然即ち賢妻にして賢母、あたりましたらどし／＼御注文をホヽヽ(しぐれ)

▲摘草のシーズンになりましたれ、私はもう樣に夢中になつて小川に落ちる樣な事もなくなりましたけれど、只さへ暖い陸のともすると風の糸にからみ上げられさうですわ、皆樣のうち花言葉御存じの方は、どうぞお裾分け下さいな、あの、私、意味知らずにある花を友人に送つて頭痛くのやうな得ない失敗してよ、何れ倶樂部でお目にかゝりますと仰有つた獅子樣、其後如何遊して？、貴女も近いうちに「めでたくかしこ」と結末されるのでせう？、さう隱しつこなしよ理想は確かドクターでしたわれ、日永のれむけざましなんて羅千鳥樣にしつぺい返しでも遊しやしないかと實にハラ／＼して居りますのおほゝほ三谷芳子樣、至急御住所御知らせ下さいませ、私を覺えてゐらしつて？、(山形市普禮町中堂四三八物河鈴子)

▲三月號俳句地賞の方は新潟内藤きく枝樣とありましたが、京都の内藤きく枝樣ではありませんか(京都しづ子)—誤植に付京都と訂正いたします、

▲諸友の皆樣、朝顏の種子が入用でしたら、女子用書簡か、繪はがき(七枚以上)御送り下さい朝顏種子混合を送ります、又實費として壹錢郵券拾五枚を御送りの方へも同種子を分與致します(大阪市南區天王寺大道三丁目松澤豐子)

▲私は以前から園藝に趣味を持ちまして、色々の草花を作りますが、昨年は殊に朝顏の變絞りの狂咲大輪の種子澤山採りましたから、若し御望みとあらば、他の種子と交換いたしませう(山口縣大島郡蒲野村鍵波千代野)

▲四月十五日の、さま／＼な家風、今から樂しみに致して居ります、さま／＼な家、此の題は平凡にもなれば奇抜にもなりますゆゑ、趣味深い事だらうと思ひます、三月の紙上に織華開樣の「一種の女」と云ふのがありますわれ、今後おひまがおありでしたら、每號におのせ下さいまし、(茶目子)

▲都の春は今如何に、我が住む田舍の春も又格別ですよ、十五萬石の城址は今櫻の名所として名高うございます、一度お遊びにいらして頂戴な、それから、一寸伺ひますが、私は、女學世界の古いのが澤山出來ましたが、之れは如何致したらよろしいでせうか(大和郡山の里にて若松子)

▲瑞琴樣、日常生活の裡に無限の教訓を得られてお出での御身がお羨しくぞんじます、貴女のホームこそ眞のスヰート、私の描く理想其儘ですのれ、私はまだ十九歳の少女ですが、家事の暇には、この女學世界で、嚴しい學校で得られなかつた社會學を學び、女子大學講義からは實際の智識を得て居りますの、實踐倫理、私も大好きです、然しもうこの四月には卒業かと思ふとそゞろ淋しく思はれます、貴女は第一回生でせう(茨城赤澤ちよ子)

▲二月號に高木梅子樣の御寄書になりました東城の社會觀察、誠に面白く、なつかしく拜見致しました、私は一昨年の五月より昨年の八月ま

で、京城に住居してたもんですから、あれを讀んで一々此の通りと、うなづかれました、在京中け、和洋折衷の官舎に住居してたゝめ、温突のあぢも聞いたゞけで知る由もありませんでしたが、田舎に轉任してからは、朝鮮家屋の外ありませんから、温突の氣持いゝ味を覺えました、朝鮮語も一寸した會話位知つてをりましたけれど、田舎は又都とちがひ、言葉もゾンザイで通じません(朝鮮田舍女)

▲三月號に賢い女の側面をお書き遊ばした山縣菊子様目下何れにお住み遊ばし升か、お伺ひ致したう存じます、(名無草)

▲三月號に綾子様のも、千代子様も、見えませんので、少なからず失望致しました、ほんとに如何遊したのでせう、千代子様、此の前の元祿さんの様に、引込んでおしまひなさるのでは無いでせうね、女教師の尊き天職、猶わけのした奥様、蘭花日記、誠に面白く拜見いたしました忘れ得ぬ記念、何より〱なつかしう御座います、昨年の今頃は自分もさうだつたのですもの(ホアイトリ、子)

▲園藝をお好みの御方にお願ひ致します、私は昨年八月の大洪水の際に、消毒して居りました大切のダリヤを皆無くしてこまつて居りますが若しカクタスダリヤ、及びデコラチーブダリヤの種子御持ちの方は何本御めぐみ下さいまし、(新潟縣南蒲原郡中野村岩太芳子)

▲皆様、此頃東京で流行のローマ、ヴインナ、ルイザなど云ふ髪は、どんな風に結ぶのでせうお教へ下さい、お願ひ申します(高知智惠子)

▲「春の曲」私いく度となく讀みかへしましたわあの華やかなしかもしつとりとした拔目のないお筆を、それから感じたのは村雨様の沈痛なお書きぶりでした(白蓮)

▲高山先生崇拜遊ばす豐前の一女校、樗牛全集の五卷は私も何度見てもあきません、あなたも五卷一等御好きでいらつしやるさうで、おなつかしう御ざいます、春野様あなたも樗牛全集御好きの御様子、どうぞ御交際下さいましな(佐渡の一女)

▲米國メコマツの中田きみ子様、わたしも渡米いたしたいと思つて居りますが、何しろ向ふの事情がわからないので困つて居ります、御手紙差上げとうございますが、おさしつかへなくば誌上にて御住所お知らせ下さいませ(函館鈎尾棣子)

▲與謝野晶子先生の雜記帳、面白く拜見致して居ります、私も先生崇拜の一人で御座います、何卒記者様女史のお寫眞をお掲げ下さいまし、(石狩朝山しげ子)

▲在米の諸姉上様に御願ひ申します、私は東北の山奥に住む一少女で御座いますが、渡米して自活の途をたてたいと思つて居りますが、何かよい口が御座いませんか、失禮ですが誌上で御知らせ下さい(福島萬子)

▲光榮ある人生の春の「かゞやく面」ほんとうにうれしく拜見いたしました、ほんとうに百合子様は幸福でいらつしやるのね、(秋田の月子)

▲記者様、日本女子商業學校長嘉悦孝子先生のお宅をお教へ下さいませ、(富山藤田靜子)――麹町區土手三番町同校内に居られます、

▲記者様、十月の紙上で產婦の心得をお話し遊された西尾きやう子様の御住所をお知らせ願ひます(北朝鮮鏡城小野政與)――麹町區飯田町六丁目十六番地です、

▲私はヴアイオリンを習ひたいと存じますが、本所深川のうちに教へる處がございましたら、御手數ながらお知らせ下さいまし、(深川區猿江裏町鹽谷幸子)

▲誌上の皆々様、かれておのぞみの萩香様と富枝様のお寫眞近頃妙な所より手に入りました、私もたゞ一枚ほかございませんから本誌にのせてお目にかけたいと思つて居ります、(赤坂にて入千草)

新刊紹介

短篇十種モーパッサン集　前田晁譯

佛國の文豪モーパッサンの傑作短篇十種を選びて譯したるものなり、從來この種の飜譯に往往免かれざるは難解、晦澁、意味の不明瞭にして讀者を悩ますこと多かりしに本書は極めて明快にして、原文の味と香とを併せて呑みこまるる樣なるは、譯者の眼光と手腕のすぐれたるが故ならん。片々たる小册子といへども亦よく現時代文學の内容を窺ふに足るべし。價四十五錢博文館發行

文法應用英文の組立法　上條辰藏著

日本に居て英文を學ぶものは恰も敵軍の中に切り込みて孤軍苦鬪するやうなものである。それは日常その年月に觸るゝもの悉く日本の事物であるから英語を話し又は書く場合に困難が多いのである。これが爲めには文法的智識の一と通り文の組立法の一般は是非とも心得て置かればならぬ。本書はこれに就て尤も有効なる便宜を與ふるものである。價三十五錢、博文館發行

畿内見物大和の卷　中澤弘光畫

千年以前の佛家佛寶の光かゞやく奈良の寄都春日野、猿澤の池、大佛殿、花の三月旅にくらさば吉野山、歴史上の古蹟に富める大和路は日本の希臘、羅馬にも似たらんかし、この舟大和の名所數十個所を水彩畫、油繪、原色版、木版寫眞版にして卷頭に挿み、高安月郊、與謝野晶子、薄田泣菫諸家の感想、紀行、日記を添へて畫解となす、趣味饒かなる美本なり。定價二圓金尾文淵堂發行

畿内見物京都の卷　中澤弘光畫

體裁は大和の卷とほゞ同じ、内容は卷頭に淸水寺、祇園、八阪の塔、粟田靑蓮院、南禪寺、永觀堂以下五六十枚の繪を色ずり木版、原色版寫眞版等にして挿み、大和の卷と同じく諸家の感想文等を添へて頗る趣味に富む。定價二圓、金尾文淵堂發行

家庭百科全書洋食の調理　亀井きき子著

本書は西洋料理及び和洋折衷料理の製法を說きたるものにして、西洋料理の部はスープ、ソース、むし物サラダ、冷し物、野菜、揚げ物、ゆで物、いりつけ物、煮物、燒物等に部を分ち、和洋折衷料理の部も、汁物、あへ物、燒物、いりつけ物其他數部に分ち、著者の實驗に基きて丁寧に記されたれば、普通の家庭には頁き參考書なり。定價四十五錢、博文館發行

作歌と助辭　三矢重松著

本書は「近代の歌の誤」と題してかつて雜誌「若竹」に揭げしを更に增訂せるものゝ由にて、誤り難く誤り易き助辭十五六に就て淡裏より詳しく說明せるものなり。作歌の爲に好參考書たると共に、一般國語を研究する者も一讀せば得る所多からん。定價貳拾五錢、明治書院發行

俗曲評釋上方唄　佐々醒雪著

近世三絃の流行と共に檢挍、勾當などゝ稱する盲法師の三絃や箏を職業としたる人々の手に發達し來りたる上方唄の評釋にして、餘稅趣味ある書なり、特に初めに總說として、上方唄と江戶唄との相違、組唄、長唄、端唄、芝居唄及び淨瑠璃等に就て起原變遷等を詳說したる所などは流石に手に入つたものなり、定價五拾五錢、博文館發行

義士お伽噺　曉紅生著

こは赤穗義士の美談をお伽噺として子供に分るやう面白く書きたるものなり。近來赤穗義士に關する書は折々上梓せらるると雖も、之をお伽噺としたるものは他に類を見ず、此際之を出したる著者の功は沒すべからず。定價四拾七錢、三芳屋書店發行

募集（四月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以內の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館內女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）・金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內一定刊數……十二冊
増刊四回（一、五、九、十一月）價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲寄紙の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●[illegible]目錄御入用の方は二錢券相添申込まれ

明治四十四年三月廿三日印刷納本　第拾壹卷第五號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番・千十八番
本局　二千六百二十番・三千二百二十九番

腦神經衰弱ヒステリー病絶好の療法

婦人病者は其療法が誤つて居る

百般の事物改良進歩して所謂文明開花の時代となり自然的結果として生存競爭は劇烈を極め心神の過勞は遂に恐るべき腦神經衰弱父婦人にありてはヒステリー症に陷るものが多數である、世人は健康自慢で居つても尙本病に罹つて居る人が澤山ある。今素人にも分り易き容體を大略を述べて見やう即ち頭痛がする頭は重い眩暈がして記憶力が減じて、つまらぬ事が氣になりて夜はオチ／＼ねむられず惡夢を見たりして胸さわぎがする眉と眉との間がくしや／＼する、其他何をしても倦み易く疲れて少しも忍耐してやれないのみならず、氣が短かくなつて氣むづかしく氣不性になり考が纒まらず順序を立てゝ仕事が出來ず決斷力が減じ耳は鳴る肩は凝る段々重くなるにつけて胃が惡く物の味が變り口中が痛んだりあれたり食慾を減じ胸がつかへたり嘔吐を催したり腹がへると胃が痛み胃が鳴る通じが惡くなる、時には動悸がするので心臟病ではないかと思ひ手がふるへたり或時は處々痛みを覺えるのでリウマチスだと醫者さへ云ふて居る樣な事がある、又對談中に腋下より汗が流れたり唾液が過分に出たり又欠伸が出て逆上はする皮膚を爪でかくとミヽズばれがする樣なことがある。

以上の容體の一つでもあるときは、直ちに「レーベン」の療法を實行されるが好い、「レーベン」は常持博士の發見になれるものにして岡田博士を初め其他大家の大喝采を博したる植物性の藥物にして多量の「リンサン」がふくんで居るのである。世の中には自分の病氣が治つたと虛欺の吹聽をなす山師がある注意せよ。

世間若し本病を患ふる人あらば東京市銀座弓町二二、中南定太郎宛送料二錢切手封入申込みあれば腦神經衰弱ヒステリー療法と精神療法を詳述せる二冊子を無代進上す……遠慮なく春ば急げ直ちに申込あらんことを。

女（後付の一）

英語少年 第一卷第五號 春期增刊

僕の一日

四六二倍判紙數四十頁
舶來上等紙石版極彩色
亞鉛凸版六度刷其他寫
眞銅版及電氣版畫挿入

正價十錢
郵稅五厘

四月十日發行

「僕の一日」は太郎と云ふ一學生が朝の起床から夜の就褥迄の一日の生活を一擧一動毎に美しい挿畫と分り易い英文とで說き明したもので、此間に朝の冷水浴や登校の割引電車や學校での稽古や遊戲や歸宅後の復習や散步や友達の來訪などは云ふに及ばず、英語で電話をかけるとや日記を認めるとや又英語演說の通辨をするとや夜活動寫眞を見に行くとなど面白い記事が澤山あります。特に伯父さんからの小包が屆いて之を開くと美しい畫葉書や面白いポンチや英語一口咄が出て來る所は記者と畫工とが苦心の頁です。ツマリ、初等程度の英作文と英會話とを獨りで樂しく稽古するやうに編んだものです。賣り切れぬ間に御購めなさい。



▼大懸賞‖英語考へ物▲

東京本町 博文館

(女、後付の二)

□□幼年世界 第一巻 第五號 臨時增刊□□



新入學

アラタニ學校ヘ入ラレル幼年諸君ノ爲メニカウイフ氣ノキイタ**臨時增刊**ガ出マス。

口繪ハ武内桂舟先生ガ**一宮尊德先生ノ幼時**ヲカイテ下サルコトニナッテヲリマス、又寫眞版ニハ學校デノオ行儀ト云フノガ出マス。

記事ハ卷頭マヅイハヤ先生ガ**「蜂ノ功名」**ト云フステキニ面白イ鳥獸大合戰ノオ伽噺ヲオカキニナリマスシ、ソノ他ハ**尋常一年級**カラ**四年級**マデノ諸君ニ讀ンデ戴ク爲メ各々部門ヲ別ケテ讀方、書方、算術、修身、地理、歷史、何ニヨラズ**教科書**ニモトヅイテ、面白クカイテアリマス、マダコノ外談話室、遊戲室ノ設ケモアリマスカラ**賣切**レナイ先キニサア〳〵早クイラッシャイ〳〵〳〵!!!

菊判紙數八十頁
口繪…石版壹枚
光澤式寫眞版二頁
正價一冊金八錢 郵税一錢

四月十日發行

東京本町 博文館

女(後付の三)

第六巻 第五號 四月一日發行

少女世界

菊判百廿八頁（石版寫眞版挿山）正價十錢 郵稅壹錢

◎春（口繪）……鏑木清方 ◎小金井の櫻……（三色版）

◎奈良の少女會◎平和◎學校寫眞◎誌友の面影……（寫眞版）

内容

（少女會館）

博文館

石川鴻齋先生　三島中洲先生　校訂

鼇頭音釋 康熙字典

全一册四六判總皮
上製堅牢函入美本
紙數三千餘頁
定價**金五圓**
小包料**拾六錢**

特價提供

四月十五日迄
特價金四圓

字彙、字鑑、玉篇、正字通等、字學に關する書其數乏しからずと雖も、簡略に失するにあらざれば則ち浩瀚能く其中を得、實用に供して、便益なるものは、康熙字典を推さゞるべからず、然れども、此書の原刻、本邦に齎すこと多からず、彼の土に於ても亦悉く之を各州に頒つ能はざるにより、數々刻を更めたり之を以て點劃を誤り、字體を失へたるもの尠からず、我亦之を飜刻して愈々誤り愈々失し、爲めに誤字謬劃枚擧に遑なきに至れり、碩儒、鴻齋石川先生、中洲三島先生之を慨し、相謀り補正の事に當り、數年を閲し漸くにして成れるを本書と爲す、爾來、版を重ぬること數十回、頒本實に拾數萬部に上れり、爲に銅版は磨滅して漸く鮮明を缺くものあるに至れるを以て、今回更に訂正を加へて石版刷と爲したり、印刷鮮明、之を舊版に比するに別様の觀あり、而して價は却て廉なり、乞ふ舊版に倍する好評を賜へ

東京日本橋本町三丁目　**博文館**　振替口座東京二四〇番

文藝倶樂部

菊判紙數三二〇頁
木版錦繪原色版
寫眞版十頁挿入
正價 貳拾五錢
郵稅 二錢五厘

しばらく**本誌**に其作物を載せざりし**江見水蔭子**三年振りにて長編小説「**備前岡山**」を寄稿す。岡山は子が郷里なり。幼にして東都に出で何十年にて初めて歸省す。子が犀利なる看察此の奇警なる一大雄編を齎す。讀者を**魅**せずんば已まざる可し次に**田村松魚子**の傑作小説「**死後**」を掲ぐ。構想の奇、行文の麗、必ずや斯界を驚かさむ。第三に**中内蝶二子**作の喜劇「**嘘**」を載す。青年俳優諸子に依りて、近く、**市村座**に實演の約あり。讀みて抱腹絶倒せざるものなからむ。倘夫、**新講談**に至りては斯界の維將**猫遊軒伯痴子**が得意の讀物「北海奇聞**娘淸玄**」を收む。戀に狂ふ少女が心胸の波瀾は、子が舌端に上りて遺憾なく其の響を傳へむ。尚本誌獨得の**活社會、長廣舌、演藝界**の諸欄其の材料の**淸新**なると其の趣味の**豐富**なるとに於て**天下**に冠たらん、鳥唄ひ蝶飛ぶ**好季節**に及び**此文藝倶樂部**なかる可らず

東京本町 **博文館**

女(後付の七)

新藥に就きて

最新發明 肺病 肋膜

獨逸ドクトル 高平氏報告（醫事週報二七號報告再錄）

新治療劑主藥の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱は本藥服用後は常溫下に減じ患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を增進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試驗報告及賞賛により明らかなれども今本院服藥患者につき其成績を左に報ぜん

●金森某（德義上住所姓名を秘す）**兩肺結核**に陷り咳嗽たん盜汗女子三年前發病途に末期重症の 動悸呼吸不利。不眠。發熱激しく度々喀血し非常に羸痩す服藥壹週頑固なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服藥貳週喀血やみ臥蓐せしもの屋外に出で日光に曝るゝところに至る治療用三十日病全く治し食慾進み體重を増加せり

●兵頭某卅一歲男 **肋膜炎**（喀血無し肺尖初期の疑あり）胸部痛み食不振身體倦怠盜汗。咳嗽、頭痛あり身體羸痩を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因るとは云へいかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歷を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	全治
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	微効
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治

患者	性	病名	成績
熊谷	男	兩肺結核末期	無効
宮本	女	結核性肋膜炎	全治
岡田	男	氣管支加答兒及肺炎	全治
岡崎	男	右肺結核及腹膜結核	全治
神村	男	肺結核初期	全治

斯の如き好成績は從來の藥物に於て見る能はず我國藥劑界名譽の發明藥として報告する義務あるを信ず又効力多大にして持長服藥するも副作用なく殊に**喀血**と其豫防に可驚効あるを以て醫藥の傍服用最も妙ならん吾人は病者に向って新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勸むると共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勸告す ●本治療法を知らんとする患者は貧富の別なく、醫者にも療法あり）遠慮なく送料郵券二錢添東京神田竪大工町拾三番地療養院製藥所村尾明治堂宛申込あらば新治療法の書を無代にて贈り得らる、故是非一讀あれ益する處多からん、之れによりて全治の幸福を得らるべし

藥價

壹週 金二圓
貳週 金[illegible]圓九十錢
參週 五圓七拾錢
四週 七圓貳拾錢
五週 九圓

東京神田竪大工町 療養院製藥所 **村尾明治堂**

電話本局參千七百五十二番（私書函神田）
振替口座東京壹四參壹九番（本局第三號）

洋畫講義錄 繪畫講習錄

當代一流大家數十名執筆、會費各卅六錢、一ヶ年卒業、規則無料進呈

東京市麻布飯倉四丁目 **大日本繪畫講習會**

水彩畫を始め油畫木炭畫肖像畫ペン畫等を[illegible]る詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり

日本畫の技術と學科とを平易懇切に教授し初學者と雖も忽ち上達せしむ毎號着色繪畫多し

洋畫材料品總目錄 無代進呈

百餘圖の精密なる圖を挿入したる詳細目錄は御一報次第郵税を要せず無料進呈す可し好畫家必携の好册子也

女（後付の八）

森鷗外君 巖谷小波君 坪谷水哉君序

今井翠巖君著

（最新刊）

最近調査 **女子東京遊學案内**

（附錄）……最新東京實測明細地圖

四六判美本紙數七五〇頁正價五拾八錢郵税拾錢

萬朝報評

最に好評を博せる「男子東京遊學案内」の姉妹書にして、またこれ好評を博すべきものたらずんばあらす、苟くも都下に學校養成所講習所私塾と稱するものはその何種たるを問はず網羅して痒き所に手の届きたる心地、

◁東京 **博文館** 本町▷

女學世界
（毎月一回廿三日印刷納本）
（明治四十四年三月廿三日印刷納本）第拾壹卷第五號（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

◉口癖の樣に頭痛がするといふ婦人あり

御婦人は十人寄れば、七八人まで頭痛して困ると仰しやいますが、頭痛の起る原因に色々あるけれども、婦人病の殆ど總てが頭痛の原因となるといふ事は、どの御醫者さんも申します、併し多くの婦人は、頭痛をするのは、時候の爲めだとかいつて、顳顬に、頭痛膏だの、梅干の皮などを貼て、それで治ると思ふ人もある樣ですが、之は大なる誤解である、婦人病の根治を圖らない內は、頭痛は決して止むものでない、上述の如く頭痛がして困るといふ方は、多くの場合に於て、婦人病に罹つて居るのであるから、特に是等の婦人の爲めに、婦人病の兆候及び療法に付て簡單に述べて見ませう。

ヒステリー症は俗に言ふ血の道で、最初は頭か重く、氣がふさぎ、次で頭痛が起る、もう一歩進むと癇高ぶり、些細の事が氣にかゝり、過ぎ去つた事や、取越苦勞をする樣になる、白血赤血、こしけは子宮內膜炎の結果で、多量のねばく／＼した帶下を漏らし、其帶下は時として、血液又は膿を含む事があり、甚だ惡い臭がする、此病氣は懷姙の機能を奪ふから子寶を擧げ難く、顏色は常に蒼く活氣に乏しい、年頃になつて月のものを見ないとか、たとへあつても、時期一定せず、其量に多少あり、月經時に苦痛を感ずるのは皆病氣の結果である、「つわり」は姙婦の持ち前の如く考へる方があるけれども、營養分を攝取する事が出來ない爲に、身體甚だ衰弱し、甚しきは是が爲めに死ぬものがあるさうである、其他腰足が引釣り痛み、又は胸先へ差込み錐を揉み込まれる樣な痛みを覺えるとか、目が眩んだり、耳が鳴つたり、肩が凝つたり、腰足が冷えたり、顏がほてつたりする容態は、多く婦人病から起るのである、此外產後古血が滯ると色々の病氣が起る、日立ちが惡るければ手足に水腫が出來たり、しびれたりする、以上述べた所は、婦人病の大要であるが、是等の病氣に對する治療法は、津村順天堂の自宅療法を以て最良とする、津村順天堂には、內服藥としては中將湯あり以上の諸病に特効があります、外用藥即ち子宮座藥としては中將球があります、此兩藥を併用すれば、藥効は內外相應じて一層著るしい。

どういふ時に中將球が必要か

子宮內膜炎とか、白帶下、赤帶下、こしけ、子宮痙攣、子宮炎、子宮加答兒、膣炎、膣加答兒、子宮糜爛、前の惡臭、前の搔痒、月經時の疼痛及び良人の淋疾に罹り居る時等に中將湯を服用して中將球を兼用するの必用か有ります。

◉中將湯、中將球は全國到る處の藥店にて販賣す、若し無き時は病人の容體詳しく書き添へ、本舖、東京日本橋通四丁目津村順天堂へ、注文せられよ中將湯には數種の加減藥ありて、本舖は其病症に應じ適當の加減藥を發送する。

中將湯代價　五週分二圓五十錢、三週分一圓六十錢、二週分一圓十錢
一週分六十錢、四日分三十五錢、二日分廿錢

中將球定價　百二十個入五圓、四十五個入貳圓、二十個入壹圓、九個入五十錢、試分三個入二十錢

定價金貳拾錢●郵稅貳錢
VOL. XI.
（東京市日本橋區本町三丁目博文館發行）
No. 5.